
駆けろ、姫に賭けろ！

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆ける、姫に賭ける！

【Nコード】

N0037Y

【作者名】

友絵少尉

【あらすじ】

近未来。少女たちのあいだに未知の病気が流行していた。発病した少女は、“魔導少女”と呼ばれ、制御不能の魔法の力を発揮、周囲に破壊をもたらしてしまう。少女の治療には、その魔導パワーを消費させつづけるしか道は無い。このため少女たちを極限まで追い詰めるためのレースが考案された。少女たちを追い詰めるべく、人工の魔導エネルギーが開発され、少年たちに与えられた。人工の魔導少年の誕生である。かくして今夜も、少年が、少女をレースマシンで追い込み、彼女らのマシンを撃破する過酷なレースが始まった。

魔導少年の中学生マミヤは、日中は中学に通い、深夜になると異端審問猟騎兵として少女迎撃に動員される日々を過ごしていた。彼はデビュー時、レースを連続圧勝で飾った元エリートだった。その後なぜか敗戦を重ねつつける彼は、ある日運命の美少女と出逢うのだった。“魔導の姫”と呼ばれる美少女と――。

魔導少女狩り〜深夜の首都高速〜

少年の騎乗した魔導二輪装甲車輛は、
時速三〇〇キロメートル超のスピードで東京、首都高速環状線を疾
駆していた。

装甲のボディカラーはサーキットブルー。

車体は流麗なエアロフォルム、

それでいて武装をもつが故の無骨さを兼ねそなえたシルエットだ。
ヘッドライトのハイビームが前方の闇夜を切り裂いてゆく。

現在、魔導爆燃機関の出力は毎分、

三万一二六五魔導力場展開を記録、エンジンシステム異状なし、
重力波制御システム異状なし、

各種武装、火器管制システムやはり異状なし。

全システム、オールグリーン。

コクピットのコンソール、分厚い超硬化透明プラスチックのウ
インドシールドに守られて、

魔導メーター、スピードメーター、各ディスプレイのモニタ画面が
そう告げてくる。

オールグリーン。だから、狩れ、と命じられているかのようにだ、
マシンに。

今夜こそ、魔導少女を狩れ、と。

ほんとうにマシンが命じてくるかのように、

プレッシャーを与えてくるかのように、少年はそんな錯覚すら憶え
た。

軽く頭をふってみる。

第二次世界大戦時のナチス・ドイツ軍を彷彿とさせる形状のフリ
ツヘルメット。

十五歳のまだ華奢な少年にはその重量が頸に重く感じる。

けれどその両眼には爛々と燃える光が宿っている。

蒼白の光だ。

魔導爆燃機関の内部で爆発、燃焼している魔導エネルギーとおなじ色の光だ。

走行中に本部からビデオ通信のコールが鳴った。

ディスプレイに男の顔が映しだされる。

整えられた優雅な白髪の持ち主だった。

『軍政異端審問局よりマミヤ曹長へ通達、マミヤ聞こえるか私だ』

「はい大佐」

『今夜こそ戦果を上げろ、魔導少女のハウキをへし折ってやれ』

「了解しました（アイ・サー）」

『まったく貴様は返事だけは一人前だな』

大佐は苦々しい捨てる、ターゲットの？魔導少女？の現在位置を送信してきた。

それに彼女の戦績も、その子の騎乗する魔導二輪装甲車輛の主要諸元、
インターセプト魔導少女迎撃に必要な情報のすべてが開示されてくる。

極秘情報——彼女の名前、年齢、住所などの個人情報。それ以外のすべてが。

ターゲットの魔導少女は、今夜が初陣だった。

軽い相手、のハズだ。

思念を集中する。

少年の、マミヤの意志に呼応して、魔導爆燃機関の回転が徐々に上昇してゆく。

出力、三万二〇二九アーデルハイド、三万二二一五……、三万二
三——。

『マミヤ曹長っ、なんたるザマだ？ 一六戦目にもなってまだそれしか出せんのかっ、

今夜敗北すれば貴様どうなるか分かっているんだろうなっ？』

大佐が罵声を浴びせてくる。

いつものことだ、聞き飽きた叱責の言葉を少年は受け流した。

午前三時過ぎの東京の街、マミヤ以外首都高速に車影は、無い。
警視庁交通機動隊と軍政異端審問局の合同部隊が交通規制を敷いてくれているからだ。

防弾仕様の前輪がアスファルトの路面を抉り、
白煙を後方に残しながらマシンが奔る。

魔導少女のマシン迎撃、そのための専用魔導二輪装甲車輛、
通称獵犬。ヤークトフロント

いまスピードは時速三四〇キロメートルほど、
重力波の干渉を周囲に与えながら、老朽化してすでに久しい首都高
を駆けぬけてゆく。

眼前にひろがるのは、快晴の暗闇の空。

突風が、時速三四〇キロで疾走するマミヤとヤークトフロントに殴
りかかる。

彼の全身に空気が喰らいついてくる。痛くはない。痛覚は麻痺し
ているからだ。

重力波を右側面へ散布する。

同時に重心移動、マシンを寝かせ、右コーナーに突入する。

重力干渉を受け、対向車線のむこうがわ、

首都高の強固な遮音防壁が波打って震動していった。

魔導の発する力を借り、右に吸いよせられる感覚になる。

まるで右半身が、何メートルも離れた遮音防壁と癒着したかのよ
うだ。

さらに急減速、時速一〇〇キロまで落としてかろうじてコーナー
を曲がる。

ふたたび加速をかける。

彼のヤークトフロントが江戸橋ジャンクションを通過、
コーナーを曲がりきり、直線コースへ。

ヘッドライト、強烈なハイビームが路面と前方とを照らしだす。
遙か前方、見えてくる。

魔導少女の駆るマシンのシルエットが見えてくる。

マミヤ少年の駆るヤークトフロントが、ついに魔導少女のマシンを目視内射程に収めた。

火器管制システム、作動。

ヘッドマウントディスプレイの片眼鏡が自動操作で右目を覆ってゆく。

射程距離四〇メートル、ターゲットのマシン、時速一六〇キロで走行している。

ヘッドマウントディスプレイに覆われた右目に、目盛状格子レティクルが投影される。

加速にのみ使ってきた魔導エネルギーを攻撃にふりわけるときがきた。

減速して、二〇ミリ機関砲に装填された呪法弾にエネルギーの充填を開始する。

火器管制システムの充填完了のシグナルが鳴ると同時に、前輪をガードする正面装甲板左脇の二〇ミリ機関砲をフルオート射撃した。

重厚な発射音、同時に空葉莢が排莢され路面にぶち撒かれてゆく。魔導少女も負けてはいない。

おなじく減速して、拡散重力場を後輪後方へ展開、

呪導爆雷を四発、路面に投下すると彼女は一気に加速をかけた。

逃げ切りを図るつもりだ。

マミヤは一転、エネルギーをまた加速にふりむけながら、左右へハンドルを切る、ハイビームの光のなか、爆雷が乱舞してきた。

一発目を右にかわし、二発目、三発目、

そして四発目の爆雷をかううじてやりすごす。

すぐ後方ほんのコンマ数秒の差で、爆雷が起動した。

首都高速線上の大爆発、立てつづけに四回だ。

ヘルメット越しに爆音とアスファルトの焦げる不快な匂いに襲われた。

魔導少女は必死だ、逃げ切るしかない彼女にとって必死の、これは？競技会？だ。

「ごめんね」

マミヤは自分でも気づかないうちに、つぶやいた。

機関砲を再び連射した。

敵の拡散重力場に妨害され、弾道が曲がってゆく。

それを計算に入れたうちの二発、ターゲット後部装甲に二発命中した。

相手のマシンが黒煙を吹き始める。

加速がやんで、徐々に距離が縮まってくる。

なおも魔導少女の駆るマシンが逃げる、必死に。

ヤークトフロントとは車種が異なる、逃げ切ることに特化した魔導

二輪装甲車輛。

ヴィルトカッツェ

通称、山猫。

六万アーデルハイドは叩きだしているかも知れない。

それぐらい後部の四つの排気口から蒼白く美しい光が残光を残し伸びている。

魔導エネルギーの光、それは魔導爆燃機関のまだ生きている証拠の光だ。

マフラーのついていない排気口、

マシンの叫び、魔女の悲鳴が深夜、首都高に鳴り響く。

時間がもう無い。

少女が京橋ジャンクションで右に曲がろうとして、車線変更してくる。

それを見越して、また呪法弾をフルオート連射、外した、わざと外した。

外した砲弾はターゲットの装甲板の左をかすめ、飛翔、どこまでもつづく首都高の防護フェンスに直撃、爆発をおこした。

呪法弾の残弾はすくない。

あとは強力だがしかし、操作に強い思念集中を要する？呪法誘導ミサイル弾？があるけれど――。

少女が京橋の右コーナーを曲がる直前、

そのミサイル弾が蒼白い魔導力の光を放ちながら、マミヤの後方から猛スピードで飛翔してきた。

彼の右脇を素通りしていった。

ターゲットの少女が曲がったところでシルエットが目視内から消える。

ミサイルが追尾してゆく。

爆発。

コーナーから直線に変わるあたりの路上、大爆発が起きた。

呪法誘導ミサイル弾がターゲットのマシンを、ヴァイルトカツツェ山猫を撃破したのだった。

マミヤが火器管制ディスプレイを解除、右後方モニタを確認する。

別の魔導二輪装甲車輛が、同僚の獵犬ヤークトフントが走行していた。

スピードを上げ、マミヤのマシンにぴたり、並走してくる。

ボディカラーはムーンミストグレー、相手から通信が入ってきた。『減速すれば？ もうすぐコーナー曲がって弾着地帯に突入するよ』

なんとも軽い口調、放課後に学校の課題をひとり先に片づけ、余裕を見せてくる生徒の声音だった。

首都高速の悲鳴

二騎のヤークトフロントは減速して、京橋のコーナーを曲がった。
光景は無残だった。

魔導少女の騎乗していた山猫^{ザイルトカツツエ}、大破して路上に残骸を晒している。
装甲カラーは派手なハーベストゴールド、その装甲板の欠片が首都高のLED照明に照らされ、虚しく光っている。

ふたりの獵犬^{ヤークトフロント}たちが急停車した。

マミヤは騎乗したまま、魔導少女を、路上でへたりこみ、肩を震わせている少女を見ていた。

ヘルメットのバイザー越しに見える少女は、中学生くらいだろうか？ 十五年次生——中学三年生——の自分とおんなじ？

すこし若いかな？ 十三年次生か十四年次、そのあたりに思えた。
右のマシンに騎乗した大柄の少年はつかつかと少女にむかって近づいていった。

彼も、魔導少女も、ほぼ同じ服装に身を包んでいる、マミヤとおなじだ。

それはまるで極薄のウェットスーツのような、全身のシルエットを、ぴたり、露わにしてくる防護服だった。

薄く軽い、それでいて対呪法、対爆、抗弾、対NBC兵器の性能をもつ優れものだった。

魔導防御兵装^{マギアパンツァー}。一般にはパンツァーと略して呼ばれている。

魔導少女のパンツァーは炎に嬲られ、若干の機械油やスス汚れが付着しているだけだった。

背の高い獵騎兵は少女にむかって、

「軍政異端審問局の定める法令に基づき、君の体表面の視診を執行する、君にはすべての個人情報秘匿する権利が与えられている、僕は、君に関する知り得た情報の一切を漏洩しないことを宣誓する……ええっと、時刻〇三二一、異端審問宣誓を終了、っと」

少女は震えながら、睨め上げてきた。
ヘルメットを乱暴に脱ぎすてる。

主に見捨てられ、路上に点々と転がっていった。
可愛らしい、可憐な少女の貌が現れた。両の瞳からは悔し涙を流している。

美しい金色の髪、青い瞳の白人の少女だった。

光っていた、少女の両の瞳も、蒼白に、元から青い瞳は、さらに蒼白に輝いていた。

三人とも、おなじ色、魔導の色だ。

同僚の少年は、ヘルメットのバイザーを跳ねあげてからじっくり、少女の顔を見て、胸のふくらみのシルエツト、それから下腹部、股なめらかなラインを描く太ももまで、順繰りに凝視していった。

嫌な目つきだった。極薄のパンツァー一枚を隔てた、その下の少女の体を透かし見ているかのような目つき。

彼は右の手首に巻いた極薄型の吸着式タブレット^{リスト・タブレット}端末とにらめっこを始めた。

開示された情報をチェックして、

「ラッキーツ」

さもおかしげに口笛を吹いてきた。

「おいっ、マミヤツこの女の悪魔の紋章、左のおしりにあるぞっ」

「そうか」

「おいおい、なんだよっ喜べよっ、女のナマケツが拝めるんだぞっ」
そういつて、

「さあ、マガアパンツァーを全部下ろすんだ、おしりが見える位置までね、あっ僕は鬼じゃあないから、うしろをむきながらで構わないよっ」

少女は何度も体を震わせながら、ようやく立ちあがった。慣れた日本語で、

「……ワタシ、これが初陣で、だからたった一試合で紋章が消えるとは思えないっ」

敗れても決して屈しない、そんな声で激しく訴えてくる。

「たしかにそのとおりだね、紋章はかたんには消えない、君のビョーキはすぐには完治しないんだ、だから見せてくれないか、君のおしりをね」

「でもっ」

「脱ぐんだ、僕は容赦しないよ？」

少女は屈辱に唇を噛みしめ、それから目元をぬぐい、彼をじっと睨んだ。

うしろをくるり、とむいて、右手首の吸着式タブレット端末を操作する。

愛騎とおなじハーベストゴールドの色をしたパンツァー、胸の前が上から、ふっ、と左右に開き始めてゆく。

彼はいてもたってもいられない、そんな様子で密着度を喪失したパンツァーの両肩に手をかける。

一気に腰まで引きずりおろした。

「——っ」

少女の、屈辱の吐息。

その裸身、体全体から魔導力の光が、蒼白色の炎が躍り、周囲を照らしだす。

マミヤは、眼を背けた。

「ええと？ 左のおしり、と……ああ、まだ紋章、残ってるねえ、ちよっと薄れた感じだけど残ってるねえ……君、来週のレースも出場しないか？ 僕に負けてまた見せてくれよ、ナマケツをね」

それからわざとらしく、咳払いをひとつして、

「異端審問による身体視診検査をこれを以て終了します、着衣の乱れを直して構いません」

いけしゃあしゃあと言ったのけた。

少女はすぐさま、パンツァーを両手で引き上げ、さらけ出していた裸身をかくした。

また座りこんで、彼を睨みつけてくる。

彼はヘッドセットマイクにむかい、声高らかに戦勝報告の通信を始めた。

「こちらソルベ、ソルベ中尉であります、ターゲットのホウキをへし折りました、くりかえす、魔女のホウキをへし折ってやったぞーっ」

彼のヘッドホンから、軍政異端審問局オフィスのおおきな歓声が漏れ聞こえてきた。

ソルベという名の少年が自身の愛騎にもどってくる。意気揚々と、大股で歩いてくる。

「下衆野郎」

マミヤがつぶやいた。

「……………ホウキをへし折るのは、勝利した猟騎兵の当然の責務だ、まあ上官として、いまの問題発言に対して寛大なところを見せてあげるよ、曹長くん？」

マミヤは自分より二階級上の同級生の顔に、ありったけの侮蔑をこめた視線を放った。

ソルベ中尉が、この三万アーデルハイドしか回せない無能野郎め、とそうささやいて、陰のこもった笑みをつくってくる。

嫌な笑みのまま愛騎のヤークトフロントにまた騎乗する。

そのとき――。

首都高速の片隅、打ち棄てられていた粗大ゴミから――家庭用の疲労急速回復ポッドやら、放射能簡易除去装置の陰から――人影がふたり素早く動いてマミヤたちに接近してきた。

マミヤとソルベ、うちひしがれた魔導少女の貌に緊張が走る。

人影のひとり、中年の男だ。彼が、

「私たちは反政府独立系メディア、日本自由放送の記者の者ですっ、異端審問猟騎兵さんたちにこれから突撃取材を敢行しますっ」

記者と名乗る中年男に、

若い二十代ぐらいの痩せた男が小型カメラをむけている。

「ふざけるなっ、報道協定違反だっ」

ソルベ中尉が激高した。

「それですっ、その報道協定により自由な報道が、真実が市民に伝えられていませんっ、

いま世界に蔓延する？魔導少女症候群？という謎の奇病についてお伺いしますっ獵騎兵さんっ」

ソルベが手をふりかざす。

答えられないっ、と記者に怒鳴り散らす。

記者はすかさずマミヤのほうに狙いを定めて、

「では君に伺いますっ、

少女たちをこの奇病から救う根治療法はあるのでしょっかっ？」

マミヤは、記者をじっと見つめて、

それから、

「……ご存じのように、この？レース？を通して、

少女たちの魔力を消耗させつつけて完全にゼロにする以外、完治させる方法はありません」

「マミヤッ、なにもしゃべるなっ」

ソルベがさらに声を張り上げる。

記者は、マミヤを？口の軽い協力者？と判断した様子で、うれしげに、

「では？ホウキをへし折る？という隠語について、人権侵害の声が上がっていますかっ」

マミヤは躊躇せずに、

「そのとおり、明白な人権侵害です、

この病気の発症者には体に？痣？が生じます」

「マミヤッ」

ソルベの怒号を無視して、マミヤはつづけた。

「少女の魔力が衰えれば、痣も薄くなっていきます、

俺たちは現場でそれを視診するため、

少女を脱がすんですよ、いまあなた方が見たようにね」

ソルベが走り寄り、マミヤの胸ぐらをつかむ。

マミヤも負けてはいない。

「だけどそれは、医療機関の仕事だっ、俺たちのしていいことじゃないっ、

女の子が可哀想だっ」

上空から、エアの排気音が大音量で聞こえてきた。

急速に降りてくる。

マミヤが、ソルベが、金髪の魔導少女も上を見る。

記者たちふたりは慌ててこの場から走り逃げようとする。

警視庁交通機動隊のエア・マシンが下降してくるところだった。

強烈なサーチライトとランディングライトがマシンから地上へ降りそそがれてくる。

機体は全長一〇メートルちょっと、後部の左右に翼がある。

両翼は機体の斜め下方へと伸びており、着陸時にはヘリコプターのランディングギアのように、

脚の役目を果たすようになっていてる。

マシンはゆっくりと、機体底面の巨大なふたつの排気口からエアを吐きだしながら、

弾着地帯のすぐそばの路面に着陸してきた。

胴体のハッチが下方へと開く、それが階段のかわりを果たして、キャビンから大人たちがぞろぞろと降りてくる。

軍政異端審問局の審問官、警視庁、生活安全部の少年事件課の刑事たち、

交通警察の機動隊員らだった。

隊員たちが苦も無く記者二名を拘束した。

カメラは没収されてしまった。

ふたりは、エアマシンへと強制連行されていった。

「おい、今夜のことは報告しないでおいてやる、貸しひとつだ」

ソルベが勝ち誇ったようにマミヤの耳元で告げてきた。

マミヤは全身に虚脱感を感じながらも、この瞬間におきたことを噛みしめていた。

そう、いまこの国は、日本は報道の自由の無い、全体主義国家なのだ、と。

魔導少女のむかおうとした？今夜のコース？のその先、西銀座方面からは、消防車輛や修復作業車などが何台もつらなり到着してくる。

少女は、異端審問官たちに連行されてエア・マシンに乘せられていった。

乗りこむ間際、魔導少女は泣きはらした貌にもかかわらず、マミヤのほうを見てきた。

マミヤを見て、すこし、ほんのすこしだけ、微笑みを見せた。

彼は、ヘルメットを脱いで彼女になんとか応えようとした。

掛ける言葉は、見つからなかった。

彼女はそのまま機体のキャビンへと消えていった。

唯、重苦しい表情で見送るしか術がない。

七月の暑気が押しよせてくる。パンツァーの空調をワンランク上げた。

空を見る。

？政府御用達？のマスメディアの何台ものエア・マシンが空中でホバリングしているのが見える。

機動隊のエア・マシンが離陸、垂直上昇を始め出す。

マミヤは無言で、空に浮かぶマシンどもを見上げていた。

マミヤ〱中学の日常の風景〱

マミヤのかよう中学校は、ごく普通の公立校だ。

東京二三区からすこし離れた、南東京市の市立中学校。

未明の？闘い？に動員されたけれど、

きょうは平日、学校は休ませちゃくれない。

なんてったって一五年次生——中学三年

——義務教育の真っ盛りってヤツだからだ。

眠たい目をこすり、遅刻ぎりぎりで一五年二組のドアを開ける。

二〇人ちよつとのクラスメイトたち、階段状の教室、

ドアの左手が最上段の席、右には教壇と大型ディスプレイがあった。
数人の同級生たちがかけよってくる。

みんなが口々にいつてくる、

おいマミヤ、深夜の動員^{オットメ}ご苦労さんっ、

とか、ネットでニュース見たぞっ、

？インター杯？残念だったなっ、とかなんとか、そんな感じにいろいろ騒々しい。

教室最上段を見る、ソルベを中心にして、クラスのいちばん目立つ男女が集まっている。

例によって、ソルベの未明の？インター杯？その武勇伝の吹聴会が盛大に開かれていた。

背の高いソルベはひときわ目立っている。

横目で見ながら、中段ぐらいの席、窓際の自分の席に座った。

すると女子の集団からひとりがマミヤのほうへ駆けよってきた。

となりの自分の席に音を立てて座りこむ。

マミヤはだらしなくデスクに突っ伏した。

元氣印のポニーテール、けっこうカワイい、愛嬌のある顔立ち。

小学校からこっち、ずっとなぜかおなじクラスで顔をつきあわせ
てきた。

「なんだよオナホ？」

「ばーかつ、ナホさまと呼びなっ、それ、ホントマジウザい、百万回くらい聞いたからっ」

名前を茶化された反撃に、ナホが打って出てくる。

いつもの挨拶のようなものだ。

「ねえ、あのさ、深夜の？インター杯？」

……残念だったね」

口調にはいたわりがあった。

仕事をリストラされる運命の彼氏に対する、彼女のような。

「それ、やめてくれ、高校のインターハイじゃあるまいし、

嫌いなんだよその略し方」

「だってさ、誰も？魔導少女迎撃競技杯？
インターセブション・カップ

なんて長ったらしいの、呼ぶわけないでしょ」

ナホは大胆に耳元に顔をよせてきて、

「グレード？（G・？）のインター杯ですら、勝てないってマミヤ
どうしちゃったの？」

？つったら小物の魔導少女ばっかしか出てこないじゃない？」

「だからソルベ中尉殿に譲ってやったのさ、

？小物の獲物？をね」

「っ……あんた分かってたってんの？」

一四連敗だよっ？カード番？なんだよっ」

「だからどうしたんだ？」

「つぎのレースで負けたら獵騎兵クビになっちゃうじゃないっ、
あんな小物相手につ、昔の勢いはどこへいっちゃったのよ？」

唐突に、未明、あの魔導少女の涙が脳裡をよぎっていった。

小物の獲物？

ちがう、ひとりの少女だ、獲物なんかじゃない、

人間の女の子なんだ。

あの子は屈辱に耐えていた。

パンツァーを剥がされ、きれいな背中を、腰を、その下も見せ始

めて――。

そこで眼を背けた、直視できずに。

これが己の仕事であるにもかかわらず。

でも？　ほんとうは、見たかったんじゃないのか？

あのソルベと自分、おんなじ人間のオスじゃないのか？

いくら打ち消しても疑問は消えてくれない、なあ？　ホントは――

「――なに、どうしたのママヤ」

ナホが肩に手を掛けてくる。ママヤはデスクに顔をうずめたまま、

「……自己嫌悪」

つぶやいた。

と、そこへナホが、

「あー、やだっ、きなすったぜ、ソルベ中尉様々がっ」

「マジ？」

ふて寝してごまかすことに決めた。

「よう、万年連敗曹長殿っ寝覚めはよかったか？」

もう慣れっこだろ、負けんのにも」

数人の取りまき連中が笑いころげた。

ナホはソルベに挑む目線で、

「ママヤ曹長はアンタに獲物を譲ってやったんだってさっ、小物だったからよっ」

不吉な沈黙がおりた。

取りまきのひとりが怒り出して、

ナホと言い争いを始めた。ソルベが片手をあげて、

「やめろ」

ソルベの一言、場がおさまった。

「こっちはやってやるわよっ、インターセプター異端審問獵騎兵の中尉様だからって

イバンじゃねーよっ、あたしらとおんなじ一五年次のクセにっ」

「なあナホ、お前の彼氏の――」

「バカッ、こいつはっ、ヤダ、

彼氏なんかじゃないわよっ」

「まだ、マミヤ、とはひと言もいってないけどね」

「――っ」

「まあいい、じゃあお前のペットのマミヤくん、

インター杯何勝何敗か知っているのかい」

「ど、どうだっていいじゃないっ」

「よくはないさ、魔導少女の魔力は撲滅されなければいけないんだ、社会の秩序の為に、そのために僕たち審問獵騎兵が体を張ってる、僕はいずれG?に打って出るよ、

あのエースのシゲミツ中佐と肩を並べるまでになっってみせる、絶対にね」

「シゲミツさんに？ アンタがあ？

アタマ湧いたんじゃないのっ？」

「すくなくとも、その負け犬よりは可能性があるよ」

「マミヤだってがんばってるわよっ」

「二勝一四敗のどこが？

？カド番？のどこががんばってるってんだよっ」

マミヤは横目でちらり、周囲を見る。

上背のあるソルベにむかって、ナホは決然と相對していた。

ナホは怒っている、本気で青筋を立てて怒りまくっていた。

「ごめん、ソルベ、俺、もうすぐクビだから」

鬱陶しい、自分にはナホにかばってもらう価値なんかない、そう思うからテキトウに謝った。

「ちよっ、マミヤーッなんかいいかえしなさいよっ、すこしぐらいっ」

「傑作だなっ、女の腐った奴はそうやって他人に頭下げつつづける人生ってわけだっ」

ソルベはひとしきり、取りまきたちと笑いあってから、ナホに、

「なあ？　こんな負け犬の相手はやめてさ、僕のグループに入れよ、僕ってば、また年俸が上がっちゃってさあ、こんなに？　ってくらいなんだぜ？

なんせ僕はG？、G？あわせて一八勝無敗だからさ――」

ひっぱたいた、

ナホが一八勝無敗の異端審問猟騎兵中尉様の横っ面を盛大にひっぱたいた。

クラスの連中が集まり出した。

ナホやめなよー、とナホの友達連中がいつてくる、おいケンカやめろー、と中立派のグループの男女たちも大声をあげ出した。

そこへ初老のクラス担任がようやく入室してきた。

皆、自分の席に着き始める。

ソルベはナホをじつとり、凝視しながら、

「……このままじゃ済まさないぞ、いいか、絶対にだからな」

「アンタなんかそのうち負けてみなさい、

自称エリートくんほど負けると脆いモンよっ」

「……」

ソルベはナホを見て、マミヤを睨み下ろし、

ついで教壇の担任に一瞥をくれた。

無言で立ち去っていった。

取りまきたちが中指を下品に突っ立ててくる。

しっしっ、とナホが掌をふって追いかえす仕草をする。

彼女がどつかと席にまた座りこんだ。

「ナホ」

「……」

「なんでおまえが泣く？」

「ばーか、このあたしが泣くわけないじゃないっ」

マミヤはまたデスクに突っ伏して、

「……ごめんな」

ナホがこっちをむく、その気配を感じる。

「だからっ、なんで……そんなすぐ謝んのよっ」

涙声でささやいた。

はい、みなさんおはようございます、初老の担任が朝の挨拶をしてくる。

クラス全員が起立する。

「はい座ってよろしい、ええと

……きょうの限目は、あー、倫理学ですね」

担任は連絡事項を伝えて、ホームルームをとっと切り上げ教室をあとにした。

全員が座った。

あー、かったりーよねー、倫理の授業っ、皆、そう口々に騒ぎ出す。

マミヤは横目で彼女を見た。

ナホはうつむき、しきりにポニーテールに手をやって、髪をいじっていた。

表情は、見えなかった。

平穏な授業の破られた日

一限目、倫理学の授業――。

かったるい内容をさらに酷いものにしてるのが講師のやる気の無さだった。

「えーまあこのようにね、

現代の生命科学をもっとしても、なぜ魔導少女が一定の割合で誕生しつづけるのか？

なぜ第二次性徴期を過ぎた少女の体表面に、悪魔の紋章と呼ばれている痣が生じて魔導少女として覚醒するのか？

依然真相は不明だけど、おおくの仮説の立てられるなかで最有力なのは、恋愛感情が覚醒や魔導力と密接に関わっているとゆう――」

倫理学の時間、解説をつづける二〇代のスマートなおバサン、いやいや、お姉さんが教壇に立っている。

一〇代のころはさぞかし美少女として遊んだんだろう、そんな派手なファッションに身を包んでいた。

彼女の正体は、法務省の内局である人権護民局の護民官だった。

講師としてときどき市内の中学をまわっているのだ。

ちなみについたあだ名はゴミンゴちゃんという。

マミヤは憂鬱な気持ちで窓の外を眺めていた。初夏の陽差しは眩しかった。

手首の震動に気づいた。右手に巻いた手首専用のタッチパネル情報端末、リスト・タブレット、通称リストタブのバイブレータ機能が働いて、震動したのだった。

メール受信を告げている。

メールは転送されまくっていた。発信者はこのクラスの中立派グループの女子である。

《日本魔導少女自立支援協会（JMA）の最終オッズ情報だよー

ーっ

バカらしい、そう思い、メールを削除しようとした。
となり、ナホがおんなじメールに見入っている。

なんとなく、マミヤもつづきを読んでみることにした。

《今日深夜三時のG？、一対二戦インター杯最終オッズ、
ソルベ中尉単勝一・二三倍、

ワンオンツー

それにくらべてマミヤ曹長のオッズは二七・六四倍ーっ、
これじゃ賭けにならないよねーっ、

やっぱりうちのクラスの出世頭はソルベ君に決まりかもねっ、危
うしカド番曹長っ》

ナホがじっと、見入っている。

すると彼女は、自分のリスタブでメールを打ち始めた。

来た、受信、またバイブレータが作動した。ナホからのメールだ。
開いてみる。

《負けないで》

ただ、この一行。たった、これだけ。

マミヤは自分のリスタブにうかぶデジタルの文字を追った、画面
にじっと見入ってタッチパネルにうかぶ文字に指で触れてみた。

『——と、いうわけでね、

魔導少女をそのかし、その破壊力を悪用した魔導テロが世界中
で頻発するに至り、我が国におきましても、

やむなく時の政府は、国会を解散、一時閉鎖の超法規的措施を執
りつつ、

軍政があくまで臨時措置として四〇年前から施行されるにいたっ
たわけでございまして、

やむなくも少女たちの健全な育成、人権擁護、情緒不安定になり

がちな彼女たち魔導少女の魔導エネルギー発散のため、

ひいては完全にエネルギーを消失させるためにね、

インターセプション・カット

魔導少女迎撃競技杯がですね、

ほんとうにやむなく開催されるようになったわけでありまして、

あ、

……テキスト読むの疲れたわ——」

教壇の上のゴミンゴちゃんは、まったくやる気のない声音でテキストを棒読みしていた。

それにつけても、この美女、やる気モードOFFっちゃってる感じがものすごい。

マミヤは横目でナホを盗み見た。

彼女は、ぷいっ、と右に顔をむけて表情をかくす。

ポニーテールを可愛く揺らしながら。

「そのための組織として法務省の所管の下、人権をですね、

あくまで人権擁護の立場を固持しつつ、

独立行政法人であるところの、日本魔導少女自立支援協会（J M

A）が発足したわけでございましてですね、

インター杯の収益金アガリは、法務省の貴重な利権、協会は大事な天下り先になってるのよね

……あ、余計なこと言ったわ』

誰も聞いちゃいなかった。

マミヤもそうだった。考えた挙げ句にメールの返事を打ち返した。

《ごめん、ありがとう》

送信する。

となりの少女は文面に見入っていた。突然——。

「ばーか」

唇の触れるくらい、マミヤに近づき、耳元でささやいてきた。

彼女の吐息、右の半身が熱くなる、熱を帯びる。

彼女の唇が、吐息が、貌が離れていった。

彼女はまた自然な姿勢をとりもどして、何事もなかったかのように教壇のディスプレイに目をやっている。

——ばーか、耳について、離れない言葉。

少女が、こつん、と左足でかわいくキックをしてくる。

マミヤは、そうっ、と肘で少女の腰の脇を突つついた。

少女がこっちをむく、微笑んでいた、もう泣いてはおらず、微笑んでくれていた。

マミヤは戸惑った、どうしていいのかわからなかった。

初夏の陽気、教室のエアコンがなぜか、ちっとも効いてはいないように思えてくる。

「ええとね、

彼女たち魔導少女に対抗、迎撃すべく、軍政異端審問局はね、人工の魔導少年とも呼ぶべき少年たちの育成を開始いたしました、このクラスにもお二方、在籍されていらっしやいますね？
うら若き異端審問猟騎兵さんですねっ、猟騎兵さくくんっ」

ゴミンゴが突然、黄色い声を上げてくる。

彼女がソルベをちよつと見て、それからマミヤを見てくる。

手をふつてにこりと微笑んでくる。

最上段、ソルベの席のあたりから、口笛、拍手、喝采がわきおこってきた。

例によって取りまき連中だ。

「授業にもどりますよ、

はい、彼ら少年たちが人工的に魔導エネルギーを発揮するため、
？魔導石？が発明されました、

発明したのは、魔導工学で最先端の研究を誇るドイツ連邦でござ
いましてですね——」

ナホがマミヤの耳に口を近づけ、

「なーによ、ゴミンゴのヤツ、マミヤに気があるんじゃないのっ」
彼女はふくれっ面だ。

まさか、とマミヤは軽く首をふってつぶやき返した。

マミヤのデスクの上、震動がおきた。

学習用の大型ペンタブレット端末が小刻みにデスクの上を動き出す。

バイブレータの機能なんかじゃない。それは教室全体の震動だった。

そしておおきな校舎の揺れ、爆発音が聞こえてきた。

護民官のお姉さんのやる気のない、けれど饒舌な語り口がやんだ。

——さらに、こんどはいっそうおおきな震動。

床が小刻みに揺れる。轟音が聞こえてくる。

下の階のほうからだ。

「ナニこれ地震っ？」

女子の誰かが叫んだ。

それが合図と化して全員が席を立つ。

「はい、落ちついてくださいね、落ちついて行動を——」

ゴミンゴが呼びかける。

誰も聞いちゃいない。

クラスは騒然となり始めた。

第三級アーデルハイド暴走事件

クラスが騒然となる。

そこへ校内放送を告げるチャイムが鳴り響いてきた。

『ええ、緊急放送です、これは訓練ではありません、みなさん慌てないでください』

校長のアナウンス、本人の声は狼狽しきっていた。

全館に放送の流れるのが聞こえてくる。

『ええとですね、一三年四組、女子生徒がですね魔導少女として覚醒の様、

とり乱した状態ですね、重力場を放出中、

？第三級魔導力場展開暴走？の様です。

一階校舎の被害甚大、速やかに普段の避難訓練同様、避難の開始をですね——』

ゴミンゴが真っ先に教室から飛びだしていく。

急ぎ、現場につけるつもりなのか、このお姉さん、

やれ人権擁護だのなんだのって、どうやら口先だけではなかったらしい。

マミヤが立つ。

ゴミンゴのあとを追うように、教室内の階段を跳ぶようにして降りてゆく。

「マミヤッ」

ナホの悲鳴に、ふりかえって、

「おまえは訓練どおり非常階段から地上へ逃げろっ」

ナホに叫び返す、ついでソルベを見上げて、

「なにしてるっ現場にいくぞ中尉っ、護民官殿に後れをとるなっ」

一喝されたソルベは、茫然自失の体からようやく自分を取りもどしたようだ、

大柄な体を素早く動かす、階段を下りてマミヤの元にやってくる。

「魔導石は四錠もってる、中尉はっ？」

「僕は五錠だ、第三級暴走なら楽勝だぞ、被害者救出優先でいこう、マミヤ曹長っ」

「わかってるっ」

ふたりの少年が廊下に出る。

先にいったゴミンゴの姿は、無い。

ふたりがうしろをふりむく。

髪を振り乱し、廊下を走り逃げゆくゴミンゴの後ろ姿があった。

「ゴミンゴのヤツツ、ひとり非常口のほうへ逃げやがったっ」

「構うなくぞ中尉っ」

ふたりが制服のブレザーから金属製のピルケースをとりだす。

蓋を開けると、蒼白色に光り輝く魔導石の光が少年たちの顔を照らしだす。

長さは一五ミリくらい、長方形のカプセルのように形状が整えられている。

少年たちが一錠をとり、噛み、砕き、舌下錠の要領で唾液に溶かす、速やかに全身に成分を行き渡らせる。

「——来たっ、クソツ、漲ってきたっ」

ソルベが荒い息を吐く。

プライドの塊のような少年だけれど、仮面を脱ぎすてたいま、獰猛な猟犬の本性を見せていた。

マミヤも頬を紅潮させる。

血圧、脈拍、心拍数の急激な上昇と興奮、快楽を押さえこむのに躍起になる。

走るうち、ふたりの両眼が光り出す、蒼白に輝きだしてきた、あのときの、未明のインター杯のときのように。

やがて体の表面、皮膚全体からも、制服の着衣の下から光を放ち始めた。

少女との出逢い

ふたりの少年は、避難する生徒らの波にぶつからないよう、教職員専用回廊を通って最短コースで現場に駆けつけた。

校舎一階の一三年四組の教室、隕石メテオの落下してきたような惨状を呈している。

破片は外壁を突き破り、外廊下は足の踏み場もない有様だ。

現場は無人だ。

倒れている者の姿も無い。

何度か目撃してきた、これが？第三級魔導力場展開暴走？の破壊力だった。

ソルベの右手首のリスト・タブレット端末、通称リストタブに軍政異端審問局から緊急指令通信が入った。

相手は大佐だった。

ソルベが大佐と連絡をとりあう。

その姿を見て、やはり痛感させられる、自分は下士官なのだ。

この現場の指揮官は、自分ではない、中尉であるソルベのほうだった。

アイ・サー

「了解しました」

ソルベがこっちを見て、

「学校から審問局に報告がいつてる、死傷者はゼロ、ターゲットは現在一三年五組の教室内に移動した模様、彼女のデータがきた、君に転送する」

「了解中尉」

軍政異端審問局からソルベのリストタブへ、覚醒した魔導少女のデータが送られてきた。

それがマミヤのリストタブに転送されてくる。

マミヤは画面を注視した。

《ターゲットの宗教感情…国家定期健診の心理スキャン情報／一〇

○%無宗教との判定結果アリ・オカルティズムへの関心傾向…アニメ等からの情報に傾倒中／受診から五三日経過》

日本では無宗教のパターンが比較的多い。

特定の信仰があれば、それに感応する専用の呪符を用いてターゲットを拘束できる。

彼女の場合、アニメ、コミックなどサブカルチャーからの雑多な情報の影響を多大に受けていた。

この子を拘束するためには、それに応じた、いかにもそれらしい呪文、術式が有効だ。

それがその子にとっては、最大の心理的效果、打撃となってくれるからだ。

ふたりはブレザーの懷、専用のホルスターから――拳銃用のものではない――呪符を数枚とりだした。

審問局から？それらしい術式・呪文？がダウンロードされてくる。最初に呪符にインストールされてきたのは、晴明桔梗印、いわゆる五芒星だ。

それに？臨兵闘者皆陳烈在前？の文字。これは修験者の呪法？九字？の真言である。

五組、この廊下をさらに奥へといったすぐ先にある。

ふたりは魔導パワーの跳躍力を使い、身軽に廊下の残骸の上を跳びこえていった。

五組のドアにたどりつく、ふたりが目でうなずきあい、ドアを開ける。

教室の中、女子がいた、ふたりいた。

ほかに生徒も教師も、避難して誰もいない、ふたりの女子だけだった。

教壇の手前、階段状の教室の最前列、全身から蒼白色の不安定な発光をくりかえし、泣いている少女がいる。

そしてもうひとり、その魔導少女を抱きしめている女子のうしろ姿が見えた。

ソルベが臆した様子で、つばを飲みこんだ。

「中尉、拘束呪符を」

マミヤは携帯用ヒートナイフをとりだした。

ナイフを人さし指の先に照射、血を数滴、呪符に垂らす。

呪符にインストールされた晴明桔梗印と九字が蒼白色に光り出す。

「中尉、早く呪符をっ」

「あっ——」

ソルベも我に返った様子でマミヤとおなじ行動を始めた。

ふたりの若き異端審問猟騎兵は、間合いを詰めていった。

覚醒してしまった女子生徒は、怯えた様子でふたりの少年に貌をむけてきた。

小麦色に日に焼けた、可憐な少女だった。

「——っ」

少女がなにかを言いかけようとする。

マミヤが、覚醒した少女の肩に一枚、拘束系呪符を左手で押しつける。

九字を唱える。

「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前っ」

右手を動かす。

人さし指と中指を伸ばして？刀印？を組む。早九字と呼ばれる呪法を執行した。

びくんっ、と少女の日焼けした体に震えが走る。

ソルベも遅れて呪符を貼る。緊張した面持ちで早九字を執行する。

呪符の九字が、ふわり、札から離れ、空中に躍り出る。

蒼く輝く縄のような形状となって、女子の体に巻き付き始めた。

「……あ、マミ……っ……」

覚醒した子は、ぽつり、と一言だけ声を発した。それからゆっくりと気を喪っていった。

拘束、完了。

ソルベが、ふうっ、と脱力しながらも、すぐに大佐に報告を入れ

る。

マミヤが、抱きしめていたほうの女子を見て、
「軍政異端審問局の者です、異端審問法に基づき、第三級アーデル
ハイド暴走の容疑者を緊急拘束しました、あなたにお怪我はありませんか？」

その少女はすこしばかり首を横にふった。

「御無事でなによりでした、失礼ですが事情聴取にご協力を——」
言葉は、固まった。

女子ががふりかえったのだ、覚醒した魔導少女を抱きしめたまま。
黒い、さらさらのロングヘア、黒と茶色の宝石を凝縮したような、
両の瞳、泣いていた、その瞳から涙が溢れ、こぼれ落ちていた。

少女は、ツン、と上をむいた小生意気そうな整った鼻梁、その下
の艶のあるピンク色の唇から一筋血を流している。

黒髪、輝く両の瞳、こぼれた涙、白い肌に流れる赤い鮮血。

それが、魔導の蒼白色を間近に浴びて、光と影、濃い陰影を醸し
出していた。

マミヤは、任務を忘れ、少女に見惚れていた。なにもできず、立
ちつくしていた。

「この子ならもうだいじょうぶよ」

少女の、凜、とした涼しげな力強い声音。

「……あ、はい、貴女のお怪我は……」

なんとか、それだけ口にできた。

「私なら平気、この子にちよつとぶたれただけ」
くすりと寂しげに微笑んだ。

「あの、それは、なら保健室にきていただきます、応急処置を施し、
その……さらなる治療の必要なときは、医療費は異端審問局に請求
してください、全額を軍政府がお支払いします」

少女はそっと、頭を下げた、礼の印に頭を下げた。
うしろからソルベが、

「曹長っ、大佐の命令だ、僕がターゲットを審問局へ護送する、悪

いな、僕の手柄という形になってしまいが、君はその少女から事情聴取をして、報告を——」

ソルベの言葉が途切れた。

こちらをふりかえった少女の貌を見たのだ。

ぼけっ、としてマミヤ同様、その場に固まってしまった。見惚れてしまっている。

少女が、拘束された魔導少女の体を静かに床へと寝かしてやる。

自分のブレザーを掛けてやった。

マミヤが、

「では、中尉、護送を頼みます」

ソルベはうわの空だった、地球と月のあいだを一往復するくらいの時間、微動だにせずにいて、それからようやく我に返ってきたようだった、月面の宇宙ステーションから帰還して、生まれて初めて生身の美少女と出逢った、そんな顔をしている。

「あ、いや曹長、僕が……君にかわって事情聴取を——」

「大佐の命令で、手柄を得るんじゃないのか、中尉？」

ソルベが顔面を引きつらせて、最大級の悔しさを表現してきた。

少女の名は、エリカ

保健室で、その少女は養護教諭から怪我の手当を受けた。

教諭は、事情聴取のことをわかつていたので、処置後席を外してくれた。

静かな保健室。

ふたりっきりになった。

少女は、椅子に座り、窓の外の景色を見ていた。

なにかの決意、意志をしっかりと秘めたような瞳、居ずまい、そんな雰囲気は少女には備わっているように思える。

マミヤは立ったまま、気圧されていた——相手は一三年次生だぞ？——自身、いいきかせてから右手首のリスタブの録音モードを起動する。

「これより自分が、異端審問猟騎兵マミヤ曹長が事情聴取を開始します、自分のリスト・タブレットに音声記録されますがよろしいですか」

「構いません」

「まず、お名前を——」

「エリカ」

視線は、窓の外をむいたまんまだった。

「……なぜ、貴女は現場で魔導少女を抱きしめて——」

「私の転校してきて初めて出来た友達だったから、だからいっしょうけんめい、暴れるあの子を抱いていたの、異端審問法に触れますか？」

「い、いや、そんなことはありません」

「では、これで帰っていいですか？」

マミヤは、いったん録音を中止した。

つばを飲みこもうとして、気づいた、口の中はからからに乾いていた。

「あの、なにか俺はっ……自分はきみの気に障ることをしましたか」
少女は、初めてマミヤに視線を合わせてきた。

「気づかないの、異端審問官さん？」

「いえ、猟騎兵ですが……自分に落ち度があったなら——」

「きょう、私の大切な、できたばかりの友達が魔導少女になった、
あなた方はその子を縛り上げてから、その子のこと、まるでその場
にいなくなったかのように私をじっと見てきた、あなたも、それか
らさっきの中尉さんも」

マミヤは両眼を閉じた。返す言葉、どうしようもない、なにも見
つからない。

「女の子を口説こうとするんなら、時と場所を選んだほうがいいわ、
それとも異端審問官さんにとって、魔導少女になった子は女の子の
人数のうちに入らなくなるの？」

「申し訳なかった、謝罪します」

「要らないわよ、謝罪なんて」

少女は、エリカは席を立った。

「噂どおり審問官って最っ低ね」

軍政異端審問局オフィスの喧騒 ※重要な改稿有り

エリカ……エリカ・ヴァンデル・メーア。
帰国子女。

先週、ドイツ連邦共和国から日本に帰ってきたばかりだった。

現住所は南東京市、実家は飲食業、兼旅館業。

屋号は？ユリスモールカフェ？……都知事への届け出書類を見た限り、

規模などから簡素な宿泊施設の類だろうか、そう思われた。

年齢、まだ、十二歳……大人びた子だった。

振りまわされてしまった。悔しい。

そうだ、これは悔しさ、なんだ。

マミヤは、デスク上のタブレット端末のタッチパネルを叩きつけた。
けた。

なにかに憑かれたかのように。

けれどこれ以上エリカの詳細な個人情報にはわからない。

エリカは諦めて、覚醒してしまった女の子のほうのデータを調べようとした。

すぐにその手を止める。

魔導少女の正体、

本名をはじめとする個人を特定できるデータは極秘なのだ。

それを知っているのは、軍政異端審問局のごく限られた幹部のみとなっている。

異端審問猟騎兵といえども、すべての情報を思うがままにかき集められるわけでは無いのだ。

ふっ、とため息をついて、今朝の覚醒したばかりの魔導少女、エリカに抱きとめられていたあの少女の容態をたしかめるべく、外線を発信した。

相手は少女の收容先の警察病院だった。

端末ディスプレイにまだ若い女性看護師が映った。

『あら、マミヤ曹長、また今朝の子の件でしょうか？』

「はい、容態は安定しているでしょうか」

『だいじょうぶですよ、バイタルはすべて正常です。』

きょう、もう八回も確認してくるなんて……さては学校で、一目惚れでもした相手でしたか？』

女性看護師が笑顔になる。

そのうしろ、ナースステーションのほかの女性看護師たちも笑顔を見せる。

マミヤの表情をうかがおうとしてか、画面をのぞき見てくる。

「いえっ、決してそんなことは……仮にも審問猟騎兵です、魔導少女を相手に、その……」

自分でも赤面していくのがわかる、一目惚れ、この言葉に反応してしまったのだ。

『まっ、ごめんなさいね、私ったら……その、冗談のつもりでした』
女性看護師は本格的に誤解した様子だった。

マミヤは顔を赤くしたまま、看護師たちは驚き、好奇心、困惑を様々に見せながら、

お互いに謝罪し合う、なんだか訳のわからないビデオ通話になってしまった。

外線を切った。

東京都内、霞ヶ関の法務省の外局、軍政異端審問局庁舎内、五階。
時刻は二二ふたふたいちご一五時。

もう、午後一〇時過ぎだというのに、
庁舎内には残業組ライン職の官僚たちの周囲にスタッフ職が集まっている。

五階フロアでは指示と罵声、口論の応酬が飛びかっていた。

睡眠阻害覚醒薬の入ったブラックコーヒーをひと口飲んだ。

ぬるくなったブラック、飲めたもんじゃない。

マグカップを自分の専用デスクにおきなおし、デスクチェアの背

もたれに全身をあずける。

何を、何をいったいどうしてこんなにエリカのことを焦って調べているんだ？

あの覚醒した少女のこと、何度も容態を確認すれば、許してもらえる、エリカに合わせる顔ができる、そうとでも思っていたんだろうか。

もうひと口、コーヒーを我慢して飲んだところで内線が鳴った。

タブレット端末、着信音だ。

相手は六階にいるソルベ中尉だった。

あまりいまの気分では、というか、まったくといっていいほど相手をしたくなかったけれど、

「なんでしょう、ソルベ中尉」

内線を開く。

ソルベのふてぶてしい笑みがモニタに映った。

『もう定刻を過ぎてるし、敬語はいらないよマミヤ？』

「……用件は？ ソルベ」

『エリカ・ヴァンデル・メーア……調べていたな？ あの子の個人情報？』

眼をつぶって、

「察しが良いな、いつもながら……俺の情報開示請求履歴、見たんだろ？」

『なあ、お互い考えてることはいっしょじゃないか』

「なんのことかな」

『おとぼけは無しにしよう、君には愛しいナホがいるだろ？ あの

ふざけた暴力女がねっ』

「ナホを悪くいうな」

『僕は正式に学校事務局に、エリカとの異性間交遊申請をするつもりだ』

「……」

『ハハッ、凶星かつ、凶星だろうっ』

ソルベが含んだ笑みをこぼしてきた。

「いいことを教えてやる中尉殿」

『なんだい？』

「そのかわり、このまえのレースの？貸し？をチャラにしてくれ」

「まあ、話によるね」

ママヤはありのまま、きょう保健室でのやりとりをソルベに話してやった。

ソルベは最初、自信満々の笑みをうかべていた。

そいつが話を聞き終わるころには、月へのシャトルバスに搭乗したとき、

自分の宇宙服を家におきわすれてきたことにやっと気づいた一〇年次生のような顔になっていた。

完全に余裕の消し飛んだ声で、

『不味い、不味いだろう完全に嫌われたぞっ……君はどう思う？
どうするつもりだいっ？』

「あした学校が終わったらすぐに家に訪問して謝罪を——」

『遅いっ、君はいつも遅いっ、だからインター杯であんな成績をとるんだっ』

「じゃあどうする？」

『いまから実家にいってみるさ、飲食業の届け出見たらう？』

「……ああ」

？ユリスモールカフェ？……カフェの閉店時間は、

○四〇〇（まるよんまるまる）時と申告されてあった。

すくなくともカフェは深夜未明まで営業をしている。

エリカが店にいるかどうか、まだ寝ていないかどうか、それはなんの保証もなかったけれど。

？睡眠圧縮剤？がひろく普及して、

市民の睡眠時間が平均二〜三時間ぐらいが常識とはなっていた。

昔で例えれば、夜の七時過ぎに下級生の実家のカフェに遊びにく感覚に近い。

マミヤとソルベは各々、残務を処理してから怒声の飛びかうオフ
イスをあとにした。

軍政異端審問局オフィスの喧騒 ※重要な改稿有り（後書き）

お詫び

魔導少女の個人データをもっているのは、初稿では人権護民局としていました。これを軍政異端審問局のトップクラスのみ知り得る情報に訂正します。

友絵少尉 2011年11月7日

？魔導の姫？～欧州リーグの覇者～

更衣室で猟騎兵の内勤用常装軍服から私服に着替えをすませる。
軍政異端審問局、庁舎屋上。

エアポートにふたりが顔を見せあったのは、ちょうど日付のかわる頃合いだった。

ふたりは、帰宅する職員たちの行列にならんだ。

民間のタクシー会社のエアマシンが一〇台以上も屋上に集結している。

職員たちのために駐機しているのだった。

飛び立つマシンの二本の脚部、強烈なランディングライトが輝き乱舞していった。

屋上は、真昼のように明るかった。

マシーナリー
航空機誘導員がつぎのフライトに立つエアマシンを誘導してくる。
マミヤたちが乗りこむ。六人乗りの小型のエアマシンだ。

ふたりを乗せて離陸していった。

マミヤは、眼下にひろがる東京の街並みを見下ろす。

街の灯りのけばけばしい、渋谷、新宿、池袋、赤坂、六本木……。

その周辺、ゲーテッドコミュニティと呼ばれる、半ば要塞化した
防犯外壁に囲まれた高級住宅街、

億の値のつく超高層マンション群。

それと対照的に、灯りのろくすっぽ見あたらないスラム街があちらこちらに散見された。

灯りの街と、昏い街、そのまだら模様。

まだらをつなぐ線、都心の高速道路や主要国道は、打ち棄てられた電気自動車が、暴徒化した住民やギャングの手によって放火され、無数の燃える点となって、煙を夜空に上げていた。

空に目を転じれば、富裕層と中流層の人々を乗せたエアマシンが闇夜のあちこちにランディングライトを点灯させて、夜間のフライ

トを我が物顔で満喫している。

「なあマミヤ、この景色を見るたび、僕は優越感に浸るんだ」

左に座るソルベが、ぼつり、いつもとちがった、どうにも疲れた口調で語りかけてくる。

「……」

「ごらんの有様、いまのご時世、民間にろくな仕事なんて見つかりやしないよ、去年の、一四年次生死事件、憶えてるか」

「……金持ちの母親が、十四歳の息子に質の悪い魔導石を飲ませて、拒絶反応で死なせた、あの案件だろ」

「ああそうさ、世の中こんな案件ばかりだ、何千万も払って闇市場で粗悪な魔導石買い漁って、子供に飲ませたところで、？魔導石適性？を保持する少年は一〇代人口のたった〇・一％だったのにな……親つてのは……自分の子供にバカな期待を持ちすぎるんだよ」

マミヤは心底うんざりして、

「なにがいたい？」

「ハタチを過ぎても魔導石適性を保持できる確率、〇・〇〇一％未満……だから僕は残り最後の五年間、有意義に過ごす、そう決めたんだ、

ハタチまでに出世して、財産を蓄え……異端審問獵騎兵を分限免職になったら、審問官試験にパスして昇進したい」

「エリートは、いうことがちがうな」

ソルベが初めて、窓から視線を引っぺがしてこちらを見てきた。

「なぜだいマミヤ？　なぜG？のデビュー戦と第二戦、あれだけ華々しく連勝した君が、どうして一四連敗なんて無様な……カド番なんぞに陥ってしまったんだい？」

「さあね、無能だったんだろ」

ソルベは、納得できない、そう小声でつぶやいてくる。

「僕は……僕は勝利しつづけるんだ、絶対にだ、僕になら……できるはずなんだ」

「立派な宣言だな、でもならどうしてそんなに声が疲れているんだ

」？

ソルベは眼をつぶり、問いには答えようとはしなかった。

前に座る中年のパイロットがこちらを見てくる、気さくな声で、
「お若いのに、達観してるっていうかねえ、猟騎兵さんは語る話題もそこらの子とはちがうもんですね」

「そうだよおじさん、僕は選ばれた存在だからね」

ソルベがあしらうように生返事をする。

マミヤが横を向いて、またクソ面白くもない夜の退廃しきった首都をぼんやり見つめ出す。

「まあねえ、わかりますよ、今夜はねえ、我が国の猟騎兵さんたちの落ちこむのもね、無理はないでしょう」

ソルベが初めて、興味を示したそぶりで、

「何かあったんですか、事件が、魔導テロでも？」

「ご存じなかったんで？」

マミヤも、窓からパイロットへ目を転じる。

「欧州リーグの覇者、G？のあの魔導少女がいま来日してるでしょうに、？魔導の姫？さまがねえ」

「初耳ですっ」

ソルベが身を乗りだした。

体を固定したハーネスを突っ張らせながら。

「私もね、今夜のニュースで知りましてね、ああ残業しなすってたんでしたっけお二方は？　だからか、今夜緊急のG？インター杯、開催されたんですよ、五号池袋線でねえ」

ふたりの少年は絶句した。

局のオフィスのあの喧騒、怒りの声……これが理由だったのか。

「相手は、あの姫の相手は誰です？」

マミヤが訊ねる。

「シゲミツ中佐ですよ、我が国の猟騎兵のあのエースライダーの……
ワンオンワン

……一対一の一騎打ちですよ、熱く燃えたんですがねえ、

勝負前は、の話ですけどねえ……最終オッズは姫が一・二九倍、

シゲミツ中佐は二・八五倍でしたが、それがねえ……」
過去形。

少年たちは、大嫌いな互いの顔を見つめあってしまった。ソルベが呆然として、

「負けたんですか、あのシゲミツさんが？」

パイロットは何度もうなずいて、

「速攻で負けちゃいましてねえ、タイムは一分ちよい、だったかなあ？」 姫のあの必殺技が炸裂しちゃって、ねえ、あの例の――」

ゲシユライ・トラウム
「希望の悲鳴」

マミヤがつぶやいた。声に熱が、こもっていた、かつては持っていた熱が。

“ユリスモールカフェ”　　魔女のサバトのラプソディ

マシンのなかで、それ以上姫のことについて誰も語ろうとはしなかった。

沈黙がおりる。

マミヤとソルベはそつぱをむいて、窓の外を見ていた。

パイロットも雰囲気を感じたのか、饒舌な口を閉じてしまった。

南東京市のエアポートに到着して、マミヤたちはすぐにエリカの家に向かった。

？ユリスモールカフェ？に。

住所の情報を頼りに街を歩いていく。

この街一帯は、都心から逃げだしてきた、中流よりすこし上、若干富裕層のためのマンションが林立している。

どこか、ヨーロッパの街並みを意識したかのような、石畳の清潔な歩道。

目抜き通りには二〇メートル以上の高さのマロニエの大本が街路樹として等間隔に植林され、並木道になっていた。

初夏の熱がまだ街を支配している。

ここには、暴徒の影も、壊され放棄された自動車の残骸もなかった。

「おかしい、このあたりのハズなんだがな」

ソルベが焦り声でいった。時刻は午前一時過ぎ。

ともかく、エリカはふたりを嫌っているのだ。

交際を申し込むどころの話ではない、謝罪から始まる最悪のスタートといえた。

「やはりこの建物じゃないのか」

マミヤがとあるレンガ造りの建物のまえで立ち止まった。

赤茶色のレンガ造りの外壁、西洋木蔭の一種、イングリッシュアイビーが蔓を伸ばして壁面を覆っている。

三階建ての瀟洒なアパートメント、そんな雰囲気だった。
カフェの看板どころか、表札も見あたらない。

ふたりはうなずきあい、ドアの脇の呼び鈴を鳴らした。

『どちらさまでしょうか』

インターフォンの少女の声、エリカではなかった。

聞き覚えがある、たしかに、マミヤは思った。

「ソルベと申します、失礼ですがこちらは、エリカさんのご実家の
ユリスモールカフェではございませんか？」

自分はエリカさんの通う中学の一五年次生です、
エリカさんにお会いしたくうかがった次第ですが」

沈黙。

マミヤがドアの上、小さな透明の球体を見つける。

ぼん、と手の甲でソルベを軽く叩く。

顎をしゃくってやる。ソルベも上を見て、うなずいてきた。

球体は監視カメラだった。

『……………どうぞ』

ドアの鍵が屋内からの操作で開けられた。ふたりが緊張した面持ちで建物に入ると、風防のためのガラスドアが正面に設けられてあった。

エントランスはちいさな風除室となっていた。

内側のドアは押すと開いてくれた。

カフェのホールが目の前にひろがる。

二十人くらいがパーティを開けるくらい、

それくらいの広さ、右手に長く奥へと伸びるバーカウンター。

左手には四人掛けのテーブルが三台。ほそながい造りのホールだった。

ふたりの少年の眼は、左手の壁に釘付けになっていた。

歴代の優秀な魔導二輪装甲車輛、その写真が所狭しと飾られてあったからだった。

異端審問獵騎兵の駆る獵犬も、魔導少女が逃げ切るための山猫も、

ヤークトフロント

ヴァルトカッツェ

両方ともだ。

すごいな、ソルベがめずらしく素直に感嘆を口にする。

ただのカフェじゃないな、マミヤは思った。

カウンターの奥、キッチンから金髪の少女がエプロン姿で顔を見せる。

「君は――」

少年たちは息を呑んだ。

きのうの未明、G?のインター杯で迎撃した、あの魔導少女だったのだ。

少女はソルベを無視して、マミヤに無邪気な笑顔を見せてきた。

「マミヤ曹長、ワタシがこいつにホウキをへし折られたとき、目を伏せてくださいましたね？」

「ご厚意感謝しております」

カウンターのスイングドアからホールに出て、こくん、とちいさな頭を下げてくる。

「……いや、その」

マミヤは言葉に窮してしまう。

それにくらべてソルベは忌々しげに盛大な舌打ちを鳴らした。

「顔バレしましたので自己紹介します、キャロルと申します、フランス系日本人です、

トーキョー都内の中学に通う一四年次生です」

少女が、キャロルが金髪のミディアムヘアをふわり、なびかせながら、はつらつとお辞儀をしてくる。

マミヤにむかってだけ。

自分たちの一個下の少女、キャロル。

エアマシンで連行されるとき、自分に微笑みかけてくれたのは、そういうことだったのか、マミヤは理解した。

そうすると同時に口を開いて、

「この魔導二輪の写真、それから君がいること、ここはひよつとして避難所じゃないのか」

「おっしゃるとおり、このカフェと裏にあるホテルの正体はワタシたち魔導少女の避難所^{サバト}です」

魔導少女の避難所、通称サバト。

世間から迫害と差別を受けやすい彼女たち魔導少女が安心して生活、

定住するための秘密の施設、住処、それがサバトだった。

サバトに関する情報はすべて人権護民局が所掌している。

魔導少女の個人データは、サバトに避難した時点で、

審問局から人権護民局へとそのすべてが開示される規則となっている。

東京だけでもかなりの数があると噂には聞いていた。

天敵であるはずの猟騎兵たちに、偶然とはいえど捜し当てられたのは皮肉としかいいようがなかった。

「さて帰るとしようか中尉殿」

「なっ、まだエリカにも会ってないのにつ」

「猟騎兵がサバトに接触するのは、

インターセプション・カップでの八百長の嫌疑をかけられるだけだ、

それにシゲミツさんの負けた夜なんだ、

サバトで魔導少女とお話をする気分じゃないだろう」

「ちょっと待てマミヤ、シ、シゲミツさんのことは……ともかくとしてだな、

異端審問法では別にサバトへの接触が禁止されているわけじゃないぞっ、

僕らには捜査権だってあるし」

「ゆっくりしてってください、マミヤさんだけ」

「キャロルといったね、君いちいち突っかかってくるなあっ」

ソルベの言葉に、

「当たり前だ、このドスケベ猟犬め、アンタ、ワタシのおしりをオカズに、

寝るまえ変なことしたんでしょうつ？」

可愛い貌に似合わず、物凄い毒舌だ。

「こっ、こここの娘っ」

ソルベが痛くプライドを傷つけられた様子だった。

「ふたりとも落ちついてくれ」

もういっぺんいつてみる、とソルベがいうと、

キャロルもドスケベ犬、ド変態ワンコッ、オトコのプライドもない政府のペット犬っ、

とまあ容赦ない口喧嘩が始まってしまった。

マミヤがもう一度、仲裁に入ろうとしたとき、

「騒々しいわね」

三人が声のするほうをふりむく。

カフェの奥、裏手のドアが開かれていた。

エリカが、立っていた。

白いネグリジェの上、ナイトガウンを羽織っている。

つややかな黒髪は湯上がりで潤い湿っていた。

それをバスタオルで拭きながらホールを突っ切ってきてくる。

マミヤは顔を赤らめて、そっぽをむいてしまう。ソルベは破顔して近づいていった。

「邪魔、中尉さん」

エリカは右手でソルベを払いのける仕草をしてくる。

「ん、あ、あの——っ」

ソルベは、少女のネグリジェ姿を、白い頸を、開いた胸元をガン見しながら、後ずさる。

エリカはマミヤの正面に立ちはだかった。

「あらためて自己紹介するわ、エリカ・ヴァンデル・メーアよ、この避難所のオーナーの娘、放課後はキッチンでバイトしてるの」

「どうも」

ぶつきらばうに返すママに、エリカは、

「貴方、どういうつもり？ あの子の容態八回も警察病院に問いあわせたそうじゃない？」

ママは彼女を直視できずに——特に胸元、未だ幼いながらも胸のふくらみが呼吸でゆっくり、息づいているせいで——さらに赤面してしまい、

「……無事かどうか気になって、それだけだ」

「それだけ？ ふーん……私にその気がないとわかった途端、こんどはあの子をくどく気？」

「そんなつもりは無い」

「そうよね、天下の審問官様だもんね、獲物の魔導少女なんか相手にするわけ無いわよね」

「異端審問騎兵だ」

エリカは、ママの訂正を無視して、自分の入ってきた裏手のドアをふりむいた。

「——だ、そうよ、チハヤツ、どうする？」

かろやかに呼びかける。全員の注目がドアに集まった。

ひよい、と小柄な少女がドアに隠れながらも、半身をのぞかせる。少女の髪の毛、左の長く優雅に伸びたサイドテールが、ふわり、揺れた。

「君は、今朝の覚醒した女子じゃないか」

ソルベが驚きを口にする。キャロルは不安そうに、

「ねえ、まだ寝てないでだいじょうぶなのっ？」

エリカは、くすつ、と微笑んで、

「愛しのママ曹長がきた途端、体のだるさはどっかへ消し飛んじやったそうよ」

キャロルが、ふう〜ん、と納得げにニヤリ、とエリカに笑顔を返してくる。

「どういことだ、彼女、退院できたのか」

マミヤが三人の女子の顔を順繰りに見ながらいった。

「はい、ついさっきこの避難所^{サバト}に引越してきたばかりですっ……あ、あのっ、私マミヤ先輩のことっ、私、ずっと、ず、ずっとあの、あっあっあっ、あのっ」

チハヤはちっちゃな体を震わせ、舌っ足らずな口調で渾身の告白をしてくる。

キャロルがぷうつ、と噴きだして、

「好きだったんだ？ チハヤ？ 覚醒するまえから？」

チハヤが隠れた半身、顔も、足も手も使って精一杯動かし、何度もうなずいた。

「僕は気に入らないな、なんだ？ なんなんだこの展開は、これはいい——」

「空気野郎は黙ってなさいよ」

またしてもエリカのきつい一言。

「そっだよ、このスケベ犬めっ」

キャロルがピンクのベロを出してくる。

「き、君たち、僕を誰だどっ？ G？G？あわせて一八勝無敗の——」

キャロルは大笑いして、

「デメエなんかあの？魔導の姫？様にくらべたらド三流のチョーザコ野郎じゃーんっ」

「しっ、失敬なっ、世界のG？の頂点に立つ魔導の姫とだね、

まだG？の僕を比較するのは、卑怯だぞっ。

だがしかしだね、い、いずれは僕もだな、いずれはG？には——」

「黙れば？ 妄想は貴方の夢日記にでも書いてなさいよ」
三度、エリカのきつい声。

「僕にくらべたら、このマミヤ曹長はG？のお荷物なんだぞっ、一四連敗のカド番野郎だっ」

エリカはカウンター席のウインザーチェアを引きよせ、馬乗りに座りこんだ。

両の白い、ひきしまった太ももが、ネグリジェからすこしだけはみ出してくる。

ソルベの目が釘付けになる。

マミヤは天井、あらぬほうへ急いで目線を逃がした。

エリカが背もたれに、けだるげにあげを乗せて、

「なら、勝負する？　ここでオトコの度胸、見せあうのもいいんじゃないの？」

「いいともっ受けて立つっ」

ソルベが鼻息を荒くする。エリカの太ももと膝小僧を見て、さらに小鼻をふくらませる。

「中尉だけせいぜい好きにやっていってくれ、俺は帰る」

マミヤが踵を返しエントランスへとむかう。

エリカがキャロルに、ちらり、目配せする。キャロルが笑んで、

「マミヤ曹長っ、お話があるんでーすっ」

駆けよって、彼の腕を引っつかんだ。

キャロルの胸——けっこうある——思いっきり少年の肘に押しあてられて、くにゃん、と形をかえてくる。

少年は赤面して、体を引き離そうとする。

キャロルが、まあまあ、こっちへ、そういつて、ふたりならんでエントランスの風除用の内扉を開ける。

キャロルが扉を開めると風除室にふたりっきりになった。マミヤは困惑してしまい、

「なにをするんだ？」

「マミヤ曹長、魔導少女を代表してお礼をいいます、みんな

一四戦連続でわざと負けてくれていきますよね、つぎ負けたらカド番だってゆうのに」

「……」

「隠しても無駄っ、闘えばわかりますっ、ワタシはみんなから先に聞いていたけど、

きのう闘って確信しました、魔導機関を傷つけずに後部装甲板だシートカウル

けに被弾させるなんてっ、スゴいです」

「……買いかぶりだ」

「ホウキをへし折るの、嫌だからでしょ？ だから負けてくれてるんですよね？」

みんながそう噂をしあってます、

きょうぐらいあのバカ犬中尉と闘って、本気見せてくださいっ」

「俺にはなんのメリットもない」

「勝負してくんないなら報道機関にリークしちゃおっかなー、

異端審問猟騎兵マミヤ曹長は一四戦連続で故意に敗退してるって、八百長疑惑？ そんなんに発展したらキャロルは嫌だなー」

キャロルが、ヤダなー、ヤダなー、といいつつ、

密着してきて——またしても胸が、ふにゃんという感じになって——しなだれかかってくる。

「……」

マミヤは額の汗を拭きながら、わかった、わかったから離れて、とすこし声を荒げた。

キャロルが内扉を開けてうれしげに、

「マミヤ曹長が勝負を受けて立つってーっ」

マミヤの腕を引きながら、ホールに踊りこんできた。

引くに引けない勝負　夏の夜更けのラブソディ、第二幕

エリカがうつすら、笑みをつくり――カフェの古風なシェードランプの灯火に、見事に映える笑みで――すらり、身を翻し、バスタオルをチハヤにむかって放り投げる。

チハヤがサイドテールを揺らし、慌てて受けとる。

それを見てから、エリカはキッチンへと入っていった。

出てくると、両手にもっている肉切りナイフを二本、高々と掲げて見せた。

形状記憶型のサンダルを脱ぎすて、カウンターに乗りあげ仁王立ちになる。

膝の隠れるくらいのネグリジエの裾、太もものシルエットが、くつきり、天井のシェードランプの灯りで透けて見えた。

ママヤがやはり恥ずかしさのあまり、視線を逸らす。

ソルベは絡みつく視線を向けた。

エリカは両手に一本ずつ、切っ先を下にしてナイフをもった。

全長三〇センチほど、おおきな肉切りナイフだった。

「ふたりともチェアに座ってくれない？　両手は下に降ろしたままね」

ふたりはいわれるがまま、ウインザーチェアに座りこんだ。

カウンターの横で互いを睨みあう恰好に座らされる。

頭をちよつと下げて、カウンターをのぞきこめば、

エリカの履いてるショーツがもろに見えてしまいそうな、見えなそう、そんな角度。

キャロルがママヤに近づいて、彼の左横にしゃがんだ。

チハヤが、そろそろっ、と歩いてきて、ソルベの右横で正座した。

「いい、みんな？　これからナイフを貴方方の正面の床に落とすから、

見事に柄をつかみ取ったオトコが勝者よ、

手は片手のみ使うこと、私の合図とともに手を出すこと、
それまでは下に降ろしておくこと、いいわね？

キャロルとチハヤが貴方方の監視役をするからフライングしたヤツは失格よ」

ソルベが、エリカのふくらはぎ、太もものシルエット、かわいらしくふくらんだ両の胸、

それから彼女のツン、とすました表情、最後に二本のぎらつく肉切りナイフを見上げた。

「僕が勝ったら賞品はなんだい？」

「私のいま履いてるショーツを見せてあげるわ、ご不満？」

「僕はっ、い、異存ないぞっ」

マミヤに顔を転じて、

「君はどうなんだっ」

「……構わないが」

キャロルが横から、くすくすっ、としながら、

「ねえマミヤ、顔つき、ガラッと変わったー」

「からかわないでくれ」

「僕は負けないぞ、なあエリカ、もしもふたりとも成功するか、失敗したときはっ？」

「そのときは引き分けね、残念賞なら……そうね、あしたにでもなんか考えておくわ」

「よっ、よし、いつでもこいっ」

ソルベがナイフをじっと睨み上げる。

マミヤはそんなソルベを冷静に眺めていた。

「じゃあ、いくわよ」

ふたりの少年、同時にうなずく。

キャロル、チハヤの両の瞳が輝きを帯び始める、あの、蒼白の魔

導エネルギーの光を帯びる。

少年たちの手の動きを見逃さないために。

魔導力の宿る瞳で——そう、それはどんな地上の野生動物をも凌駕する視力を誇っている——瞳で熱い視線を注いでくる。

エリカが、じっと、見下ろしてくる。

その瞬間を図る、一匹の野生のメスの獣のように。

カフエは、静まりかえり

。

——エリカの両の指が開く。

ナイフが落ちる。

少年たちの手が空を切る。

トンッ——。

小気味のよい音がして、ナイフは……ナイフが——。

床のフローリングに突き刺さっていた。

二本だ、二本とも、刺さっていた。

ソルベは伸ばした右腕を、怯えた様子で震わせていた。

マミヤは、そんなソルベの様子をやっぱり、無表情に見つめているまんまだった。

ソルベが憤慨して立ちあがり、

「どうやら引き分けだね、ぼ、僕はこれで失礼するっ」

「バイバイ政府の御用犬——っ」

キャロルの毒舌を背中に浴びながら、ソルベはエントランスを抜け、外へ駆けだしていった。

キャロルが、にひひー、と笑って、

「はい、勝者はマミヤ曹長でしたあー」

「詳細を教えてよ、ふたりとも」

エリカがカウンターの上からホールの床に飛び降りてくる。
ふたりの魔導少女が、エリカに耳打ちした。

マミヤはウインザーチェアから立ち上がり、

「ちがうだろう、勝負は引き分けだ、俺も帰る」

三人を見渡してから、エントランスへと歩いていくと、

「待ちなよ審問官さん、ふたりはナイフを片づけてきて」

はいっ、とキャロルとチハヤがいつて、ナイフを引っこ抜くとキツチンへと姿を消した。

「また、わざと負けたようね、ソルベが失敗するのを見届けてから？」

「いや、意味がわからないが」

「冗談いわないで、ふたりの魔導少女の動体視力、貴方方とかわらないこと、忘れたの？」

「……」

「貴方、一瞬、柄をつかんだそうじゃない？ 精確にね、ソルベの

失敗を見届けてから、瞬時にまた手放した、ホント、器用なこと……

…なさるのね」

「あのふたり、乱視なんじゃないのか」

「勝者は貴方よ」

「よしてくれ」

「見たく、ないの？」

マミヤが顔を真っ赤にして、

「あ、あたりまえだろう、正式に異性交遊許可証の発付されていない女子を相手にっ——」

「じゃあ、かわりに残念賞をあげるわ」

エリカはいうやいなや、両の手をネグリジェの裾に入れ、裾をたくし上げ、純白のショーツを一気に引きずりおろしてくる。

マミヤが咄嗟に両眼を背ける。

「やめてくれっ、なっなにをっ」

エリカは太もも二本をかるやかに動かし、両の太もも、ふくらはぎ、足首から、

しなやかに白い二本の脚を踊らせ、ショーツを脱いでしまった。

丸めると、マミヤに放った。

少年が両手で受けとめる、思わず、受けとめてしまう。

少年は両眼を、ぎゅっ、とつぶり、両手の中にあるものを見ないようにして、

強く、強く握りしめていた。ショーツにはやさしいぬくもりが残っていた。

マミヤにはそれが灼熱の痛みに感じられた。まるで掌に太陽を握りしめているかのように。

「いっておくけど、男の子にこんなコトするの生まれて初めてなんだからね」

「……」

「お好きに使っていいから、おやすみ曹長さん、今夜寝れたら、の話だけれど」

「——っ」

少年は悔しさと、羞恥と、目の前のうつくしい少女へのこらえよ
うのない想いを胸にして、唯、唇を噛みしめ、見返すほかなかった。
少女は、少年のすべての想いを受けとめるかのようにして、微笑
んでくれていた。

「それと、学校では馴れ馴れしくしないでよね、約束よ？、私って
基本、審問官は嫌いだから」

「……異端審問獵騎兵だ」

少女は、くすつ、と目をほそめ笑顔をこぼしてから、寂しげに、
「いっしょよ」

つぶやいた。

マミヤ曹長はエリカをひと睨みして、それからエントランスを抜け、
外へ、ユリスモールカフェの外へとしゃにむに走り逃げ出してい

った。

エリカは、マミヤの後ろ姿を見送った。

内扉の鍵を掛ける。途端に――。

くたっ、とその場にへたりこんでしまった。

両手で、ネグリジエの裾をきつく引つつかんでいる。

まるでそうすれば、投げ渡したショーツがまた舞いもどってくる
とてもゆうかのように。

キッチンから、キャロルとチハヤが出てくる。

キャロルは忍び笑いを漏らしていた。

チハヤはとんでもない？恋の超強敵？ライバルのエリカをまえに
して、すでに涙目だった。

「OKーっ、上出来だったよーっ、雑誌のマニュアルどおりっ」

キャロルがそういつて、

手にもっているEペーパー――紙状の極薄携帯端末――をひろげて
見せる。

紙面には、ダウンロードされたコンテンツのデジタル文字が躍っ
ていた。

《この夏本番！ 彼氏ゲット大作戦！》

派手なロゴでそう謳い文句がならんでいる。

エリカはそんなキャロルにすがりつくような視線を送った。顔は
真っ赤っかである。

「っ、恥ずかしいっ、やっぱりこんなマネするんじゃないっ」

そういつて、両の瞳に涙を、本気の涙をにじませる。

キャロルが呆れ、ため息をついて、

「いまさら何いつてんのっ」

「だって、だいじょうぶかな？ 私、彼にどう思われたかな？」

エリカの声は不安をとおりすぎて恐怖に震えている。

まるで彼氏の写真を手にフルヌードでニヤニヤしているところを
彼氏その人に見られちゃった、

そんな醜態を晒した少女のように。

さっきまでの威厳はどこへやら、だった。

マミヤ、カグラ姉さんに連行される

翌日、マミヤはどうとう一睡もできず、寝不足で憔悴しきって登校してくる羽目になった。

ナホやクラスの親しい連中から魔導の訓練でもしてたのか、そう聞かれたりした。

マミヤはデスクに突っ伏したまんま、

「なにも聞かないでくれ」

そういつて、またやつれた眼で遠くを見つめるのだった。

初夏の、窓の外の景色を。

まるで長いギャンブラー人生、カジノでついにロイヤルストレートフラッシュを出してしまったディーラーのような、燃え尽きたような、幸運を使い果たしたような、そんな表情だった。

「なあにー？　ひとり黄昏れちゃったりしてえーっ」

ナホは事情がさっぱりわからず、困惑しているようだった。

そんなナホの質問攻めをかわしつつ、午前の授業は過ぎていった。昼休みの時間、ランチタイムになった。

学校食堂のフロア内、一五年次生の独占する南テラス方面は、遮光ガラスで暑熱をさえぎられ快適そのもの。

清々しい夏の陽差しを独占できる上級生の定位置である。

マミヤは、オートマティックでトレイに料理を盛りつけてくれるマシンの行列にならんだ。

自分のランチが配給されると、すぐさま北側、一三年次生の集まる陽のあたらないエリアへと突きすすんでいった。

四人掛けのテーブルがいくつも横にならんで、生徒たちが和気あいあい、うれしげにランチを楽しんでいる。

マミヤの姿を見つけると、途端、声をひそめてしまう。

それから一転、あちらこちらから押し殺した声がわきおこり始める。

——異端審問獵騎兵のマミヤ曹長だっ、スゲえなあ、ぼくもなり
たいなあ獵騎兵っ、でもあの人カド番だよ、とかそんな、あこがれ、
好奇心混じりのひそひそ声が聞こえてくる。

マミヤは、いちばん男子のたむろしているグループを見つけた。
突進する勢いでむかった。

グループのいかにもスポーツやってますって感じのスマートな一
三年次生たち。

彼らがマミヤを見ると、

マミヤ曹長に敬礼っ、と軍隊ごっこであこがれの念を表してきた。
「すまないが、彼女とふたりつきりにしてくれ」
ざわざわ、とさらに一騒動がおきる。

マミヤ曹長が早くも俺たちのマドンナ、エリカさんに目をつけた
ぞっ、

そんな男子たちの落胆、悲鳴、羨望……ささやきの数々。
一三年次の坊主どもは肩を落として散り散りになっていく。
遠巻きになって、こっちの様子をちらちら、うかがってくるばか
りだ。

マミヤは人払いをすませると、北側の窓際テーブル席に陣取った。
正面にいる女子は、一三年次生。
先週帰国してきたばかりの転校生にして超美少女……。

「きのう……アレは、その、非常に困ってしまった」

エリカはゆったりとくつろいで、席に座っている。

窓外の景色を眺めていた。

学校のキャンパスに植えられた並木が、緑も鮮やかに風に揺られ
ていた。

七月の光の降りそそぐ平穏な昼。

ゆっくりと、気怠い仕草でこちらに貌をむけてきた。

「天下の審問官様でも狼狽することがあるのね」

「獵騎兵だ……からかわないで欲しい」

エリカは、くすつ、と笑みを見せて、

「お気に召すと思ったんだけどなあ」

マミヤは周囲をうかがいつつ、

「アレは君に返す、自分には異端審問獵騎兵として、規律ある人生をだな——」

「わざと——」

エリカが正面切って顔を間近によせてきて、声をひそめると、

「わざと一四連敗してきた貴方がいまさら？　いまさら？」

どのツラ下げて獵騎兵の心得を説くというのかしら」

マミヤは迫力に気圧されてしまう。

この避難所サバトのキッチンで働くイチ美少女をまえにして。

「そんなに困るコトかしら？」

エリカは、ランチのアメリカンクラブハウスサンドイッチをひと口かじり、また物憂げに窓の景色に瞳を転じてしまう。

マミヤは美少女の横顔を、途方に暮れて眺めるしかなかった。

「……当然だっ」

マミヤが頭を抱えこんだところへ、

「あ~~~~~ら、も~~~~うっ、ここにいたのマミヤくん~~~~
~~~~っ」

脳天気な、二〇代ぐらいの女性の声が近づいてきた。

マミヤが顔を上げる。

げんなりした顔をうかべた。

ゴミンゴ姉さんだった。

本名はカグラ。遠くから見るとなかなか美人だけど、間近で見ても妙齡の美人だった。

きのうのチハヤの覚醒事件のとき、トンスラぶっこいたあの護民官である。

「さあマミヤくん、お姉さんといっしょに良いところへいきましょ

っ」

「その、カグラ護民官殿」

マミヤが頭痛を頂点にしながらいった。

「あゝらしいのよいつものように？ゴミンゴッ？って呼んでくれてもねー、ともかく」

マミヤの耳元に口をよせ、

「ユリスモールカフェは秘密の避難所<sup>サバト</sup>なの、

人権護民局の縄張りだしねー、異端審問獵騎兵<sup>ウチ</sup>の君にこられちゃマズいし、

それにあのショーツ——」

マミヤが立ちあがる。

「カグラ護民官殿、自分は、自分はその、あの、この件に関して——」

「わかってる、わかってるっ、さあ、無許可の不純異性交遊の容疑で身柄を拘束しまーすっ」

カグラ護民官に腕を引っぱられ、連行される羽目になってしまった。

「なんだかわからないけれど、いつてらっしゃい」

エリカの妙に冷めた——ほんとうにお芝居ががっているぐらいに

——素っ気ないお見送りを背に受けながら、マミヤは学食フロアを美女といっしょに歩いていった。

サバトは人権護民局の直轄化にある。外部との連絡の一部始終は報告される決まりだ。

どうやら、エリカの口から、護民局のカグラへとすべて筒抜けの様子だった。

少女から少年へと、宙を舞い、渡されたあの純白の、危険物のことも。

思春期の少年に、第一級アーデルハイド暴走すら起こしかねない、魔法のアイテム。

少年の自室、ベッドの中限定ではあったけれども。

フロア中央の大階段のところで、ナホとソルベたちが取りまき連中とともにやってきた。

「あらソルベ中尉、ごきげんようっ」

「こんにちはカグラ護民官殿っ、なにゆえマミヤ曹長を拘束なさったのでっ？」

「いろいろワケありなのよんっ、あ、君は問題ないから安心していてよろしいっ」

ソルベはそれを聞いて、

「あ、安心いたしましたっ」

バカ正直に胸をなで下ろすソルベに、ナホが激怒した。

「ちよっとおおおおっ、アンタってば、自分さえよけりゃあそんでいいのおおおっー？」

「ん？ あたりまえじゃないか暴力女？」

「うっさいわねっ……信じらんないっ、なんでマミヤだけ——」  
そこで血相を変えて、

「まさか、マジで不純異性交遊？ 学校に無許可で？」

ナホはショックを受けた様子で、ただ、ゴミンゴ姉さんに連行される愛しの幼馴染みを見送るしかほかになかった。

フォッカーM?F/Aモデル110(第1異端審問猟騎兵連隊・大隊格納庫にて

マミヤは格納庫の電源スイッチを投入した。

高い天井、LED照明灯がつぎつぎと点灯してゆく。

ひろい格納庫だ。

時刻、二三一〇(ふたさんいちまる)時。

長い廊下、左右には獣たちが、魔導二輪装甲車輛だ、  
ヤクトフロント

猟犬どもがずらりと駐機している。

左の列、格納庫のドアから数えて三騎目。

マミヤの愛騎が、密やかに咆吼をあげるのを待っていた。

装甲のカラーリングはサーキットブルー。

第一異端審問猟騎兵連隊隷下、第一大隊、第一中隊、第一小隊、  
第三班。

マミヤの所属部隊だ。一、の数字のならぶのは、彼がエリートの  
証、

そう、それはかつてのエリートの証。

ここは第一大隊専用格納庫である。

サーキットブルーは自分の小隊カラーだ。

小隊隷下の三個の班、各班に一名の猟騎兵パイロット。

こいつ専属の整備兵一名。

以上二名で一班を構成する。

こいつ——制式名称、フォッカーM?F/Aモデル一一〇。

ドイツと日本の共同開発車輛。

F/Aとは、戦闘及びミサイル攻撃型を、モデル一一〇とは一〇  
〇〇を掛けあわせて、一一万を意味する。

魔導爆燃機関を毎分、一万アーデルハイドまで安全回転できる  
機体性能ってゆうわけだ。  
レッドゾーン

それ以上の回転域は危険領域、

そう呼ばれている。

全長三一九〇ミリメートル。

乾燥重量四三〇キログラム。

機体の横、後方装甲板左横にエンブレムの塗装。  
シートカウル

黒地に赤い髑髏が魔女のホウキを噛み千切っているデザイン。

第一異端審問猟騎兵連隊のエンブレムである。

鋼鉄の獣のまえ、鼻っ面の先でマミヤはあぐらをかいて相対していた。

マシンとおなじカラー、サーキットブルーのマギアパンツァーを着用している。

「なあ、あのさ、フォッカー……」

マミヤは愛騎にひとり、語りかける。

少年のその貌は、とてもおだやかなものだった。

「ゴミンゴ姉さんのヤツがさ、俺に無理難題ふっかけてきたんだよ」  
獣は沈黙したまま、マミヤのまえに唯、その巨軀を固定スタンドにあずけ、静まりかえっている。

マミヤが立ちあがり、騎乗した。

手にしていた、あの金属製のピルケースから？魔導石？を一錠出して噛み砕いた。

瞳が、全身があのだ蒼白のオーラに包み込まれてゆく。

コクピットのコンソール、血液認証パネルの上に親指を押しあてる。

ほんのわずかな血液が、パネルから打ち出された採血針によってマシンに流れこむ。

遺伝子解析がおこなわれ全システム、起動準備を開始。

『キュインツ、キュツ、キュイイイイイイイイイイイインンンン  
ンンンンンンンンンツツツ』

愛騎が起動した。

起動時の、金属の擦れ合う、かるやかな高音が格納庫の壁に反響する。

クラッチレバーを握りしめ、アクセルグリップを回してゆく。

マミヤの両の瞳、光彩が爛々と輝く。

その強さを増し始める。

少年の発する？人工の魔導エネルギー？と

マシン本体の燃料タンクにセットされた魔導石、

そのふたつのパワーが相手を認識しあい、対消滅を始め出す。

パイロットと魔導二輪装甲車輛、二種類の魔導エネルギーの対消滅したときこそ、

マシンの走行性能も、武装のコントロールも、すべてのスペックを十全に発揮できる。

そう、対消滅の瞬間、魔導エネルギーの、蒼白色のパワーが爆発的に発生するのだ。

魔導メーター、その回転数が上昇を始める。少年が歯を堅く食いしばってゆく。

……五四七、

一八三九、

五八九二、八九九四、九九七三——。一万〇〇九四。

六秒で一万を超える、魔導爆燃機関、臨界を突破、走行可能域に突入する。

『グオオオオオオオオオオオオウウウウウウウウウルルルルルルルルルンンンンンンツツツ』

音がかわる、爆音にとってかわる。

さらにアクセルグリップを回す、

スロットル開度を全開へ——。

第一六戦目でキャロルと対戦したとき三万がやっと、それだけしか出さなかった。

出そうとしなかった、

それがいま――。

三万五七八一、

四万八九〇六、

五万七八九九、七万二〇五五、一〇万九〇四三……………。

一一秒で一〇万オーバー。

魔導メーターが跳ね飛ぶ勢いで上がる、上がりつつける、  
レッドゾーン危険領域までぎりぎりのところへ。

全身の生気を、魔導エネルギーを吸われる、獣に喰われる感覚、  
生き血を吸られてゆく感覚に近いものがある。

後方、排気口から蒼白の炎が、彗星のように尾を引いて噴きだし  
ている。

少年と魔導爆燃機関の魔導石のパワーが混じりあい、文字どおり  
燃焼し、消耗していった。

アクセルグリップをもどす。

下がる、魔導メーターは一気に下がっていった。

爆音は止み、排気口の彗星天体ショーも終わった。

『キュウウウウイイイインンンウウウウンツ、キンツ、  
キンツキンツ……キンツ』

水冷システムが魔導爆燃機関を冷却、冷温停止状態のステージに  
移行させる。

独特の、金属を鋭く弾くような音が鳴り始めた。

金属音は終息してゆき、冷温停止状態へ移行完了。  
クラッチレバーをもどす。

からやかな拍手が鳴った。何度も打ち鳴らされてくる。格納庫のドアのほうから、だった。

マミヤは騎乗したまま、右手のドアをふりむいた。

カグラ護民官が独り、拍手をしていた。

こちらへ歩きながら、

「きょう一日、お付き合いただき恐縮です」

声には、中学校でみせるお遊びの雰囲気は微塵もない。

マシンのそばまでやってくる。

マミヤは両手、両脚をだらり、放り出した感じで騎乗していた。

「魔導メーター、排気音から察するに一一秒台で回転一〇万オーバ  
ー、お見事です曹長」

「カグラさん、それくらい真面目に授業すればいいのに」

カグラ護民官はすこしだけ微笑んで、

「真面目にやってもやらなくても、みなさんは聴いてはくれませんか  
から」

沈黙がおりた。

マミヤは大人の美女をまえにして、語るべき言葉をなんとかして  
紡ぎ出そうとしていた。

カグラは、それを待っていてくれる風情だった。

話してもいい、このオトナになら、

それがマミヤの結論だった。

きょう一日、彼女と話し合い、そしてマミヤの考えた末たどりつ  
いた答え。

「……ときどき、ちょっと、わからなくなることがあるんです」

「なんででしょう？」

「俺たち、なにをしてんだろっ、って、なんでこんな凄いマシンに  
乗ってまで、女の子たちをおっかけ回して、その……」

「ホウキをへし折る行為をしなければいけないのか、ですか？」



「……そうだよ、授業では絶対話さないよね？　獵騎兵たちが、勝利後に少女たちにする？　身体検査？　のこと」

「ええまあ、人権上、グレーゾーンを遥かにぶっちぎってますから」  
マミヤはただ、力なく頸をふるばかりだった。

カグラは毅然とした態度で、

「魔導少女症候群、

正式には？　グレコイグレスias症候群？　を発症した少女には、  
かならず胸から太ももにかけての肌のどこかに痣が生じます、

通称、悪魔の紋章、この痣の消滅が、症候群の完治を意味します、  
現場にて速やかに紋章消滅の存否を視診にて確認すること、

この医療行為は希有な特例として異端審問獵騎兵たちに厚労省より認可された権限です」

彼女のよどみのない言葉、その一言一句にマミヤはうなずき返していった。

「そして痣を消滅させるには、

少女たちの発する魔導エネルギーを消費させつづけるしかありません、

それ以外方法は無いです。

彼女たちに必死になってもらうには、競争が、負ければ？　罰ゲーム？　の待ち受ける苛烈な競争が欠かせません。

そのためのインター杯、そのための視診です。

せめてうわだけでも人権を守った上での、ぎりぎりの処置です」

「それだよ、その視診が俺たち隊員の原動力なんだ、

みんなその瞬間、女の子を……したいように……する瞬間に飢える、

だからこんな危険な任務をしてる、

軍政府公認の賭博の対象にまでされても、それでもつづけている

んだ、

勝てば賞金ボーナスの支給付きでね」

「心中、お察しします」

カグラが頭を下げてくる。

そんな彼女を横目に見ながら、マミヤは視線を床面に落として、

「初陣は、勝利の瞬間、最高だったんだ、

魔導少女のホウキをへし折ってやるのが、痛快でたまらなく快感だったんだ

……自分は、正義の、社会秩序の番人なんだ、ってバカみたいに思ってたんだ。

それが二勝目で嫌になった、

女の子が泣きだした瞬間、俺は……」

「……」

「……俺は……ゾクゾクきたんだよ、

女の子の涙を見て、一層ホウキをへし折ってやりたくなった、

どうしようもない衝動だった、

あの女の子の着てるパンツァーをひんむきたくってしょうがなくなっただんだ。

……俺は、最低の……クズだったんだ……いまでも、それは変わらない——」

「ご自身をお責めになることはありません、

彼女たちは要治療対象者です、

社会の治安維持のためにです、

覚醒時の危険な重力波爆発、中学校で先日ご経験されたはずです」

「カグラさんは真っ先に逃げだしちゃったけどね」

「はい、私には生きてやり遂げる任務があります、

勇敢な獵騎兵殿が二名もいらっしゃいましたので、現場をお任せ

いたしました」

「汚いなあ、オトナって……いっつも」

「己自身の身の内にある清濁をいかに見極めるか、これが大人の指標です」

「……」

「改めてお願い申しあげます、

曹長、？魔導の姫？との試合にエントリーなさってください、

その後は我々が手筈を整えます。

あの少女に勝てるのは、現在、世界中で貴官をおいてほかにはありません、

？あの少女の命を救える？のも、貴官をおいてほかにはおりません」

深く、カグラは深く、礼を尽くし頭を下げてくる。

マミヤは、コクピット、左右のグリップを握りしめた。

魔導メーターを見つめる。

いま目盛はゼロの位置にあった。

時計回りに一，二，三……目盛の一が一万魔導力場展開を意味する。  
アーデルハイド

……一〇，一一，ここを過ぎると表示が赤く塗られている、  
レッドゾーン  
危険領域を示す目盛だ、

一二，一三，一四，一五。以上。

一五……絶対危険領域、一五――。

その最高値を見つめつづけながら、

「……闘うしかないんですよね？」

？魔導の姫？と、彼女の？希望の悲鳴？と？  
ゲシユライ・トラウム

マミヤは、自分自身に問いかけるかのようにつぶやいた。

「はい、曹長」

「姫の正体……やっぱりわからないままですか？」

「はい、ドイツまで部下を派遣しておりますが、未だ不明のままです」

「きょうカグラさんが教えてくれた話、すぐには、やっぱり信じられなくて……」

「無理ありません、ですが——」

いいよどむカグラを見て、マミヤがやさしく微笑んだ。

「だいじょうぶ、大隊格納庫には盗聴器こくしきの類はないですよ」

「——ですが我々の内偵調査の結果、ほぼまちがいは無い、そう断言いたします」

「……ほんとうに？」

「はい、軍政異端審問局は本気です、

大佐は、？魔導の姫の暗殺指令書？に署名を済ませています。

このままでは姫は、つぎのインター杯のレース中、？不慮の事故死？を遂げる運命です」

「そうなる前、に？」

「事故の起こされるまえに、曹長がお勝ちになってレースを終わらせる意外、

姫を救える道はありません」

格納庫の壁、デジタル時計があった、

いま日付がかわった、〇〇〇〇（まるまるまるまる）時の電子音が、格納庫内に鳴り響いた。

## お風呂場の女子会〜ホテル・ユリスモールにて〜

ユリスモールカフェの裏手にはちいさな林がひろがっていた。  
常緑樹の高木、ブルーヘヴンの木立がほそく天高く、  
空に突き刺さるかのように鋭く伸びている。

木立に囲まれて、三階建ての古風な洋館があった。

ホテル・ユリスモールである。

正方形の洋館は、中央が吹き抜けになっており、  
パティオ中庭を形づくっている。

一階の大浴場、すこし開いた窓から湯気が中庭へと漏れ出ていた。  
少女たちの笑い声が聞こえる。

四、五人が一度に入れるバスタブが湯気を立ちのぼらせている。  
初夏の深夜、おだやかな風が吹きすぎてゆく。

エリカはバスタブに肩まで浸かり、縁にあごを乗せていた。

ロングヘアをタオルで巻いている。お湯で熱った額に、頬に、う  
なじに、

じんわり、汗が滲んでなんだか色っぽい。

A四サイズの紙を両手にもってひたすら見入っていた。

Eペーパー。文字どおり紙状、極薄の防水型携帯端末である。

紙面には、ネットでクレジット決済後ダウンロードした雑誌が映  
っていた。

〈月刊ジュニアスクールガール〉の九月号だ。

特集は《夏本番！ 今年の夏こそ彼氏をゲット！ 必殺テク総特  
集！》

と謳っている。

「？姫っ？、なーに見てんのさっきっからっ」  
キャロルが威勢よく叫んでくる。

チハヤの小麦色の四肢と日焼けしていない白い貧乳に腰、背中を泡いっぱいにして、

ボディスポンジで洗ってやっている。

「うん、ちよっと、ね」

エリカは優美な眉根をすこしばかり困惑げに曲げている。

《さあ狙った獲物、いやいや彼氏にマニュアルステップ二で挙げたように、

危険な贈り物、ちゃんとあげたかな？

目の前でショーツを脱いで放り投げてやれば、オトコなんであつという間にイチコロ！

あなたに夢中！ ステップ一で書いたように、  
あなたが怒っているのがちゃんと伝わってれば、女の子が主導権を握るのはカンタン！》

うんうん、と紙面の文字にエリカがうなづく。

「ほーんとっ、姫ってつくづくマニュアル女子だよーっ」

キャロルもそういつてうなずいた。ゆたかな胸のまえで腕組みをしている。

チハヤがキャロルの肩越しから恥ずかしげにのぞきこんできた。

「なっ、なによっあんたたちっ」

キャロルは大笑いして、

「いままでヤローに見向きもしなかったあの？魔導の姫？がねえーっ、

よりによって初めてのオトコが審問猟騎兵？

なんのジョークよっっー感じじゃんっ」

なあ？ チハヤッ、そういつてがしがしとチハヤのお湯に濡れた髪の毛をなでぐり回す。

「い、痛いよう、キャロルッ」

エリカは、いちゃいちゃしているふたりの少女を見ながら、

「そういうんじゃないし、ちがうし、遊びだし」

「またまたあーっ、いまさら隠すなよっ」

「といってキャロルが顔を近づけてきて、

「相手のマミヤくんはアンタの正体知らないんだから、かわいそうじゃない？」

ウチら魔導少女と、ウチらを狩るのが使命の獵騎兵、

こりゃあ叶わぬ恋だわーっ、ってか、フツーに考えて異性交遊許可証、絶対下りないよ？」

チハヤがふたりのそばに近づいてきた。

「たぶんね、姫はマミヤさんがね、一五連敗してクビになるのを待っていると思うの」

「あっ、そっか、マミヤくん？カド番？だったっけっ？」

「マミヤさんで私たちの？恩人？みたいな感じだよね？ だからなんだか複雑……」

チハヤがそういうと、キャロルの顔から笑顔が抜け落ちていった。エリカは不敵な、それでいてなんとも苦り切った嫌そうな表情をうかべてくる。

それから、ふんっ、と無理矢理笑みをつくって、

「だからっジョークッだって、私別にあいつの負け望んでないし、異性交遊望んでないしっ」

キャロルは、途端、そうはかんたんにダメされないぞ、っとそんな感じに邪悪に微笑んで、

「ただのジョーク？ そんだけでショーツを犠牲にしたの、それだけのためにー？」

「そうよっ」

「ねえ姫、あの渡したショーツ、いくらした？」

「やつすいヤツよ、まえに買って一度も履いたことなかった安物だけど、それがなにか？」

ふたりの言い合いにチハヤが首を突っこんできて、

「あの、私このまえ姫の買い物つきあったんだけど――」

「ちよっ、チハヤツ」

慌てるエリカを尻目に、キャロルが、

「なに？　そんでなによチハヤツ？」

「一万八千円のシルクの白いショーツ、買ってたよ、まちがいなくソレが渡したショーツだと思うの」

キャロルが、ニヤアーツ、とした笑いを見せてくる。

チハヤも興味津々にエリカを見てくる。

「姫のウソツキーツ、たっち悪うーっ」

キャロルがそういつて笑いころげる。

跳ねたお湯とボディシャンプーの泡が宙に舞った。

「な、なによっなんか文句あんのっ？」

そう叫ぶ——戦闘態勢に入った猫のような——エリカの肩に、キャロルが腕を回してきた。

姫はーっ、惚れた男に一途ーっ、ヘンな調子で彼女は、この夏流行りのラブソングの替え歌をつくって、冷やかしてくる。

「なによっ、は、恥ずかしかったんだからっ、渡したあと死ぬほど恥ずかしかったんだからっ、やれるもんならキャロルもやってみなさいよっ」

「姫はあーっ、好きなオトコにはー、恥ずかしくってもーっ、死ぬ気でショーツを渡すーっ」

「なによそのヘンな替え歌っ」

そこへ、浴室のホームセキュリティコンソールから、アラームが鳴り出した。

エリカとキャロルの売り言葉に買い言葉の口喧嘩がやんだ。

「んー、なんだろ？」

キャロルが立ちあがり、コンソールの画面を見る。

「げっ、噂をすれば姫にとって運命のオトコ、マミヤ曹長がカフェのまえにきてるっ」

「え、ウソッ」

エリカの声がうわずった。



「マジだよほらあっ」

キャロルが画面を指さした。三人が見入る。

「マミヤ曹長だった。ドアのまえでいったりきたりをくりかえしては、

チャイムを押そうとして、ためらう様子を見せている。

「や、やややだっ、どうしよう、早く上がんなきゃっ」

エリカが取り乱し始める。バスタブから上がり、速攻で体を拭き始めた。

キャロルが、にんまり、見逃さないとばかりに笑ってくる。

「姫ーっ、ステップ三の勝負服と下着はOK？」

「え、あっ、もちろんだいじょうぶっ」

「それと夏場の汗のにおいをおさえるひかえめなオーデコロンはー？」

「よ、用意したっ」

「マミヤくんが迫ってきたらー？」

「マッ、マニユアルには、ステップ三では、いまはまだ、キスと軽く胸にタッチ以上は許しちゃダメって……」

そこで、そう、そこまで口を滑らしてから、

「魔導の姫？ことエリカ・ヴァンデル・メーアは、うしろにいるふたりの視線に気がついた。

ゆっくり、ふりかえる。

キャロルの、してやったり、のニヤ笑い、エリカという、勝てそうにないライバル出現による、チハヤの哀しげな潤んだ瞳……。

「なあに？ この私に？ ？魔導の姫？になんか文句でもあるの？」

「——ッ全力で本気モードじゃ——————んっ、姫エエエ————」

「ち、ちがうってなにバカいってんのキャロルッたらっ、わかったっ、あんたこそ……さてはマミヤ狙ってんでしょー」

「はあっ？ このワタシが？ そ、そりゃ負けてくれた恩義は感じて  
るわよ、でも——」

「ほーらやっぱりきっかけはそれじゃないのよっ、そうに決まってるっ」

「はああっ？ なっ、なによーっ、いくら姫でも勝手なこといわせないんだからねーっ」

エリカとキャロルは一糸まとわぬすっぱんぽんで、

取っ組み合い寸前の口喧嘩に突入してしまった。

口ではおさまりきらず、ふたりは実力行使に突入した。

エリカがお風呂のお湯をキャロルの顔にぶっかけた。

キャロルがお返しとばかり、ボディシャンプーで泡の立ったスポンジをぶん投げてくる。

ふたりの脇を、おなじくすっぱんぽんのチハヤが、

そろそろっ、と抜き足差し足忍び足で出ていくのに、ヒートアップしたふたりは気づかなかった。

## マミヤの意志

時刻は〇二〇〇（まるふたまるまる）時をまわっていた。

睡眠時間の減少したこの時代といえど、下級生の、しかも女子の家を訪問するには著しく常識を欠く時間帯といえる。

なりふり構ってはいられなかったのだ。

マミヤはいてもたってもいられず、ユリスモールカフェへと足をむけてしまった。

あの少女に逢いたかったから。

ひと目、エリカの貌を見たかったから、どうしようもなく、見たかったから。

赤レンガの建物、イングリシユアイビーの蔓の絡まった壁面を見上げる。

あんなものを放って渡され、あんな別れ方をして、学校外でどんな顔をして逢えばよいのやら、さっぱり見当もつかない。

そうこうするうち、時間だけが過ぎてゆく。

やはり、帰ろう、そう思い、踵を返したときだった。

かちやり、エントランスのドアがほんのすこし開いた。

マミヤがうしろをふりかえる。

開いたドアの隙間から、じいー、とチハヤがこっちをのぞき見ていた。

「あの、チハヤくん」

マミヤが声をかけると同時に、

「好き……」

チハヤは蚊の鳴くような声でささやいた。

瞳を潤ませながら、決意を固めた様子で眼力がとんでもなく強い。

「……チハヤくん？」

ぱたん、  
ドアが閉じられてしまう。

音を立てるのを怯えているかのように。

彼女のたった一言、不意の一撃を食らい、ドアのまえに立ちすくんでいると、

またドアがすこしだけ開いてきた。

チハヤがやつぱり隙間から外の道路を、マミヤのほうを潤んだ瞳で見つめてくる。

「チハヤくん、あの――」

「好き……」

また、ささやいた。瞳が潤みすぎて泣き出す寸前である。

マミヤは頬を赤く染めながら、

「いや、そういうことは、女子がだね、軽々しくいわないほうが、その――」

「チハヤは、平気ですよ？」

「え？」

「私が、もしもまた暴走したら、呪符で拘束してくださいね、」

チハヤは、チハヤは我慢します、マミヤ先輩になら縛られても、

チハヤ、平氣」

「チハヤ、くん」

マミヤがしどろもどろになった。

そのとき大声が聞こえてきた。

「なあーにいつとんじゃあつ、こんのクソガキアアアアアア  
アアアアーーーーッ」

キャロルの声だ、カフェの奥から響いてくる。

すかさずうしろからチハヤを羽交い締めにした。

チハヤが口をぱくぱくさせて、

「た、助けてー」

どうにも抑揚の乏しい、頼りのない悲鳴を上げた。

「ひかえめな態度を見せておいて、私たちをさしおいて抜け駆けするとは、怖ろしい子っ」

別の声が近づいてきた。

エリカだ、彼女が遅れてエントランスに顔を見せた。

「エ、エリカちゃん、助けてー」

チハヤの哀願に、

エリカは、

「転校からコッチ、まだ一週間のつきあいだけど見抜けなかったわ」

「お仕置きだからねチハヤッ」

キャロルがバスローブの胸元に、チハヤの顔を押しつけながら引っ立てていってしまった。

カフェの正面、マミヤとエリカ、ふたりつきりになる。

道路の街灯に照らされ、マミヤがエリカを直視できずに、立ちつくしていた。

エントランスの間接照明の灯りの下、エリカがバスローブを着てそっぽをむいている。

湯上がり彼女は、頬を薄く桃色に上気させ、

白い肌には湯の滴と初夏の汗をじんわり、にじませている。

「こんな夜になんか御用？ 審問官さん？」

「猟騎兵だ、いや、その」

マミヤは、足もとに視線を落とした。

「きみの顔が、見たくって、それだけで」

自分自身、どんな顔をしていいのかがわからない。

夢中で言葉を探す。

「見れて、よかった」

彼女は黙りこんでいる。

「じゃあ、帰るから、こんな遅くに悪かった、ごめん」

「別に、悪いなんていってないじゃない？ なんでいちいち謝るの

よ」

エリカは瞳を逸らしながら、つつけんどんにいつてきた。

「ご用件は？　ほんとは何をいいにきたの？」

詰問され、マミヤは貧乏揺すりのように体を動かしてから、それから――。

顔を、あげた。

「近々、おおきなレースに……出るかも知れないんだ」

「そう？　お相手は？　その魔導少女は強いのか？」

マミヤは肩をすくめて、

「うん。とても、とっても、強い」

「貴方たしかカド番だったわよね……こんどは本気を出すおつもり？　それともまた――」

「これで失礼する」

エリカが、まだ何かをいいかけようとした。

カフェのなかから、ホームテレフォンの着信ベルがけたたましく聞こえてきた。

それを合図にしたかのように、マミヤは走りだした。

カフェのほうをふり返ることもなしに。

## エリカのほんとうの想い

カフェに通話してきた相手は、  
魔導の姫こと、エリカ・ヴァンデル・メーアのスポンサー企業の重役だった。

テレフォンのビデオ画面、  
その中年男は肥満した体を特注サイズのエグゼクティブチェアに無理矢理押しこむようにして座っている。

オフィスは控えめの間接照明で薄暗い。

エリカには、ビンに無理矢理押し込められたフォアグラが暗闇で笑っているように見えた。

カフェの一階、

テレフォン端末のまえで、彼女は体のシルエットを男に見透かされないよう、

サマーセーターとロングスカートで防御していた。

この男の、いつも少女を値踏みする目つきが大っ嫌いだったからである。

男はフォアグラのトリュフソース添えに舌鼓をうちながら上機嫌に話していた。

「いやあきょうはめでたいすよ姫、難航していたつぎのレースの対戦相手ですが、

ニッポンの猟騎兵どもが何人かエントリーしてきております」

「それはどうもミスター・シャハト、で、こんど私の倒す犬っころはどんな連中？」

「まず前回瞬殺されたシゲミツ中佐が最初にエントリーしましたぞ」  
「あら、学習能力ないのね、日本のトップエースさんてば」

シャハトという名の重役は、エントリーしてきた幾人かの猟騎兵らの名前を挙げていった。

エリカが長い髪をかき上げながら、

うざったそうに聞き流してゆく。

「最後に……なんの冗談だか、G?でカード番をむかえてる若手がひとりエントリーしましてな」

彼女の髪をいじる手がとまる。

ついさっきの、マミヤの言葉が甦った。

——?うん。とても、とっても、強い?あのひとはそういった、

強い、魔導少女。

「そのワンちゃん、名前は?」

「マミヤ、階級は曹長、戦績二勝一四敗、一五連敗した獵騎兵は分限免職されるのが世界の公式ルールです、ニッポンリーグでもたしかそのはずですな、この若僧なにを考えているのやら」

「ラストに、私に負けて引退の花道でも飾るつもりかしらね」  
シャハトはエリカの言葉に大笑して、またフォアグラをフォークで口に運んだ。

「ええと、ではマミヤ曹長のエントリーは拒否でよろしいですな?」  
「受けて立つわっ」

叫んだ、エリカは叫んでいた。

声の裏返りそうになるのを懸命にこらえながら。

シャハトは、フォークのフォアグラを皿に取り落とした。

啞然とした様子で、

「ですが、姫とこの曹長ではレースが成立するかどうか、オッズもどうなることやら、我がヘルマン&ハインマン社としましては、

G?の名に恥じない、後世に語り継がれるレース展開を希望している次第です」

「私が憐れなそのカード番獵騎兵殿に引退の華を添えて見送ってあげる、



この魔導の姫が直々によ、

H&H社はいつもどおり前宣伝にお金をかけて盛りあげてくれればそれでいいわ」

自然と口調が早口になってくる。少女の心の泉が波立つ。

フォアグラの材料の犠牲となったガチョウたちがその泉で一斉に水浴びを始めて、

少女の感情の襞に波紋をひろげまくっている。

フォアグラども自重しろよ、エリカはつぶやいた。

「は？ 姫？」

「なんでもないわ、とにかく私のおしりを追いかけてようってゆうバカ犬さんたち、

全員葬ってあげるから、ミスター・シャハトはしっかり契約を結んでください、

よろしいかしらっ」

シャハトはエリカの剣幕に驚いた様子だったけれど、あの姫の最終決定である、逆らうことはできない。

愛想笑いをうかべながら、姫のおっしゃるとおりに、そういつて通話を切った。

一二歳の少女はカフェのホールでひとり立っていた。

周囲に誰もいないのを確かめる。

くすくすっ、とうれしさのあまり忍び笑いを漏らし始めた。

ロングスカートのポケットからリストタブレットをとりだす。保存してある動画を呼び出した。

G?の初陣で圧勝したマミヤ、その少年が満面の笑顔を見せる勝利インタビューの海外配信動画だった。報道記者たち<sup>プレス</sup>に囲まれた少年はよろこび、栄光に輝いて見えた。

エリカはうつとり、眺めやってから、

「ねえマミヤ、魔導少女<sup>わたしたち</sup>を氣遣って一四連敗してくれていままでありがとう、

私が、この魔導の姫が、

貴方を苦痛から解放してあげるからね、

私に負けて晴れて政府の番犬をクビになったら、もうだいじょうぶっ、

貴方が猟騎兵をクビになれば、私と貴方の異性交遊許可証だって下りるわ、

ってゆーかトーキョー都にお金積んで下ろさせてみせるからっ」

少女はうつとり、動画を見つめながら、

「ほんっと、貴方ってば、実力を隠してきたからって、

よりによってカド番のときこの私に挑戦を仕掛けてくるなんて、調子のりすぎっ、おてんばさんだぞーっ」

さらにリスタブの画面に頬ずりしながら、

「もうっ、まさかとは思うけど、魔導の姫のほうに恋しちゃったんじゃないでしょうね？」

世界の頂点に立つ姫のハウキをへし折りたくなっちゃったの？

姫のカラダ、見たくなっちゃったの？

だとしたら浮気だぞ？　ダーリンッたらっ、

この、うつ、わっ、きっ、モ、ノッ」

エリカの妄想はとまらない。

インター杯勝利後の自分のイメトレをやり始めた。

彼女のイメージのなかで、マミヤ曹長は屈辱に全身を震わせている。

エリカがその前に立ちはだかっている。

そしておもむろにローズレッドのヘルメットを脱ぎ捨てるのだ。

彼女は膝を屈して両手をひろげ、負けた——ことになっている——マミヤのマネを始めだした。

声色をかえて、

「君がっ、ま、まさか、魔導の姫がエリカッ、君そのひとだったなんて知らなかったっ」

彼女はすかさず体の立ち位置を入れ替える。

魔導の姫たる本人役を始めた。

「そう、この私が魔導の姫……貴方の力量では一〇〇万年ほどエントリーが早かったようね」

マミヤ少年にチェンジ。

「俺は、なんて、浅はかで、スカした、身の程知らずのストコドッコイだったんだろうっ」

両手で美しい黒髪につつまれた頭を掻きむしる演技をするエリカ。またしても立ち位置をチェンジして、

「おかわいそうに……貴方、猟騎兵以外になんの取り柄もないことだし余生はニート確定だわ」

くるりとふりむいて、

膝を屈し、両手を高々と掲げながら、

「ああ、お、俺はこれからどうすればいいのだろうかーっ」

エリカはまるでその場にマミヤがいるかのように、  
空気<sup>エア</sup>マミヤをやさしげに抱きしめるポーズを取った。

「だいじょうぶよ、私の可愛いワンコちゃん、

私とい、異性、異性、交遊を、コホンッ、

この私が貴方をこれからずーとっ、やっ、養ってってあげるからっ」

いつもの冷め切った仮面を脱ぎ捨て、可愛らしい一二歳の恋する女の子の貌になる。

ほっぺたを真っ赤っかにして、両腕を自分で自分の体に巻きつけている。

ひとりハグ、である。

エリカは瞳を潤ませながら、声音をかえるのみたいに忘れ、

「……ひ、姫ーっ」

チェンジ。

「いやっ、エリカ、って呼んでくれなきゃイーヤーなーのーっ」

一人二役を演じ終えた。

ひとりハグの両腕に回す力が、ぎゅっ、と強まる。

腕の中美しい小ぶりの胸が、ふわん、と形をかえる。

「…………ふふっ、私ったらどうしよう？　とうとう言っちゃったっ」

上気した頬に両手をやる。恥ずかしさのあまり——だったら最初っから小芝居なんかするなよって話なんだが——貌を覆って、未だ幼いながらも未発達の美しいボディラインをふわりふわり、と揺すりまくった。一二歳とは思えない、艶のある腰とおしりのくねり具合である。

ふわふわダンスが始まった途端、カフェの裏手のドアから爆笑がおきた。

キャロルとチハヤである。

ふたりして今まで気配を殺して——魔導少女の能力である——気づかれぬよう、エリカの小芝居の一部始終を見ていたのはまちがない。

キャロルはドアをガシガシぶっ叩いて涙を流して笑っている。

チハヤはまだ幼い小麦色の体を、くにゃん、と曲げて笑いの発作に全身を震わせていた。

ふたりが抱き合って、笑い死にの発作をどうにか食いとめる。

キャロルがマミヤの声音で、

「ひっ姫、ひめえええええっっっ」

チハヤがエリカの口真似というにはあまりにお粗末だったけれど、「いやなのー、ちはや、じゃなかったー、えりかつ、て呼んでくれ

ないと、いやなのー」

その舌っ足らずな棒読み演技に、キャロルが腹を抱えながら、「きゃっ、ワタシったら、どうしよう、とうとう色ボケで頭のほうがイっちゃったあっ」

ふたりして涙を流し何度も笑いころげた。

姫のふわふわダンスの真似をしながら。

少女たちのおしりがその都度、ふわんふわん、悩ましい動きを見せる。

エリカは、素の無表情になった。

なんとゆうか男の子が良くない本を見ながら、

良くないことをしている最中、ママに部屋のドアを開けられ突入を許してしまった、

そう、あの世紀の瞬間の表情となっている。

男の矜持と女の矜持、崩壊するときは、

まあ、どっちも似たり寄ったりなものなんであろう。

その顔つきのまま、つかつかとキッチンへ入っていった。

「あれ、姫ー？」

キャロルが笑いを引っこめる。いぶかしんでいると、

世界に冠たる魔導の姫は出てきた。

肉切り包丁二本持って。

「お前らコロす」

いった、彼女は言い切った。

声が半ば本気っぽかったりする。

？世界の姫？の貫禄をすでに取りもどしていた。

姫は、コロす、ぶっコロす、そうぶつぶつ、と物騒なことをつぶやきながら突進してきた。

肉切り包丁二本を水平にして——これはマジで刺すときの恰好だ

——刺突の姿勢になっている。

裏手のドアにだらしなく寄りかかっていたふたりが身を翻す。

一目散にホテルにむかって逃げだす。

混じりつけ無しの絶叫を上げて。

エリカは包丁もったまんま、呪法誘導ミサイル弾もびっくりの速さ、

ひたすら全速力でふたりを追尾した。

そのうつくしい貌に薄笑いをうかべながら。

## 怒りのナホ

夜空を見上げれば、無数のエアマシンたちが飛びかっていた。その放つ光の奔流が流星のように尾を引いている。

マミヤは遙か高空を仰ぎ見るのをやめた。

見飽きた人工の天体ショーだ。

おおきなマロニエの並木道をエアポート目指して歩いてゆく。

中学の夏服が汗を吸って不快だった。

暑さのせいではない、嫌な脂汗が流れてくる。

嫌でも、甦ってくる、カグラ護民官との会話が。

この汗は、その記憶のせいだった。

押しつぶされそうになる、彼女の言葉に、それゆえのプレッシャーに。

だから逢いにいった、エリカに逢いにいった、  
なんとしても逢って、あの貌を一目見たかったからだ。

逢ったからってどうなるとゆうもんでもない。そんなことはよくわかつている。

わかつてはいたけれど。

重苦しい物思いにふけるのをやめた。

視線に気がついたのだ。

ふたつの視線に。

マロニエの大木の陰にふたり、少年と少女が、佇んでいた。

こちらを見据え、歩いてくる。

突拍子もない、実に奇妙な組み合わせのふたりだった。

「ナホ、どうしてここへ？」

私服に着替えたナホは一五歳の女子力真っ盛りのきれいな瞳をむけてきた。

マミヤのまえで腕を組んでふんぞり返る。

どうやらずいぶんとお怒りのご様子だ。

ポニーテールを揺らしながら、

「このナルシスバカ中尉から話は聞いたわ」

「口を慎みたまえ、暴力女」

ソルベ中尉が彼女のとなり立っている。

こいつだけは実に鬱陶しいので、マミヤは無視を決めこむことにした。

ナホだけを見ながら、

「ふたりでいっしょに帰ろう、ナホ？ もう時間も遅いし」

「おい、こら、僕は無視されるのが大嫌いなんだっ」

案の定、ソルベが突っかかってくる。

「自称エリートは黙っててよっ」

「なんだとっ、せっかく教えてやったのに、この暴力女っ」

ふたりのけんか腰の言い合いが、疲れたマミヤの脳細胞に追い打ちをかけてくる。

「なあナホ、頼む、落ちついて聞いてくれないか」

マミヤのうんざりした声音に、

ナホは引きつった笑みになって、

「あのさあ、あんたわかってる？ 審問猟騎兵がよりによって、

あの穢らわしい魔導少女のサバトに足繁く通うとか、正気なのっ？

ゴミンゴのヤツに目えつけられんのあたりまえじゃないっ、

その上、審問局から八百長の疑惑もたれたらどーすんのよーっ？」

「だから誤解だ、ナホ」

「あっ、そう？ じゃあその誤解をこれからみんなで解きにいきましょうっ」

「ちょっと、待ってくれ、何いってるんだ」

マミヤは猜疑心に満ちた視線をソルベに送った。

彼はニヤついてこっちを見返してくる。

無視を決めこんでいるわけにはいかなくなってきたようだ。

「彼女になにを吹きこんだんだ、中尉殿？」



「なにつて、ホントのことさ、曹長くん」

「さあいくわよふたりとも」

ナホが率先して歩きだす。

サバトへと、あのユリスモールカフェへと。

マミヤは硬直してふたりの後ろ姿を見やった。

いまから？ エリカに再び会っていったいなにをどう会話すればいいんだろうか。

## エリカVS・ナホ

魔導の姫は動きやすい軽装に着替えていた。

体のラインのうきあがったキャミソール、それにミニのフレアスカートを履いている。

カフェのカウンターの、両手をほそい腰にあてがい、

勝ち誇った笑みをうかべていた。

「まだよ、あんたたち、まだまだこれからよっ」

キャロルとチハヤは、パジャマ姿のまんま、カウンターのウインザーチェアに座らされている。

キャロルが、もう何度目かのギブアップを告げてくる。

「ねえ姫、ウチらが悪かったからもう、カンベンして……」

その声は、どこかうっとりしたような、哀願のような、官能的に潤んだ色を帯びていた。

「ダメよ、この程度で許すほど私は甘くないんだから」

「チハヤはまだまだ、平気だもん」

強がってるのか、それともホントに平気なのか、チハヤはけっこう余裕のおっとり顔だ。

「強情な子ねまったく、ならコッチは？ コッチならどうよっ？」

そういって、チハヤのまえに新しい皿をおいてやった。生クリームたっぷり、

チョコレートプディングのラズベリー添えである。

キャロルがプディングを横目で見て、一筋、白いきれいな頬に脂汗をしたたらせる。

恐怖した貌になる。

チハヤは、握りしめていたフォークをおいて、スプーンを手にとった。

「平気だもん」

スプーンで円筒形のプディングをこっそり崩して豪快に口に運ぶ。

焦げ茶色の塊が、ココアに卵黄にクリームに砂糖という高カロリー  
の怪物がちいさな口に吸いこまれていった。

チハヤは美味しそうに笑みをうかべた。

彼女はこれが九皿目だった。

キャロルはチハヤから眼を背け、自分の前に積まれた七枚の皿を  
見つめた。

「あした、体重量るのが死ぬほど怖い」

エリカは酷薄そうな笑みをうかべて、

「まだまだこれからよっ」

キャロルに新しい皿を用意してやる。

新鮮イチゴをふんだんにのせた生クリームとパイ生地 of 四重奏、  
ユリスモールカフェ特製ナポレオンパイであった。

「ワタシの大好物……八枚目を出すなんて卑怯よ姫っ」

エリカは、キャロルから奪い取っているリスタブでとっととクレ  
ジット決済を済ませてしまった。

これでキャロルはカフェでナポレオンパイを買ったことになる。

「嫌なら生ゴミに捨てるだけ、あんたの買った大好物のナポレオン  
パイをね」

「姫の意地悪っ、鬼畜、外道っ、オトコに平気でショーツ渡す痴  
女っっ」

場がしんと静まりかえる。

「……ダブルよ、ナポレオンパイ、ダブル、さあ、二皿いっぺんに  
いってみようか？」

エリカがもうひとつパイをキッチンからもってくる。

口を滑らせたキャロルは顔面蒼白だ。

チハヤが横から顔をのぞきこんでくるようにしてきて、

「キャロルってば自滅型だよっね」

涼しげにいった。

「うるさあーいっ、もう喰ってやる、体重がなによっ、喰ってやるってんだよっ」

キャロルは半ベそかきながら、しゃにむにフォークを突き刺す。口に押しこんでいった。

「そうよその調子」

エリカは、魔導の姫——とゆうよりかはほとんど暴君——の二つ名にふさわしい態度でふたりを見下ろした。

するとチハヤと目が合った。

彼女は姫に対して、

「平気ですよー」

にこっ、と笑い返してくる。

そういわれて黙っている暴君、いやいや姫ではなかった。

「チハヤにはブルーベリーパイデコレーション全部載せ、生クリーム添えを丸々ワンホールいっちゃってみようかつ」

それを聞いて、チハヤはうれしそうに微笑んだ。

キャロルは耳を塞いで震えている。

エリカがチハヤのリスタブでクレジット決済しようとしたとき——。

来客を告げるアラームが鳴った。

三人が、カウンターの壁に掛かっている監視モニタを見た。映っているのは少年ふたり、少女ひとり。

「なんで？ どうしてマミヤったらもどってきたのっ？」

エリカがうれしい悲鳴を上げる。

キャロルはウインザーチェアを蹴っ飛ばして立ちあがる。

エントランスへ猛ダッシュして、

「マミヤーツ、ウチらを助けてえっ」

泣きながら内側のガラス扉を開けようとした。

チハヤが冷静な口調で、

「キャロルー、部外者の女の子がひとりいるから？ 顔バレ？ しちゃうよー」

「え、ああ、ヤバいじゃん」

キャロルはガラス扉のまえでふたりをふり返った。

チハヤも席を立つ。エリカにむかって、

「ねえねえ私たちのリスタブをね、返して欲しいの」

「あ？ ほらよっ」

姫はエントランスのほうに視線を釘付けにしながら、

ふたりのリスタブを無造作に床へと放り投げた。

チハヤはキャッチすると、キャロルにリスタブを渡してやった。

キャロルはすぐさまクレジットの利用記録をチェックし始めた。

「ワタシの今月の小遣いがあっ」

キャロルが叫んだ。

それでもちゃっかり、食べかけのナポレオンパイの皿を手にする。

ふたりは身を隠すため、そそくさと裏のドアからホテルへと帰っていった。

エリカがオートロックのドアを解錠してやる。

ナホが先頭切って、ホールに飛びこんでくる。

カフェの内装を一瞥して、すぐさまカウンターのエリカに照準を合わせてきた。

ナホとエリカは、相対した。

ふたりの間、カウンター越しの一メートルちよいの空間だけ、異様に熱くなってきた。

ふたりとも、無言のままだ。

ただひたすら周りの空気だけが、加熱してゆく。

ソルベは悠然とテーブル席に陣取る。

マミヤはというと、ふたりの女子からすこし離れたところで、

所在なげに突っ立っていた。

少年はいま、加熱クッキング中のオーブンレンジのまっただ中にいるのだった。

その証拠に、エリカもナホも、貌を紅潮させほつぺたをどんどん膨らましているではないか。

レンジでこんがり灼かれてゆくパイ生地のように。

美味しそうな感じにほどよくふくれっ面の女子二名に比べ、マミヤはしなびた春菊のようだった。

レンジの熱で水気が抜けて、苦みだけ残った不味い春菊。

実際、少年の顔のほうも春菊みたいに苦り切っていた。

口火を切ったのは、ナホからだった。

「一三年次のクツソガキの分際で、うちのクラスの男子にちよっかい出してくれちゃったのがいるってゆうから来てみれば、アンタがそうなのかなあっ？」

「さあ？ なんのことかしらセンパイ？」

「このバカ中尉から話は聞いてんのよっ、うちのマミヤのことよっ」  
「おい、バカは余計だぞっ」

ソルベがテーブル席から跳びあがる。

「空気は黙ってなさいよっ」とナホ、

「黙れば？」

とエリカが同時に叱りつけるようにいった。

ソルベは怒りのふりおろす場所を求めるかのように、カフェのなか、視線を彷徨わせた。

エリカがナホを品定めする視線で上から下まで見つめて、

「うちの、マミヤ、いまそういったわね？ センパイ？」

「ええ、いったわよ、それがなによっ」

エリカは長い髪の手先をもてあそびながら、

「なにか、そう、なんでもいいわ、センパイと、

この審問官さんとのあいだになにか特別なものでもあるのかしら？」

「あるわっ、マミヤとは腐れ縁だからいろいろ知ってるものっ、

こいつの嫌いな食べ物、アンタ知ってる？ あたしは知ってるんだから、

春菊よっシュンギクーツ」

エリカは、くすくすつ、とそれは愉快そうに笑い出した。

「教えてくれてありがとうセンパイ、彼が店にきたときは料理に入れないようにするわ、春菊」

「はああーっ？ あたしが来させないからっ、マミヤには二度とサバトには来させないわっ。」

彼は立派な異端審問猟騎兵なんだからっ、

こんなところで油売ってていいわきやないのよっ」

「でも、カド番だったわよね、審問官さん？」

エリカは腕を組むと、流し目をマミヤに送った。

ナホは憤懣やるかたない様子で、

「なにかいいかえしてやりなさいよっ」

「……ナホ」

「なによ？ アンタオトコでしょっ、

そんなシュンギク無理矢理喰わされたような顔してんじゃないわよーっ」

マミヤは、ますます立ち枯れた春菊のように腐って弱りきった表情になってしまった。

ソルベがそこで、ひとつ咳払いをしてきた。

「おいナホ、忘れてるものがあるんじゃないのかい？」

ナホがソルベのほうをふりむく。

舌打ちして、プリーツスカートのポケットから折りたたんだ書類をとりだしてきた。

ぴらん、とその紙きれを開いて、エリカの眼前に突きつける。

「異性交遊申請書よっ」

マミヤたちの中学校事務局に申請済み、そう印鑑の押印された申請書だった。

申請した日付は本日のもの。

申請者はナホ、交遊対象者の名前はマミヤだった。

署名欄には、当然ナホのほうは自筆でサイン済だ。

マミヤの署名欄だけが空欄となっている。

「あとはママのサインをもらうだけよ、これで学校で受理されれば晴れてあたしたちは、恋、恋っ、び、びとっ——」

「晴れて恋人同士になれる、ってわけね」

エリカがいった。いいよどむナホになりかわって。

けれどそれで引っ込むナホではない。

「……ムツかつくわね、エリカ・ヴァンデル・メーアッ、なにその余裕な態度、

あんた帰国子女だからって日本のガッコの上下カンケーなめてんじやないの？」

「センパイこそ大胆ね、本人の彼氏をまえにして、

？私を抱いて欲しいの、ママヤ？って宣言したも同然よね、その、紙きれ見せたってコトは？」

「このっ、こんのクソガキッ……」

ナホは顔面を可愛く真っ赤にして、言葉に行き詰まってしまった様子だ。

ママヤも、そうだった。

フライパンでソテーされちゃった春菊のように熱に火照りかえっていた。

ソルベひとり、怒気を漲らせていた。

あの強気で押すナホですら気圧されている場の展開に、当初の予定の外れだした雰囲気到我慢のならない様子である。

エリカはまるで一国の姫、いや女王のような貫禄で、三人を見回して、

「審問官さんも照れちゃってるようだし、この雰囲気じゃいいだせないわよね、本音を」

ナホはエリカを睨みつけ、

それからママヤに恋い焦がれる女の子の視線を送った。

ママヤはうつむいて、唇を噛みしめている。

「ママヤア……」



ナホがすがるように、催促するように甘い声を出す。

「こうしましょう、センパイ方」

エリカは、裁定を下す女王よろしく厳かにしゃべりだした。

「さっきも話したように、この審問官さんはカード番をむかえてるわ、つぎのレースこそ必死に勝利を目指して頑張ろうとするでしょうね、だから彼が勝ったら、

そのときはその？私を抱いてくださいと惨めに懇願する申請書？にサインをする、

それでいいんじゃないかしら？」

場が、しん、と静まりかえる。

カフェの空気は、ついさっきまでオーブンレンジの灼熱地獄、二〇〇℃にも高温調理されていた。

ところがそれはいま、急転直下、粗熱もとらずに極寒のマグロ専用冷凍貯蔵庫に放りこまれたようになってしまっていた。

「ねえセンパイ、その？惨めに抱いてくださいと懇願する申請書を——」

「そのいい方やめてよっ」

エリカは、蒸気爆発寸前の圧力釜と化したナホを、ゆっくり、ほそめた瞳で凝視して、

「やだ、私としたことがごめんなさいねセンパイ、

その？私のところを、肉体をも思うがままに犯してください、ってマミヤに土下座で告白したのも同然の書類？にサインした以上、センパイは当然この審問官さんの勝利のほうを願うわよね？」

ナホはぷるぷる、全身に怒りと羞恥の震えを奔らせながら、

「——当然、でしょう？好きなひとの——」

ちらっ、とマミヤのほうを盗み見る。マミヤは赤面してうつむいたままだ。

「——好きな男の子のがんばって勝つほうに賭けるに決まってんじゃないのよっ」

ソルベが慌てて、

「おいナホいいのかそれでっ？」

ナホはエリカにありったけの嫉妬の眼差しをむけながら、

「当然でしょっ、勝つのを願ってなにが悪いのよっバカ中尉っ」

「この能無し曹長は一四連敗中なんだぞ、カド番だぞっ、

負けるぞ、つぎのインター杯も負けてクビに決まってるんだぞっ」

「マミヤのことそれ以上侮辱したら殺すわよっ」

ナホの背中から殺気がじわり、

オーラとなって立ちのぼりだした。

ソルベは悲痛なうめき声を出して、

「おい、曹長、君の問題だぞ、君がはっきりとしないからいけないんだ、

何かいいたまえっ」

「そうよマミヤ、お願い、つぎこそ勝ってくれるよねっ？」

マミヤは、額の汗をハンカチでぬぐった。

エリカがミネラルウォーターをタンブラーに注いでカウンターにさしだしてくる。

マミヤが彼女を見つめて、

「……ありがとう」

「どういたしまして、ア、ナ、タッ」

エリカが腰をくねらせながら、

自分のハンカチでマミヤの頬をふいてきた。

うつとりとした流し目を、思わせぶりな瞳でマミヤを見つめてくる。

マミヤもナホ同様、蒸気爆発寸前の顔となってしまうた。

「……なに、してくれてんだテメエ」

ナホの声は陰にこもって、もう殺人音波の域に達し始めている。

エリカは、そんなナホに、

「私は彼が負けようとも構わないわ、傷心の彼を受け入れてみせる、

あら？　これ、恋に恋する域を超えた？愛？？

ってやつかも知れないわね」

「じゅ、一三のクソガキの分際で……なにふざけたことを又かして……」

「あらいやだ、まだ一二ですけど？」

エリカとナホが睨みあう。

カフェの空気は再び、マグロの死骸のならば冷凍庫から、華やぐパイ生地膨らむオーブンレンジに逆戻りになってきた。

「ナホ、エリカ、俺は勝つ」

——マミヤに、三人の視線が一瞬で集まる。

「マミヤッ」

ナホのうれしげに甘えた声といったら、  
それこそオトコなら速攻抱きしめたくなるくらい、初々しいものだった。

ソルベがおおきくうなずいて、

「よくいつてくれたぞ曹長、つぎの対戦相手は決まってるのか？

エントリーは？　大佐も絶対G？でも最弱の相手をチョイスしてくれるだろうから、  
安心して良いと思うぞ、うんっ」

この勘違い野郎は放置することにして、マミヤは先をつづけた。

「エントリーはもう申し込んである」

「誰だい、その最弱の可哀想な魔導少女は？　うん？」

ソルベがにんまりと笑んでくる。

ナホは先をうながすように何度もうなずいてくる。

「審問局を通して、相手の魔導少女のスポンサー企業に話がいって  
るんだ、  
もうすぐ内定の返事がスポンサーから返ってくるはずだ」

ナホはインター杯のシステムに詳しいわけではない。

瞳を輝かして、マミヤの話のつづきをまっている。

ソルベは、ちがった。

「……曹長？　ははっ、馬鹿をいっちゃいけないな、スポンサー付きの相手といえばG？の中堅以上の手強い相手だぜ？君程度のエントリーなぞ、論外だ、即座に却下されるのに——」

マミヤは、この面倒くさいバカの説教を片手でさえぎった。自分の手首に巻かれたリストタブに見入る。

「返事のメール、もう来ていた」  
ソルベは大笑いしだした。

「どこのどいつだよ、そんな世間知らずの間抜けなスポンサーは？」

「ドイツのヘルマン&ハイネマン社だ」

マミヤの答えにソルベが、無表情になる。

どうやら思考停止に陥ってしまったようだ。

その社名、世界中の猟騎兵で知らない者など皆無だった。

そして、その世界的大企業の後援する魔導少女が、いったい誰であるのかも。

ナホが固まった中尉殿を不審げに見て、

「なあに？　その会社ってば誰のスポンサー？　ねえ相手の魔導少女は？」

マミヤは、ヘルマン&ハイネマン社からの正式な通知メールと、軍政異端審問局の競技杯出場指令書の添付されたメールとにらめっこをしていた。

それからナホを見つめ答えた。

「G？の？魔導の姫？だよ、ナホ」

## マミヤ、機長からションベン小僧呼ばわりされる

マミヤの乗りこんだエアマシンはえらく揺れて不快な空のフライトとなっていた。

パイロットは三十過ぎぐらいだろうか、マミヤよりよっぽどオトナではあるけれど、

自分の仕事に熟練した一人前のオトナとはお世辞にもいえない腕前だった。

首都上空の乱気流の中を平気で突っこんでいくのである。

男は乱流に乗るのを楽しんでいるようだった。

若者によくいる？空の暴走族？あがりのタイプの男だった。

民間タクシー会社に就職したのに、若いときの気分がまだ抜けきれていないのだろう。

マミヤは、揺れまくるキャビンの席で疲れきった体をあずけていた。

「パイロットさん、気流の上、飛んでもらえませんか？、酔いそうなんです」

若い男はただでさえ悪そうな目つきをさらに鋭くしてきた。

「うるせえよ中坊が、ガキのクセしてこんな時間によ、夜遊び朝帰りか？」

ああ？ 生意気な口たたいてっとお空に放り出すぞっ」

目つき同様、口も性格も残念な人物のようだった。

「でもまあアレだ、オメエみてえな陰気くせえガキは彼女のひとりもできたためしねえだろ」

そういつてコクピットでゲラゲラとひとり笑いだした。

笑いながら、テレビのチャンネルを二四時間放送の音楽番組に切りかえる。

大昔にメガヒットを飛ばしたクラシック・ロックが流れ出す。

マミヤもよく知っているくらいのメジャーなナンバーだ。

男は曲を口ずさみながら、

「おいガキ、この曲知ってつか？ 俺らの生まれるまえのグレートナンバーだぜ」

「ええ、知ってます」

「へっ、シヨンベン小僧でも知ってんのかよ、まあいいや、このバンドが現役のところはなあ、あの胸くそ悪い魔導少女ってのも異性交遊許可証なんてのも無かったんだぜ？

あのクソツタレの異端審問局のクソどもだって影も形も無かったんだ、信じられっか？」

「ええ、そうですね」

「けっ、おめえらガキでもガッコの倫理で習ってんだろ？ 異性交遊許可証？」

「ええ、習いました」

「おめえらシヨンベン小僧は十年早いとしてだな、俺らみてえなれっきとした大人でも、恋愛に許可のいる時代になるとは思ひもなかったぜ、つたくよ」

「まったくですね」

「この曲の時代はなあ、自由だったんだよ、ロックだったんだよ時代そのものがよお、

え？ 好きな女に告ってふられて、恋愛がいくらでも自由だったんだよ、自由っ」

「ですね」

「魔導少女がよ、あの魔女のガキどもが出てきちゃったせいだ、全部あいつらのせいだよ、

あいつらな？ 恋愛感情こじらせつと魔女のビョーキになるんだぜ、始末に負えねえよ、だからだよ、イチイチ国が恋愛取り締まる羽目になったんだよ、

審問局の軍人どもがエラそうにいばりくさってられんのも魔女のせいだよ、

おい聞いてんのかションベン？」

「ええ、そのとおりだと思いますよ、ただ、恋愛説はもっとも有力な仮説に過ぎません」

「ちっ、素直だといいてえとこだがテメエなんだか生意気だな？」

まさか審問局に俺のことチクるとか考えてんじゃねえだろうな？

あ？」

「そんなつまらないこと、しません」

「ったく、とにかくエアマシン乗りナメてんじゃねーよってコトよ？」

それに比べて猟騎兵のガキどもな？

奴らクソガキのせいでスゲえマシン乗りやがってよお、

俺にも乗せろって話だよ、中坊のガキですら魔導二輪乗って魔女のケツおっかけてんだぜ？

勝てばご褒美にオンナのハダカ拝めてよ、ボーナスも出るんだぜ、ガキの分際で生意気ぶっこいてると思わねえか？」

「ええ、酷い職業だと思います」

「だろ？　でもよ、へへっ、ちよっと思うんだよなあ、

この俺様にも魔導石適性があつたらな、ってよ、

したら……まあ、なんだ、猟騎兵って人生も悪かあねえ、って思うワケよ」

「そうですか？」

「バカだろテメエ？　おいションベン？　　猟騎兵はスゲえマシンぶっ飛ばして、

勝てばオンナの着てるパンツァーひんむいてよ、

ハダカ見放題、賞金付きの人生だぜ？　ガキのうちからっ」

ママヤは眼を閉じた。

今夜はとりわけ、都内のスラムで暴動の火の手が上がっているのが目についたからだった。

少年にとって、正視できる地上の光景ではない。

男がコクピットのサイドウィンドウから地上を見る。

「今夜もど派手にやってやがんなあ貧民どもがよ、

俺様もよ、猟騎兵になつてりゃあ、あの下の高速を魔導二輪で、  
こうヴィイインッとよ、バカども蹴散らしてかつ飛ばしてたのにな  
あっ」

マミヤは眼を閉じたまま、

「機長さん、エアマシン乗りになりたかったんですか？」

それともほんとうは猟騎兵になりたかったんですか？」

ガラの悪い男は黙りこんだ。

「おいションベン、なにいつてやがるんだ？」

「機長さんの話を聞いていると、猟騎兵のほうに憧れているような  
気がしたんです、

よしたほうがいいです……あんな仕事、誇りもなにも、ありはしま  
せん」

男は呆氣にとられた様子だった。

間をおいてから歯をひんむいて笑い出した。

「傑作だぜションベン野郎っ、テメエさてはアレだろ？」

流行りのゲームでよ、ヴァーチャルゲームで猟騎兵をジョブに選  
んでよ、

そいつになりきっちゃって、その気になってんだろ、だろ？ 凶星  
だろ？」

そういつてまた愉快そうに嘲笑を浴びせてくる。

操縦桿を派手に動かして乱気流に乗るのを楽しんでいる。

マミヤは疲労と睡魔にとらわれていた。

ユリスモールカフェのこと。

くり返し、何度も、ついさっきまでの情景が思いだされて仕方な  
かった。

ナホ。泣かせてしまった。

彼女は泣いた。？魔導の姫？を相手に勝てるわけがないよ、そう  
いつてカフェのホールにへたりこんで泣き崩れたのだった。

エリカは、あるとき無表情だった。

彼女にもやはり思われたんだろうか？



魔導少女たちと間近に接してきた彼女のことだ、思ったはずだ、身の程知らずの馬鹿、だと。

帰宅するとき、マミヤはナホに送ってあげるよ、そういったわりながら申し出た。

あっさり、断られてしまった。

エアポートで皆、バラバラのマシンに乗りこんだのだった。

あのめんどくさい中尉殿もなにかを喚き散らしていたっけ、自分も絶対エントリーするとかなんとか、そんなことを。

マミヤとしては疲れるだけだから、ろくに聞いちゃいなかった。

コクピットの音楽番組が中断された。

『報道フロアから、臨時ニュースを申しあげます』

張りつめた女性の声。

マミヤは重たいまぶたをなんとか押し上げて、画面のほうに目をむけた。

テレビが報道スタジオに切りかわっている。

緊張した面持ちでアナウンサーの女性がスタジオのデスクに座っている。

画面上、スタッフの指示らしき指の動きにうなずいている。

おいなんだよこれ、おいっ番組中断すんなっ、とパイロットが怒鳴りだした。

気流で、がくんっ、とおおきく機体がまた揺れる。

『いま入ってきた最新情報によりますと、

都内と神奈川県の大規模なふたつの反政府デモ隊が合流しました、暴徒化した群衆が警察機動隊の手薄な箇所を突破、

南東京市周辺の市街地で放火と略奪がおきております、

未確認情報ですが、つい先日発生した魔導少女覚醒事件の容疑者の少女の自宅付近が……この地域を中心に放火がおこなわれている様子で――』

マミヤが、ハーネスに固定されていた上半身を跳ね起こす。

「ああ、やだねえ辛気くせえ、どっかほかのチャンネルねえかな」  
男がチャンネルを切りかえてしまう。

マミヤは慌てて、

「報道番組のチャンネルにしてください、暴動の詳細が知りたい」  
「ああ？ ションベンなにヌカしてんだよ？ 家帰ってママと朝イチのニュースでも見てろや」

マミヤのリスタブのバイブレータが震動する。

テレビのことはとりあえず放って、画面に見入った。

エリカから、だった。

『マミヤッ、いまどこっ？』

普段とはちがう、必死のエリカの表情、そして声。

「エアマシンに乗って帰宅中だった、チハヤちゃんは？」

『無事だよ、ご両親も避難してだいじょうぶだったけど』

「カフェのほうはっ？」

「ここは平気」

どっしり、マミヤは全身に冷や汗をかき始めていた。

かろうじて皆の無事を知り、安堵のため息をつくことができた。

『でも、チハヤがね、いま泣きだしていて、とっても不安定になっているのっ』

チハヤちゃんの？ 魔導少女の精神状態が、感情が不安定に？

それは、アーデルハイド暴走に陥る予兆を孕んでいる。

「審問局と護民局に通報は？」

『うんっ、さっきしたからっ、カフェに応援部隊送ってくれるってっ』

「俺も戻る」

エリカは何度も何度もうなずいてくる。

『お願いマミヤ、早く来てっお願いっ』

画面の中のエリカが左横を見た。なにか叫ぼうとしたところで、映像は途切れてしまった。

マミヤが顔を上げる。

パイロットの男が、コクピットのシート越しにこっちのリスタブをのぞきこんでいた。

「おいションベン、いまの子すんげえカワイコちゃんじゃねえかよ、テメエまさか彼女じゃねえだろうな？ ああ？」

「お願いしますっ、すぐに元のエアポートにもどってください、いますぐっ」

「はあ？ バーカッ、あそこはデモ隊の暴れてる近くじゃねえかよ、もどるわけねえだろがっ」

マミヤはサマージャケットの懷から、？伝家の宝刀？をとりだすことにした。

一瞬の迷いも無かった。

権力を振りかざすようで、いままで使ったことはなかったけれど。出した、身分証明書を。

二つ折りの身分証を開いて、パイロットの鼻っ面に突きつける。

「軍政異端審問局のマミヤ曹長です、有事につきこのエアマシンを接收します、

このマシンに物的被害の出たときには、

軍政府に対して損害賠償請求の権利が貴殿には認められています」

目つきの悪いパイロットは、口をあんどりと開けながらマミヤ曹長を見てきた。

ションベンくせえ中坊のガキを乗せたはずだと思っていたら、

その正体は自分の敬愛してやまないロックミュージシャンの生まれ変わりのお姿だった、

彼にとってしてみれば、まさにそんな風な驚天動地の展開だった。

「……あ、あんた、その歳でってコトは、天下の異端審問獵騎兵……さま？」

「早くもどってください、接收指示に従わない場合、

貴殿に刑事罰を科さねばなりません、お願いです早くっ」

「——は、はいいつ、お、おっしゃるとおりにいたしますです、

はいいいいいっ」

男が金切り声を上げ、すぐさま機体をターンさせる。

「そっ、曹長殿、質問がありますっ」

マミヤはそれどころではなかった。

キャビンのサイドウィンドウから地上を食い入るように見始める。

「あとう、曹長殿っ、魔女のパンツァー脱がすのって、やっぱサイコーの気分ッスかねっ？」

「機長早くっ、無駄口たたかないでっ」

「はいっ、わかりました、わかりましたから俺が審問局の悪口いつたの密告しないでねーっ」

男は目つきも顔つきもがらりとかえた。

気流に乗って遊ぶのもやめ、カフェにむかって操縦桿をきる。

マシンはフルスピードで暁の空を飛行してゆく。

マミヤの見つめる眼下には、暴徒の放火した暗赤色の点がつぎつぎとつながり、線と化しつつあった。

マシンの飛翔する高空にまで、猛煙はひろがりを見せ始めていた。

## 無力感

マミヤがエアマシンで駆けつけたとき、空から最初に見た光景は、ブルーヘヴンの木立の倒壊だった。

？外の世間様？とつながるカフェと奥まったホテルとのあいだの木立、

高木が空に突き刺さるように鋭く伸びていたのに。

それがいま、何本もなぎ倒されている。

まるで怪物が暴れていった痕のようだった。

そう、？怪物？が――。

タクシーの機長はとても親切になってくれており、ホテル・ユリスモール屋上のちいさなエアポートにマシンを着陸させてくれた。

おそらくは異端審問局のトラブルに巻きこまれたくないのだろう、マミヤを降ろすとすぐさま離陸して去っていった。

ホテルの玄関前のちよつとした広場や、

中庭<sup>パティオ</sup>やらにはすでに当局の軍用エアマシンが数台、強行着陸している。

「みんな無事でいてくれっ」

三階建ての――人の姿の見あたらない――ホテルの螺旋階段を駆け下りながら、

そう祈らざるを得なかった。

マミヤはホテルの正面玄関から外へと飛び出した。

眼前、軍政異端審問局のエアマシンが駐機している。

ランディングライトの強烈な閃光とマシンのエンジンのジェット噴射で吹き上げられた砂利で、

両眼を開けているのもつらい。

審問局の普通科歩兵部隊の二等兵が――ずいぶんと若い青年だが――マミヤの姿を見て怒鳴り声を上げてくる。

「貴様はなんだ？ ホテルの客か？ 子どもは中に入っているっ」  
ジェットの乱流がうるさい、耳に痛いぐらいに。  
自然に大声となる。

マミヤは無言で二つ折りの身分証明書を提示した。

二等兵の青年は瞬時に居丈高な態度を引っこめ、

「失礼しました曹長殿っ」

敬礼してくるので、マミヤも答礼した。

話すために顔を近づけると、上背のある二等兵は身をかがめてきてくれた。

「状況を教えてくださいっ」

「はっ、死傷者はゼロ、建物損壊は無し、

容疑者の？ 魔女？ は第三級アーデルハイド暴走につき、呪法拘束中  
でありますっ」

マミヤは内心、ほっと安堵するとともに、顔に渋面をつくった。

？ 魔女？ は、魔導少女への差別用語だったからだ。

いや、自分こそ、異端審問局においては自分のほうこそ？ 異端？  
かも知れないな、

マミヤはふと、そう思った。

審問局員のあいだでは、差別用語はありふれたオフィスの会話でも  
平然と使われているのだ。

現にこの二等兵は、魔女、の単語を発音するとき、

迫害する者特有の不快なイントネーションを挟み込んでくる。

「お気をつけくださいっ、仲間の魔女が中隊長に猛抗議の真っ最中  
ですっ、

人権護民局のゴミ連中も駆けつけてきてますっ」

二等兵の言葉にマミヤの胸がざわついた。

真っ先にキャロルの顔がうかぶ。

そしてエリカのことだから、彼女もキャロルに付き添ってるにち  
がない。

最後に護民局。

この地域の統括責任者はあのカグラ護民官だ。

マミヤが皆の居場所を尋ねようとしたとき、エアマシンの胴体ハツチが下方に開いてきた。

「ふっざけんじゃねーよ、チキショウツ」

キャロルだ、彼女が怒鳴りながらハツチに姿を見せた。

ネグリジエタイプのパジャマの裾が風にあおられ、はためいている。

所々破けて泥だらけだった。

その両肩をカグラ護民官につかまれていた。

「なんだよ、離せよっアンタ護民官だろっ、ウチらの味方なんだろっ、

ちっとは役に立てよっ」

「まあまあ、お願いだから落ちついて、キャロル」

カグラはいかにも情けなさそうな愛想笑いをうかべていた。

そう、学校での？あの演技？の表情のほうをいまは見せていた。

「出ていけっ、俺の機体からとっとその魔女を連れ出せ、空気が穢れるっ」

中隊長だろう、野太い男の罵声がマシンの奥から聞こえてきた。

「とにかく、護民局といたしましては、異議申し立てをしておきますので」

カグラは平身低頭、ぺこぺこと頭を下げている。

キャロルはそれを見て、母国語らしき言葉でなにか悪態を叫んだ。カグラが、こちらの視線に気づいた。

マミヤと目が合う。カグラは一瞬真顔になり、また再び？頼りない護民官？の表情にもどった。

彼女がキャロルを抱きかかえるようにして、ハツチの階段を下りてくる。

そして、ふたりのうしろからゆっくり、美少女が現れた。

エリカ・ヴァンデル・メーアが。

肉体のラインを露わにしたキャミソールとフレアスカート。

どちらもやっぱり泥だらけだった。

スカートの裾を押さえつけながら、ハッチを下りてきた。

エリカとキャロル、美しい漆黒と緑の瞳が一斉にこちらをふりむいた。

「マミヤッ」

キャロルが叫んで、カグラの手をふりほどこうとする。

マミヤは躊躇した。

審問局員たちの眼前なのだ、キャロルから親しげな態度を見せられた、ただ、それだけ、それ自体がすでに危険であり、命取りだった。

審問局からすれば、魔女と通じてしまった？ 叛乱分子？ の姿、その証拠以外の何物でも無い。

そのとき、カグラが救ってくれた、瞬時にキャロルを後ろから羽交い締めにしたのだ。

「離せっこの役立たずっ」

なおも叫ぶキャロルを護民官はねじ伏せながら、マミヤの目の前を素知らぬ風にとおりすぎてゆく。

ふたりは取っ組み合いをしながら、ホテル・ユリスモールの正面玄関へと入っていった。

マミヤはただ、見送るしか術はなかった。

ふり返ると、目前にエリカが立っていた。マミヤの身分証明書を、ちらり、見るふりをしてから、少年の両眼を、凝視してくる。

長い髪の毛が、風にあてられその貌にかかる。

ミルク色の絹を思わせる肌に降りかかる幾筋かの髪の毛の束。

少年は、手を動かし、やさしく髪を整えてあげたい衝動をかりうじてこらえた。

「そんなにあの子のネグリジェ姿がお気に召したのかしら、？ 審問官さん？？」

「自分は、？ 異端審問獵騎兵です、お嬢さん？」



「今回の暴走を起こしたのは、うちのサバトに避難を始めた子よ、名前はチハヤ、貴方、エリート endpoint くれよね？ 助けてくださらない？」

「そのチハヤさんの処遇は？」

「警察病院再入院、二四時間の監視下付き」

エリカの言葉に、マミヤはうつむいた。

自分には、決定を覆す権限などなかったからだ。

「自分にはどうすることもできません」

「やだわ、頼りにならないエリートサンね」

くすつ、と微笑みをもらしてくる、じつとなにか、訴えかけてくる笑顔を見せる。

二等兵が少年と少女を交互に見ながら、

「曹長殿、彼女は単なるサバトの管理者の娘に過ぎません、お気を掛ける必要など——」

「下っ端二等兵は黙ってなさいよ」

「貴様、審問局隊員にむかって舐めたことをっ——」

二等兵の怒りの言葉を、マミヤは右手を挙げ、軽く制した。

「昨今はメディアの目もうるさいと聞いています、貴官の態度一つが中隊の名誉に直結します」

「しかし曹長」

「民間人の些細な非礼は、大目に見てやったほうが貴官の中隊によりいっそうの箔が付きます」

二等兵の青年は虚を突かれたようで、

慌てて計算をめぐらす大学生の顔つきになった。

「……まあ、そうですね、たしかに曹長がそうおっしゃるんなら……」

二等兵は気持ちの落しどころを見つけられたらしく、怒りを引っこめた。

そこへ彼の野戦服のリスタブに中隊本部からの連絡が入ってきた。  
『第一小隊、撤収作業をおこない、速やかに母機前へ集結せよっ』

二等兵の顔に緊張が走る。

マミヤに敬礼し駆け足で去っていった。

敷地内に散らばっていた第一小隊の兵士たちの動きが活発になる。そのあいだに、中隊長の座乗するエアマシンが垂直離陸を始めた。轟音、砂塵、何種類もの航空ライトの煌めきを地表に叩きつけながら、

機体は高空へと昇っていった。

敷地の別の場所に駐機していた第一小隊の軍用エアマシンも、カフェの外、

並木道に緊急着陸していた、中隊の他の機体も順次離陸していく。

「チハヤ、連れて行かれちゃった」

エリカは、ぽつり、つぶやいた。

「彼女の実家はもうなかったんだ」

エリカは空を見つめたまま、

「全焼しちゃったって、家族はとくに避難していたから無事だったけど」

中庭パティオのほうから、また離陸音を響かせて、人権護民局のマシンも飛翔していった。

マミヤがそれを見ながら、

「護民局は？ かばってくれたのか」

「だめね、ゴミンゴってあだ名だったかしら、あの女護民官、中隊長やら審問官やらにおどおど頭下げて、チハヤの拘束措置の緩和を頼み込んでいただけ」

マミヤは無力感に苛まれた。黙って、？演技を押し通してくれた？カグラを見送った。

空が明るくなってきている。

長い夜だった。

マミヤはユリスモールに、このサバトにきょう未明だけで都合三

度も訪れてしまった。

疲労だけがつのってゆく。

救いを求めるように、かたわらにいる少女の横顔をのぞき見た。

表情を消して悲しみを押し殺しているエリカ。

マミヤは朝焼けのなか、彼女を、なおもある種、

威厳を失わずにいる少女のたたずまいを見つめていた。

疲れ果てた少年にとって、少女のこの横顔だけが救いだった。

この歳下の少女の、朝の陽の光の下、太陽をも圧倒する輝きの瞳が、

きつく結ばれた、ほんのり紅い唇が。

それは少年にとって、たしかに救いだった。

## 秘密会談

その重役室は広々としていた。

抑え気味の間接照明が床から天井をほのかに照らしている。

全体的に暗い部屋だった。

中央、巨大なデスクと権力の象徴のようなエグゼクティブチェアに男がふんぞり返っている。

エリカがつけたあだ名はフォアグラ野郎、本名はシャハト。

ヘルマン&ハイネマン社の重役である。

彼は、いま四皿目のフォアグラのトリュフソース添えを平らげるのに夢中だった。

部屋の壁際には三次元立体映像の広告が投影されている。

広告は高らかに謳っていた。

《ヘルマン&ハイネマン社は魔導少女の更生のため、

インター杯を後援しています。がんばれ、走れ、魔導の姫！

姫とともに我が社も走りつづけます》

『白々しい宣伝だな』

厳格そうな男の声が聞こえてきた。

シャハトのものではない。

声の主は、デスクの上の大型端末のモニタ上に映っている。たったいま、守秘回線でビデオ通話がつながってきたのだ。

白髪を丁寧に整えた、生粋の軍人タイプの容貌。

マミヤの上官、あの軍政異端審問局の？大佐？だった。

本名は一握りの軍政府高官しか知らない。

コードネームで？R大佐？か、または階級のまま大佐などと呼ばれている。

マミヤやソルベを指揮下におく第一異端審問猟騎兵連隊の連隊長

職に就いている男だ。

「いや、これはこれは手厳しいですな大佐」

シャハトは、へりくだる笑みを露骨にうかべ、一切れフォアグラを口に運んだ。

美味そうに咀嚼して飲み下す。

『？あと何回？だ？』

「先ほどエンジンアチームから連絡がきましたよ、

二回です、まちがいです、

ゲシユライ・トラウム

大佐、姫があと二回希望の悲鳴を発動させた瞬間、

魔導爆燃機関は暴走、絶対危険領域に突入したまま大爆発します。

そうなるようにあの小娘のマシンに摩耗した部品を仕込んだのですから——」

もう一切れ、フォアグラを口に放りこんで、

「ん、美味い……つぎのレースこそ、

姫には？栄誉ある事故死？でもって彼女の常勝不敗神話に華を添えるようではありませんか？」

絶対危険領域。

魔導メーターのあの、赤く塗られたゾーン。

その最大値を振り切ると、彼女自身の魔導パワーとマシン本体燃料タンクの魔導石との？対消滅？が制御不能に陥ってしまう。

マギアパンツァー

魔導防御兵装のおかげで外からの防御は鉄壁だ、爆燃機関の大爆発でも彼女は無事だろう。

がしかし、パイロットとマシンとの対消滅が暴走したら話はちがう。

彼女の美しい肉体は、体中から血を噴きだして崩壊するのは避けられない。

モニタの中、大佐はつぎつぎとEペーパーの書類に決裁を与えながら、

『? プラチナチケット? の倍率はどうなっている?』

「ええと、お待ちください」

シャハトはデスクの引き出しの電子錠を解錠した。

中から紙幣一枚分程度のおおきさのEペーパーをとりだす。

それは金の卵だった。

その? プラチナチケット? にはこうインストールされた文字がうかんでいる。

《魔導少女迎撃競技杯 結果予想投票券 グレード?

ターゲット…魔導の姫

エントリー中の迎撃者…五騎

サーキットコース (予定) スタート…千葉県木更津金田インターチェンジ

ゴール…東京都芝浦パーキングエリア

コース種別…公道

総距離…三四・三キロメートル》

このようにペーパー上段にこんどのインター杯の基本的な情報がデジタル表示されていた。

そして、下段。

《購入者の予想したレース結果…魔導の姫のマシンリタイア

現在の倍率…四〇三万一八二九倍》

《貴方の賭け金…一〇万円 現在世界中でこの予想をしているのは貴方一名です》

あの魔導の姫が、マシントラブルでリタイアなどという、  
途方もないレアな予想に賭ける者は世界をおいていまここに一名しかいない、

そうゆうわけだ。

もしもまかり間違つて、？ほんとうに姫がリタイアしたそのときには、

一〇万円×四〇三万倍で四千三十億円の払戻金を得ることになる。

「いやはや倍率は四〇三万一八二九倍ですぞ、万より下の倍率も含めれば――」

『そんな端金はどうでも良いのだ、

購入者は露見しないよう万全を期してもらいたい』

「心配ご無用です、スイスのプライヴエートバンクを使い、

ダミー会社を経由して偽装は完璧に手筈を整えてありますぞ」

シャハトはそういつて、したり顔の笑みをうかべる。

笑みながらフォアグラを、

ガチョウを無理矢理肥満させてからとりだす脂ぎった肝臓料理の最後のひと口に齧り付いた。

「太らせてから、処理する……勝ちつつけてきて、処理する……いや、

なんとも、フォアグラと魔導の姫、似た者同士ですなあ、その味わいも絶品ですぞ」

エリカが聞いたら怒りで瞬殺モノのセリフを吐いて、

シャハトはさらに高笑いした。

大佐は最後のペーパーに決裁を与えると、おもむろに葉巻をとりだした。

サイズは小ぶりで味の強い、高級品だった。

シガーカッターで吸い口を切りそろえ、ガスライターで火をつけると、

口中でゆっくり、極上の煙を味わっている様子だった。

『若干一二歳の魔女の娘が、七二連勝で得た巨万の富に囲まれ暮らしている、

病気でいつ暴走するかも知れぬ小娘ごときがな、

この私ですら、首都を荒らしておる暴徒どもの気持ちかわからんで

もない、

愚民が暴れるのも無理はない、酷く荒んだ時代だと、最近、とみに  
そう思うのだ』

「まったくもって、おっしゃるとおりですなあ」

『魔女どもはおとなしくホウキをへし折られて泣いておれば良いの  
だ、

無駄に勝ちすぎる身の程知らずな、ふざけた魔女は……』

大佐は静かに煙を吐きだした。

『身の程知らずの魔女には、この世からご退場願おうか』

あくまで、職務上の任務を遂行しているだけ、

そんな風な乾いた口調だった。

「大佐のご協力があつたればこそですなあ、

山分けした配当金で私はニューカレドニアに別荘を購入して余生を  
満喫する予定ですよ、

大佐はいかがなさるご予定で？」

『審問局の秘密資金に充てる、

なんとしても魔女を暗殺する秘密部隊の結成予算を得なければなら  
んのだ』

「ほっほっほ、ご立派なお志ですなあ」

大佐は、この俗物スノブを絵に書いたような、

フォアグラの塊のように肥満した重役に、なんの感情も見せない視  
線を送りつけた。

『すべては社会の治安維持のため、市民の安全のためだ』

大佐は、回線を切った。



エリカが服を脱ぎ捨てたとき、マミヤが味わった試練について

ホテル・ユリスモールの正方形の中庭<sup>パティオ</sup>から見上げる空は、三階建てのホテルの建物に切りとられて、やっぱり澄んだ青い正方形に見えた。

地上から、まるで天空にうかぶ水色の四角いプールを眺めている、そんな、不思議な錯覚を思いおこさせるものがあった。

中庭のおおきさは、ちょうど二五メートルプールがすっぽり収まるくらい、

それくらいの広さがある。

中庭の北側には、十人も入れば満杯になる程度のちっちゃいプールがあった。

空同様、澄み切った透明な水をたたえている。

初夏の昼下がりが、さわやかな曙光を浴びて、水面はキラキラと輝いていた。

溶けたクリスタルの結晶が乱反射しながら、真っ白に光り、うねっているみたいだった。

マミヤはプールサイドのビーチチェアに身をあずけていた。折りたたみ式のキャンバス地の感触が、疲労した体に心地よい。

「結局徹夜してしまったわね」

エリカが近づいてきた。ワゴンテーブルを押してきている。

アイスレモンティーのセット一式が載っていた。

彼女は泥汚れのついたキャミとフレアスカートのまんま、

着の身着のままだった。エリカは彼にアイスティーをさしだして、プールサイドに座りこんだ。

両のふくらはぎまで無色透明な水の中に入れる。

ばしゃばしゃ、水よりも透きとおった色の太ももを大胆に動かした。フレアスカートが揺れて、太ももの上のほうまで見えそうになり、

「見ないでくれる？」

気づけば、少女がこちらをふりむいていた。

慌てて、視線を外す。

アイステイーを飲む。

口の中がからからに乾いているのを、意識した。

会話の糸口を、話題を探した。午前中、さんざんふたりで話し合ったチハヤのことしか、やっぱり思いうかばなかった。

キャロル、そうだ、チハヤちゃんの見舞いにいったキャロルはどうしているだろうか？

マミヤは、タンブラーに注いでもらったアイステイーの琥珀色の残りをじっと見つめながら、

「……えっと、キャロルから連絡はあったのか？」

「さっきね、警察病院に着いたって知らせてきたわ、

チハヤとは面会謝絶で会えなかったって……いま、病院のロビーで寝ずにがんばってくれてる、

チハヤに会えるまで帰ってこないって息巻いてた、

それとタクシーのエアマシン、

いまは有事だからって、運賃五割増しで請求されたって怒ってた」

彼女らしい、マミヤが微笑んでつぶやくと、

エリカも、こくん、とうなずき返してくる。

いきなり、マシンガンの連射音が遠く、彼方からかすかに響いてきた。

エリカが不安げに、遠くを見透かす瞳をつくる。白い面太ももの動きがとまる。

「警察の武装機動隊がデモ隊の残党狩りをしているんだよ」

「鎮圧されたのかな？」

「審問局から連絡があった、国軍が神奈川方面に投入されたみたいだ」

「さすが獵騎兵さん、治安にお詳しいのね」

「初めてだな、獵騎兵と呼んでくれた」

エリカは———なんだか大人びた仕草がとっても彼女の雰囲気に合わせていたけれど———両肩をすくめて見せた、軽い感じで。

「審問官で、そんなにお嫌いなもの？」

「獵騎兵にしたって、嫌いだよ、こんな職業」

「だから、一四連敗してきたってわけ？ カド番になってクビになりたかったから？」

マミヤは答えるかわりに、アイスティーを一気に飲みほした。

「なのに、？魔導の姫？のヌードは見たくなっちゃったってわけね？」

マミヤは、琥珀色の甘い液体を盛大に嘔きだした。

咳きこみながら、

「なにを、急に」

エリカは両の瞳に蠱惑的な挑発の色をたたえてマミヤを、じっと、見据えてくる。

少女の双眸のその力にあらがうことはできず、視線をプールへと逃がしてしまった。

「あら？ だって、姫に勝つつもりじゃ無かったのかしら？」

「ほんとは、もうクビになってただの中学生にもどるつもりだったんだ」

「ムキにならなくってもいいのに」

「なってなどいないっ」

「魔導の姫が来日した途端、

その子のオールヌードが見たいから、隅々まで余すところなく、その目に焼きつきたいから、ホウキをへし折りたくなっちゃったから、

だから気が変わった、そうなのね？」

「そうゆういい方は……ないだろう？」

エリカは水辺に視線を投げた。

なぜかはわからない、妙にか細い声で、

「好きなの？ 魔導の姫さまのこと」

「……あこがれ、そうだ、あ、憧れていたっ、世界最強といわれている魔導少女に」

「そう？ それだけ」

「そうだよ」

「マミヤ、ねえ？ 自分の強さに、自信ある？」

マミヤは唇を舐めてから、

「無い、といえば、ウソになる程度には……」

「魔導の姫様に、勝てそう？」

「勝つ以外に道はないんだ、どうしても」

「そんなに彼女を脱がしたいのね？」

「ちがうっ、断じてちがうんだっ」

マミヤは、なんだか妙な汗をかき始めていた。

暑さのせいではない。

アイスティー、飲もうとした。

すでに手にもつタンブラーは空っぽだった。

やけっぱちになって、中の氷を噛み砕いた。

「ナホ先輩と、魔導の姫、どちらが好きなの？」

いわれて、こんどは氷の欠片で喉がむせてしまった。

激しく咳きこみながら、

「きみ、なんだかおかしいぞ、どうしたんだ、なにが言いたい？」

「別に」

「……その、服」

マミヤは声の裏返らないよう、慎重に発音しながら、

「服だけでも、もう、着替えたほうがいいよ、よごれてるし」

少女は、つんっ、と鼻を澄まして、

「ほんと、はつきりしないひとね」

いうやいなや、泥のついたキャミソールを脱ぎ捨てた。

フレアスカートも引きずりおろして脚から抜いてしまう。

マミヤは両手にタンブラーを捧げ持って——そう、まるでついに聖杯を見つけた敬虔な信者のように——一二歳の少女の肉体に目が釘付けになってしまっていた。

薄いピンク色のブラとショーツ。可愛らしいフリルの装飾で縁取りされている。

彼女がこちらを向いた。ショーツのフロント部分、淡いピンクの刺繍レースになっている。

半分、シースルーだった。大事なところの肌が見えそうで、見えなそうで——。

「なにをそんなに凝視しているの？ 魔導の姫様やナホセンパイがとっても可哀想」

「凝視などしてないっ」

少女はおかまいなしに、ランジェリーのまんま、プールに飛びこんだ。

美しい黒髪を濡らしながら、

光の乱反射で真っ白に輝く水面へと浮きあがってきた。

「きみは男子の前で平気でそうゆうことをするのか？」

怒り、そうだ、怒りのようななにかが、

急激にふつふつとわき起こってきてしまった。

少女は、頬に掛かる髪をほそい指で払いのけながら、

「貴方が汚いモノは脱げとゆうからよ、おかしなひと」

「着替えろ、っていったっ」

少女はくすつ、と笑顔をこぼして、プールサイドに両腕をついた。

「そんなにゆうなら着替えてくる」

上半身を水面から起こした。

そして見た、マミヤは見た、少女のショーツ、

両の太ももの付け根の中心が、フロントのシースルー部分が水で肌  
に、

ぴたり、張りついてしまっていて、

「あ、上がらなくていいからっ」

全力で視線を外した。

ほんとうに、渾身の理性を総動員して、両眼をきつくつぶった。  
失明しろといわんばかりに、まぶたを閉じた。

「？ どうしたの、猟騎兵さんたら……」

少女も、腰の下、自身の大切なところに瞳をむける。  
瞬時にプールの中にその身を沈める。

「見たでしょーっ」

声が一二歳の少女のそれに変貌していた。

恥ずかしさの塊、甘く切ない吐息とともに叫んでくる。

これが、本来のこの子の、少女の声、なんだろう。

「……見てない」

「ウソーツ、いま、間があったじゃないっ」

「き、きみの、せいだぞっ、そんな恰好でプール入るからだっ」

少女の返事は、ない。

マミヤは全身を熱い血潮の塊に、サマージャケットにデニムを着  
ているにもかかわらず、

心臓が体のあちこちからはみ出して空気に触れる痛みを味わってい  
た。

火照りは、激痛を伴う快楽に近かった。

恐る恐る、両眼を開けてプールを見た。

エリカは肩まで水に浸かって、じーっ、とマミヤを睨みつけてい  
る。

両の頬は痛々しいくらい、

可愛く真っ赤っかになってしまっていた。

「……ってくれる？」

マミヤは耳を澄まして、

「え？」

「お願い、だから、先に建物の中、入っててくれる？」

切なげに、少女は懇願してきた。

マミヤはもう、アウト、だった。

心臓が耳の隣で脈打ってるかのように、手にとるように鼓動が聞こえてくる。

体中の血液は、熱病に冒された患者みたいに煮えたぎって水分が全部あらかた蒸発したかのようにだった。

少年は、声を出すことすらできなくなってきた。

なんとか一、二度、うなずいてチェアのキャンバス地から身を起こした。

途端、また座りこんでしまう。

動けない、堅く、あんまりにも堅くなってしまっていたのだ。

デニムの前を突き破ろうとするぐらいに。

「どうしたの……」

少女がちっちゃく、泣くように問うてくる。

「ごめん」

少年もうつむいて、いっしょうけんめい、謝った。

いま、中庭に地獄の穴が開いていたら、

少年はよろこんで飛びこむつもりだった。

その自信がある。現にいま、体中を羞恥心の業火で灼かれているではないか。

地獄の炎に投げこまれたほうが、まだ少女に軽蔑されなくて済むとゆうものだ。

少女の、息を呑む声が聞こえた。

よりいっそう少年の頬が、朱に染まってゆく。

少女は、くすつ、と、それこそ——うれしそうに？——楽しげに笑い声を漏らしてきた。

「ごめん」

そうゆうしか、ほかにない。すべてのボキャブラリーが、脳内から蕩けて消えてしまっていたからだった。

「オトコの子って、ほんつとにサイテーね」

「ごめん」

やがて、ころころっ、とそれはほんとおかしそうに、十二歳の少女そのものって感じの笑い声がおこった。

少女は笑いをなんとか収めて、

「アタマ冷やしなさいよ」

そういつて、手で水をすくうとマミヤに思いっきりぶっかけてきた。

「冷たっ——」

そんなマミヤを見て、また少女はかるやかに、のびやかに笑い声を上げるのだった。

「……っんともうっ、待ってあげるわ、元の状態にもどるまで、ねっ」

「すまない」

「いやらしい、とってもエロくていやらしい獵騎兵さんだもの、大目に見てあげるわ」

すっかり、余裕をとりもどした調子でいつてくる。

そのくせ、少女のほうにしたって、あいかわらず全身肩までプールに浸かっていたけれど。

ついさっきまでと打ってかわって、その白い肌、

そのどんな部分だろうとマミヤにはもう二度と絶対見せてなんかやらないんだから

……健気に、懸命にそう告げてくるかのようだった。



## エリカの想い出〜ふたつで充分ですよ in ベルリン〜

「ねえまだあー？」

エリカが呆れ声とゆうか、愉悅の含み声とでもゆうのか、なんとも生き生きとしてうれしげに声を上げ訊ねてくるのが、マミヤはたまらなく悔しかった。

彼女はプールの中、うしろをむいてやっぱり肩まで水に浸かっている。

彼はプールサイドのビーチチェアに座りっぱなしだった。

七月の陽光が照りつけてくる。

それにもかかわらず流れる汗は、焦りをともなう脂汗だった。

少年の青い欲望は、履いてるデニムのせいでびっちり抑え込まれ行き場がどこにもない。

ないもんだから、猛り狂ったまんまだった。

暴発こそ、しなかったけれども。

マミヤは徹夜のナチュラル・ハイな気分も手伝って——疲労してるのにもかかわらず

——気持ちをどうにも手のつけられないレベルにまで昂揚させていた。

脚を何度も組み替えつつづけている。

いま、また組み替えたとき、エリカが、

「ほんと、サカリのついたエロワンコちゃんは始末に負えないわね」

「誰のせいだと思ってる？」

「さあ、誰かしらね？」

マミヤはどうとう、根負けした。

「エリカ、頼みがあるんだ」

途端、びくん、と少女の両肩が震えた。

「……なに？　なによ？　ヘンな頼みとかだったら承知しないんだから」

すこし語尾がおかしかった。

なんだか照れて、うわずっている感じがする。

まちがいない、彼女だっていっぱいいいんだよ、マミヤは思った。

それが、なんだか無性にうれしかった。

「そんなんじゃないっ、だから……話題を、なんかいい感じの話系の話題を頼む」

「なに？ その無茶振り」

「なんでもいい……そうだ、きみの昔のこと、ちいさいころの想い出話とか、どうだ？」

彼女がゆっくり、こちらにむきなおる。

ふたりはようやく、その瞳同士で互いの存在をたしかめあった。

エリカはプールサイドで両手を組んで、かたちの良いちいさなあごを上に乗せた。

中庭の芝生と、素焼きのテラコッタの石畳とをぼんやり、眺めやっていた。

マミヤは辛抱強く、脚を組み替えながら待っていた。  
いい風が吹いていった。

水面が揺れて、少女のクリーム色の貌に眩しく光が乱舞する。

「……私のまだ幼いころ、ドイツでの話よ、

パパに立食パーティーに連れて行ってもらったの」

マミヤは額に流れる汗をぬぐいながら、

「いいもんだな、いかにもヨーロッパらしいというか」

「ええそうよ、私よろこんでパパについていったの。」

エアマシンでベルリンの空を飛んでね、街の中心街にてっきりいくもんだと思っていたら、

とんでもないところっちゃったの」

「とんでもない？」

「そう、繁華街のなかでも場末のほう、小汚いちいさな店、立食スタンドよ、パパったら平気で入っていくのよ」

怒ったような、つつけんどんな彼女の口調。その貌のほうはちがった。

言葉とは裏腹にたいせつな、とってもなつかしい記憶なんだと、そう表情が告げている。

「私まだ背が低くって、スタンドに置かれた料理も見えなかったの、ふて腐れちゃってそっぽ向いてた。

パパは残念そうに、私のこと見て寂しげに笑ってたっけ」

「ドイツ料理だとして、軽食スタンドだろ、なんの店だったんだ？」

「日本ソバよ、立ち食いソバ」

マミヤは瞬きをした。

あまりに予想外だったから。

「パパったらたどたどしいニッポン語でソバを注文してるの、ところが店の人がガンコオヤジってヤツ？」

パパとけんか腰で口論になっちゃってね」

「なぜだ、ソバの注文をしただけなんだろ」

「パパが頼んだのは、エビ天ソバよ、

トッピングに大エビ四つくださいって頼んでたのよ、

店の人、そんなに食べれないから、残飯出すのはだめだから二つで充分ですよ、って、

それでケンカ」

「昔気質の店主だね」

「そうね、いまでもあの店主の言葉、ニッポン語で怒鳴った言葉、憶えてるんだ……」

？ふたつで充分ですよっ？って何回もそうニッポン語で怒鳴って怒るの、

残飯残すはニッポンの恥、ってね、口うるさい店主だったみたい、

それでもけっこう繁盛していたのよ、ニッポンびいきのドイツ人たちが常連でひっきりなしに出入りしてたわ」

「それで、エビ天はどうなったんだ？」

「結局ふたつしか乗っけてくれなかったの、

ソバの上に。あとから聞いたんだけれど、

パパったら四つのエビ天を私と二個ずつ半分こするつもりだったのよね……で、パパね、

二本のうちのひとつをね、不器用に箸でなんとか挟んで、私に差しだしてくれたのよ、

エリカ、これがママの故郷のニッポンの味なんだ、  
って……そういつてね……」

ベルリン時代を懐かしむ、少女の貌。繊細な微笑みがそこにはあった。

「美味しかったか？」

エリカは首をふった。

一転、表情を消して、首を横にふった。

「食べなかったの、意地張って、立食パーティーって騙して連れてこられたから、

私、馬鹿な意地、張っていたのね」

後悔している話しぶりだった。

彼女の口調からは、たしかに後悔の記憶が読みとれた。

「ほんと汚い店だったの、なのにとっても美味しそうな香りがするの、

ダシの香り、油揚げるパチパチってゆう音、

不思議なお店だったな、エビ天、コガネ色にキラキラしていて――」

エリカは瞳を閉じた。

「美味しそうだったの、とってもね、美味しそうだったのよ、

やせ我慢して食べなかったの、パパがみんな食べちゃったわ、サクサクッ、ってすごい良い音させながら、ソバをヘタツピにすすりながら、

熱い熱いっていいながら……美味しそうだったの、とても……」

マミヤはじつと、耳をかたむけていた。

「そのあと、お父さんといく機会があったのか？」

エリカは、ペろっ、と舌を出してきた。

「それがね、家庭の事情ってヤツ？　？　いろいろとあった？　のよね、よくある家庭の不和ってゆうか、ゴタゴタがあってそれっきりパパといく機会はないまんまよ、いまも、そのまんま……」

「……」

「あ、詮索はしないでよね」

マミヤはうなずいた。エリカの家庭の事情。

深く立ち入るのは憚られる気がした。

ふたりの手首のリスタブが震動した。

バイブレーター機能だ。

メールの受信だった。

「いまごろ学校から連絡きたのね」

「ああ、有事につき無期限の休校か……やむを得ないな」

「これで安心して？　魔導の姫？　に？　挑める？　わよね？」

エリカはいたずらっ子のように、ちろっ、とまた舌を出してきた。

マミヤは真顔で、

「ああ、きみのゆうとおり、姫を雑音抜きで？　倒せる？」

彼の表情を見て、彼の声音を聞いた少女の貌から一瞬で笑顔は消えた。

かき消えていった。

ふたりは真剣な眼差しで、互いを見つめあっていた。

しばらくのあいだ、微動だにせず、少年と少女は見つめあっていた。

プールの清らかな水だけが、そよ風に揺られ、夏の昼下がりの陽光をはね返していた。

## アルバトロスM―VK36タイプ110―哀しみのエリカ

服を着替えたエリカ・ヴァンデル・メーアが、ホテルの屋上でエアマシンタクシーに乗りこむマミヤを見送ったとき、

うまくちゃんと笑顔で見送れたかどうか、自信はなかった。

なぜなら彼は倒すと、エリカを倒す、

よりにもよってそう断言してきたのだから。

いっつも彼に見せてきた冷笑的な微笑を見せる余裕など、とうに喪っていた。

独りのとき思わず妄想でうかべてしまう十二歳の少女のあどけない笑顔を見せたわけでもなかった、当然ではあったけれど。

この笑顔は、マミヤに見せるためにだけ、

それだけのためにいままでとっておいてきたものだった。

そう、とっておきの笑顔。大好きなマミヤにだけ、

あのひとにだけ見せることのできる、飾り気なし、

心から、エリカは心から思う、これがほんとの私の素顔、素の私なんだと――。

私たち魔導少女のために、

プライドを捨て十四戦敗北を重ねつづけてくれた、

唯一の男の子。

強い、貴方は強い、

わかる、私にはそれがわかる。天才は天才を知るものなのだ。

魔導少女の動体視力をもってすれば、

どれほど貴方が苦心して呪法弾をわざと外してきてくれたのか。

ここぞというタイミングを数瞬ずらしてミサイル弾を撃ってきたのか。

私たち魔導少女の投射した呪導爆雷をкаろうじて回避する演技。

無能者を装う演技。

ほんとに凄い、エリカは思った。神業としかいいようがないくらいに。

エリカはそんな気持ちを、抑え込まないとあふれ出すあのひとへの想いを、

かろうじて心に押し込めていた。

ちょうど魔導爆燃機関が、少女から吸い取った魔導エネルギーと魔導石の対消滅による大爆発をそのシリンダー内に封じ込めるように。

圧縮と燃焼のサイクルをくりかえすのとおんなじように。

けれど、排気は？

この想い、吐きだす相手は？

マミヤ、貴方はまだ、私のものじゃない。

貴方は事もあるうにこの私を倒すと言い切った。

世界一難敵ひしめく欧州リーグの、その覇者たる？魔導の姫？に本気で勝つ気でいるじゃない？

怒りだ、これは本物の怒りだ、この私を舐め切っているのだから。

この魔導の姫を、本気で倒すつもりの方。

真の実力者であるからこそそう思ってしまう貴方が、この上なく愛おしい。頼もしい。

男の子として、私の身も、心も、捧げる相手は世界中で貴方をおいて他にはいない。

けれど――。

異端審問獵騎兵は、ヤークトフント獵犬のパイロットは、

決して魔導少女と交際してはならない。

決して両者のあいだには、異性交遊許可証は下りてはくれない。

下ろす国家はこの地球上のどこにも存在はしない。



「だから私が勝つわ、マミヤ、貴方がそれほどまでに己の職業を忌み嫌っているのなら、だいじょうぶよ、私が、せめて私の手で貴方の苦役でしかないキャリアにピリオドを打ってあげる」

ホテルの地階へとつづく秘密エレベータの箱の中、彼女は独り決意をこめてささやいた。

黒い真珠のように光を放つ瞳を閉じ、想う。

貴方は強い、たしかに。

でも、私の敵では無いの、

それがわからないの？

なぜわからないの？

私の愛する貴方——。

定員八名の箱から解放され、地下五階に下りたった。

まぶたを開き、我に返る。想いをふりきる。

ヘルマン&ハインマン社の武装警備員たちが——二十四時間常駐する鬱陶しいボンクラ連中が——エレベータホール前で一斉に敬礼してくる。

魔導の姫に、エリカ・ヴァンデル・メーアにむかって。

エリカはいつものように、無視寸前のおざなりな動作でそれに応えた。

シャワールームに直行する。

ワンピースを乱暴に脱ぎ、糸まとわぬ裸身となる。

全身に温水を浴びる。滅菌洗浄され、更衣室へと足を運ぶ。

ここは、ニッポンでつくられた姫の聖域だ。

金属質な灰白色の部屋。右にずらり、  
マジックパンツァー  
魔導防御兵装が何着も収納されていた。

正面に等身大の姿見。巨大なミラーに美しい乳白色のフルヌードを惜しげもなく晒け出す。

まだ幼いながらも、しっとり息づくふたつの胸を、ほそく締まった腰を、カラダの中心の未成熟なアンダーヘアを、傷ひとつない、完璧な自分の肉体を凝視する。

「見て？ マミヤ私を見て？ このカラダはあなたのものなのよ？ あなただけのもの……」

長い、とても長いため息を吐きだす。

怒りのあまり、奥歯を噛みしめるのがとまらない。

愛するひとからの侮辱は、断じて容認できなかった。哀しかった。なぜなら――。

エリカは思う、私がこんなに愛しているのに、

貴方は？魔導の姫？に夢中なのだから、と。

パンツァーを裸身の上に装着して更衣室を出る。

カラーはローズレッド。長い黒髪とミルク色の貌にとってもよく映えるカラーだった。

姫のほそい、しなやかな肉体にフィットして、全身のボディラインをくっきりと浮きあがらせている。

地下五階の格納庫。姫専用の格納庫だ。

上の地階は、キャロルやチハヤたち避難者の格納庫や更衣室にあてがわれている。

学校の体育館ほどの広大なスペース。

高い天井。

無影灯がぬくもりの欠片もない照明を放っている。

いくつも連なる大型工作機械の群れ。

ここはたった一騎のためだけにある精密工場だ。

技官、魔導工学エンジニア、メカニックマンらが一斉にうやうや

しい挨拶をしてきた。

その有象無象すべてを無視して、

愛騎の魔導二輪装甲車輛へと最短距離で歩いてゆく。

パンツァーとおなじカラーリング、

深みのある格調高い緋色の山猫。

ヴァイルトカッツェ

フロントカウル

前面装甲板はシャープな流線型。

機体後方へゆくに連れ、少女の肉体のように艶やかな丸みを帯び  
波打つフォルムとなっている。

アルバトロスM―VK三十六タイプ一〇。

一〇〇%ドイツ連邦共和国純正部品で製造された赤い山猫だ。

互角の性能を誇るあのマミヤたちのフォッカーM？とならぶ傑作  
騎だった。

「姫、メンテナンスはすでに？完璧に？済ませております」

H&H社の主任技官が――シャハト直属の部下――が丁重な言葉  
遣いで告げてくる。

魔導の姫は、黙って唯、うなずいた。

姫の双眸が妖しく輝き出す。

あの魔導の光を、蒼白色の光を放ち始めていた。

## ポールポジション

「なんじゃとつ、武装を全部外せだああっ？」

その老整備兵の大声は、メンテナンス・ガレージ 獵騎兵の大隊整備工場に轟いた。

老人の雄叫びが、マミヤの愛騎の搬入された、だだっ広いガレージの壁に跳ね返る。

すぐそばで聞いたマミヤは両手を耳に当てがい、  
無難にやりすごした。

ガレージにちらほらと見える整備兵たち、

獵騎兵らが整備機器の陰からこちらをチラ見してくる。

「そうだよ、おやっさん、こんどのレースでは無用の長物なんだ、  
武装はね」

おやっさんと呼ばれた老兵は顔面を蒼白にすべきか  
赤面して怒りの説教をつづけるべきなのか、迷い込んだみたいだった。

結局、孫が自殺すると聞いたんで、  
慌てて自分の墓から甦って飛びだしてきちゃったゾンビじいさん、  
そんな風な訳のわからない顔になった。

「……マー坊まあ座れや」

「その呼び方、いいかげんよしてください」

マミヤはこの敬愛する老兵にふさわしい敬意をこめながらも、  
不敵に笑みながら床に座った。

おやっさんも座りこむ。

上下つなぎのジャンパースーツのポケットから噛みタバコをとり  
だして、

一粒口に放りこんだ。

苦虫ならぬ噛みタバコを、不味そうに噛みつぶしながら、

「相手はあの？魔導の姫？さまじゃ、おめえがエントリーしたと聞

いたときゃあ、  
わしゃうれしかったぞ、なんせ——」

マミヤに顔をよせ、上目遣いにのぞきこんでくる。  
タバコのメンソールの匂いがした。

「一七戦目にしてやっと、本気出しやがったな、  
このガキ、わしゃ咄嗟にそう思ったんじゃ」

「俺はいつだって本気ですよ」  
「おやっさんが、ばちんっ、と派手に音を立てながらマミヤの肩を  
ひっぱたく。」

「アホヌカセ馬鹿たれが……おんめえ、なに考えてやがる？」  
マミヤは笑みを引っこめた。

「勝ちたいんです、姫に」

「……丸腰でか？」  
声をひそめて問うてくるおやっさんに、  
マミヤが答えようとしたとき——。

跳んできた、スパナが工場の床の上、飛び跳ね回転しながら、  
マミヤにぶつかりそうになり、

「危ないな」  
マミヤがすんなり、片手で受けとめる。

高笑いがおきた。

そいつらが、声の主たちが近づいてくる。  
天井にマウントされた、いくつもの専用クレーン、  
それにつり上げられているマシンの裏手から姿を現した。  
数はふたり、大学生ぐらいの年格好だ。

マミヤはふたりの獵騎兵の姿を認めると、直立不動の姿勢をとった。

こんな連中でも一応上官だからだ。

おやっさんもうさんくさげな顔をしながら、立ちあがる。

ひとりは筋骨隆々のプロレスラーのような体軀の持ち主。

もうひとりは痩せぎすの鋭い印象を与える軽薄そうなタイプだ。

おやっさんがふたりを睨みつけて、

「こらあっ、スズキッ、オーハシッ、てんめえら、ガレージでなに  
してやがるんだっ」

スズキと呼ばれたレスラータイプの筋肉ダルマが、

「悪かったな、おやっさん、手が滑った」

「そうそう、床を勝手にころがってったんすよっ」

「馬鹿野郎っ 水平定盤の上転がるスパナなんぞどこの世界にあるんだあっ」

完全な球体でも自然に転がったりはしない水平を保った床、  
水平定盤。一流のガレージに必須の設備である。

獵騎兵連隊随一の老練なベテラン整備兵、

おやっさん自慢のガレージを平気でバカにしてきたのだから、  
老兵の怒るのも無理はない。スズキ大尉は素知らぬ風で、

「なあおやっさん、いいかげん意地張ってないでシゲミツさんの整  
備にもどったらどうだ？」

こんな三万しか回せないクズにいつまで肩入れするつもりなんだ  
？」

「決まっとる、マー坊が本気を出すまでじゃっ」

「本気い？」

クズの出す本気っていったいなんなんすかあっ？」

オーハシ中尉がすかさず口を挟んでくる。

ひとり愉快げにゲラゲラと笑う。

スズキ大尉は静かに笑みながら——小物が大物ぶるときよくやる  
仕草で——マミヤを見た。

「なあ曹長、敢えてクズとは呼ばず曹長と呼んでやるぞ、貴様にG？のエントリーが認められたのはたちの悪いジョークだ、まちがいなんだよ、いまからでも遅くはない、

出走、辞退しろ」

「その御命令には従えません、大尉殿」

オーハシがスズキを見て、

「コイツカド番すからね、負けてクビになったあとで、  
？魔導の姫？が強すぎたせいだからだ、

とかなんとか調子こくつもりなんすよ、負けの言い訳づくりっすよ、  
きつとっ」

そういつて、

オーハシ中尉は訳知り顔でマミヤを見下す視線を投げってくる。

「おまえらなんじゃっ、自分に自信がないからレースのライバル潰  
しにきたんかあっ」

老兵は噛みタバコを床に吐き捨て、ふたりの青年を挑発してくる。

「ライバル？」

スズキはそらっとぼけた風に顔全体を疑問符にして、脇にいるオ  
ーハシを見る。

「俺らはG？で実績あるっすけど、

だからこんどのインター杯エントリーしたんすけど？

ええ？ 俺らのライバル？

おやっさんそんな強えヤツどこにいるんすか？

目の前にG？で一四連敗の鼻クソみてーんならいるけどっ」

オーハシはまた笑いこぼれた。

おやっさんも黙ってはいない。

「マー坊はな、初陣第二戦、そりゃあ見事な勝ち方じゃった、  
シゲミツの全盛期を超えるぐれえのな、

それぐらいなんだと、本物なんじゃと、俺は見たんじゃ、俺の目は  
ごまかせねえっ」

スズキは呆れかえって、

「おやっさんの見る眼を悪くいうつもりはさらさらないんだ、たしかに曹長は二戦目までは良くやったよ、それは認める、だがビギナーズラックだったんだよ、

怖い物知らずの初心者、勝負の世界には地雷の埋まってることを知らないもんさ、

知らずに猪突猛進すること、あるだろう？

それで偶然地雷を踏まずに成功しちゃうことがまれにあるんだ、それが二戦目までのコイツさ、

地雷の怖さに気づいて、パイロットは初めて中級者の門を叩けるんだ、

偽もんはそこで地雷にビビって足踏みする、

そのまま人生が<sup>キャリア</sup>終わる、

それがいまのコイツなんだよ」

おやっさんは薄い頭髪を掻きむしった。

「マー坊、なんか言い返してやらんかいっ」

「大尉のおっしゃることは正論ですよ、おやっさん」

マミヤの飄々とした口ぶりに、

老兵は自慢の水平定盤の床面を何度も踏みつけ、

「なんじゃっ、がつんといえんのかいっ」

軍隊内において上官に対して、がつんというなど論外、もってのほかだった。

古参兵であるおいちゃんはこのふたりをまったく評価していない様子で、

「じゃあアレか、おまえらは姫に勝つ自信があんのかいーっ」

老整備兵も、なかなか痛いところを突いてくる。

初めて、スズキとオーハシは、鼻白んだ。見下しきった笑みを引っこめる。

「おやっさん、いくら古参兵でもいっていいことと悪いことがあります



ますよ」

マミヤの態度は、いたって自然体だった。

「うるせえっ、マー坊っ」

「弱い者いじめは、かっこわるいですよ」

さらっ、といったのけた。

おやっさんは、じっと、マミヤを見て、それからニヤリ、ひと笑いして噛みタバコをまた口にした。

呆然としているスズキとオーハシを尻目にして、

「そうじゃったのう、？弱い者？いじめは良くないのうっ、ふたりとも、スマンかったわいっ」

はじめに切れたのは、オーハシだった。

マミヤにつかみかかつて、

「オメエ誰が弱いもんだってっ、ああ、いってみろよこらっ」

マミヤの胸ぐらを激しく揺するオーハシに、

おやっさんがつかみかかる。

おやっさんは引っ込んでくださいよおっ、とオーハシが金切り声を上げる。

老兵は口から泡を飛ばして、おまえらレース前の大切な体じゃあっ、と叫び返した。

スズキが、三人の取っ組み合いを思案顔で眺めていたとき、ふと、うしろをふりむいた。

立派な体格の猟騎兵がひとり、いた。こちらへ真っ直ぐ歩いてくる。

「やめろお前たち、シゲミツさんだぞっ」

スズキのうわずった声に、三人の動きは途端、

やんでしまった。

古参のおやっさんも例外なく、全員最敬礼してむかえた。シゲミツ中佐をむかえた。

彼は静かに笑みながら答礼してきた。

「マミヤ曹長、このふたりは貴官同様、

魔導の姫を相手に今回エントリーした猛者たちだよ、

だがG？ベテランの彼らをもつてしても、今レース前の緊張感に耐えかねたと見える、

軽いジョークで気を紛らわせようとした、

それだけだ、貴官と同様にだ、

そうだろう？ 諸君？」

スズキ大尉とオーハシ中尉がちいさく目配せをしあう、ふたりして、

「は、そうでありますっ」

ふたりの返答に、シゲミツは満足そうにうなずいた。

「おやっさんも曹長も、私の顔に免じてこの場はなにも無かったことにしてもらえませんか」

「おうっ分かった、おめえたちは仲間じゃあつ、

仲間割れしとったらあの？魔導の姫？には勝てんしなっ」

「申し訳ありませんでした」

マミヤは殊勝な態度で謝って見せた。

また、シゲミツ中佐はうれしげにひとつうなずいて、

一同を見渡した。

「マミヤは今回、念願のG？初参戦、

しかも……残念なことにカド番の危機を迎えている、

私はこれを勘案し、私の権限においてマミヤ曹長に

？魔導の姫？戦の？ポールポジション？を譲りたいと思う、

異存ある者は遠慮なく申し出てもらいたい」

いつのまにかガレージ内にはこの五人を注視するギャラリーの輪ができていた。

幾人もの猟騎兵、整備兵たちのあいだにざわめきが起こっていつ

た。

ポールポジション。

レースに出走する<sup>ヤークトフロント</sup>猟犬のスタートにおいて、もつとも有利な位置。

今回のレースのように、<sup>ワンオンファイブ</sup>一対五ともなると、

公道に五騎の猟犬が一行平等に並走するスペースは無い。

このような場合公式ルールにより、各騎のスタート位置がずらされる。

最先頭の車輛の斜め後方に二番騎、おなじようにその後方に三番騎……、と斜め後方へと布陣しての出走となるのだ。この最先頭を？ポールポジション？と呼ぶ。

本来ならそのレースでもつとも戦績の優秀なパイロットの陣取れるスタートラインだった。

その戦績をもつシゲミツの宣言なのだ、

誰が異論を唱えられるだろうか？

シゲミツは皆の表情を順繰りに見渡してから、

また満足そうにこんどはおおきくうなずいた。

「私の提案は通ったようだね」

二十四歳にして現役の異端審問猟騎兵の——魔導石適性〇・〇〇  
一%の壁を破った——日本のトップエースは、マミヤに握手を求めてきた。

マミヤは差しだされた手に応えた。

「カード番脱出、期待してるぞマミヤ曹長」

「ありがとうございます、中佐殿」

中佐は、かわいがってきた実の甥っ子の晴れ舞台を祝うかのよう  
に、

さわやかに振る舞っている。

マミヤはなぜか——不可解なくらいに——控えめな笑みで応じた  
だけだった。

他の猟騎兵たちなら有頂天になってよろこぶ場面だとうののに、  
である。

## ナホの賭け

四日後。時刻は二三一〇（フタサンイチマル）時。

ナホは首都圏上空をタクシーエアマシンで飛翔していた。

機長は寡黙な男だった。

三十代くらいで運転の少々荒っぽいのは困りものだった。

けれど今夜はそんなことはどうだっていいのだ。

ナホはリアシートから、

コクピットに設置されたちいさなテレビに食い入るような視線を送っている。

機長も耳をかたむけている様子だった。

『全国のみなさま、全世界のみなさまっ、

今晚は、古町です、

お待ちせいたしましたっついにこの夜を迎えました、

インター杯G？レース、ターゲットは？

そう、世界に知らぬ者はいないっ、欧州リーグの覇者にしてついに、

ついに来日しました？魔導の姫えええーっ？』

古町とゆう男性の司会アナウンサーは姫、の一言を絶叫口調で伝えてくる。

放映権を獲得したこの民放局、総力を挙げての中継体制の敷かれて  
いる様子だ。

熱の入りすぎである。

まあ無理もない。世界の魔導の姫の初来日、初の日本でのレース  
の生中継なのだ。

前回の対シゲミツ中佐戦においてはレースは試合結果のみ速報が流  
されただけである。

そのため今夜は生で姫の爆走が拝めるとあって、  
視聴率がどれだけ上がるか予想もつかないのだ。

『と、申しましてですねえ、はっきりいって今夜の見所は姫がどうやって勝つのか、

それしか見所ないんですけどねえっ』

「ううっ何いってんのこの古町ってキャスタームカつくつ、  
獵騎兵もがんばってるってのっ」

機長が柄の悪そうな顔だけれど、温厚なしゃべりで、

「お嬢さん、ひいきの獵犬でも、今夜の五人のなかにいるんですかね？」

「……ええ、あの、あたしの幼馴染みが出走するんです」

「へえっ、そりゃあめでたい、俺もね、応援してる獵犬がね、  
ひとり出走するんですよ」

そうですか、とナホはうわの空で返事をする。

テレビではその獵騎兵たちや姫のオッズの最新情報のテロップが  
流れ出したのだ。

『二三時集計分の単勝オッズ最新情報をお伝えします』

スタジオの女性アナが読みあげだした。

『魔導の姫、貫禄の一・〇二倍、

シゲミツ中佐八・七五倍、

スズキ大尉六二・一八倍、

オーハシ中尉一四八・九四倍、

ソルベ中尉二〇・九七倍、ソルベ中尉は一八勝無敗、今回の大穴、

台風の目となるかも知れません

……ええと、マミヤ曹長二万一一五三倍、あ、万獵券です、

カド番のマミヤ曹長、単勝オッズとうとう万獵券出しちゃいました  
ね』

スタジオで隣に座る古町が、ぶふっ、と汚い笑い声を上げてしま  
う。

ナホは悔しさのあまり、  
フロントシートの背中にキック一発お見舞いしてやった。

「つぎけんなっフルマチーッ」

「荒れてんねえお嬢さん？」

「今夜のために十万親からお小遣い前借りしてきたんですっ」

「おう、一口分かい？」

「高すぎますよっ、G？って、

一口分のチケット最低十万からなんだもん」

「そりゃあ、まあねえ？ G？は世界中で取引されっから、

ステイタスってやつだよ、G？、？あたりとはね、やっぱ格がちがうからね」

機長は興奮してきたようで、寡黙さを捨て去ってきた。

「お嬢ちゃん、あんたがどの猟犬に賭けたか当ててやろうか？

そうだなあ、幼馴染みだから、歳も近えっばいしソルベだろ、大穴のソルベ中尉、アタリだろ？ なっ」

「ち、が、い、ま、すっ」

「なんだよなんだよそんな怒んなくってもいいじゃねーかよ、

ったく、まあいっつか、とにかく聞いてくれよ、

俺ってばこのまえ猟騎兵を客に乗つけたんだよ、この五人のうちのひとりをよ」

「……へえ」

ナホは初めてちよっただけ機長の男の話に興味をそそられた。しかし――。

『——それにつけましてもG？初参戦のソルベ中尉とマミヤ曹長、明暗くつつきり別れちゃいましたけれども、

これね、ほーんと、なあーんでマミヤ曹長エントリーできたのか、これ自体がですね、すでにしてからびっくり仰天っ、世界の七不思議っ』

ナホと機長は同時に舌打ちした。

「俺、この男のしゃべり嫌いでね」

「あたしもですっ」

機長は、フロントウインドウから見える、無数のエアマシンの放つ白いストロボライトを見やった。

「このまえ、デケえ暴動あったろ？ あの日だよ、あの晩俺はあの若僧を乗つけたんだ」

「偶然で、あるんですね」

「おうっ、お嬢さんの幼馴染みってのも、たまげた偶然だけどなっ、でよ、そのガキ、このデケえレース控えて怯えてやがったよ、震えてやがったよ、

ちようどあんたのその席に座ってよ、可哀想だったよ」

「……猟騎兵って、そうなんだ？ 意外かも」

「だろ？ 世間様でいわてるほど、

天下の猟騎兵もタフな連中じゃあねえんだな、これが、

あいつらだってよ、ただのガキなんだよ、

だからよ、俺はいつてやったんだよカツ入れてやったんだよ、

そいつによ、俺がオメエを応援してやつから、

せめてな、惚れた女の前でくれえ……？ オトコを見せてみろ？ ってなっ、バシッとよっ」

「ふーん、機長さん、いいこというじゃんっ」

ナホは素直に感心した。

実に奇妙な縁だ、そう思う。

南東京市のエアポートで駐機していたタクシーを偶然拾ったところの展開である。

世の中、案外ずいぶん狭いものだ。

「——へ、まあ、なっ」

機長はなんだか誇らしげに鼻を鳴らした。

「で、その猟騎兵って誰なの？」



ナホが興味津々に聞くと、

「おう、マ——」

『こちら木更津です、ただいま、スタート地点の木更津からライブ映像お届けしていますっ』

まだ若い女性の現地レポーターが興奮気味にしゃべりだした。

低空で飛ぶ民放のエアマシンに乗ったままの中継だった。

女性アナの後ろ、キャビンの窓から見える背景は、一面深淵の闇、夜の東京湾だ。

対岸は打ってかわって神奈川や首都圏、

大都市の膨大な街の灯であふれかえっているのが鮮明にわかる。

ナホと機長はまたテレビに釘付けになった。

『ええ、特別許可を得て猟騎兵さんに特別インタビューを敢行したいと思いますっ、

まずはカド番のマミヤ曹長に突撃インタビューを試みてみますっ』

「——ツマミヤア——ッツ」

ナホがあらん限りの黄色い声援を——悲痛な色も混じりつつも——フロントシートをひっぱたきながらテレビにむかい送った。

機長が、ぽかん、と口を開け、ナホをまじまじと見つめてくる。

「幼馴染みって、え？」

「うん、マミヤなの」

「……………ええええええ————っ、マジでえええええっ?」

「どうしたの、機長さんがなんでそんなに驚くの?」

「いやっ、アレだ、そのう、お嬢ちゃん万猟券に一口十万、

ぶっ込むつもりかなと思って驚いちゃったただだよ？」

「うんもちろんっ、機長さんは？ 誰応援してるの？」

もうその人のチケット買った？」

「いやあ、いま金欠でよう、今回は応援だけなんだ、応援、誰乗つけたのかは秘密な」

「なーんだ……とにかく芝浦の特設チケット売り場急いでね、まだあたしマミヤのチケット買ってないから」

「お、おうっ、わかった、出走は二四時ジャストだから余裕だ、心配しなさんな」

機長は顔中から脂汗を流しながら、操縦桿を握りなおした。

## 策謀くエース・シゲミツの底意く

軍政異端審問局のエアマシンが木更津金田料金所の広大なスペースに何台も駐機していた。

パイロット及び魔導二輪輸送のための専用エアマシン、通称トランスポーターである。

マシンのライトや特設照明の光で、廃墟と化した料金所はライトアップされていた。

まるで二〇世紀の現役のころを懐かしむように、かつての車輛の往来を取りもどせたかのように華やいでいた。

アスファルトのいたるところに見える雑草、スプレーアート気取りの下品な落書き、

どれもこれもいまは、この瞬間だけは、なりを潜めていた。

G?のビッグタイトルに、その白熱した熱気の渦のまえには、荒廃したその景色すら見事にショウアップされ、背景として取りこまれていた。

空に浮かぶ何機ものマスメディアのエアマシンが唸りを上げ、撮影のベストポジションを争っている。

「うるせえなあ」

ソルベ中尉は、苛ついた声音でつぶやいた。

ここ数日間、何度怒りの発作に襲われたことか？

それもこれもあのシゲミツさんがマミヤにポールポジションを譲ったと知ったからだった。

時刻、二三一五時。  
フタサナイチゴ

トランスポーターのうちの一機、

ソルベを輸送したマシンは、後部ハッチを開いて彼の愛騎、フォッカーM?をすでに搬出し終わったところだった。

彼はいま、パイロット専用キャビンのわりと高級なシートにふんぞり返っていた。

けれどその表情はちがった。

月面戦争で、弾薬も、携帯酸素も水もすべてを喪い、敵に銃口を突きつけられた二等兵の顔をしていたのである。

要するに魔導の姫を相手に、土壇場にきて怖じ気まぐっているのだった。

そこへリスタブにビデオ通話が入ってきた。

緊張のレース前だ、無遠慮極まりない。

怒鳴りつけてやろうとして通話に応じたら、三分割された画面に映ったのは、とんでもない相手だった。

シゲミツ、スズキ、オーハシの三人のライバルたちだったのだ。だから――。

「お、お疲れ様でありますっ」

階級のおなじオーハシといえども、G?のベテラン猟騎兵だ。非礼は許されない。

緊張の極みに達したソルベをなだめるように、シゲミツは鷹揚な笑みを見せてくる。

『ソルベ、君と話をしたかったところだったのだよ』

「はっ、光栄でありますっ」

シゲミツはビジネスライクにしゃべりだした。

彼の話す今夜の？作戦？はとてもシンプルなものだった。

サーキットコースは、木更津側がアクアブリッジと呼ばれる海上を渡る橋となっている。  
ストリート

ひたすら一直線である。  
ゲシュライ・トラウム

魔導の姫の希望の悲鳴を避ける場所は、

カーブになっている箇所はどこにも無い。

そこで、マミヤ、だった。

ヤツをポールポジションに、姫の矢面に立たせるのだ。

ヤツが真っ先に姫の必殺技を浴びて大破した直後、

四騎が一斉に姫へ総攻撃をするのである、

だいじょうぶだ、いかに姫といえども、希望の悲鳴には  
ゲシユライ・トラウム  
パワーチャージサイクル、というものがある。

つぎの悲鳴の放出まで、時間が、間隙が生じるのだ。

『そこを叩くのだよ、問題は無い、コースはストレートだからな、  
四騎一斉にすべての呪法誘導ミサイルを叩き込むんだ、  
姫に避けられる余地は無いのだ、これで勝てる、  
絶対に勝つ』

復讐に猛り狂う、中佐の、二四歳の若者の陰惨な声音がそこには  
のぞいていた。

ただし、勝者は誰となるのか？

公式ルールにおいては、インター杯の勝者とは、  
ターゲットの爆燃機関に直撃弾を撃ち込み、撃破した者のことを指  
す。

『うむ、今夜の勝者は？四人？だよ、ソルベ君、  
姫の撃破が最優先事項だ、

互いに協力し合うのだ、結果として誰が？勝者認定？されようとも  
恨みっこなしにしよう、

日本の意地をかけ、プライドをかけ、欧州リーグの支配者を倒すの  
だ、

今夜、我々が史上始めて姫に勝つっ』

「——はい中佐殿っ」

感動した、ソルベは感動の渦中にあった。

月面で戦死しかけていたところに、来援の獵騎兵一個連隊もが殺到して、

救助されたも同然だったからだ。

ソルベは三人に丁寧な礼をいった。

シゲミツとスズキは勝利を確信した笑みで応えてくれた。

ひとりだけ、オーハシ中尉だけは顔を強張らせている。

『おいソルベ、貴様階級がおなじだからってこの俺に舐めた態度とるなよ？』

だいたいテメエの単勝オッズ、なんなんだよ？

なんで俺が一四八倍でテメエが二〇倍なんだ？』

『やめないかオーハシッ』

スズキ大尉が鬱陶しそうに声を荒げる。

オーハシは不承不承黙りこんだ。

通話を終え、ソルベは身震いした。

オーハシのことなど、どうでもよかった。

「僕のG？初陣は、魔導の姫の撃破だ、僕の成功に満ちた人生の、これは輝かしいメルクマールになるんだっ」

ソルベ中尉は、感涙すら、両眼にうかべ始めていた。

ナホ、生まれて初めてG?のチケットを買い芝浦にて

古町アナのしゃべりは絶頂にあった。

芝浦の特設チケット売り場前。

巨大なオーロラビジョンにこのアナウンサーのアツツ苦しい顔がでかかと映っている。

それでもって、世紀の一戦、世紀の一戦、とこのフレーズを、脳内発作起こしたオウムみたいに際限なく繰り返しているのだ。短気なナホでなくても嫌になるってもんである。

「馬っ鹿じゃねーの、フルマチーッ」

ナホの渾身の叫びなんぞ、

この周囲を埋め尽くす群衆のなかではわずかなノイズに過ぎない。

大群衆が、このチケット売り場に押しよせていた。

老若男女、誰もが予想を口にしてあちこちで口論に発展している。なかには手を出し合う連中もいて、ケンカになると、

即座に現場に大量動員されている武装警官に取り押さえられる始末だった。

チケット売り場の建物の直上、高速道路の高架橋が南北に連なっている。

首都高速一一号、台場線だ。

その漏水とひび割れの走ったコンクリの架橋が、晴れきった夏の夜空を覆っている。

オンボロの高架橋が、イルミネーションで目の眩む売り場に汚い漏水をひっきりなしに落としてくる。

群衆は形状記憶式のレインコートやら、伸縮自在の発光型の傘をさしてひしめき合い、

天を覆う一一号線を恨めしげに見上げるのだった。

「もうっキッタナイなあつ、傘もってくんだった」

「まあそうゆうなやナホちゃん」

機長がナホの横に連れ立っていた。

付近のエアポートはどれもキャパいっぱいになっており、仕方なく近場の路上に違法駐機してきたのだった。

取り締まる交通警官はいない。

いたるところ違法な路駐エアマシンで、地上の道路はあふれかえっていたからだ。

ナホは機長に肩を抱かれ守られながら——心のなか、マミヤごめんね、とつぶやきながら

——押し合いへし合い、券売機の列に並んだ。

ならんで早々、ふたりは汗だくになってしまった。

ナホは汗をハンカチで拭きながらへろへろになっていた。

地面で拾ったEペーパーを頭に垂らして、汚い漏水しのぎにしている有様。

機長は汚水をまるかぶりになって、

腕で汗といっしょに乱暴にぬぐっている。

「なあナホちゃん、そのEペーパーさあ……」

「え？」

ナホは、ばて気味の不機嫌な瞳で

頭の上のペーパーをちらり、仰ぎ見た。

ペーパーに、削除し忘れたらしい文字列がうかんでいたのだ。

手にとって見てみる。

《また負けだ。全財産すった。俺はもう死にたい》

「——ちよ、ちよっとなによっこれえーっ」

彼女はぶつくさいいながら、

ペーパーの端のデリートボタンをタッチする。

……どうやら壊れてるペーパーらしく、文字列が削除できない。

「こりゃあ、持ち主の怨念かねえ？」

呆れ声の機長だったけれど、

汚水がまた彼女の頭上に落ちてきたとき

——彼女がイラついて動いたんびにポニーテールが可愛く、



ふわふわと揺れるもんだから——手でかばってやった。

ふたりがあーだこーだと削除に悪戦苦闘するうちに、じりじりと行列は進んだ。

で結局、ナホは切れた。

縁起でも無いペーパーを地面にはたき落として、

足で踏みにじってやった。

そうして、ようやく先頭がめぐってきた。

ナホは券売機にならんだ色とりどりのタッチパネルのボタンを見て、

「あれ、えっとマミヤの勝ちに賭けるのは、ええと、ええ、つと……」

「なんだナホちゃん、インター杯買うの初めて？」

「うん、だって親が許してくれなくって」

後ろの列から、早くしろやこらあーっ、と罵声がひっきりなしに飛んでくる。

「だからさ、こっちのボタンの列が、

単勝な？ んでもって下の段が姫に撃破された獺犬の予想ボタンだよ」

「ええっと、じゃあ……これだっ？」

「ああっ、ナホちゃん、それレースのスポンサーの出してるドリンク買うボタンだってっ」

「ええーっ」

途端、券売機横の自販機から自動音声が流れ出した。

『ヘルマン＆ハイネマン、この夏一押し天然βーエンドルフィン配合、

飲めば多幸福感に包まれちゃう覚醒系ハッピーソーダ、特設会場限定特価七五〇円になります』

「高ーしいらねーよバカ野郎ッ」

機長が自販機相手に毒づいて、

マミヤの単勝予想のボタンを勝手に押そうとする。

「ダメッ、機長さんっ十万払うのあたしなんだからあたしが押すっ」  
「はいはい、わあーった、わあーたよっ」

早くしやがれ、クソ野郎ーっ、またしても列の後ろから怒鳴り声。

機長が舌打ちして、うるせえなあ、と独りごちる。

漏水が、ピチョン、と機長の額に垂れてきた。

「あ、きったねえなあ、おいっ」

機長がいまにもブチ切れそうに頭上の高架橋を仰ぎ見る。  
汗と泥水を手でぬぐった。

ナホが単勝ボタンをタッチしようとしたとき、自販機がまた、

『ご一緒に、北海道産ほくほくフライドポテトはいかがですか？』

「チッ、いらねーよっバカ野郎っ、

イモはおとなしく北海道でブタのエサになってろっ」

機長はブチ切れて、大声を上げ自販機をぐーでぶん殴った。

「もう機長さん、うるさいっ」

「だってナホちゃん——」

いきなり、機長の襟首が後ろからつかまれた。

「?——なにしやがんだゴラアアッ」

機長が、十代のころのやんちゃ時代にもどっちゃって、  
ドスをきかせてふり返る。

機長の襟首をつかんだのは、大男だった。

男は段違いのド迫力で、

「……誰がイモだ? あ? 誰がブタのエサがなんだ?  
誰にむかって口きいてんだ? ニイちゃん?」

ふたりの真後ろにならんでいたこの大男、

どっからどうみてもブラック、そのスジの人であった。

「あ、ハイあのう、すみません」

機長はすぐさま卑屈に笑んだが、

怖いおじさんは——顔面が、遺伝子を疑うレベルでジャガイモそっくりだった——思いっきり機長に顔をよせてきて、

「ワレ、舐めとんのか？　な？　ニイちゃん？　なあ？　ニイちゃんあああんつつつつ」

「すみません、ホントすみませーんっ」

激怒したジャガイモが、機長の胸ぐらをつかんで、ナホのほうへ押し倒さんばかりに突きを入れた。

機長がナホの背中にぶつかり、

ナホが券売機に頭からぶつかって、

「痛いっ、ああ、もうなにすんのよっ」

券売機から、

ぴろり~~~~んっ、と電子音が鳴って、

『ありがとうございます、一口一〇万円になります』

「あれ、あたし、押しちゃったの？」

ナホが、一〇万円をチャージしたリスタブを券売機の接触面にタッチさせる。

後ろから、スピーカの大音響で、

『そこなにしてる、ケンカはやめなさいっ』

警視庁の機動隊員が列を割って突進してくるのが見えた。

方々から怒号やらヤジやらが飛びかいた。

機長が泣きべそかきながら、おまわりさーん、と叫んだ。

ジャガイモのおじさんの威勢のよかったのはここまでだった。

武装機動隊員を見るなり、

「ま、無かったことにしよ、ニイちゃんや」

ジャガイモ顔をサツマイモのように怒りで紅潮させながらも、機長に笑いかけた。

警官が群衆をかきわけ、こちらにたどりついた。

大男は笑顔で釈明を始めた。

「なに？ なにがあったの機長さん？」

「なんでもねーし、さあいこうぜっ」

機長は顔面の涙と汗を拭きながら、ナホの手をとった。

彼女が、券売機から吐きだされた紙幣サイズのEペーパーをつかみ取る。

ふたりいっしょに、警官に説教されてるジャガイモを尻目に列を離れ、

群衆のなかへ紛れ込んでいった。

## 番組コメンテーター、パンダ・信田の“希望の悲鳴”解説講座

古町アナはあいもかわらず巨大なビジョンのなか、コメントの機銃掃射をスタジオにぶちまけていた。

変化したことといえば、お気に入りワードが？世紀の一戦？から？魔導の姫の必殺技、希望の悲鳴？にチェンジしたぐらいだった。

『さあそれでは皆さんここでござらしてみましよう姫のつ、

必殺技っ、全世界の獵騎兵どもを震え上がらせてきたあの

ゲシユライ・トラウム  
？希望の悲鳴？、

ゲシユライ・トラウム  
希望の悲鳴の対抗策ですっ、

解説は元・獵騎兵、番組コメンテーターでおなじみパンダ・信田しんださんです、

よろしくお願いしますパンダさんっ』

『どうも、パンダ・信田です』

無表情な中年男が古町の右に座っている。

自己紹介を投げやりな口調で済ませると、

『魔導の姫のこの技なんだけど、

はつきりいって技の発動前にミサイルの遠距離攻撃で姫のマシンをね、

あの深紅のアルバトロスを撃破するしかないよね』

熱意のこもらない解説を始めた。

『はいはいはいはいっ、

やっぱり姫は無敵なんですかねーっ信田さんっ？』

『この希望の悲鳴って技の正体なんだけどね、

巨大な重力場異常をアルバトロスの後方に展開する技なんだよね』

『はいはいはいはいっ』

『その原理なんだけどね、

魔導メーターの魔導力場展開値をね、

姫の強力な魔導パワーで一気に跳ねあげるのよね、

例えば八万アーデルハイド（A・H）から一二万AHまで爆上げしたとするよね、

その差四万AH分だけの強力な重力波が猟犬に襲いかかってきて、  
ヤークトフロント 猟犬の車体を破壊しちゃうワケなんだよね、

技の強さはこのAHの値の差に正比例しているんだよね』

『なるほどなるほどっ』

『技の有効射程は一〇〇メートルちょっとっていわれてるんだよね、  
そんで世界戦公式ルールでね、  
ヴィルトカッツェ 山猫のケツから

三〇〇メートル超えて距離つけられちゃったヤークトフロント 猟犬は即失格になるからね、

一〇〇メートル以上、三〇〇メートル以内の範囲内で逃げつづける  
羽目になっちゃう』

『はいはいはいっなんとか打開策は無いもんでしょかねー？』

『なんたって三〇〇キロ超す高速の世界でマシン同士走ってんでしょ、

相対距離をそんだけ維持するみたいな器用なマネ、

手練れの猟騎兵でもつづけんの難しいよね、

相手が姫だしね』

『はいなるほど、はいなるほどっ』

ここで芝浦特設会場のビジョンの映像が切りかわった。

スタジオからスタート地点の木更津金田料金所にかわった。

テレビカメラは上空から、照明煌めく廃墟の料金所を撮影している。  
る。

スタジオのふたりの映像は、画面右下に小窓のようになって映しだされていた。

『こちらスタート地点からライブ中継ですっ、

いま時刻は二三時五四分ですっ、まもなくスタートですっ』

女性レポーターが、パンダ・信田とは雲泥の差の熱狂ぶりで話し始めた。

古町も興奮しながら、

『はいはいはいーっ、

姫と猟犬たちのスターティングポジションの紹介お願いしますっ』

『はいえーとですね、姫のスタート位置は、

料金所を出て中央分離帯の始まる地点となっていますっ、

いっぽう猟犬側です、

ポールポジションが姫の後方五〇メートルの位置になります、

ポールポジション、この？一枠？からの出走はミスターカド番、

マミヤ曹長ですっ』

また古町が、ぶふっ、と汚い笑いをこぼして、

『パンダ・信田さんの解説からすると、真っ先に悲鳴喰らってオダ  
ブツですかねーこの猟犬』

パンダ・信田も、こんなガキどうでもいいといった口調で、

『コイツ死んだも同然だよね、

ってゆーかG？にエントリすること自体まちがってるよね、

公式ルール改めたほうがいいよね、だって試合になんないんだもん、  
俺ひさしぶりに見たよ、単勝オッズで万獵券出しちゃった間抜け野  
郎、

猟犬の恥さらしだよね』

女性レポーターが言葉を引きついで、

『その斜め右後方です？二枠？ニッポンのエース、シゲミツ中佐で  
すっ』

女性がうれしげに名前を告げると、

パンダ・信田も、

『姫に対抗できんの、いまこの人ぐらいかもね、

買うんならまあこれ鉄板でしょ、このまえ負けちゃったけど、

でも俺が現役だったら姫と良い勝負になったと思うんだけどなあー

ー』

古町も女性アナも、このコメントをスルーした。

『三梓、スズキ大尉、四梓、オーハシ中尉』

『シゲミツのね、走りの邪魔になんない程度にね、がんばればいいんじゃないの』

『五梓です、一八連勝中、オッズも上昇中です、ソルベ中尉ですっ』

『大穴狙いならね、買いかも知れないね、コイツの走りイイ感じよ、

見込みあるよね』

『もうまもなく二四時です、日付変わっていいよいよ出走ですーっ』  
はしゃぎまくる女性アナに、

古町も負けてはいない、ひとり有頂天にしゃべりだした。

『世紀のっ、ま、さ、に世紀の、一戦っ……んんんっ、いま、スタートですっ』

オーロラビジョン前、大群衆から、

？引っ込めフルマチ？コールがうなりを上げわき起こっていた。



## 希望の悲鳴くゲシュライ・トラウムく

魔導の姫の、あの深紅のマギアパンツァーを脱がすのは、俺の仕事だ、シゲミツは思った。

容赦はしない、

引きちぎるように脱がしてやる、そう決めていた。

姫の——噂に尾ひれはつきものだけれど、

美少女だと聞いている——あの約五〇メートルちょい先に見える小柄なシルエット。

ひきしまったケツ、くびれたほそい腰がパンツァー越しにくつきりと見える。

二枠の自分の位置から手にとるように見える。

アレを、引きちぎってやるのだ、

そう想像するだけで、最高に嗜虐心をそそられる、そんなカラダをしていた、姫様は。

「情けはかけんぞ、体中を見てやる、犯すように見てやるぞ、

オマエのカラダのすべてをな、ほかの三人にはやらせん、

俺の手で脱がしてやるんだ」

フォッカーM？に騎乗した彼は、荒く吐息をついた。

料金所のすべての特設照明、全部が自分をライトアップしてくれるために点灯しているのだ、

彼はそうも感じていた。

二〇分前、係官から渡された一〇（テン）カプセルの魔導石。

とっくに消化されその成分がシゲミツの体内を血流とともに荒れ狂っている。

フルフェイスのヘルメットの下、

シゲミツは舌なめずりをして、快感の奔流を我慢していた。

このシゲミツの名声に泥を塗った、美少女。

そう、ただではおかない、思い知らせてやるのだ。

あの七二連勝中の、世界を支配し魅了つづけているメスの山猫に、  
だ。

病魔に冒された魔女の分際で、

巨万の富と名声を欲しいままにしつづける、美少女。

その少女がいま、自分の眼前で悔し涙を流しながら、  
すべてを脱がされようとしているのだ。

彼は勝利をすでに確信していた。

その光景を想像するだけで、目の眩む思いがするのだった。

前方、すでに誰も使わなくなって久しい道路標識が撤去され、  
スタートシグナルを告げる五個のレッドランプが敷設されている。

いま赤く点灯している。

あの五つがすべて消灯したときがスタートだ。

魔導少女狩りの、

インター杯の、

G？レースの開幕だ。

軍政異端審問局から通信が入ってきた。

相手はR大佐である。

『全騎に告ぐ、魔導爆燃機関を起動せよっ』

「シゲミツ、<sup>アイ・サー</sup>了解」

クラッチを切り、爆燃機関を起動。

耳に、体中に慣れて染みついた震動が始まる。

金属の灼かれる異臭が鼻をつく。

シゲミツはバイザーを下げ、顔を密閉した。

ヘルメット内、超小型酸素ボンベのチューブが自動で鼻腔に装着

されてくる。

臨界点の一万AHまで順調に上がる。

魔導メーターの数値がどんどん上がってゆく。

爆燃機関の発する金属同士の擦れる音が変わる。

臨界に到達した証だった。

八秒台で、一万を、臨界点オーバー。

絶好調だ、今夜の俺は最高だ、シゲミツは思う。  
二四時になる。〇〇〇〇時。

シグナルのレッドランプ、ひとつめが消灯した。  
ミラーで右斜め後方の三騎を確認する。

「スズキ、オーハシ、ソルベ、作戦どおりいくぞ、  
準備はいいか？」

通信を飛ばした。

三人からオールグリーン、の声が返ってくる。  
獲物を狩る男たちの声音だ。

ふたつめのレッドランプ、赤い光が消滅した。  
突然、三杵のスズキから通信が入る。

『中佐っ、ヤツをつ、マミヤを見てくださいつ』  
「うん？」

シゲミツが左斜め前方を見る。

一杵、囷に使うチキン野郎、マミヤのフォッカーを。  
それは、彗星だった。

排気口のマフラーから蒼白の光の奔流が、  
それは見事な彗星の尾を思わせる光の束が噴き出しているではない  
か。

姫と、魔導の姫とおんなじぐらい強烈な炎が。

『そんな、あ、あり得ないっすよ』

オーハシが慌てふためいてくる。

『あいつは三万がやっとのクズのはずですよっ、そんなっ、あ、あ  
んなスゲえ——』

「黙れ、オーハシ」

シゲミツが突き放すように冷酷に命じる。

オーハシは沈黙した。

三つ目のシグナルが消灯する。

「三騎とも見ておけ、ああいうのを痩せ馬の先走りというんだ、スタートから全力をふりしぼってるに過ぎん、

すぐに精神集中でなくなってるレースから早々に脱落だ」

『そ、そうでしょうか？』

スズキが、おずおずと疑念に取り憑かれた声を上げてくる。

四つめ、赤い光が消える。

「いくぞ、貴様ら」

五つめが消える。

クラッチレバーをもどす。

スロットル開放。

一騎の山猫と五騎の獵犬、ヴィルトカッツェ ヤークトフント

魔導二輪装甲車輛どもが発進した。

スロットル開度を上げる、さらに加速する。

六騎は距離を保ったまま走った。

シゲミツのフォッカーの左右、景色が瞬く間に海に変わる。

すでに東京湾アクアブリッジの上を走行していた。

シゲミツは姫とのあいだにマミヤを挟みながら、慎重に走った。

姫との相対距離、一二〇。

「ハハッ、バカだヤツはやっぱりただの阿呆だ、

マミヤを見ろ、距離詰めすぎだぞっ」

加速した。

姫が一気に加速をかけたのだ。

彼女のシルエットが遠ざかり、橋の上、消失点にむかい疾駆してゆく。

いま彼女の魔導メーターがうなぎ登りに上がっているはずだ。来る。

魔導の姫の？ゲシユライ・トラウム希望の悲鳴？がやって来るぞ、

シゲミツの口中が恐怖にひりついた。

だが、それは勝利のまえの試練だ、そう思い直す。

唾液は出ない。出てはくれなかった。

シゲミツは思い出していた。前回の敗北のときの希望の悲鳴を、ゲシユライ・トラウムあの重力波の爆発を。

砂漠に捨てられたラクダは死期を悟ると、涙を流すという。

泣いていた、シゲミツは涙を滲ませていた。

どうした？ 俺？ 自問する。

レース中だぞ、なにを考えている？

彼は悲鳴を上げそうになっていた。

両翼、昏い、真っ暗な海。

ハイビームの照らし出すその先、左、照明灯の残像が、魔導の動体視力でもとらえきれないほどのスピードで消える。

見えた瞬間、つぎからつぎへと後方へ流れてゆく。

尻の後ろの爆音、震動、流れ襲いかかってくる暴風。

気流が水塊のように車体に、シゲミツの全身にまともにぶつかり、まとわりつき殴りかかってくる。

「各騎、来るぞおっゲシユライ・トラウムがやって来るぞおおお  
っっ」

いつのまにか絶叫していた。

シゲミツの脳裡にマヌケなラクダの顔がこびりつき、

そのせいで彼は笑いの発作さえ起こしかけていた。

マミヤを盾にしろ、マミヤを、

あの能無しの陰に隠れるんだ、自身に言い聞かせる。

相対距離を三〇〇メートル以内に、それさえ守っていれば――

姫との相対距離、一四〇。

マミヤは？ あのバカ野郎、姫のすぐ後ろを走っていやがる。

シゲミツは愛騎の魔導メーターを見た。

一〇万三〇〇〇AH以上の回転数に達していた。

撃てる。

この数値なら、いまなら精度の高い呪法で誘導ミサイルを撃てる。  
全弾撃てる。

それだけのAHを誘導に振り向けることができる数値だ。

「勝ったぞおおおおおおおつつつつ」

シゲミツが絶叫する。

「各騎、呪法誘導ミサイル全弾発射準備っ  
アイ・サー  
了解っ」

心強い、僚騎たちからの返事がヘルメットの中で響く。

シゲミツの右目にヘッドマウントディスプレイが覆いかぶさる。  
レティクル

目盛状格子が彼の目の前にひろがる。

勝利の瞬間を告げる照準の、レティクルが。

マミヤの後ろに、その陰に隠れてさえいけば――。

そのマミヤが、動いた。

彼は動いた。

マミヤのフォッカーが車線を変更、右へと――ふわり、鳥の羽ばたくみたいに――移動した。

マミヤのスロットル全開らしき加速で、  
彼は並んだ。

魔導の姫と並んでしまったのだ。

いま、シゲミツの眼前。

姫のすぐ右でマミヤが並走しているではないか。

——— いったい、何万回転出していやがるんだ？

ヘルメットをかぶった姫が——それは驚愕か？——真横のマミヤをちらり、

ふりむくのが見えた。

手にとるようにわかる。なぜなら。

姫は急加速のあと、この瞬間、急ブレーキをかけていたのだから。

目前、気がつけば、姫のアルバトロスはシゲミツのすぐ前を走っていた。

レティクル越しに、それがはっきりと見える。

「距離取れええっ」

シゲミツの短い悲鳴だった。

揺れた、東京アクアブリッジ全体が、鳴動した。

以前聞いた。たしかに聞いた、シゲミツの聞いた、これは？絶望  
？の悲鳴。

ゲシュライ・トラウム  
希望の悲鳴が鳴り始めた。

姫とアルバトロスのシルエットが歪む。

重力レンズが発生する。

その歪んだ残像そのものが、シゲミツのフォッカーに迫り、襲いかかってきたのだった。

シゲミツは何かを言いかけ———。

姫の背後の橋梁が、アスファルトが、裂ける。

鱗状にバラバラにめくれ上がり、その残骸すべてがフォッカーに押し寄せた。

魔導の支配下、橋の上の空間はねじ上げられ、

ねじれの渦にシゲミツたちは突っこんでしまっていた。

シゲミツのフォッカーの前面装甲板が吹っ飛び、前輪が消し飛んだ。  
フロントカウル

ラジエータの冷却水とエンジンオイルの熱を浴びながら、

シゲミツは宙を跳んだ。

跳びはねていた。

騎乗すべき己の愛騎は、もはや尻の下で残骸となり、彼といっしょに鱗のアスファルト、

そのささくれ立った路面上を滅茶苦茶に転がるばかりだった。

そう、無数の破片と化して。

シゲミツの愛騎は廃車となった。

前回の対戦につづいて、廃車となった。



パンダ・信田『俺、最初っからマミヤくんの実力気づいてたよ?』

芝浦の巨大ビジョン、

右下の小窓に映っている映像は珍妙なものだった。

古町とパンダ・信田、ふたりそろって口を半開きにして、固まっていたのである。

それを見ている観衆たちもぶっ飛んじやった顔を、皆一様にうかべている。

しん、と静まりかえった芝浦のチケット会場広場。

それでいて、異様な殺気立つ気配に包まれていた。

口半開きの群衆は、さながらアサリの酒蒸しで殻を開いた貝そのものだった。

それでも古町は違った、テレビ慣れした男は違った。

石化呪文を解呪された魔法使いのように、

固まった状態から一転、言葉を呪文のように吐きだした。

『ええとですね、はいっ、世紀の一戦始まっておりますがさてっ、ここで一大ハプニングビッグサプライズが我々のまえに出現したわけでありますっ、

シゲミツ、スズキ、オーハシ三人の猟騎兵が一瞬にして

姫の必殺技、希望の悲鳴の餌食となってしまいました、

現在トップは姫と並走するマミヤ、あのマミヤ曹長であります、

その後方二〇〇メートルに生き残りのソルベ中尉が追走中でありますっ、

さあ、ここで解説のパンダ・信田さん?』

古町がすかさず右にいるパンダを見た。

パンダは未だ固まったまんまである。

古町はそれでもめげずに、さあ世紀の一戦、

とか、マミヤ曹長がついにほんとうの実力見せましたね、とか、姫のいまの希望の悲鳴について一言お願いしますパンダさん、だとか話をふりつづけている。

パンダが、射殺されたジャイアント・パンダみたいに無反応なので、

古町も切れたらしく、

『さあパンダさん、解説の仕事してくださいよ、

パンダさん、ねえパンダさん？

パンダさん

パンダさん

パンダさん

パンダさん、パンダさあーんっ』

こんどはパンダ・信田が切れた。

我に返った様子で、

『パンダパンダうるせえよフルマチ、俺その芸名嫌いなんだよ、

こんど事務所に文句いって名前替えてもらうわ』

『あ、話逸らしちゃってーっ、

さすがのパンダさんもマミヤ曹長の真の実力に

気づけなかった訳なんでありますけれどもっ』

『バカ野郎、俺は最初っからマミヤ？くん？の実力、気づいてたよ？

もちろん、でもさ、オッズ見てよ、

マミヤ？くん？は万獵券カワイソウにつけられちゃったんだからさ、

雰囲気ってもんがあるよね、

そこで俺ひとり反逆児になって、マミヤ？くん？の真の実力に言及してもさ、

場の空気壊すだけなんだよね、

テレビ的にそこら辺気を遣ってあげただけなんだよね』

『なるほどっ、さすがはパンダさんっ』

ふたりとも、妙な汗を掻きながら、引きつった笑いをうかべ合っ

た。

いっぽう広場のほうはといえば、死んだアサリ状態だった群衆も、息を吹き返していた。

方々から、万獵券だよ、ひょっとしたら万獵券いっちゃうよこれーっ、

と驚きの声が上がりが始めた。

シゲミツらに賭けていたらしい人々は、死んだ貝のまんま、その場に座りこんでしまっている。

ソルベに賭けたらしき人々から絶望的な？ソルベコール？がわき上がる。

そのうちあちこちから、

またしても？引っこめフルマチ？コールが上がってきた。

それはうねるようにひろがって、

「てめえ、フルマチーッ、

おめえマミヤ紹介のとき笑ってたじゃねえかあーっ」

ひとりが怒鳴り声を出した。

そういやそうだった、と周囲の群衆がそれに同調し始める。

その同調の輪はあっという間にひろがって、

会場は、？引っこめフルマチ？と？がんばれマミヤ？コールの大会唱となった。

マミヤコールを叫ぶ連中がマミヤに賭けていないのは、

そのやけっぱちの怒声から歴然としていたけれど。

？ソルベコール？を叫んでいた連中は、とうとう沈黙してしまった。

ナホもマミヤコールのひとりに加わっていた。

「引っこめフルマチーっ、もう、マミヤッ、がんばってマミヤーッ」

恋心のフルパワー全開の悲鳴をビジョンにむかって投げつけていた。

両の瞳はうっとり、マミヤのサーキットブルーのマシン、

その一点のみに夢中になっている。

「あたしのために、あたしとの交遊許可証のために、マミヤががんばってくれてるっ、マミヤーッ、超愛してるうーっ」

となりでは、機長が貧乏揺すりをしながら悔しがっていた。

「チッキシヨウ、俺も買っとくんだった、

十万、いや二十万払ってもマミヤ曹長に賭けときゃよかった、

夢の万狼券っ、クソッ、俺のバカ野郎っ、バカッ、バカアアアアー  
ーッ」

金の亡者も、乙女の恋心に負けないぐらい、地獄の底からの雄叫びを上げていた。

ビジョンのメイン画面、暗闇のなか、エアマシンからの空撮による中継はつづいている。

マミヤと魔導の姫は並走しながら、

ライトアップされた東京湾アクアブリッジを通過していた。

荒廃した海ほたる跡地を抜け、

いま、アクアトンネルへと突入した。

## マミヤVS・魔導の姫

そんなはずは、

この私の走りについて来られるなんて？

マミヤ、あなた、どれだけのパワーを隠してきたの？

姫は、魔導の姫は、世界を支配しつづけてきた最強の魔導少女は思った。

急ブレーキをかければ、

すかさず真横の彼もブレーキをかけてくる。

あくまで右隣の位置をキープしてくる。

ときおり、マミヤはフルフェイスのバイザー越し、自分のほうを見てくるのだった。

この魔導の姫と、そのアルバトロスを、じっくり、観察するよう  
に。

そんな彼が愛おしくもあり、そしてすこし憎らしくも、嫉妬すらも感じ始めていた。

彼の走りに。

彼のもつ、魔導の秘められたパワーに対して。

彼女のアルバトロス、いま現在、

魔導メーターは一三万回転を突破している。

いまのメーターは値が高すぎる、

希望の悲鳴のために上げるだけの余裕が無い。

下手に上げれば、一五万に、赤い絶対危険領域へと突入してしまう。

減速よ、メーターの値を落とすのよっ——八万AH？ 九万ぐら

いに？——そこまで落とす、

それから再び、今夜二度目の希望の悲鳴をあなたに、

愛するあなたにお見舞いしてあげる、

許してね、マミヤッ——姫は瞬時に決断した。

右のブレーキレバーを全力で握りしめる。

怒りなのか？ 握る指は震えた、震えつづけた。  
トンネル内。

オレンジに輝く照明灯の光に満たされた閉塞空間。

左の側壁、見る間にマシンのスピードが落ちて、  
そこに描かれたくだらないスプレーの落書きが見えるようになってくる。

いままで一瞬で後方へと吹き飛んできたトンネルの壁。

天井も、トンネル全体の光景を余裕で目視できるスピードまで落とした。

時速一五〇キロメートルちよつとぐらいに。

姫は魔導メーターを確認した。

七万回転ちよつと。マミヤは？

やっぱり、ぴたり、右横に密着するように、幅寄せをしてくる。

——幅寄せ？ まさかっ——。

姫は見た、マミヤのサーキットブルーの車体を。

フォッカーの基本装備、二〇ミリ機関砲も、

後部装甲板付近のミサイルランチャーも装着されてはいなかった。  
シートカウル

そのかわりあったのは——。

マミヤの超軽量化して、高機動性能を得たマシンの左の兵装吊り  
ロシ下げ架には、

黒いボックスが装備されてあった。

それがいま、破裂した。

中から単分子ワイヤーが何本もこちらに飛び出してくる。

ワイヤーどもは、前部と後部の装甲板に、

いままで傷ひとつつけられたことの無かった姫のアルバトロス、  
その深紅の装甲板に食い込んできた。

先端が打ち込み用の装甲貫徹穿刺針となっていた。

山猫を捕獲するための装備。

猟犬が、自分より弱い格下の山猫を、

マシンの破壊をすることなしに丸ごと捕獲してしまう装備。

「――ナメた真似をつつつ」

魔導の姫は、混じりけ無しの怒りを、

叫びをヘルメットの中、爆発させた。

姫が周囲の重力波を一気に膨張させる。

並みの猟騎兵なら、一撃で吹き飛ばされるほどの勢いで膨張する。

マミヤはすかさずそれ以上に強い中和力場を展開、

無効化させてくる。

歪み始めた姫の周囲の空間が、

即座に均衡のとれた状態へと逆戻りする。

さらに彼は、ワイヤーの根元にあるウインチを起動させた。

放たれたワイヤーを巻き取り始めたのだ。

フォッカーとアルバトロスの車間距離が見る間に縮まりだした。

「――くっ」

姫は屈しない、あくまで諦めたりはしない。

それが魔導の姫の、姫たる証だからだ。

左の爆雷ポッド、装填口の蓋をはね開けて、

一番上の呪導爆雷を素手で取り出す。

マミヤのフォッカーに押しつけてやるつもりだった。

激怒しながら彼のほうをふり向いたとき、

彼は自分の手首のリスタブ画面をこちらに向けていた。

そこにはこう表示されていた。

《非常事態につき、国際標準非常時通信回線を開かれたし》

マミヤ、どうゆうこと？　なにが起きたとゆうの？

姫は緊張しながらも、回線を開いた。

『レース中よ、説明してっ』

音声変換装置を通した、

姫の電氣的に変声された音声がマミヤのほうに伝達された。

『初めまして、魔導の姫、

貴女のアルバトロスにはトラップが仕掛けられています、

あともう一度希望の悲鳴を発動させると、

爆燃機関が暴走して、メーターが一五万を振りきってもどれなくな  
りますっ』

『——っ』

姫は即座に理解した。

それがなにを意味するのかを。

私を、暗殺しよとした？　でも誰が？——姫が疑問を口にしよう  
とすると、

マミヤが、

『H&H社のシャハト氏、それに審問局の上層部です』

『いったい誰からの情報よっ？』

『カグラ護民官ですっ』

『……無能なオンナだって話を聞いてるけど？』

マミヤが首を横にふる。

『暗殺の情報を察知してから、

カグラさんは必死に貴女の正体を調べてきました、

でも最後までこの機密情報だけは入手できなかったんだ、

だから貴女に伝えられなかった、

俺がこのレースで貴女を捕獲する以外、暗殺を防ぐ手立ては無かつ  
た』

『そんな、なんてことなの……』

裏切られた、無様だ、



自分のスポンサーに裏切られてしまうとは。

『姫、後ろっ』

マミヤの叫び。

彼女がミラーで確認する。

直線のトンネル後方、相対距離一三〇の位置にフォッカーが一騎走っていた。

オレンジの照明を浴びて、

ムーンミストグレーの装甲カラーが艶光りしている。

ソルベだ、ソルベのカラーだ、

ヤツのフォッカーが後方から猛追してきていた。

呪法誘導ミサイル弾を全弾、一斉発射した。

魔導の姫と、マミヤのフォッカー、両車輜にむけて。

## ソルベの嘲笑

やっぱりだ、マミヤの野郎、  
実力を隠してきたんだ、

わざと一四連敗してきたんだ、  
ソルベ中尉は確信していた。

おそらく奴は魔女たちに同情してきたんだ、  
だから前回のG？で奴は、乱入してきた記者どもにむかってほざいたんだ、

？女の子が可哀想だ？そういったんだ、奴は。

これは明白なサボタージュだった。

ひよっとしたら魔女たちと内通していたのかも知れない。

ゆゆしき事態だった。軍政異端審問局の猟騎兵という要職にありながら、断じて許されない。

国家反逆罪に相当する犯罪行為だった。

「魔導の姫と仲よくレースから消えろマミヤ、

僕の手で君のキャリアに終止符を打ってやるっ」

ソルベはヘルメットの奥、歯をむき出しにして壮絶な笑みをうかべていた。

あの、魔導の姫を捕獲してのけるほどの化け者だったんだ、マミヤの野郎は。

だからこのレースで一五連敗させてクビにしてやるんだ、

奴ほど手強いライバルはおそらく世界のどこにもいないからだ、

ソルベの決意は断固たるものだった。

だからミサイルの半数をマミヤに向け発射した。

いま、発射した。

全弾を。

アーデルハイド

ソルベは魔導力場展開のふりわけられるありったけのパワーを  
呪法誘導に割いていた。

精神を極限まで集中して、精密誘導に専念する。

トンネル内のオレンジの照明が、

勝利を祝うシャンパンの色にすら思えてくる。

飲んだことはまだ無いけれど、彼は酩酊しているといっって良いほど、

すでに勝利の快感に酔っていた。

あのふたりはなにか通信をしあっている様子だった。

隙を見せたのが運の尽きだぞ、笑いが止まらなかった。

ミサイルが、ワイヤーで絡み合った二輻の魔導二輪を猛追してゆく。

「この直線距離、逃げ場はないぞマミヤッ」

ソルベは嘲笑した。

## G?レース、終了

『姫っ、強制終了っ』

マミヤが叫んだ。

強制終了、ただそれだけ、

そのひと言で姫はマミヤの戦術を解した。

ふたり同時にクラッチを切る。

コクピットの片隅、ちいさな保護カバーを指で跳ねあげる。

カバーに守られていたりセットボタンを押した。

己のマシンの魔導爆燃機関を強制終了させる。

瞬時に冷温停止状態にステージを強制移行させる。

ふたりの周囲、

魔導の異常重力場が一挙に消失した。

それと同時に動力源の停止したふたりのマシンが

急速にスピードを失う。

呪法誘導ミサイル弾は、ターゲットの異常重力場を探知して追尾してくる。

それが突然、消えた。

ミサイル全弾は目標をロスト。

迷走状態のままトンネル内を飛翔する。

そのままマミヤたちを追い越していつてしまう。

それを追うようにして、

ソルベのフォッカーが時速三〇〇キロのスピードでやってくる。

ソルベのマシンも、ふたりとすれちがい、

彼らを追い抜いていつてしまった。

ふたりの右の車線を走り、ソルベは走っていった。

ふたりのほうをふり向きながら。

そのフルフェイスの奥には、

どんな驚きの表情のうかんでいたことだろうか？

迷子になって飛んでいたミサイル弾は、  
ようやく目標を探知した。

ソルベのマシンの異常重力場を探知、認識したのだった。  
マミヤたちの前方、数百メートルのところで  
ソルベのフォッカーが急ブレーキをかける。

彼は、間に合わなかった。

ミサイル弾すべてが反転してくる。  
ソルベのマシンに向かい、喰らいついてくる。

爆発。

ソルベのフォッカーは全弾被弾して跡形もなく爆散、  
装甲板の破片が飛び散る。

トンネルの内壁にぶつかり跳ね返ってくる。  
炎に包まれる。

轟音がトンネルの中を伝わり、残響が何度も重ね合った。  
マミヤと姫は、黒煙の充満するトンネルを情性にまかせ、  
低速で走っていた。

まもなく、炎のくすぶる弾着地帯までやってきた。  
爆心地、ソルベがいた。

膝立ちの姿勢で、ふらふらと揺れていた。  
全身、エンジンオイルやらスス汚れやらにまみれてしまっていた。

通りすぎるとき、マミヤはねぎらいの言葉をかけてやった。

「おつかれ、ソルベ中尉、本レースは終了した」

『ご苦労様中尉さん』

姫もなんだかものすごい冷淡な口調で変声した言葉を投げつけた。

ふたりは弾着地帯をやりすごし、慣性にまかせてマシンを徐行運転していった。

ふたりがミラーを見る。

ソルベがふらつきながら、立ちあがっていた。

ヘルメットを脱ぐと、放り投げてきた。

こちらにむかい、罵声を浴びせているのがわかった。

マミヤと姫は、互いを見合った。

姫にはわかる気がした、

彼が、自分の愛するひとがどんな表情をしているのかを。

ヘルメット越しだったけれど、それが手にとるように見える、姫は思った。

ふたりは、互いの拳と拳で、ばちんっ、と叩きあった。

互いを祝福するそれは、確かな証だった。

相手を認め合った、その証だった。

## エアマシンと宇宙戦艦

芝浦の特設会場では、

サッカーワールドカップでニッポンまさかの世界王者、

優勝しちゃったかのような空前のらんちき騒ぎになっていた。

興奮する群衆をとめる警察の機動隊員などいはいはなかった。

警官たちもレースの信じがたい結果をまえにして、

同僚同士、あるいは群衆と手に手をとって

お祭り騒ぎに荷担している隊員まで出ている始末だったからだ。

もはや誰も高架橋からの汚水を睨み上げる者などいない。

みんな平気でずぶ濡れになって、

あるいは勝手にアルコールやソフトドリンクを互いにぶっかけ合い、いまこの瞬間を楽しんでいたのだった。

ナホと機長も見知らぬ人からアルコールをぶっかけられ、はしやぎまくってハイタッチをしあっていた。

ナホは、アクアトネルのあちこちに設置されていた中継カメラでマミヤの勝利を見届けた。

たしかにこの瞳に焼きつけたのだった。

「やったああああああっ機長さんっ、

マミヤがあたしのために、

あたしとの愛のために勝ってくれたのよーっ、

愛は奇跡を起こすのよーっ、

ざまあみろっエリカ・ヴァンデル・メーアッ」

機長は知らない外人のオッサンからビンビールを一本もらって、ラッパ飲みでいい感じにできあがってしまったている。

酔いのまわった赤ら顔で、

「でもなあナホちゃん、曹長勝ったの俺もうれしいけどよ、賭けのほうは……残念だったなあ」

ナホが、ジャンプしながら万歳するのをやめた。  
「え？」

「うん、ナホちゃんの単勝狙い、あれな、  
曹長が姫のマシンを撃破するってゆう予想なのよ」

「え、じゃあ、さっきフルマチのバカが  
ホカクーツ、ホカクーツて叫んでたけどあれは？」

「そう、山猫を捕獲っつー超絶レアな予想が別にあんの、  
捕獲はただでさえ難しいから、

あの魔導の姫を捕獲っつったら、  
倍率は鬼のようにスゲえことになってんだろうな、  
まあ買った奴なんていねえだろうけどよ」

「……なーんだ、お金持ちになれると思ったのになあ」  
「じゃあねえよ、そう上手くはいかねえって」

「うん、だよなー」  
ふたりはびしょ濡れになりながら、  
それでもほがらかに笑いあった。

ナホは購入した一口のチケットをブラウスのポケットからとりだした。

「でもこのチケットはね、一生の宝ものにするんだ、あたし決めたのっ」

「おうっ、それでいいと俺も思うぞ」  
そうしてふたりは、顔を寄せあい、単勝のチケット、そのEペーパーの画面に見入った。

デジタル表示の画面はこう、告げていた。

《購入者の予想結果…山猫の捕獲 最終倍率…七五万ー四四三倍》

ふたりの顔から、笑顔が消えた。  
消えて終いには、中間テストで零点とったのに、



先生からこんなことを言われちゃったときの生徒の顔になった。

？あんたは良い子だから、特別に七五万点にしてあげたんだから、感謝しなさいよねっ？

機長は目をしばたいたしてから、

「悪いナホちゃん、俺酔ってて幻覚見てるわ、

あちゃーっ、ってか俺ガキの頃一〇〇点だってとったことなんてねーしよ、

どっちかつつーと悪ガキだったし」

「あたしだってテストいっつも赤点ぎりぎり……ってなんの話よっ？」

「あ？ 俺もわかんね」

ナホは、酔ってなどいなかったので、立ち直りが早かった。

「幻覚じゃ、ないよ？……捕獲のチケット、あたし買っちゃったみたい、っかな？」

機長がぼんやり、ナホを見つめてくる。

「オトナをだな、その、からかうのはよくねーんだぞ」

「だってほらっ」

彼女がそういって、機長の鼻っ面にチケットをもっていく。

機長は、しばしのあいだ、

そのダウンロードされ、保存された画面を、

削除も上書きも改変もできなくなっているプロテクトの施されたデジタルの文字列を見ていた。

ナホが熱に浮かされた様子で、

茶目っ気たっぷりのガイジンサン口調で、

「あなたのー、墜落したー、マシンはー、このー、

六人乗りエアマシンタクシーですかあー？

それとおーもー、このー、超弩級宇宙戦艦ですかあー？」

機長は、さっ、と手を上げて、

「宇宙戦艦でーす」

ふたりは夢じゃない証拠に、もう一度チケットを食い入るように見た。

「……ナホちゃん、単勝買うつもりが、ボタン押し間違えた？」

「機長さんに背中押されてさ、頭っから券売機に激突する拍子になんか押しちゃったみたい」

ふたりは見つめあい、互いに手を取り、

そしてようやくと喜びを大爆発させたのだった。

調子っぱずれの社交ダンスみたいに、

ぐるぐる回って、喜びの輪をつくり踊った。

「機長さーんっ、うれしすぎて、

十万かける七五万の計算ができないよ？ どーしようっ？」

「あははっ、俺もさっぱりわっかんねーわ、

いいんじゃないか、家帰ってからでよっ」

「だよね、それからでいっかあっ」

ナホは踊り疲れて、息を切らした。

機長は近くの若者グループからビールをわけてもらい、また飲み始めている。

彼女は、紙幣サイズのペーパーをしまいながら、

「待っててねマミヤッ、あたし大金持ちよっ、でも……」

もう一枚のペーパーをとりだす。

異性交遊申請書だった。

うっとり、見つめる。

くすっ、とうれしげに微笑み、

大事そうにまたポケットにしまった。

七五万かける一〇万円の？テストの答案？よりも大事そうに、ポケットにしまった。

## 大佐のオフィスの“三つのクルミ”

そのオフィスルームは、窓の無い閉塞した空間だった。

魔導二輪装甲車輛の一輛すっぱり収まりそうな個室である。

この部屋の主に招かれ、退出した部下たちはたいてい、

トイレに直行してストレス緩和向精神薬やら、

持病の胃潰瘍や不眠症の薬を飲むのだった。

今夜訪れている部下は、第一異端審問猟騎兵連隊の副官である。

痩せぎすの四〇代の男だった。

副官は、胃がいれんと胃酸過多の薬があと自分のオフィスに何錠残っていたのか、

ふと考えていた。

それと減る一方の自分の体重のことも。

副官に相對して、スチールデスクに部屋の主が座っている。

主はビデオ通信中だった。

彼はヘルマン&ハインマンのシャハトを呼び出したのに、

かわりに秘書の女性がモニタに現れた。

『申し訳ございませんが、シャハトは急遽帰国するためハネダエアポートにむかっております』

R大佐は、極めて落ちついた手つきで通話を切った。

副官は決して大佐の目を直視することなく、

その背後の五脚台に掲揚された日本国旗と

髑髏の連隊旗との中間に視線を彷徨わせていた。

大佐のデスクの上に置いてある？三つのクルミ？を  
絶対に見ようとはしなかった。

「事態がどうなっているか貴官もわかったことかと思うが」

「はっ、直ちに空港の審問歩兵中隊に身柄を拘束するように下達いたします」

「拘束、いま、拘束と貴官は答えたのか？」

大佐は右手の強化義手でクルミを一個取った。

メタリックなカラーの義手の中、

クルミが瞬時に握りつぶされ、粉みじんになってしまった。

副官は頭の片隅で死力を上げて胃けいれんのピンクの錠剤の個数を数え始めた。数えながら、

「では、処断、でありますか」

暗殺を意味する隠語を語るとき、

いつも声の上擦ってしまうのがこの副官の悪い癖だった。

「貴官はその癖を治した方が良い、

生きて局から出て家路につきたければ、そのほうが賢明だ」

副官のピンクの錠剤の数え方が三倍速に跳ね上がる。

「至急、手配、いたします」

「それと、マミヤ曹長の件だが」

「はっ、魔導の姫共々、速やかに処断を——」

メタリックの義手が、二個目のクルミを破碎してしまった。

副官は、痙攣した胃全体が喉元にせり上がってくる感覚に、眩暈に襲われた。

「どこの世界に貴重な猟騎兵を、手塩にかけた部下を処断する馬鹿がいるとゆうのだ？」

「……で、では？」

「マミヤ曹長の一四連敗は明白なサボタージュ行為であった、

国家反逆罪の構成要件を満たすものと思料する、

よって、ゴールの芝浦パーキングエリアに審問憲兵一個小隊を派兵、速やかに逮捕せよ、

なお、？抵抗する場合は即座に？射殺せよ、

即座にだぞ、？抵抗する場合は？だ」

「……はい」

「魔導の姫も銃撃戦の中、

流れ弾を受け死亡するかも知れん、

残念ながら混乱した戦場では、？よくあること？だ、ちがうか」

「はっ」

「そしてこれが最大の任務だ、

姫のアルバトロスを確実に全壊、廃車にするのだ」

副官は、ほんの数瞬、理解するのが遅れてしまった。

「解らんのか？」

あれは、トラップの仕掛けられたままの

？証拠物件？なんだぞ、

なぜマミヤが難度の高い捕獲を試み、成功したのか、

貴官は考えたことが無かったのか？」

副官は、ほとんど波打ち際に追いやられてきた深海魚のようになっ  
っていた。

口からすべての内臓の飛び出してくるのを、両手で押しもどす妄想  
にとらわれた。

「マミヤ曹長が、司法関係者に、内通していたと……？」

「警視庁か、護民局か、いずれかだ」

副官が脂汗を垂らし始めたとき、

デスクのビデオ通信で審問局諜報部から緊急の知らせが入った。

相手は諜報部長だった。

大佐の顔を見るなり、即座に本題を切りだした。

『最新情報です、南東京市から人権護民局のエアマシンがゴールに  
むかつております、

カグラ護民官の機体ですっ』

「わかった、ご苦労」

『信じられません、あの無能な女護民官が――』

「なら君が無能で、

あの女狐は有能だったということだな、我々の敵は護民局に決まり  
だ」

『……っ』

諜報部長がなにかを言いかけた。

大佐は無視して回線を切った。

副官はトイレに駆けこむときの来るのを秒数で数え、待っていた。

大佐は、デスクの上の二個のクルミの残骸と、

生き残っている一個とを見くらべて、

「君の副官としての？ライフ？は本日残り一個な訳だが、  
有効に活用したまえ、

君の、

その、

中佐の、

階級章は、

一体何のためにあるのかね？」

「連隊副官の軍務を全うするためでありますっ」

「なら全うしたまえ、今、すぐにだ」

**魔導の姫が、マミヤの態度に相当お怒りのご様子です。**

マミヤのフォッカーと魔導の姫のアルバトロスは、ワイヤーでつながったまま並走していた。

魔導爆燃機関を強制終了してしまったため、メンテナンスを受けるまでは使用できなくなっている。

かわりに予備の動力源である水素燃料エンジンに切りかえていた。ふたりの運転は、息がぴったりだった。

まるで昔からツーリングを重ねてきたカップルのように、無駄のない動きである。

時速八〇キロ未満の安全運転でゴールの芝浦パーキングエリアにむかっていた。

マミヤはこれからのことを、

非常時通信回線を通して姫に語って聞かせていた。

姫が彼の説明を聞くにつれ、怒りに頬を強張らせていく。

『じゃあ、私のアルバトロスが証拠品なわけね？』

これをカグラ護民官に渡すまでは死守しないといけないってこと？』

マミヤはうなずいた。

『このG？は姫の出走したビッグタイトルです、』

世界中のマスメディアの注目の的ですが、

だから芝浦でゴールするまでは、

R大佐といえども思い切った措置は講じてはこれないでしょう』

『問題は、そのあと、ね？』

『はい』

『護民局ってどこまで頼っていいのかしら、』

ってゆうか護衛とか、頼りにできるの？』

『無理ですね、都内の護民局本局はカグラさん曰く、』

ふぬけの集まり、だそうです、

南東京市の護民局分室には、カグラさんの指揮下に精鋭の護民局捜査官が結集しています、

しかし兵力差が違いすぎるんです、

圧倒的に異端審問局のほうが戦力は強い』

『じゃあどうすればいいの？　ゴールを過ぎたあと？』

『カグラさんのエアマシンがゴールで俺たちを待っていますが、大佐はそこで総力を挙げ妨害してくるでしょう』

『私は魔導の力があるわ、なんだったら感情を高ぶらせて、第三級暴走くらいやってもいい気持ちよ

今は？　でもマミヤ、貴方は？

魔導石の補給がつかない、たしか出走前には――』

『はい、一〇カプセルの魔導石を服用しましたが、時間的に余裕は無いでしょう、

それにしても暴走とは、姫も過激ですね』

『そんな余裕かましてる場合じゃあないでしょ？

なんだってやってやるんだからっ』

『ご安心を、一応秘策があります』

『どんな？』

マミヤが姫のほうをふりむく。

姫には、彼がヘルメットの奥でなんだか微笑んだように、そんな風に思えた。

『これです』

彼はそう言って、股のあいだの燃料タンクを手で叩いた。

『あ、そっかつ』

『はい、姫の魔導力で燃料タンクを切り開いて、

中から未使用の魔導石を取り出します、

それを俺が服用してなんとかしのぎますよ、

少々機械臭いでしょうが、ここは我慢です』



姫はなんだか気分の浮き浮きしてくるのを抑えきれずにいた。  
マミヤ、貴方はいったいどこまでいこうとゆうの？

この私ですら、ついてゆくのがせいっぱいってところかも知れないのに？

そんな感慨に浸ってしまふ。

いっそうこのひとへの想いの高まるのをひしひしと感じてしまふ……。

けれど、油断はできない。気を引き締めなければ。

敵は、未だ健在で自分たちの飛びこんでくるのを手ぐすね引いて待ち受けているのだから。

姫はそこまで考え、とある想いに行き当たった。

途端そわそわと落ち着かなくなってしまう。

『姫？』

すぐに気づかれた、

やっぱりこのひとにはかなわない、そう思った。

『マミヤ……曹長？ あ、あのね、あのう、し、視診……は？』

彼がこちらを見てくる。

姫は真っ直ぐ前方を見たつきり、

マミヤのほうを見れなくなってしまう。

いま、ふたりは多摩川トンネルから羽田エアポートを通過、  
湾岸線に入っていた。

東京湾岸の重工業地帯。

深夜を過ぎてもなお、煌々と人工の光が満ちあふれている。

正面も左右の景色も、どこもかしこも。

上空には民放のエアマシンたちの大渋滞が見える始末だった。

『あのね、あの、できればなんだけど、ね、

この先の東京湾トンネルあたりで、  
その、人の目の届かないところでね、  
ささっ、と済ませてもらえと

……私としては、は、はず、恥ずかしくないってゆうか、  
なんてゆうか……いちお、その、

姫とまで呼ばれてきた私、だし、その……』

顔が火照る。

ホントにもう、このひとのほうを見ることができやしない。

マミヤは前方をむいて、

『視診はしません、ご安心ください、姫』

え？……クエスチョンマークがうかぶ。

姫の思考がちよっとヤバくなった。

真っ赤っかとゆうか、

ピンク色ってゆうか、

うれし恥ずかし貴方に捧げちゃうモードだったモノが、

思考回路が破綻を来してしまった。

『………しないの？』

『はい』

『マジ？』

『はい』

『なんでよ、どーして？ 私……ホウキへし折らないの？』

『しません』

『なんで？ 貴方まだこの期に及んで公式ルールを破るの？』

理由はなによ？ いてみなさいよ』

そういつて、マミヤのほうを睨みつけてやった。

マミヤがこっちを見た。

姫はすぐさま、前方にむきなおる。

………やっぱり、このひとを直視できない

……いまは、できない……。

『理由ですか？』

いまはそれどころでは無いからです、

証拠品を一刻も早くカグラ護民官に届けねばなりません』

姫が、がつんつ、と一発、

自分の両の太もものあいだの燃料タンクを握り拳でぶん殴った。

思いつきり、ぶん殴ってやった。

愛騎のアルバトロスにこんなマネをしたのは初めてのことである。

『姫？』

『あつ——そうっ？』

そうなんだ？

それどころではない？

ふーん、そうなんだ？ それどころ？

どーも失礼しましたわね、

私の……（ふるぬーど、なんて口が裂けてもいえないから省略）

……なーんて所詮、貴方にとっては、

それどころの一言で片づけちゃうシロモノなんだ？

はいはいそうよ、どうせお粗末なもんですよ、

私の（略）なんてっ』

怒りにまかせて、呪導爆雷の投擲スイッチON。

しゃこんつ、と小気味の良い音を立てて、

爆雷が後方へと一発吹っ飛んでいった。

時間差をおいて湾岸線の路上、大爆発をおこす。

マミヤは、のけ反らんばかりに驚いた様子で、  
後方を見やっていた。

しばし、呆然としていたようで、それから姫のほうを見て、  
『レースはもう終了です、

姫、初めての敗戦と陰謀に巻きこまれて殺気立つお気持ちは解ります、

ですが何卒お控えください、

老朽化している路線とはいえど、我が国のインフラですので』

がつーんつ、ぶん殴った。燃料タンクを。

また姫は、がつんつ、と猛烈な一撃を拳に託して殴りつけた。

自分のふたつの、ぷるん、とした太ももに挟まれた燃料タンクを、  
愛騎のタンクを二度にわたってぶん殴ってやったのだった。

姫はバイザー越しに、その太ももを、肉感的ない感じのライン  
を描く下肢を見た。

肌にぴったりと吸いついたマジアパンツァーにくるまれた肉体。

胸のふたつの曲線。

小ぶりの魅惑的なふくらみが、カラダのすべてのシルエットが、  
肉体が露わになったようにくつきり浮きあがっているとゆうのに。

姫自身、

そんな肉体を見せたいのか、  
見せたくはないのか、

いったい全体どっちなのか、

もうすでに訳がわかんなくなっちゃっていたんだけど、  
とにかくムカついたのである。

絶好のチャンス？

っだってゆーのにこのアホンダラのストコドツコイはっ――

――愛してるけど、

許さんっ、姫は思った。

愛してるからこそ、許さんっ、

そう思い、怒りを異常重力場の爆発のごとく膨れあがらせていった。

マミヤは、そんな姫をしげしげと眺めやっていた。  
ひとつ、おおきく、うなずいた。

『俺のせいで七二連勝の大記録が破れた件、  
たしかに心中お察しします、俺のせいです』

そういつて、しゅん、となつてしまった、彼は。

そうよ、あんたのせいよつ、全部あんたが悪いんだからつ、  
姫は思った。

もしまたなんかこのアホンダラが言おうもんなら――。

二発目の爆雷を投擲してやる、そう決めた。

決めて指をスイッチにあてがった。

## カグラ、祈るゝ芝浦のゴールにてゝ

高度三〇メートルの低空から見た、

芝浦パーキングエリア、栄えあるG?のゴール。

普段なら勝者を讃える栄光の舞台だ。

ライトアップされ盛大にセレモニーのおこなわれるのが常である。  
それが今回は違った。

普段なら群がっているマスメディアの姿は、

民放のエアマシンは影も形も無かった。

かわりにいたのは、軍政異端審問局の武装エアマシン。

それと人権護民局、南東京市分室のエアマシン、

カグラのマシンだった。

ふたつのマシンは、ゴール上空で睨みあうようにして、

ホバリングの姿勢をとっている。

野戦服姿のカグラは、エアマシンの胴体ハッチを開放して、

身を乗りだすように地上を見下ろしていた。

ゴール地点、マミヤと魔導の姫の姿が見える。

フォッカーとワイヤーでつながった深紅のアルバトロスの姿もだ。

パーキングエリアの路上で、少年と少女は微動だにせずにいる。

ふたりから距離を置いて、審問局の憲兵隊が配置についている。

高速道路を封鎖して、ふたりを狙撃する布陣を敷いていた。

両者の対峙は、一触即発の雰囲気である。

カグラは舌打ちして、

「やってくれんじゃないのR大佐？」

でもそうは問屋が卸さないのよんっ」

にやっ、と笑んで、ヘルメットのヘッドセットマイクで通信回線を開く。

「地上班っ、準備はっ？」

『こちら地上A班っ、姉御っあともう五分お待ちをっ』

カグラの部下である特別捜査官が野太い声で地上から応答してくる。

さらにB班、C班からぞくぞくと報告が入り出す。

「二分でやれっ」

カグラが怒鳴る。

おまえら遅いっなにやってんのっ、

そう彼女が威勢よく——姉御と呼ばれる由縁だ——さらにどやしつける。

それからマミヤと取り決めておいた非常通信のチャンネルを選択して開いた。

「マミヤ曹長、聞こえますか」

『——はい、カグラさん』

「いいですか、絶対に憲兵の挑発には乗らないでください、予定どおり地上班の工作開始を待っていてください」

『……でも、カグラさん、それは——』

「これはすでに戦争です、奇麗事のいえる段階を超えておりますっ」

カグラはとなりに陣取っている部下の捜査官に、

「憲兵隊、戦力は一個小隊ってところよね」

「はい、姉御の読みが当たりました、

騒ぎおおきく出来ねえから中隊規模はさすがに派兵できんかったようです、

伏兵の配置も対人レーダーに反応はありませんっ」

捜査官が答えると、

カグラは男の短髪をぐりぐりとなでながら、

「OKツイイ感じっ、あとは地上班ね」

捜査官が双眼鏡で地上を観測しながら、

「ただ、憲兵隊の猟騎兵たちがマミヤ君にどれだけ敵意をむけるか、気がかりです、猟騎兵の連中、

？化けもん？で狙撃するつもりですよ、姉御」

カグラも地上を注視した。

少年たち、異端審問猟騎兵だ、

六人の少年が伏射の姿勢になってアスファルトに身をあずけていた。陣地を構築し、自動車道を塞いでいる。

同僚のはずのマミヤに、二脚に支えられた巨大な銃身をむけているのだ。

ヘルマン＆ハイネマン社傘下の軍需企業の開発した、アンチ・マギア・ライフル。

対魔導狙撃銃。呪法弾を装填し、マギアパンツァーを貫通させる、そのための専用ライフルだった。

対空機関砲としても使われる二〇ミリ×一一〇の強装呪法弾薬を使用する、

まさしく化けものライフルだった。

六人の陣地は強化複合装甲板と土嚢を組み合わせ、

結界呪符の張られたもので、防御に關しても手抜かりはない。

その背後に指揮車の装甲車輛が一輛停車しているのが見える。

「早く、地上班急いでっ」

カグラが祈りの言葉をつぶやいた。

その時――。

動いた、マミヤと魔導の姫が動いた、

ふたりがなにかささやき合う仕草をして、前進を始めた。

魔導二輪から降り、徒歩で進み出したのだった。

二輛の愛騎とともに。

「マミヤくんっ」

カグラが叫ぶ。



——六人の二〇ミリ狙撃銃が、一斉に火を噴いた。

## 芝浦の一斉蜂起

『マミヤ曹長、聞こえますか』

カグラ護民官からの通信だ、

マミヤは通話を始めた。

魔導の姫はアルバトロスに騎乗して、

停車したままの、この膠着状態を不快に思っていた。

いつもなら押し寄せる報道関係者はひとりとしていない。

民放のエアマシンも、ふたりがゴールの瞬間をむかえると、直ちに審問局によって撤収させられてしまったのだった。

これが報道協定、ってヤツです、

そうマミヤが教えてくれたのだ。

『……でも、カグラさん、それは——』

マミヤは沈痛な表情を見せている。

カグラとの通話を終えた。

『どうしたのマミヤ？』

まだわだかまりは残っているので、

ちよっと怒ったような口調になってしまう。

でもあの数十メートル先、あの強固な憲兵たちの陣地を見ると、さすがの姫も痴話げんかを——そうだ、痴話げんかなのだ、

あれはまぎれもなく——引きずっている場合ではない、それはわかる。

姫は、自分と彼のマシン、

両方の燃料タンクを見た。

姫が引き裂いた裂孔が無残に刻まれている。

マミヤは？ 秘策？ どおり、

すでにタンクにけっこう残されていた魔導石を服用していた。

マミヤの助言で、姫も生まれて初めて魔導石を服用してみた。

パワーが、全身に漲ってくるのがすぐに解る、恐るべきシロモノだった。

その証拠に、ふたりの体のシルエットを覆っているのは、まぎれもない魔導の光、蒼白に美しく光り輝く、月光を思わせる哀しげな光である。

マミヤは考え事をしているようだった。

うつむいて、なにかじっと思考をめぐらせている、そんな雰囲気だった。やがて、

『姫、憲兵隊は思った以上に強固な陣地を構築しています、がしかし突破しようと思えます』

『望むところじゃない？』

姫は、うつすら、笑みすらうかべていつてのける。

第三級アーデルハイド暴走ぐらいなら起こしてみせる、

そう彼にいった。それは、本気の言葉であった。

やってやる、マミヤに害を為す敵は、ひとり残らず倒してやるんだ、

そう、姫は強い決意を固めていた。

憲兵隊陣地から、スピーカの声が大音量で聞こえてくる。

『マミヤ曹長、降伏したまえっ、

貴官には国家反逆罪の容疑がかけられている、投降すれば、“身の安全は保証”するっ』

『どの口でゆうのかしら、よくいえたもんよね？』

姫の憎まれ口に、マミヤも肩をすくめて、

『いきましよう、姫』

『ええ、元のパワーに石の力もプラスして、

いまの私は無敵って感じよ？

全力で中和力場の掩護を貴方にしてあげる、大船に乗ったつもりでいてね』

『心強いです、姫』

ふたりはうなずきあった。

水素燃料の切れかかっている車輛から降りる。

互いのマシンを押しながら前進を開始し始めた。

連続で爆音がした、いや、これは銃声、

アンチマギアライフルの銃声だった。

マミヤの中和力場に、六発もの呪法弾が直撃する。

彼がその衝撃にのけ反る。

呪法は中和され、強装弾は、跳ね返り跳弾となって、  
車道の先、アスファルトの彼方へと消えていった。

『マミヤッ』

彼は頭を数回振って、姫にうなずいてきた。

だいじょうぶです、そういつてくれた。

時間が無い、焦った様子で、

つぶやきをもらしてくる。

『急ぎましょう、姫』

ふたりは駆け足となった。

魔導の力で増した腕力で重装甲のマシンをかるやかに押しながら、  
自動車道を駆けていった。

さらに爆音。

マミヤと姫、双方に精確な弾着で襲いかかってくる。

それも中和した。

それでも衝撃波はものすごいものがある。

体の芯まで響いてくる。

『強烈ね、あのライフル、思った以上だわ』

『ええ、叛乱を起こした猟騎兵を射殺するための物ですから』  
痛みをこらえる、それは声音だった。

『だいじょうぶっ？ 怪我したのっ？』

『平気ですよ』

マミヤは、姫を勇気づけるように首を縦にふってくれた。何度も。

陣地まで、

あと魔導二輪が三輦分ほどの間合いにまで詰めてきていた。

陣地内の混乱がわかるようになってくる。

指揮車の脇で、審問官たちが通信をおこなっていた。声が漏れ聞こえてくる。

『——はい、たしかに魔導石の力です、

マミヤは未だ魔導石のパワーを保持しております、理由は不明で——』

ざまあみろ、姫は思った。

さらに至近距離から爆音が六発。

姫のヘルメット付近の中和力場に命中、それと胸のあたりに。

鋭い痛みが走っていた。

姫は呼吸が困難になってしまった。

すかさずマミヤが——そんな余裕無いはずなのに——腕を肩に回してくれた。

ふたりは互いを支え合い、

陣地突破を目指し、

前進をつづけた。

陣地から、ひとりの少年獵騎兵が、立ちあがった。

「マミヤ曹長、もう止めろっ、限界じゃないのかっ、俺はもう撃ちたくはないんだっ」

ほかの五人に、後方の指揮官たち、

審問官たちにも動揺のようなものが駆け巡るのが見えた。

審問官が、貴様裏切るつもりかっ、

そう少年を怒鳴りつける。

『仲間割れだわ、マミヤッ』

肩を寄せあっている最愛の人を見る。

——ヘルメットの下、バイザーの下から、流血が見えた。

マミヤは、吐血していた。その血がフリッツヘルメットからこぼれだしていたのだ。

『しっかりして、マミヤッ』

中和力場をありったけ割いてあげようとした。

『駄目です、姫、貴女の命が危ない……』

『そんな、だってっ』

さらに五発の爆音。

ふたりは体中に撃ち抜かれたような打撃を受けた。

アルバトロスにも何発か命中してくる。

装甲板と中和力場でなんとか切り抜けた。

ところがマミヤに異変が生じた。

膝を震わせ、路上に屈しそうになってしまう。

『マミヤ、嫌っマミヤ駄目、しっかりしてお願いっ』

姫はパワーの死力をふりしぼり始めた。

やってやる、皆殺し、にしてやるんだからっ。

アーデルハイド暴走を。

姫の目の前、怒りに視界の狭まってゆくのがわかる。

マミヤが強く、とても強く、手を握りしめてきてくれた。

『駄目、です……姫』

『っ……でも、貴方の傷がっ』

陣地にさらに騒ぎが広まっていた。

「俺も嫌です、こんな処刑はごめんだっ」

路面に伏射の姿勢をとっていた別の獵騎兵が立ちあがる。

後ろの審問官が彼を殴り倒した。

俺もだ、僕も嫌ですっ、

つぎつぎと狙撃手たちが反旗を翻し始めた。

陣地が混乱を極めだしたとき――。

パーキングエリアの両脇、地上とつながっている非常階段から群衆が溢れんばかりに路上へと飛び出してきた。

『始まったか……カグラさんの作戦……』

『なに、どうゆうことっ?』

群衆は鯨波を上げて、

マミヤたちと目の前の陣地の小隊にむけ突進してくる。

憲兵小隊はパニックに陥った。

審問官たちが威嚇射撃を始め出す。

群衆はとまらない。

怒りに染まった市民らは、陣地に殴り込みをしようとして、

結界の呪符に触れ悲鳴を上げた。

マミヤと姫はあっという間に人々に守られるかたちで取り囲まれた。

皆が口々に、ヒーローのマミヤ曹長だっ、

マミヤを守れっ、そう叫んで氣勢を上げる。

陣地の呪符結界で失神した民衆がつぎつぎと折り重なりだした。

人々はその体をよじ登り、

土囊と装甲の遮蔽物を乗りこえ陣地内に殺到した。

憲兵小隊は、指揮車と降下していたエアマシンに逃げ込み、

命からがら、潰走していった。

マミヤたちの輪の外、怒声が響いた。

どかんかいおんどれらあっ、どう聞いてもそのスジの人の怒鳴り

声だった。

厳つい大男が——遺伝子レベルで顔面がジャガイモにそっくり、姫は思った——人の波をかきわけてふたりの元に現れた。

その後ろにつづく人影はなんと、

ナホと、マミヤを乗せてくれたあの機長だった。

『いったいどうしたの、これ？ なにが起こったの？』

姫は軽くパニックになっていた。

「マミヤッ……え？ やだ、怪我してるのっ」

ナホが悲鳴を上げて、マミヤに駆けよる。

彼の両手を握りしめた。

『かすり傷さ、ナホ』

「でも、だってっ」

『水を差すようで恐縮だけど、事情をご説明願いたいわ』

姫が愛するひとと、

突然現れた？私を犯してくださいと懇願中？のセンパイとを引き離した。

ナホがあからさまにイラッ、とした表情を姫にぶっつけてきた。

姫もバイザー越しに睨む。

機長が咳払いひとつしてから、話を切りだした。

「あんたが魔導の姫様かい？」

まあ曹長も聞いてくれや、

下の国道でよ、俺らのヒーローマミヤが銃殺されるっつー噂が急にひろまりだしてよ、

最初誰も信じなかったんだけど、

高架橋の上で憲兵のクソどもがスピーカーでがなりだしたろ？

あれでマジってわかってさ、

みんな一斉に非常階段昇って応援にきたって寸法だぜっ」

機長は実に得意げだった。

「なによ機長さんはなんにもしてないじゃないっ」

「ナホちゃん、それはいいっこ無しだぜっ」



周囲の輪に笑いの大合唱がひろまった。

——誰も、なぜ、嚴重に封鎖されているはずだった非常階段が実に都合よく開放されていたのか、気づいていない様子だった。

マミヤは、呼吸を整えて、

『市民に、犠牲者は出てませんか？』

彼が周囲に訴えた。

みんなが、そうだ救助だつ、と口々に叫び出す。

群衆の中で即席の救護班がつくられた。

誰もが手伝い合って、失神していた人々を助け起こす。

医師が数人名乗り出てきて、

かんたんな治療がパーキングエリアの路上で始まった。

## マミヤとカグラの約束

「勝ったわっ」

カグラが勝利のガッツポーズをした。

その満面の笑顔が、

上空から聞こえてきた爆音とともに急速に薄れてしまう。

カグラ、部下の男、コクピットのパイロットらは上空を見た。

飛来してくる武装エアマシンの見た。

第一異端審問猟騎兵連隊、

第三大隊の猟騎兵と審問官らを満載した大型エアマシン、

四機がパーキングエリア上空にその姿を見せた。

「ちつくしょうっ」

カグラは怒りを露わにして、

近づいてくるエアマシンを睨みすえた。

眼下には、回収する予定だったマミヤ曹長、

魔導の姫と深紅のアルバトロスがいるとゆうのに。

ふたりは群衆に囲まれて、

すでに海岸通りの高速自動車道を北上し始めていた。

マミヤと姫は肩に互いの腕を回し合っている。

魔導二輪は大勢の群衆の手で押され動いていた。

カグラの機体に第三大隊のエアマシン一機が近づいてくる。

『人権護民局のエアマシンに告ぐっ、

直ちに当該空域から離脱せよっ、

その他のいかなる行動も叛乱幫助と見なし、

暴徒並びに貴機に対し攻撃を開始するっ』

スピーカで警告してくる。

エアマシンの回転式銃座がこちらに機関砲の砲口をむけてきた。

カグラは地上のふたりを見た。

「あとすこし、もうちょっとで回収できるところだったのにつ

「無理です姉御、ひとまず撤収しましょうっ」

カグラの決断は早かった。

「マミヤ曹長、応答願いますっ」

『……………カグラさん……………』

声が弱い。

カグラは唇を噛みしめた。

焦りをこらえ、噛みしめた。

「法務省の庁舎前で待っております……………待っていますっ絶対につ

『はい、必ずいきます、アルバトロスを、

届けます、必ず……………待っていてください』

通信が切れる。

カグラはヘッドセットマイクをいつのまにか握りしめていた。

きつく、握りしめていた。

爆発しそうな感情を押し殺し、深呼吸ひとつしてから、

「本機はこれより法務省エアポートへむかうっ」

となりの部下をふり返り、

「ネット班へビデオ送信しろっ」

「了解っ」

「地上班は撤収っ、ネット班は受信次第、情報拡散開始っ」

『こちら地上A班了解』

『B班了解』

『C班了解』

『——こちらネット班、作戦を開始しますっ、現地映像送られたし  
っ』

パイロットと部下、各班班長らが同時に叫ぶ。

カグラの部下が、

録画した？マミヤVS. 憲兵隊？の映像をネット班へむけ送信開始した。

彼女のエアマシンは急速反転、  
一路霞ヶ関の法務省庁舎へむけ、全速力で飛翔を始めた。

「いまからそっち行くからよ、クビ洗って待ってろ」

熱帯夜だった。都心環状線、芝公園出口付近。

高架線の路上に猟騎兵連隊第一大隊、

及び審問局の普通科歩兵一個大隊が展開、  
環状線を封鎖していた。

時刻は〇二〇〇（マルフタマルマル）時。

第一大隊の指揮官である、その少佐はブラックコーヒーを飲み終えて、

再び己のリスタブに見入った。

《人権護民局より全政府関係者へ通達》

そのメールに添付されていたのは、

R大佐とヘルマン＆ハインeman社の癒着、

今回の？魔導の姫？暗殺計画の概要、

それを阻止したマミヤ曹長の活躍を要領よくまとめたテキストファイル、

さらに憲兵小隊が、

？ヒーローであるはずのマミヤと魔導の姫を一方的に狙撃しつつける？

現地映像だった。

ほんのつい、さっきまでおこなわれていた？処刑失敗？の映像だ。

少佐の鍛えられた体を駆け巡るのは、

虚脱感、疲労感、怒り、

部下のマミヤを誇らしく思う気持ち——第一大隊はマミヤの属する  
隊だ

——なぜその実力をいままで隠してきたのか？

その疑問、彼の才能への嫉妬。

これ以上数え上げても切りはないので、  
コーヒーカップを口にもっていった。

空だったことに気づく。

少佐は、空のコップをしげしげと眺めやってから、  
指揮下の猟騎兵たちを見た。

少年たちは、陣地で配置についていた。

ただし、？敵？のほうではなく、少佐を、

装甲指揮車のかたわらに佇む自分のほうを見ていた。

定員二七名のうち、

マミヤをのぞく二六名全員が、

ひとり残らず少佐のほうを見つめていた。

おなじ陣地で配置についている普通科歩兵の二、三〇代の若い兵  
たちは、

奇異な目でこの？エリートの一六人？を注視している。

陣地のさらにそのむこうがわ、

都心環状線いっばいに大群衆がヤジを飛ばしている。

サーチライトのビームを浴びて、はつきりとマミヤたちが見える。

最前列、中央には、

マミヤ曹長と魔導の姫、

そして二輦の魔導二輪装甲車輛があった。

その両脇を市民らが溢れかえらんばかりの熱気とともに守りを固  
めている。

市民は、移動できるように車輪のついた強化複合装甲板を

——憲兵小隊からの戦利品——を前面に押し立てていた。

彼らは、歩みをとめることなく、

すこしずつ、

こちらへとむかってきている。

大隊副官の大尉が装甲指揮車から降りてきた。

少佐に敬礼してから、

「連隊本部のR大佐からです」

副官の声には、あからさまに恐怖、そして緊張がある。

強張った仕草で、指揮車のビデオ通信端末を差しだしてくる。

少佐は受けとった。

『大隊長、なぜ攻撃しないのだ？』

少佐の顔を見るなり、Rはいった。

少佐は脳内で翻訳してみた。

Rがこうゆう声音のとき、ヤツはこういつているのだ。

？大隊長、貴様の最後のクルミを叩き潰すぞ？と――。

少佐は微笑んで、

「連隊長、しばしお待ちを」

いうやいなや、軽く走りだして、

陣地の土嚢を乗りこえた。

ジャンプして飛び降りると、市民たちに、マミヤにむかって走っていった。

背後から、副官の呼びとめる声がした。

若い猟騎兵らも口々になにか興奮して叫んでくる。

「おいっ、使者か？ 審問局から使者がきたぞーっ」

市民たちのあいだで方々からそんな声がわき起こる。

少佐はマミヤの真っ正面に立った。

マミヤは、魔導の姫、それと見知らぬ少女に両肩をあずけていた。ふらつきながら、少女らに回していた腕を引っこめ、

直立不動の姿勢をとる。

「大隊長直々、恐縮であります」

マミヤは敬礼すると、いった。

「さて、マミヤ曹長、降伏してはみないかね？」

「出来ません」

『なにをしているのだ』

端末からRの声が響いてくる。

マミヤが怪訝な顔になって、

「R大佐と、通信が？」

少佐はうなずいた。

端末を高々と掲げた。

「さて市民諸君っ、護民局からの情報はすでにネットで知ってることかと思うがっ？」

市民たちが、

知ってるぞーっ、と揃えたように一斉に答えてくる。

「ここに？黒幕の？R大佐とつながっている端末がある、

誰かひとり話があれば好きにするといいつ

「おう任せろやあっ」

三〇代ぐらいの男がすぐさま名乗り出てきた。

ビールビン片手にイイ感じになっている。

「君は？」

少佐の問いに、男は、

「名乗る名は無えなあ、しがねえタクシーのパイロットよ」

その男は、少佐から端末を受けとるなり、

「おい、あんたがRかい？ ああ？」

『……何だ？ この酔っぱらいは？』

「いいか、耳かっぽじって良く聞け」

『誰にむかって物をいっている？』

機長は、盛大に息を吸いこむと、

「——いまからそっち行くからよっクビ洗って待ってろや、ごらあ  
あああああああつつつつ」



機長はまたビールを呑んで、上機嫌に少佐に端末を返してきた。

「だ、そうであります」

『少佐？ 君のクルミは——』

「いまはっ、いまは、連隊長、あなた御自身のクルミの残り数を数えたほうが賢明ですな？」

Rがまだ何か言いかけるところを、

少佐は通信をたたっ切ってやった。

後ろをふりむく。

「第一大隊の諸君っ、ここに諸君の同僚、

マミヤ曹長がいるっ、

私はあえなく捕虜となってしまうた訳だが、

君等は？ 君等はいったい、どうするかねっ？」

二六人の少年たちが、一瞬息を呑んだ様子だった。それから――。

少年たちは拳を突きあげ、絶叫した。

ガッツポーズをし合うと、魔導の力で邪魔な土嚢を片づけ始めた。

猟騎兵の狙撃なくして、マミヤと魔導の姫の前進を阻止することは不可能だ。

魔導の力のない普通科歩兵大隊の隊員らは恐慌状態に陥った。

統率を喪い、陣地後方の何機ものエアマシンに搭乗してゆく。

兵を満載したマシンから順に、都心環状線から飛び去っていく。

猟騎兵第一大隊付きの審問官らは憎しみの視線をむけてから、

指揮車で逃げ去った。

## 大佐の？切り札？

法務省の隣、軍政異端審問局庁舎の地下六階、作戦司令室。

R大佐は自分のオフィスから

この堅牢な地下のひろい空間へと移動してきた。

付き従うのは、暗殺作戦に参加した異端審問官たち数名、それと連隊副官のあの痩せた中佐だった。

司令室には、そこには、

いるはずのオペレータも事務官たちの姿も誰もいなかった。

磨き上げられた床には、Eペーパーが無数に散らばっているばかりだ。

連隊副官が声を震わせて、

「スタッフが……逃げたのか？　ひとり残らず？……」

R大佐は無人の己の城を一瞥してから、

副官にむかい、

「第二大隊総員に動員命令を出せ、

第三大隊、空中から催涙弾を散布せよ、

防衛大臣に国軍の出動を正式に要請せよ、

理由は首都において大規模な叛乱発生、

猟騎兵第一大隊が叛旗を翻し、暴徒に合流した旨を伝えろ」

「はっ」

副官の中佐と審問官たちが散らばり、

コンソールに陣取った。

大佐の命令どおり、各所にむけ命令や要請を発信し始める。

しかし、返ってきた答えは……。

「第二大隊、全猟騎兵、動員命令を

……拒否して……おります……」

「第三大隊、空中からの散布不可能との返答ですっ」

そう答えた審問官のデスクへ、

大佐がゆるやかな足取りでやってきた。

通信機にむかって、

「理由を説明しろ」

ビデオ画面に第三大隊長自身が現れて、

『現在、暴徒どもは国道一号線に隊列を組んで、

霞ヶ関に行進中であります、

付近の麻布、虎ノ門一帯は、

各国大使館やゲーテッドコミュニティなどの高級住宅街がひしめいており、

現時点で各界の有力者多数から、

エアマシンの騒音苦情が多く寄せられております、

はつきり申しあげてこの地区上空での催涙弾散布など、  
軍政府にとって自殺行為です』

「なぜ、そこまで行進を許した？

上空でなにをしていたのだ？」

第三大隊長は、ちよつと間をおいた。

それからにんまり、笑みをつくってきた。

『リスタブで護民局の情報を見たからであります、

R大佐』

「貴官も裏切るつもりか」

『失敬ですね、

では？大佐の御命令どおり上空からの監視任務？を続行します』

回線を切られてしまった。

そこへ副官が顔を痙攣させながら歩み寄ってきた。

「防衛大臣は就寝中につき出れない、とのことですが、  
かわりに秘書官が……」

「秘書官がどうした？」

「異端審問局と、人権護民局との？政争？は

……当事者間で解決してもらいたい、と。

国軍は……その、ちゅう、

中立の立場を……」

司令室にいた審問官たちが、

ひとり、

またひとり、色を喪い逃げだし始める。

R大佐は、敵前逃亡の裏切り者たちのことをふりむきもしなかった。

だだっ広い司令室に、

R大佐と副官ふたりだけが取り残された。

副官は胃の薬を飲むために、

給水器の紙コップをとった。

手にとるとき指先が震えていた。

コンソールのひとつが着信を伝えてくる。

大佐自らがコンソールに座る。

「私だ」

『こちらシゲミツ、シゲミツ中佐でありますっ、  
今し方警察病院から無理矢理退院を——』

「手短に話したまえ、中佐」

『はっ、大佐の権限で兵器廠の？ロングランス？出動許可をくださ  
いっ』

シゲミツがニタリ、と笑んでくる。

副官が紙コップとピンクの錠剤を取り落とした。

「あれは、実験段階の兵器です大佐っ」

「よろしい、許可する」

『ありがとうございます、

必ずやマミヤたちを地上から消し去って御覧に入れますっ』

副官が駆けよってくる。

通信は切れた。

「大佐、ほんとうにロングランスを使用するおつもりですか？」  
大佐はチェアに座って、

優雅な仕草で椅子を回転させてきた。

副官のほうにむきなおった。

「今使わずに、いつ使うのだ？」

## 吐息

東の空は、白み始めていた。

きょうもまた、快晴のおだやかな夏日になりそうな気配だった。

芝浦を出発した群衆は国道一号線、

通称桜田通りを北上して霞ヶ関の法務省へ真っ直ぐ行進をつづけている。

カグラのネットにばらまいた情報はつぎつぎと拡散されていき、首都のあちこちからデモ隊が息を吹き返した。

デモ隊はぞくぞくとマミヤたちを先頭にした芝浦の行進に参加してきた。

人いきれでマミヤも姫もナホたちもいまや汗だく状態になっている。

『アツツイわね』

姫は、空調の電源の切れてしまったマギアパンツァーを指先で引っばった。

肌とパンツァーとのあいだは、ぬるぬるの汗だく、

サウナ地獄状態である。

ナホが、あいだにマミヤを挟んで、

姫のほうをのぞきこんできた。

「あら、魔導の姫様はもうこれ以上日本の問題につきあう義理ないんだし、

ドイツへ帰ればいいじゃないですか？」

『……そうはいかないわ、

この私を暗殺しようとしたヤツがまだのうのうとしてるんだから、きっちり落とし前つけてやらなければ、私の気が済まないの』

「ふーん、そうですか？」

ところで、ねえマミヤッ、

ゴタゴタが片付いたらさ、あたしたちの異性交遊申請書なんだけど、

サインをね、すぐにしてくれると、うれしいんだけどなあ……」

『マミヤ曹長は、この私に勝ってしまったのだから、世界中からレースのオフアーが殺到してくるでしょうね、恋愛ごっこに興じている暇はないじゃないかしら？』

マミヤが姫を見た。

ナホがあらさまに可愛い貌に怒りの形相をうかべてくる。

姫にはそれが、

？マミヤ、いますぐあたしを犯したいの？

犯したくはないの？ どっちなのよっ？？

とまあ、恋の押し売り強盗をしてくる顔面凶器にしか見えなかった。

「……なんで、お姫様が？あたしたちの愛？に口を挟むの？」

『ごめんなさいね、ナホさん、だったかしら？』

私とマミヤ曹長は、これから世界を相手に闘う宿命を帯びた超有名人、

残念だけれど、一般人のあなたと、

曹長では……ねえ？』

「ふんっ、有名人？ あらそう？

そちらさんが有名人ならあたしはねえ……」

そこでマミヤがナホに、

『さつきからアラム音が鳴ってないか？』

ナホの服のほうからかな』

ナホが耳を澄ます。

大群衆を後ろに従え、喧騒だらけのなか、たしかに聞こえた。

「ええ？ あ、ちよっと、ごめんね」

そういつて彼女がマミヤにまわした腕を放した。

ちよっと小走りになって、行進のさらに数メートル先にいった。歩きながら小ぶりのEペーパーをとりだして見ている。

彼女はふり返ったとき、顔を真っ青にしていた。

気づいたら酸素残量が残り一分切ってました、ってゆうか、そんな風な絶望的な表情だ。

「んん？  
どしたのナホちゃん」

ナホがペーパーを見せている。

「受信していたのにあたしぜんっぜん気づかなかつたよおーっ」

有事につき、

……それまでに……

お越しになれない場合……」

「本券は無効とさせていただきますっ？」

ふたりが同時に叫んで、パニックになった。

どこおーーっつっ?」

239



ナホがパニクリだした。

ピーピー鳴ってる謎のペーパーを握りしめながら。

そこでマミヤが、左折すれば永田町に出る、

そこには機動隊に警護された二四時間営業の銀行がある、  
そう教えた。

「マミヤーツありがとうっ、

愛は、愛ってやっぱ、すべてを救うのよねーっ？」

ナホが泣きながらマミヤの手を握りしめる。

「ナホちゃんこっちだっ、早くしろおっ」

機長にうながされ、

「あたし、立派になって……帰ってくるからねっ」

ナホはやっぱり、謎の言葉を残して、

機長といっしょに桜田通りから左の道路に入っていった。

マミヤは片手を上げて、ふたりを見送った。

『なんなのかしらあのふたり、とにかく、仲のよろしいことね』

『……』

『あら、幼馴染み、なんででしょう？ やっぱり心配？』

『ええ、心配です、都内はどこも混乱しているから』

『……そう？』

『誰も、誰にも、死んで欲しくない』

姫はマミヤを——ヘルメットしか見えないけれど——チラ見した。  
見たかった、いますぐ、このひとの顔を。

でも駄目だ、いまは駄目なんだ。どこから狙撃されるかわからない。  
い。

頭部を守るフルフェイスのヘルメットを脱ぐ訳にはいかない、

そう、ふたりともだ。

姫は、マミヤに回す腕に力をいっそう込めてやった。

マミヤは、かくん、と頭を彼女の左の肩にあずけてきてくれた。

姫は照れくさくなってしまい、

そっぽをむいた。

『暑いですね、姫』

『そ、そうよね……』

マミヤがバイザーをスライドさせて、

鼻から下の部分まで開放した。

鼻のチューブを抜き取って、

おおきく息を吸っている。

『やっぱり、酸素ボンベの空気とはちがう、

いいもんです、外の空気は』

『そう？』

ふたりの左右と後方に長くつづく大群衆は掛け声を上げ、  
疲れるところを知らずに行進をつづけていた。

霞ヶ関の法務省にむかつて。

姫の聴覚から、群衆の立てる騒音が消えてゆく。

マミヤの心臓の音、

自分の心臓の音、

ふたりの脈拍の音、

それだけに耳が支配されていった。

『姫……姫？』

『——え、あ、はっ、はいっ』

物思いにふけていた。

つい、声が裏返ってしまった、恥ずかしい。

『姫に逢えてよかった、感謝しています、

最期まで貴女をお護りいたします』

『あ、あらそう？ でっ、でもねっ、

私はそんなんっ、よ、弱い女じゃ無いんだからねっ』

マミヤはよりいっそう、全身をもたれかからせてくる。

『マミヤ、あ、あの？』

姫の左半身が、熱を帯びる。

愛するひとの体を全身に感じる。いま、感じている。

『すこし、クラッ、と、きたんです、眩暈がしたんです』

姫は慌てて両腕でマミヤを支えた。

『怪我っ？ 悪化しているの？』

さつき芝浦でお医者さんは、だいじょうぶっていったのに』

姫が医者を探し、周囲を見回す。

『ちがいます姫、姫と肩を組んでることがうれしくて』

『……え？ わ、私と？』

『はい、貴女が、その、あんまりに良い香りをさせているものだから、

若輩者の自分には、刺激が強すぎたんです』

姫はバイザーをほんのすこし押し上げて、

右腕のにおいを嗅いでみた。

——汗のにおい、しかしなかった。

『私、香水とかつけてないんだけど？』

『ってか、汗くさくって——』

『……』

『………汗？』

マミヤは深呼吸をつづけている。

『——ちよっ、ヤダッ、なあに？』

あんたそーゆーフェチがあったのー……っ？』

『申し訳ありません、姫、フェチのつもりはないのですが』

マミヤはバカ正直に、謝ってくる。

『あっ、謝ればいいってもん、じゃないんだからねっ』

姫は思わぬところから丸裸のすっぽんぽんにされた気分になった。

気分が昂じて、よりいっそうヘンな汗をかいてしまう。

そこへ、なんだかうれしげに微笑みをうかべたマミヤが肩によりかかってくる。

すーっ、と空気をそれは美味しそうに深呼吸して吸いこんでいた。彼の吐息が頸筋に触れてくる。

ヘルメットとパンツァーとのあいだ、

わずかに露出した頸筋に。

顔に急激に血の上ってくるのを、姫は感じていた。

バイザーをすぐにまた下げてしまう。

『もういいわよっ、あんたもバイザー下げなさいよ、もうっ』

『あと、すこしだけこのままで、いいですか？ 姫』

姫のカラダ中の血液が沸騰してくる。

水蒸気爆発みたく、頬に血の上ってくるのがわかる。

『……こっ、この、ばかっ』

すみません、姫、とほんとうに済まなそうに、

でもうれしげに、マミヤはもう一度謝った。

## GREEN-EYED MONSTER

国会議事堂を取り囲む治安用防壁は高さ四メートルあまりあった。

その若い警視庁機動隊員はいつものように壁の外で警備任務に就いていた。

自分の立番の位置からは、

東の方角へと延びる道路が桜田通りと交差しているのがよく見える。その通りのほうからは、

きょうもまた七面倒くさいデモ隊の行進してくる喧騒が聞こえてくる。

また鎮圧にかり出されるのを覚悟したのだけれど、

上からの指示はめずらしいことに、暴力行為に発展したら、鎮圧せよ、

だった。

リスタブに同僚からのメールが回ってきたのだが、

どうやら審問局と護民局、要するに法務省内の内紛らしいので、警視庁としては関わり合いになりたくないようだった。

だから若い機動隊員はあくびをしながら、

深夜の立番でやる気ゼロのまんま、

携帯端末で流行りの曲を聴いていられた。

けれどすこしも気は晴れない。

今夜のG?でボロ負けしちゃったので、  
自分も暴動に参加したい気分だったのだ。

「ちつきしよう、カネ欲しいなあ……」

彼の足もと、路上に震動が走り始めた。

金欠の鬱っばい気分がいつそう最悪になる。

地響きはエンジン音をともない、おおきくなつてきて――。

隊員は左手の方角に険しい視線をくれてやった。

それは路上を軋ませながら、走行してきた。

隊員の目前を通りすぎ、

桜田通りとの交差点が見える位置で急停車した。

重低音で響くエンジンは巨人のいびき、

エアブレーキは鼻息みたいにやかましかった。

機動隊員は、ぽかん、と口を開けてそいつを見ていた。

ぱっと見、クレーン車、っぽい。

けれど黄色くはない。

国軍のカラーリング、オリーブドラブ――暗い緑色――

一色に塗装されている。

そいつは、クレーン車に恨みを抱くヤツが、

悪夢の中で描いた妄想のように薄気味の悪い、

攻撃的な外観だった。

深夜、街路灯の光を浴びてそいつはいまにも

？なにか？とんでもないことをしでかしそうな、

そんな雰囲気醸し出している。

何人乗りだか知らないが、

分厚い装甲で覆われた運転席部分のハッチが開いた。

長身の若者が現れた。

夏期軍装に身を包んでいる。

ハッチの脇の梯子を使い地上に降りてくる。

化け者クレーンもどきの車輪の直径は若者とおんなじくらいのおおきさだった。

「あ、エース・シゲミツッ」

若い隊員はインター杯が好きで、シゲミツの顔をよく知っている。

今夜のレース、シゲミツとソルベに一口ずつ、

夏の給与をつぎ込んだのである。

その本物が出現したので面食らってしまった。

シゲミツが自分のほうへ近づいてくる。

顔や腕に包帯を巻いていた。

目の前にくると敬礼してきた。

機動隊員が慌てて答礼する。

シゲミツは身分証を提示すると緊張した面持ちで、

「この車輛の後方二〇メートル以内は放熱による危険が生じる。

貴官はこの立番位置からいますぐ移動していただきたい」

「はっ、了解しましたっ」

シゲミツはうなずくと、運転席をふり返り、

「オーハシッ、子機の飛行を開始しろっ」

運転席部分から若者が顔を出してくる。

「わかりましたっ」

機動隊員には誰だかわかった。

G？に出走した、あのオーハシ中尉だった。額に包帯を巻いている。

巨大な車輛の後方、タンクのように丸くなっている箇所がある。

そこが、上からふたつに割れ始めてきた。

中に収納されていたのは、全高一メートルくらいだろうか、

小型の無人偵察エアマシンだった。

マシンは、ふわり、浮きあがりだした。

エアを下部から吐きだして、一気に上空へと舞いあがってゆく。

シゲミツは満足そうに見ていた。

マシンが遙か高空へと飛翔してゆき、目で確認できなくなっていた。

日本のエースは、それを見届けると、

踵を返して化け者車輛の運転席のハッチへもどり始めた。

機動隊員は急いで、

「あっ、シゲミツ中佐っ、

あのっ、よろしければ、

のちほどサインを頂きたいのでありますが」

目の前のエースさまのせいで夏の給料吹っ飛んだんだけど、レースで怪我した——男の勲章だ——本物をまえにするとどうでもよくなってしまうのだから、

不思議なものである。

シゲミツはこちらをふりむいてくれた。

うっすら、と笑んだ。

「作戦成功後、何枚でも差しあげよう」

機動隊員は有頂天になって、感謝の言葉を何回もくりかえした。意外と今夜はツイてる、彼はそう思った。



## 大佐の？握手？

法務省庁舎は、古風な赤レンガの壁面をもつ、ドイツ・ネオバロック様式の優雅な洋館であった。

正門もレンガの柱でつくられた威風堂々たる姿を桜田通りまえに晒している。

同省の内局である人権護民局はこの洋館内にオフィスをもっていた。

カグラは今し方、

正門を出て桜田通りに立ったばかりだった。

仁王立ちになり、

腕を組んだ彼女を護衛するのは部下の精鋭捜査官たちだ。

ど派手な赤いサマージャケットを着た？姉御？と

彼女に付き従う黒スーツの屈強な男たち。

群衆が見える。

桜田通りいっぱいひろがって、

左右に林立する政府庁舎を圧倒する勢いでカグラのほうへとむかってくる。

マミヤ曹長と魔導の姫が、先頭に見えた。

そして二輦の魔導二輪装甲車輦が群衆の手で押されてくる。

群衆の上空では、

敵の第三大隊の武装エアマシン四機が低空飛行をつづけていた。

カグラたちの上空、

二機の武装エアマシンがホバリングしている。

カグラの必死の説得で——ただし少々暴力を借りたが——護民局の局長を説き伏せ、かき集めた同局のマシンだった。

カグラの姿を認めたマミヤと姫が駆け足になってくれた。

群衆も血気盛んに走り出す。

少年と少女が互いにかばい合うよう、腕を肩に回しているのが、

手にとるように見える。

「最後まで気を抜くんじゃないよ、おまえらっ」

「はい姉御っ」

カグラの一声に男たちが吠える。

犠牲を出さない、絶対に一人も、

そう彼女は念じていた。

第三大隊のエアマシンは一糸乱れぬダイヤモンド隊形のまま、桜田通り上空を直進してくる。

カグラは待った、微動だにせず、待ち続けた。

彼女の隣の部下がイヤホンマイクで上空と連絡をとっている。

苦り切った顔でカグラに耳打ちしてきた。

「うちのマシンの連中ビビってます、

（ミサイルの）ロックオンの許可求めてきました」

「やったら終わりだと言ってやれ、

（ロックオンのレーザー照射は）宣戦布告も同然だ、  
うちが負ける」

部下がマイクにむかい小声で罵声を浴びせた。

マミヤと姫と、市民たちがすこしずつスピードを速めながら通りを走ってくる。

マミヤがすこし体勢を崩してしまう。

姫と周りの人々らがすぐに手をさしのべる。

カグラは、見つめつづけた。

地上の味方を、

空の敵を。

敵、四機は隊形を崩さず直進、

こちらへ近づいてくる。

カグラは確信していた。

第三大隊は、必ず戦闘を回避する、と。

仮に戦意があるならば、すでに空から市民たちを攻撃していたはずだからだ。

四機はなおも直進してくる。

と思いきや、機首を上げた、四機が一斉に機首を上げ、底部の回転式機関砲がこちらを向いて――。

部下が叫ぶ。

「姉御、攻撃許可を――」

「駄目だっ」

揺るがなかった、

カグラの確信は決して、ぶれなかった。

向いた機関砲座、

動かなかった。

砲口は、沈黙したままだった。そして――。

――止まった、

直進を止めた、

四機は機首を上げ急速停止、空中でホバリングを始め出した。

法務省のワンブロック手前、

交差点の直上でようやく接近を止めてくれたのだった。

彼らは急上昇を始めた。

旋回して西の空、自分たちの基地の方角へむかい、  
撤収していった。

部下の男たち、その張りつめた空気が一気にやわらいでゆく。  
皆がとめていた呼気を吐き出す。

喘ぐ者もいれば、冷や汗をぬぐっている部下もいる。

カグラだけが何事もなかったかのように、  
唯、マミヤ曹長を見つめていた。

大群衆から、盛大な喝采がはじけ、爆発する。  
空に拳を突き上げて、誰もが、叫んでいた。  
失せろ、審問局、と。

市民の声はいまや霞ヶ関で、ダムが決壊してできた洪水の濁流だった。

群衆の先頭に立つ少年と少女が、立ち止まった。  
カグラのまえまで走り終え、ようやく歩みをとめた。

三人は、交わした約束を、  
法務省正門前で、いま、果たしたのだった。

市民の流れはかんたんには止まらず、  
そのまんま桜田通りを北上して、マミヤたちを分厚く取り囲んだ。  
まるで周囲を守ろうとしてやるかのように。

都内最大のデモ隊は霞ヶ関の官庁街をもはや、完全に埋め尽くしている。

カグラは敬礼した。  
マミヤが答礼する。

「怪我を負われたと伺っております、曹長」

「カグラさん、ご心配には及びません、

魔導の姫の深紅のアルバトロス、たしかに届けました」

カグラは深くうなずいて、

魔導の姫に瞳を転じた。

「魔導の姫、初めてお目に掛かります、  
人権護民局、護民官、カグラと申します」

姫はすこしばかり、

場の熱気に当てられちゃった様子で、  
「……私の暗殺の陰謀を防いでくれて

……感謝します、護民官」

「仕事ですから」

カグラはようやく、微笑んだ。

それは晴れやかな微笑みだった。

法務省の正門のむこうから、

人影がふたつ見えてきた。

マミヤが、姫が、カグラが、

部下の大男たちが一斉にふりむいた。

法務省正門の守衛は、群衆に怯えてしまい逃げていたので、

その男は自らの手で門を開けた。

マミヤたちのまえにその身を晒してきた。

相對する者に畏怖を抱かせる緊張を身にまとった男、

白髪を丁寧に整えている。

男は口を開いた。

「私が市民諸君からリンチを受けないよう、  
取りはからってくれるだろうね、護民官？」

カグラは男と相對した。

「もちろんです、R大佐」

彼女の声には、なんの感情もこもってはいなかった。

敢えて激情を殺した声音だった。

マミヤがバイザーを跳ねあげる。

魔導の姫はヘルメットをかぶったまま、

Rに顔をむけた。

正門付近の市民たちは驚愕の声を口々に上げだした。

「この野郎がRかよっ」

ぶちのめしちまえ、とか殺せっ、奴を許すなっ、

そんな声がつぎからつぎへと起き始める。

すかさずカグラの部下たちが正門の市民たちのまえに壁をつくった。

部下たちが、マミヤ、姫、カグラ、R大佐の周りに扇状にひろがる。

ひろがって市民に対して、  
携帯スピーカで呼びかけだした。

『R大佐はっ、彼は法の裁きにより罰を受けますっ、  
市民の皆さん落ちついてくださいっ』

市民の怒号は一向に収まらない。

もうひとつの影の主、

Rに付き従ってきた副官は恐怖に引きつった顔になっており、  
正門から決して出てこようとはしなかった。

カグラは、法務省のレンガ色の庁舎、  
その裏手にある現代的なビルを見上げた。

法務省の古風な洋館とは好対照をなす、無機質な庁舎を。

軍政異端審問局の本局庁舎である。

「あの庁舎に籠城されたら厄介でした、大佐」

「私はそこまで卑怯者では無いのだよ」

大佐はカグラからマミヤに視線を移した。

？右手？を差しだしてくる。

黒革の手袋をはめた右手を。

マミヤは不思議そうにして、Rと彼の手とを見くらべた。

「マミヤ曹長、君は、

君は立派な部下だった、

最後の最後に君のような逸材に出会えたことを私は誇りに思うのだ、  
握手によって君との別れの挨拶にかえようではないか？」

カグラは無表情に――しかし警戒心最大にして

――ことの成り行きを注視している。

魔導の姫はマミヤに肩を貸したまんま、

「こんな奴と握手することないよっ」

「だいじょうぶです、姫」

マミヤも右手を差し出した。

マミヤとR大佐、部下と上官は固い握手を交わした。

## 二四一九三式重力場圧壊因子自走砲 “ロングランス”

「二四一九三式重力場圧壊因子自走砲……で、ありますか？」

スズキ大尉は、

シゲミツ中佐から教わった奇っ怪な名称をオウム返しにつぶやいた。

「そうだ、この化け者の制式名称だよ、

通称？ロングランス？だ、

貴官は座学講習で習わなかったろう？」

操縦室の後列の右、指揮官席におさまったシゲミツはいった。

「は、はい」

スズキはシゲミツの左、副官席に座っている。

ヘッケラー&コッホ社製のマシンガン的一种、

コンパクトなPDWで武装している。

スズキ大尉が猟騎兵の士官学校で

この化け者についてなにも知らされなかったのは、

開発が一次頓挫していたためだった。

巨額の開発費と政治的な紆余曲折を経て、

ようやく完成にこぎ着けた、

これは？要人暗殺専用？自走砲、

とでも呼ぶべき怪物兵器だった。

操縦室内は、さながら戦車のそのように狭苦しい。

前列左、観測員席にはオーハシ中尉、

そして右、暗殺のターゲットの現在位置、

座標を入力する火器管制員席に座っているのは、

ソルベ中尉だ。

「ソルベ中尉っ、

マミヤの奴はたしか貴様の同級生だったな？

あの目障りな野郎の座標位置、入力の榮譽を与えてやる、



貴様が自分で立候補した以上、絶対にぬかるなよ？」

「はっ、光栄でありますっ中佐っ」

ソルベはシゲミツのほうをふりむき、

それこそ最高に？会心の笑み？を見せてくる。

そこでスズキが疑問を口にした。

マミヤたちはいま、桜田通りを法務省まえへ向かっている。

ここからだと言庁街の巨大なオフィスビルが射線を妨害しているのでは？

そういった。

シゲミツは笑い出した。

勝利をすでに確信した、笑いだった。

「なあスズキ？ お前のいいたいことはわかるぞ、

なんせ自走砲と銘打ってるからな、だが、この化け者はひと味ちがうのだよ、

こいつの積載砲から放たれた

？重力場圧壊因子？はな、

入力された座標上へと空間を超越するんだ、

超越してその空間の重力場をねじ曲げるんだよっ、

だから暗殺する相手がその座標上を動かない一瞬を狙えば、

確実に殺せるんだっ」

そういつて、さもうれしそうに笑い出す。

スズキは息を吞んで聴いているようだった。

「オーハシ、子機からの映像感度は良好か？」

「はいっ、文句ないっすよ」

オーハシは舌なめずりして、その瞬間を待ちわびている様子だ。

「よし、作戦通り、

大佐がお見えになったら知らせろっ」

「はいっ……あっ、R大佐ですっ、

法務省庁舎の陰から出てきましたっ、

手筈通りマミヤたちのほうへむかつてますっ」

「よし、いいぞっエネルギー充填開始するっ」

シゲミツが興奮して、鼻息を荒くしてくる。

握手の瞬間だ、握手のっ、シゲミツがささやく。

握手の時、

R大佐から握手を求められ、

右手の義手でしっかりと握手を交わした、

その瞬間、マミヤは動かない、動けない！

「で、ですが……」

スズキが疑問を口にした。

マミヤ一人、座標を指定して暗殺に成功しても、

アルバトロスも、ほかの関係者も、

目撃者の多数の群衆も生き残るのでは？ と。

「面制圧するのだ」

シゲミツが鬱陶しそうに答えた。

「面制圧？」

「座標一点を指定すれば、

そこを起点に好きなだけの面積をも指定できるんだよ、

ソルベの座るコンソールの操作でな」

「で、ではっ」

「そうだ、大佐の周囲のすべての人間、数千人か？

数なんぞどうでもいい、

大佐以外どいつもこいつも重力場の圧壊でひねり潰してやるんだよ  
っ、

造作もないことだっ、ハハハハッ」

操縦席の真上、後方から音が、震動が起き始める。

それは未知の怪物が、自分を捕らえた檻を破壊して暴れている、  
今にも飛び出そうとしている、

そんな得体の知れない恐怖を連想させるものがあつた。

スズキは、大音響をまえにして、完全に血相をかえている。

「……それ、はっ、あんまりだ、大量虐殺じゃないかつ」

「大佐の御命令に、逆らうのか？ スズキ大尉？」

シゲミツの声が陰にこもってくる。

ソルベ、オーハシが後列席をちらり、とふりむいた。

爆音は、震動もさらにボルテージを上げてくる。

操縦席全体が小刻みに揺れ出した。

「エネルギー充填率一〇〇%、発射準備完了です」

ソルベが堅い声音で告げてくる。

「お、俺は下ろさせてもらいますっ、虐殺者の汚名なんか、いるもんかつ」

スズキは左のハッチを開けて、外へ飛び出していった。

「スズキーッ、貴様あつ」

「シゲミツ、中佐、ちゅ、中佐っ、

握手ですっ、R大佐が右手を出したっすよっ」

「ええいっくソッ、オーハシッ、

ターゲット、マミヤの座標解析っ」

「はいっ、緯度（LAT）三三四〇三五・五三三一六

……経度（LON）、一三九四五一〇・六三三五〇一っ」

ソルベが復唱して、

コンソールの三次元地図画面<sup>ホログラム</sup>上、

タッチペンで精確に座標を指定する。

「ソルベ、面制圧っ、桜田通り南北数百メートル好きに指定してやれっ、

暴徒は皆殺しだあつ」

シゲミツは驚喜している、絶対の力を手にして、

自らに酔っているかのようだった。

「わかりました、好きにやらせてもらいます」

ソルベはニヤリ、笑った。

「大佐とマミヤが握手しましたっ」

オーハシの声も興奮の極みにあった。

「よしオーハシッ、副官席に移れっ」

「はいっ」

彼が後列のスズキのいた席に素早く移る。

シゲミツとオーハシの席上、コンソールには発射スイッチがひとつずつ設置してある。

ふたりがセイフティロックを解除、

同時にスイッチに手をおいた。

ふたりがうなずき合う。

ふたりが押した瞬間、化け者は解き放たれるのだ。

「これで終わりだっマミヤッ、こんどこそ俺の勝ちだああああっ」

シゲミツが嘲笑し、叫ぶ。

「三、二、一っ」

カウントしてふたり同時にスイッチを押した。

操縦席の直上、稲妻の直撃を浴びたかのような、

破壊的なまでの音が空間をほとばしった。

三人が反射的に頭を引っこめ、両耳を手でかばう。

ソルベの指定した座標上、重力場圧壊因子は放出された。

## 決戦、法務省、正門前、

「曹長、君にどうしても質問したかった、なぜ一四連敗してまでその実力を隠そうとしてきたのかね？」

R大佐は、固く握手をしてマミヤの手を離さずに、問いを投げかけてくる。

「魔導少女迎撃競技杯の、その有り様事態がまちがっている、自分にはそうとは思えません」

「君は勝利の美酒を味わいたくはないのか？ 社会の敵たる魔女を一掃したいとは思わんのか」

「彼女たちは、敵なんかじゃありません、なんにも悪くないんだ、

ホウキを折られる辱めを受けていい訳がない」

「甘いな、曹長、君は

……最期の最期まで、甘すぎたのだよ」

うつすら、笑んだ、Rはほくそ笑んだ。

「？時間？だ」

大佐がそういった瞬間――。

天空を稲妻の轟いたかのような音が奔った。桜田通りにいる誰もが咄嗟に空を見上げた。嗤っているR大佐以外、

全員が空を見た。

大佐だけが眼前、マミヤを凝視していた。彼の、裏切り者の最期を見届けるために。

その、大佐の笑みが、  
凍りついていった。そんなハズがない、  
あり得ない、そんな表情をうかべだす。

マミヤには、  
彼の周囲にも、何も起こらなかったから。

目の前でマミヤたち、邪魔者の肉体が無様に圧縮され、  
異常重力に押し潰される世紀の一大ショーの開幕、  
そのハズだったのに。

そのかわり、東の方角、  
法務省の洋館庁舎の裏手、  
軍政異端審問局本庁舎から地響きが鳴り出した。

皆が審問局を見る。  
局の庁舎が、二〇階建ての高層建築ビルが崩落を始めたのだ  
った。

ビルの最上階が見る間に崩れ落ち、地上へと落ちてくる。  
粉じんと爆風が遅れて桜  
田通りへ迫りくる。

群衆がパニックになる。皆が路上を西や南のほうへと走り、逃げ  
だした。

崩れ落ちて生まれた空間、さっきまで庁舎のあった空間には、  
巨大な黒い球体が浮かんでいた。

あまりにも非現実的な光景。

球体は、子どもの思い描く空想のブラックホールさながらだった。  
それは重力レンズの影響で、周囲の景色をねじ曲げながら、  
無数の稲妻を、プラズマ放電のような不気味な光を放ち、  
徐々に縮小していった。

空間に歪みを残しながら、やがて球体は消えた。

マミヤと姫が呆然と崩壊を見るなか、  
カグラはちがった。

S I G ザウアー自動拳銃をジャケットの奥のホルスターから引き抜く。

R のこめかみに銃口を突きつける。

「よくも？ ロングランス？ まで持ちだしてっ、  
R 大佐っ、指揮官に使用中止を命じなさいっ」

「ロングランス……ッ」

マミヤが慄然とした顔になる。

「なにっ、なんなのよいまのっ？」

姫がマミヤをかばうように両腕を彼に回してくる。

大佐は、

奥歯に仕込んでおいた魔導石を噛みつぶした。

「シゲミツッ、何してる第二射を撃てっ」

軍服に隠されていたピンマイクに叫ぶ。

大佐の両眼が魔導の蒼白の光を宿す。

全身が光を帯び出す。

カグラが発砲した。

銃弾は、大佐を包み込んだ重力場に跳ね返されて、

遙か空の彼方へと跳弾して消えていった。

「私も、現役の適性保持者なのだよ」

大佐は嘲笑った。

「使用中止を命じなさい大佐っ、

マミヤくんっ、コイツから手を離して今すぐっ」

マミヤが大佐の手をふりほどこうともがいた。

マミヤが薄れ始めてきた魔導石のパワーで重力場を展開する。

大佐の重力場に抗い、義手をどうにか引き離そうとする。

魔導の姫は強力な重力場を

——ありったけの怒りを込めて—— R 大佐に叩きつけてやった。

大佐の肉体が後ろへ、正門へ吹き飛び、

門扉に激突する。

右腕はちぎれていた。

超鋼チタニウム製の義手が、

肘から先の部分がマミヤの手を握りしめたまま残っている。

「地獄へ堕ちろマミヤッ」

大佐は吠えた。

門扉に寄りかかり、笑い出した。

義手が、腕の部分が破裂、爆発した。

腕の部分に搭載されていた呪導爆雷が、起爆した。

「マミヤッ」

姫が絶叫しマミヤの盾になり、彼をかばった。



## ？切り札？の崩壊

狭い？ロングランス？の操縦室内。

シゲミツとオーハシは呆然自室の体で席に座っていた。

彼らの席のモニタには、

子機のエアマシンからの映像が送られてきている。

ふたりは異端審問局庁舎に撃ち込まれた重力場圧壊因子の巨大な球体を無言で見つめていた。

「なんだこれは？ 実験段階の兵器、だったからなのか？」

シゲミツがうめく。

「座標、ずれちゃいましたねー、  
所詮未完成だったんでしょ」

ソルベの投げやりな言葉。

シゲミツは猜疑心むき出しの目を彼にむけてきた。

「ソルベ中尉？」

まさか……座標をずらしたのか？

わざとっ？」

「さあ、なんのことでしょう」

ソルベはとってつけたような笑みをうかべるばかりだった。

オーハシが副官席から前列へ、

ソルベを押しつける勢いで彼の火器管制席をのぞきこむ。

「シゲミツさんっ、やっぱりっ、この野郎、

座標を庁舎にずらしてやがったっすよっ」

ソルベがオーハシの喉仏に貫手を叩き込む。

ぐえっ、と情けない声を上げて彼が真後ろに倒れこむ。

そのまま失神した。

そこへ、シゲミツがベレッタ製小型自動拳銃を、

ソルベの胸に突きつけてきた。

「裏切ったなっ、ソルベッ」

怒号は狭い操縦室内に響きわたった。

「僕はシゲミツさん、あんたにね、  
憧れてきたんだずっと、それがどうだ？

マミヤの才能に嫉妬したいまのあんた、  
どう思う自分で？ エースの名が聞いて呆れるよ」

「いいたいことは、それだけ、かつ」

突然右のハッチが開いた、

外から開けられた。

シゲミツのこめかみに、PDWの銃床が叩き込まれた。  
シゲミツが自席に倒れこむ。

スズキ大尉だ、彼がハッチ脇の梯子につかまっていた。  
PDWを構えなおして、

「怪我ないかソルベ中尉っ？」

「危うく死ぬとこでしたよ、大尉」  
ソルベとスズキは手伝い合って、

シゲミツを外の路上へ引きずりおろした。

まだ意識のあるシゲミツは、呂律の回らない口調で、  
「貴様ら、こんな事、して……」

スズキの後ろから警視庁の機動隊員が顔を見せた。

あの、シゲミツにサインをねだった若者である。

彼は機動隊のヘルメットに手をやり、呆れかえった様子で、

「日本のエースさまがねえ、無様とゆーか、姫に二連敗した挙げ句  
大量虐殺未遂とは……」

シゲミツは、隊員の姿を認めると、

「サイン、やるぞ……やるから、

こいつら……反逆者、だ、逮捕しろ……」

「サイン？ いるわけねーじゃんよ？」

隊員は電磁警棒をシゲミツに押しつけた。

ぐおっ、と蛙の鳴き声を発して、

日本の元エースは失神してしまった。

三人は、シゲミツとオーハシ、

気を失ったふたりを電磁式手錠で拘束して路上に転がしてやった。

スズキは汗だくになりながら、

「俺がもし、貴官の反逆行為に荷担しなかったらどうするつもりだったんだ？」

「僕ひとりでも、この化け者を阻止しようと思ってましたよ」  
ソルベはいった。

化け者自走砲のハッチを、がつん、と一発ぶっ叩いてやった。

「参ったな、俺は最後まで迷いつづけていたんだぞ、  
君から反逆行為を持ちかけられたとき」

「でも大尉はもどってきてくれました、  
感謝しますよ」

「ひとつ教えてくれ、あのマミヤ曹長だがな、

俺はいまなら彼をヒーローと認めるのにやぶさかではないが、

君はさんざん敵視してきたんだろう？

なぜ彼を助けようと決めたんだ？」

ソルベは芝居がかった仕草で、

両肩をすくめてみせて、

「あいつは僕の永遠のライバルなんです、

あいつをレースで打倒するのは、

僕です、僕がマミヤを倒す、

そう決めたんです、

ヤツに勝つまえに死なれたら、勝ち逃げじゃないですか？」

ぷっ、とスズキは噴き出した。

笑いの発作にとらわれたようだった。

「ヤダなスズキさん、笑うことないでしょうっ」

「いやすまん、しかしあの姫に圧勝したマミヤをライバルと断言で

きる君はある意味大物だ」

そういつてまた笑いをこらえきれずに、腹を抱えている。

ソルベは苦り切った顔になった。

「あのーすんませんけどもソルベ中尉？」

機動隊員が恐る恐る口を挟んでくる。

「なんでしょうか？」

「俺、あんたのファンなんですよ、サインもらえませんかねえ？」

「これもなんかの縁です、いいですよ、よろこんで差しあげましょう」

ソルベは快諾した。

## 第一級アーデルハイド暴走

「マミヤしっかりして、死んじゃ嫌っ、マミヤッ」

魔導の姫が、

血まみれのマミヤを抱きしめ、

路上に座りこんでしまっている。

彼のマギアパンツァーには腹部にいくつもの破片が食い込んでいた。

パンツァーの対呪法防御をもつてしても、

至近距離での呪導爆雷の被爆を完全には防げなかった。

彼の魔導石のパワーが消失しかかっていたせいだ。

顔への直撃はなんとか防げていた。

姫の中和力場が守ったのである。

門扉に叩きつけられたR大佐を――まだ笑いつづけていた――

カグラの部下たちが押さえこみ、身柄を確保した。

桜田通りは、パニックを起こした市民の逃げ惑うところとなっていた。

？ロングランス？の放った異様な球体を目の当たりにしたのだから無理もない。

審問局の崩落で発生した粉じんが辺り一帯に立ちこめている。

「……姫……ひ、め」

マミヤがささやいた。

『マミヤ、しっかりしてっ』

姫が力強く抱きしめてくる。

彼の呼吸は浅く、早い。

カグラがふたりに寄り添ってきた。

美人護民官はその両の静謐な輝きを放つ瞳を閉じる。

そして、開いた。

そのときには、すでに魔導の蒼白の光を双眸に宿していた。

カグラ護民官は、その出自は魔導少女だったのだ。  
彼女が懐のホルスターから呪符を数枚とりだす。

リスタブでマミヤ曹長の国家定期健診情報にアクセス、  
心理スキヤンの結果は六三日前の受診時の結果、  
日本ではごく一般的な宗派の？ブッティースト 仏教徒？であった。

『ねえマミヤは？ 助かるのカグラさんっ？』

「仏教の快復系呪法をダウンロードします、  
落ちついて姫、死なせはしませんっ」

「私の、呪法は強力だぞっ、助かるものかつ」  
大佐の嘲笑はやまなかった。

カグラの呪符に梵字が刻み込まれ始める。  
単なるEペーパーが、呪符としての機能を発揮し始める。

回復系の、清らかな緑色の光を放ち出す。

カグラが、光り輝く呪符をマミヤの胸に、

いちばん傷の深い部位に、そっ、と押しあてる。

密教の呪法のうちのひとつ、

孔雀明王法の真言

？おん まゆら きらんでい そわか？

を厳かに唱える。

何度も、くり返し唱えた。

マミヤの青ざめていた貌の色。

徐々にだけれど血色をとりもどし始めた。

カグラは魔導の力で、マミヤの快復具合をたしかめる。

姫にむかい、笑顔でうなずいてみせる。

フルフェイスの下、彼女の表情はわからない。

姫は立ちあがると、

押さえつけられているR大佐をふりむいた。

大佐が、魔導の力を爆発させる。

カグラの部下たち、豪腕の男たち一〇人ほどに組み敷かれていた、  
にもかかわらず大佐はおきあがり始める。

つかまれていた両腕を無造作にふりほどく。

両腕を押し広げると、

見えない異常重力の衝撃波に部下たちが吹っ飛ばされてしまった。

「そういうことだったか女狐？」

貴様、魔導の力でマミヤの才能を見抜けたという訳か？」

カグラは無言でマミヤの治癒をつづけている。

姫は、怒りに震える声で、

「よくも……よくもマミヤをっ」

「貴様と正面切って勝てる気はせんのでな、逃げさせてもらおうかつ」

大佐がジャンプして、正門を軽々と跳びこえる。

法務省の敷地内に入ると魔導の脚力で地面を蹴って逃げだした。

「逃がすかもんあああああつっ」

姫のパンツァー周囲の空間が、

ぐにやり、とひしゃげてしまう。

彼女の足もと、路上に亀裂が入ると、

その裂け目は生きてるかのごとく、大佐にむかい奔ってゆく。

正門を粉碎し、アスファルトを割って亀裂が大佐を追尾し始める。

連隊副官はしりもちをついて、

その場で震え上がっていた。

姫の蒼白の光は、見る間に膨れあがりだした。

周囲の重力場は理性を喪い、姫の魔導の下に支配された。

暴風が彼女の体の周りから吹き荒れ出す。

法務省の敷地全体が、隆起を始める。

様式美ある建築物が古風な洋館の右翼棟から雪崩を打って無残に

倒壊してゆく。

地面が生きてるかのように脈動をうち、

コンクリや建材の残骸、

なかには数メートルもある巨大なアスファルトの塊すら、無数の残骸が空中に浮き始める。

「やめなさいっ、姫っ、マミヤくんなら助かるわっ」

暴走を始めた魔導の姫は絶叫しながら、首だけ動かし、大佐の気配を探っていた。

カグラの叫びももはや、耳には入っていない様子だ。

「総員待避っ、市民を避難誘導っ、防衛省、警視庁並びに消防庁に連絡をっ——」

カグラの頭上に、コンクリの巨大な塊が降ってきた。

彼女が右手を高々と掲げる。衝撃波を飛ばして、コンクリを真っ二つに粉碎する。

同時に己の重力場を最大に展開、自分とマミヤを中心にして周囲数メートルになんとか？安全地帯？をつくる。

カグラの部下たちは死力を尽くしてボスの命令に従い散ってゆく。

腹心の部下が——芝浦の上空、マシンで彼女のとなりになっていた部下が——カグラの元に駆けつける。

マミヤを抱きしめて路上に膝をついている彼女の重力場のそばへやってきた。

大地の裂ける轟音の響く中、

「姉御っ、当局に何と連絡をっ？」

「第一級アーデルハイド暴走発生っ」

ありったけの声を上げて、部下に告げた。

部下は、死なんぐださい姉御っ、

そーいーいのこしてほかの部下とともに現場を離れた。

姫の叫びはやむことを知らない。

顔を右に動かし、

右手で目の前の空間を薙ぎ払う、



そのモーションひとつで、

法務省の右隣の庁舎も崩れだした。

子どもが、飽きた積み木の城を投げやりに叩き潰すかのように。

「あの野郎っ、どこへいったっ」

怒り狂う姫は、異端審問局のあった瓦礫の山のあたりにむかって、無数の大地の裂け目を奔らせていった。

東から南東の方角にかけて、

都心の高層ビルがぞくぞくと姫の暴走の餌食になってゆく。

マミヤが、バイザーを押し上げた。苦しい息の下、

「カグラさん、姫の、拘束を試みます……」

「無茶よマミヤくん、国軍の出動が必要なレベルよっ」

「もたもたしてたら、首都が、滅ぶ……」

マミヤの悲痛な呻きにも似たつぶやき。

カグラも息を呑んだ。

「姫の……最新の、心理スキャン情報を……教えてくださいっ」

「無理よっ、彼女の正体はわからないのよっ？」

「エリカッ、エリカ……ヴァンデル……メーア、彼女は、エリカ……です……」

カグラの瞳に驚き、

困惑、

パニック……様々な感情の波が立ち、

そして彼女はどうか理性をとりもどした。

そんな？ 彼女の正体が？ あのサバトの管理者の娘？ そうつぶやいて、

「でも、どうしてきみが知ってるの？ いつの間につ？」

「説明してる暇はない、です、は、早くっ」

カグラは腹をくくったようだった。

すぐにリスタブで個人情報にアクセスを試みた。

激しく首をふり、

「駄目っ、やっぱり異端審問局のセキュリティがまだ生きてるっ、個人情報を入力できないっ」

マミヤが指さした。

一点を指さした。

倒壊した門柱の陰に隠れ、打ち震えている連隊副官を。

カグラは一息に数メートルを跳躍した。

突然やってきた？魔女？に副官は、

「ああっ、助けてっ、まだ、死にたくないーっ」

カグラはSIGザウアーを突きつけると、

「死にたくなければ教えなさいっ、

エリカ・ヴァンデル・メーアの心理スキャン情報をっ」

副官は口元からよだれを垂らしながら、

自身のリスタブでデータベースにアクセスを始めた。

「早くなさいっ」

副官は、がくがく体を小刻みに揺らしながら、

リスタブを見せてきた。

カグラがのぞきこむ。

そこには――。

《国家定期健診の心理スキャン情報／一〇〇％無宗教との判定結果アリ

・オカルティズムへの関心傾向…特になし

・その他特記事項／特定の異性一名に対する恋愛感情が極めて顕著／受診から二日経過》

「まちがいないわねっ」

副官は何度もうなずいて、

「レッ、レース直前に魔女に対して受診は義務づけられてるだろう

っ、

その結果だっ」

カグラは、魔導の力で副官の袖からリスタブのバンドを無理矢理引きちぎった。

悲鳴を上げる副官を無視して、

彼のリスタブを手にとると、マミヤの元へともどっていった。

突然、地面が裂け始めた。

マミヤとカグラのあいだ、路面におおきな亀裂が生じた。

カグラの側が、地面全体が沈み始める。

カグラは重力場で身を守りながら、裂け目の断崖をよじ登っていった。

マミヤにむかっておおきく手を伸ばす。

「受けとってマミヤくんっ」

マミヤも手を伸ばす。

ふたりの手が交わった。

彼の手にリスタブがわたった。

「マミヤくんっ、その異性っ、おそらくあなたのことよっ」

受けとったマミヤが、ヘルメットを苦勞して脱ぎ捨てる。

リスタブ画面をのぞきこみ、

魔導の姫を、

エリカ・ヴァンデル・メーアを、

そのひとを見あげる。

よろよると立ちあがった。

「エリカ……」

マミヤはつぶやいた。

これ以上はないくらい、やさしい声音で。

カグラがさらによじ登ろうとしたとき、

断崖の崖っぷちが一拳に崩れ落ちた。

彼女も、大人数人分の高さまでになっていた下の地面へと墜落して  
いてしまおう。

強風の荒れ狂うなか、

マミヤは彼女の名を呼びつづけた。

愛する少女の名を。

「エリカ……たのむ、もうやめてくれ」

「ちくしょううつうつ、あの野郎っ、

どこへいきやがったああああああっ」

マミヤはよろめきながらも、後ろから彼女を抱きしめた。精一杯、  
抱きしめた。

彼女が、魔導の姫が、エリカがようやく気づいた。マミヤに気づ  
いてこちらにむきなおる。

「——っ？ マミヤッ？」

待っててっあいつを殺してやるわっ、貴方の敵は一人残らず——」

マミヤは、

彼女のローズレッドのフルフェイスヘルメットに手をかけた。

彼女の頭から脱がしてやる。

うつくしい、エリカの貌がその下から現れた。

途端、アップにしていた黒髪が束が崩れ、

彼女の背中に流れるように落ちてゆく。

汗と、溢れる涙と、愛するひとを見る、

恋い焦がれる瞳とが、そこにはあった。

マミヤは、長くしなやかな黒髪の垂れる彼女の背中を包み込んだ。

両腕を回して、抱きしめてやる。

彼女の唇にキスをした。

マミyah、エリカ・ヴァンデル・メーアに、キスをした。

## 静謐なる夜明け

東の空は明るかった。

七月の太陽が昇ろうとしてきていた。

その、わずかに光る東の空の陽を浴びながら、  
マミヤとエリカ・ヴァンデル・メーアは抱きあい、  
唇を重ねあわせていた。

マミヤは祈りを捧げながら、  
キスをした。

何に対して祈ったのか、それすらわからなかった。  
唯、姫の、エリカのこころを癒してあげたかった。  
怒り、傷つき、泣き叫ぶ彼女に笑顔を、

どうにかして笑顔をとりもどして欲しかったから、  
だからキスをした。

それしか、思いつかなかった。

少女の細身の体躯、ちいさな胸のふくらみ、  
しなやかな背中、

そしてやわらかい唇。

全身で今、マミヤは少女を感じとっていた。

彼の腕の中、エリカはされるがままになっている。

少女の体に抗うような姿勢は無く、

緊張も無く、

震えるでも無く、

ひたすら彼の腕に守られて、

少女はその唇を、

体のすべてを少年にあずけきっている様子だった。

少年は、唇を離した。

少女は、その泣きはらした貌を見られたくないからなのか、照れなのか、いずれにせようつむいてしまった。

その貌を少年の胸にうずめてくる。

だから、少年はやさしく抱きしめてやった。

少女の体、魔導の蒼白の光はすっかり消え去っている。

周囲の景色。

粉じんは未だ舞っている。

けれど大地の鳴動はやんでいる。

宙に浮く巨大な残骸はひとつも無い。

静寂が街を包み込み、

それを祝福するかのように東の太陽はいっそう、

その光を強めてくる。

エリカの全身の力が抜け始めた。

完全に抜けた。

するり、と膝を折ってマミヤの腕の中、

地面に崩れ落ちそうになる。

彼は力のかぎり、彼女の体を支えてやった。

「だいじょうぶ？」

エリカは貌をうずめたまんまむずがる子どものように

——とてもかわいらしい仕草だとマミヤは思った——

そんなふうに彼女は首をふった。

それから、

「うん」

だいじょうぶだから、と、そう彼の胸元でささやいた。

マミヤは彼女を抱きとめながら、周りを見た。

ふたりの左、数メートル離れた路上はその先から陥没してしまっている。

その下に、カグラがいた。

こちらを見て、微笑んでくれていた。

体の所々擦り傷やら汚れやらで美女が台無しだったけれど、微笑みはやっぱり彼女らしくたくましく勇ましい美しさをたたえていた。

マミヤのリスタブが鳴り出した。

ビデオ通話の受信だった。

相手はソルベ中尉である。

マミヤが出ると、

『いいかマミヤ、

きみは僕の永遠のライバルだ、

そして今回おおきな？貸し？ひとつだぞ』

マミヤは理解した。

この嫌な野郎のおかげで、生きのびられたことを、理解した。

ソルベは尊大そうに、

いかにも彼らしく嫌みったらしく笑ってくる。

マミヤも笑んで、

「俺は借りは必ず返す主義なんでね、

だから礼はいわないでおく」

マミヤの言葉に、ソルベが苦笑する。

一五歳の少年同士、ふたりは？戦友？のような笑顔を見せあった。

ソルベが通話を切った。

街の各所からパトカーや救急隊のサイレンの鳴っているのが聞こえてくる。

霞ヶ関の官庁街と東京湾沿いのオフィス街は、

内戦で崩壊した都市さながらの様相を呈していた。

倒壊したいくつもの高層ビル、

なぎ倒された街灯の列、

チョコレートの板を叩き割ったかのような桜田通りの路面。

「私、たくさん……たくさん、ひどいことをした……」



「ここ一帯は深夜は無人になるオフィス街だ、  
せめて犠牲者の出なかったことを祈ろう」

「……うん」

エリカは哀しそうに、声を殺してうなずいた。

ママヤは、ほっと息をひとつついて、  
体の力を抜いた。

魔導石のパワーはすでに切れている。  
カグラの応急処置だけでは全快とはいえず、  
また体中の傷が痛みを増してくる。

そっと、彼女から離れて、  
ひび割れたアスファルトの上に座りこんでしまう。

エリカがそばにひざまずいた。

ママヤの肩口、彼女がつらそうにまた貌をうずめてくる。  
ママヤはそんな彼女の頭に手をおいた。

触れるか触れないかくらい、

それくらい慣れない仕草で頭をなでる。

彼女の腕に力がこもってくる。

貌に、うれし泣きと哀しみとを見せ、

自分の愛した男の子に、

いっしょうけんめい頬をすり寄せてくる。

いつまでもこうしていたい、

そういつているかのように、

すり寄せる頬を赤らめてくる。

ママヤはぎこちなく、

彼女と自分とのおでこをくっつけ合わせた。

吐息の触れるぐらい、間近の微笑み、彼女の微笑み。

疲れきった少年の、

闘いつづけてきた少年のところに安息が満ちてゆく。

少女を抱きしめながら、

少女の汗、

少女の涙、

その香りに包まれて、

少年はいま、ようやく幸せをかみしめていた。

ふたりはおでこをくっつけ合ったまま、

くすつ、と笑顔をこぼした。

こころを分かちあった、男の子と女の子の、それは笑顔だった。

桜田通りの南から異端審問猟騎兵第一大隊の車列のやってくるのが見えだした。

市民の行進の殿を守るべく、最後尾で護衛についていてくれたのだった。

ふたりがすこしばかり体を離す。

「……私、矯正収容所送りかな？」

「いや、大佐のせいで審問局の権威は地に堕ちてるし、

局の庁舎はあのとおり崩壊してる、

審問官たちにそんな力はもう無いよ」

そこへ、カグラが跳躍してどうにか断崖を登ってきた。

「姫、我が人権護民局が貴女の人権を守ります、

矯正収容所には決して送らせません」

「彼女を、エリカをどうか頼みます」

「お任せください、曹長」

マミヤとエリカは、互いの腕で相手をかばいながら、頭を下げた。礼を尽くして、護民官に頭を下げた。

魔導の姫は、マミヤに正体を見破られた理由を知って相当お怒りのご様子です

マミヤは警察病院のベッドで寝ていた。

可動式のベッドの上、上半身を起こきあがらせて、

リモコンでテレビのチャンネルをつぎからつぎへと変えていく。

どこのチャンネルでも先日の魔導の姫による第一級アーデルハイ  
ド暴走事件をとりあげている。

幸いにも死傷者はゼロ、そのアナウンサーの言葉に、

マミヤは心から救われた思いがするのだった。

ちなみに国営放送でも、民放各局でも、

R大佐の消息を伝える報道は一切成されてはいない。

マミヤはだから、もう一度自分のリスタブでネットテレビにアクセスした。

日本自由放送がまずその第一報を伝えていた。

《速報 R大佐、人権護民局により逮捕される》

ネット上はこの話題でもちつきりである。

テレビのチャンネルをまた変えたとき、

そのニュースをマミヤは見た。

スタジオではキャスターの古町が昼の臨時特番にまで出しゃばって出演している。

『——はいっ、とゆうわけですねっ、

今回のG？は空前の払戻金となった訳ですが、

その幸運を手に入れたご本人とですね、

な、な、なーんと電話がつながってるんですっ、早速——』

フルマチの声をさえぎり、

その少女は電話口で語りだした。

サウンドオンリーの通話だ。

『はいっ、あたし億万長者になっちゃいましたーっ』

声はデジタル変換されている。

『ええとですねっ、いまのお気持ちを――』

『ねえあたしのMくん待っててねーっ、

あたしたちの結婚人生はバラ色だからねーっ』

そういつて少女は通話を切ってしまったのだった。

『もしもしっ、もしもーしっ？』

……ええっと、はい、つぎのニュースいきましようっ』

マミヤはゆっくり、背伸びをした。

こんな世の中でも、軍政下でも人々はたくましく、  
生きている。

異端審問局は解体の方向へとむかう、

そういうニュースも流れた。

すこしずつ、この国が良くなっていつてくれている、  
彼はそう思った。やすらぎに満たされた気がした。

ベッドの右側、窓の外の景色に目をやった。

名も知らぬ広葉樹が敷地に整然と植えられている。

昼の陽差しは本格的な真夏の到来を告げつつあった。

左腕の点滴の薬液が効いてきたようだ、

睡魔の訪れを感じた。

ゆっくり、両眼を閉じる。

同時に、個室のスライドドアの開く音がした。

マミヤはなんだか、目を開けるのも億劫だったので、  
聴覚だけ研ぎ澄ませることにした。

最初に聞こえたのはキャロルの声である。

「マミヤッ」

いっつも、元気いっぱいの彼女。

毎日のように病室に遊びにきてくれる。

「寝てるのかなー？」

チハヤの声。

にぎやかなマミヤの病室で、常にふたりっきりになるチャンスを  
狙ってるっばい。

可哀想だけれど、こればかりはどうしようもない。

「テレビつけっぱなしでなにをやってるのかしらね」

マミヤは、頬のゆるみそうになるのを懸命に押しもどす。

彼女の声を聴いただけで、眠気なんぞ吹っ飛んでしまう。

さて、そろそろ目を開けようかと思ったそのとき、

キャロルが、

「そつれにしてもわっかんないっ、

マミヤったら姫の正体がエリカだってどうやって気づいたんかなー  
？」

「たぶんねー、パンツァーから丸見えのド貧乳のシルエットでね、  
バレたって思うのー」

「私より貧乳のクセして黙ってなさいよ」

「ひどいのー、姫っ」

「姫ったら、捕獲されたあと声はずうーと、

デジタル変声してたんでしょ？」

「そうよ声ではバレてないはず、やっぱり、私の態度とか、  
単純に背格好で見抜いたとか？」

「いやでもさあ、カグラさんの話聞いたけど、  
確信もってエリカだっ、っていったらしいし？」

慎重なマミヤがそこまで断言するんなら何か確証があったはずじ  
ゃない？」

「やっぱりねー、ド貧乳が——」

「コロすわよチハヤ？」

「痛いっ痛いのー、やめてよ姫ーっ」

「ああっ、やめなってもう、ふたりともーっ」

マミヤは起きれなくなってしまった。

起きたらソッコー、問い詰められるに決まってる。

なぜ、姫の正体をエリカだと、気づいたのか？ と——。

マミヤはなんとも、そう、救い難いまでに、

途方も無く嫌な感じの汗をかき始めた。

「あっ、マミヤったら寝汗スッゴいかいてるよっ」

「わたしが、わたしが拭くのーっ」

チハヤの声と同時に、マミヤの下半身を覆っていたタオルケットがはぎ取られてしまった。

エリカとキャロルが一斉に、

「なにがしたいんじゃあ、テメエはあーっ」

「顔がねー、こんだけ汗かいてるから下はもっと凄いことになってると思ったのー」

「あんた第三級二度も起こしてひとんちぶっ壊しといて、私の彼氏に何しようとしてんの？」

「下は私が拭いてあげるって決めたーっ」

チハヤの、断固たる決意のこもった声だった。

キャロルが笑い声を上げて、

「どーすんの姫ーっ、チハヤにまかせる？」

それとも姫がお拭き遊ばすの？ マミヤのを？」

「のを？ って何？ マミヤのを？」

って？ な、なっ、なんのことかしらねっ、それ？」

「姫ーっ、超動揺してんじゃーんっ」

キャロルがいつそうガハハ笑いをし出した。

「姫わかんないのー？ 姫って案外鈍いねーっ、

当然マミヤ先輩の

おちんち——」

個室の中、取っ組み合いの始まる気配が聞こえてくる。  
服を引っばる音、激しく動く足音、

「ひどいのーっ姫ひどいーっ」

チハヤの半べその声に、エリカとキャロルのわめく声。

「この子を抹殺しないと私とマミヤの平穏が訪れないわっ、

なんなら、いまこの場でっ」

「姫っ、ストープッ病院よここっ、病院っ」

三人の喘ぎ声が聞こえてくる。

ぶつくさと文句をいいあう声も。

「もー姫ったらー、

脱ぎたてショーツ渡すくらいヘーキでやるくせにヘンなのーっ」

「ヘンなのはあんたの腐ったアタマの回路のほうよっ」

またしても取っ組み合いの音が始まる。

キャロルの、やめろーっ、と割って入る声で収まった。

キャロルが、落ち着けふたりとも、そう諭している。

なんだかんだいって、やっぱり彼女はふたりより上級生、

一四年次生だけのことはある。

それにしても警察病院で保護観察中のエリカには、

いつもの冷笑的な態度とは打ってかわって、困惑がありありと見てとれた。

マミヤにはそれが手にとるようにわかる。

やっぱり、魔導少女にとって、身バレするとゆうことはそれだけ

重大な関心事、

ということのようだ。

しかもバレた理由がわからない、ときているのだ。

焦るのも無理はない。

たしかに。

そして、マミヤが異常な汗をかくのも、無理は無かった。

「とにかく、彼の汗は私が拭くわ」

エリカの手。

そっ、とハンドタオルで頬を、額を拭いてきてくれる。

とても気持ちよかった。

よいのだけれど、起きるタイミングをどうしたものか、

マミヤの心は乱れる一方だ。

「マミヤ？ どうしたのかしら、

拭けば拭くほど汗が出てくるわね」

「ホッペ赤いじゃん？ 熱かな？」

エリカとキャロルがそう話す。

ふたりの貌が、かすかに近づいてくる空気を感じる。

マミヤは必死に息を押し殺し、寝たフリを続行した。

「ねえ姫？ もしもマミヤが気づくとしたら試合が決まってから霞ヶ関へ突撃する間、

そのあいだにあんたらふたり、肩並べて歩いてたんだよね？」

「そうだけど」

「ならそのあいだに気づかれたんじゃない？」

マミヤとは何をしゃべったの？ その間に？」

沈黙がおりる。

エリカの汗を拭く手はやまない。

やさしくとつても丁寧にぬぐってくれている。

マミヤの冷や汗は一向に収まる気配は無かったけれども。

「汗、やまないねー」

チハヤも心配そうにいつてくる。

「……そういえば、私汗だくだったつけ？」

マギアパンツァーの電源が切れて空調止まって地獄のように暑かったわ」

「そんで？」

キャロルが先をうながしてくる。

「それでね、マミヤったら……」

「どしたの姫？」

顔笑ってるけど？」

「えっ？ いやあのね、マミヤったらね、

わ、

わっ、

わっ、私のね、



体の、汗の

……匂いがねいい香りがするんですとか、

真顔で超ムツツリなこといったから、私ドン引きしちゃってっ」

「ドン引きしたにしては、滅茶苦茶うれしそーじゃん？」

「なっ、何いってんの？ んなわけないじゃないっ」

「はいっはいっ、チハヤね、理由がわかったのーっ」

「ふーん、当てにしないけどいってごらん？」

キャロルが期待ゼロの声でいった。

「姫はねー、マミヤ先輩にショーツを渡すときねー、

シゲミツのアホを瞬殺したレースの後でね、

湯上がり汗だくだったのー、

そのまんま慌ててあるときショーツ履いていたのね、

それでね、マミヤ先輩とのレースでも姫はパンツアー着て汗だくになっただんでしょ？

マミヤ先輩嗅覚すごーいつ、

？エリカのぱんつ？の匂いくんかくんかして、

姫のカラダの匂いもくんかくんかしたから同一人物判定したのよね

ー、

警察犬ロボットになれちゃうよー」

エリカの、汗を拭く手が止まった。

キャロルの息を呑む声がある。

爆速の鼓動はやむことを知らず、

冷や汗は脂汗となり、

顔中からダダ漏れラジエータ冷却水よろしく、

溢れ出してきやがったのである。

「きゃー、滝のような汗だわあーっ」

「きょう、滝のような汗だわあーっ」

「きょう、滝のような汗だわあーっ」

「きょう、滝のような汗だわあーっ」

「きょう、滝のような汗だわあーっ」

「きょう、滝のような汗だわあーっ」

キャロルの笑いかみ殺した棒読みの言葉に、

「ねーチハヤになんかご褒美くれるー？」

謎解いたんだからなんかちょーだい姫ーっ」

チハヤが盛んに催促してくるけれども、くるけれども――。

エリカ・ヴァンデル・メーアのタオルを握る手は、  
びたり、マミヤの頬の上で止まったまんまであった。

そのうち、ぷるぷると震えだしてきた。

タオルを思いっきり押しつけてきて、

「あら、どうしようかしら？」

拭いても拭いてもキリがないわね」

もどってきた、あの、エリカの冷笑的態度がもどってきた、  
ついに、いま。

そしてマミヤのほっぺたにハンドタオル越し、  
固めた拳をぐりぐりとねじ込んでくる。

「どうしたのかしらね、これでもまだ起きないなんて？」

エリカの声は、強制冷温停止にもっていった

魔導爆燃機関そのものであった。

「そうね、ワタシもおかしいと思うっ」

キャロルの声は笑い死に一步手前である。

エリカは、マミヤのほっぺたに思いつきり

ドリルの先端みたいに拳をあてがいながら、

「貴方、ストイックそうだから死ぬほどの恥を忍んで渡したのよ？」

？アレ？をね、まさか

……ホントに使われるとは思ってもみなかったわ……

？アレ？をね」

？魔女？だ、マミヤは思った。

エリカ・ヴァンデル・メーアは紛れもなく、

男を誘惑して離さない、魔性の女の子だ、

そう思う彼であつた。

「起きないわねマミヤ曹長っ」

キャロルの笑いながらの掩護射撃。

「ねー姫ー、ご褒美はー？」

「マミヤ曹長の手荷物を調べてくれない？」

「アレ？見つけて回収したらチハヤにケーキをいくらでもおごつてあげる」

「やったーっ」

チハヤのハッスル声に、

マミヤは上半身をびくつかせ飛び上がり、

「無い、こっ、ここには持ってきてはいないんだ」

「ようやくお目覚めね、審問官さん？」

「……獵騎兵だ」

「いいえ、これから貴方が異端審問にかけられるのよ、私たち？魔導少女？の審問にね」

くすつ、と笑んだ、魔導の姫は笑んで、

「さあ、白状なさい、

いったい、何に、

どうやって使ったのか？

どこまで使ったのか？」

「なあエリカ、こんど……そうだ、

こんどふたりで立ち食いソバ屋を探さないか？

もういまの日本じゃ見つけにくいけど、

なんとか探してきみとエビ天四つを――」

「ご、ま、か、さ、な、い、でっ」

エリカが真顔でマミヤに顔を近づけてくる。

「さあ答えて頂けるかしら、マミヤ曹長さん？」

マミヤは、ぐるり、首をめぐるして、

外の広葉樹を眺めやった。

素晴らしい、快晴の昼下がりであった。  
そよ風に木々が揺らめいている。

「……………」

……………黙秘権を行使します」

「あら？ 愛の異端審問に、黙秘権は通用しないのよ？」  
姫は嗤った、魔導の姫は高らかに哄笑した。

**魔導の姫は、マミヤに正体を見破られた理由を知って相当お怒りのご様子です**

あとがき

以上で第一章、終了であります。目下、この章の推敲を重ねております。

つづく第二章なのですが、なんとかプロットをまとめて、形にしたいと、そう思っている次第です。しばしのあいだ、お待ち頂けましたら、幸いに存じます。

ここまでお読みくださり、ほんとうにありがとうございました。  
篤く御礼申しあげます。

友絵少尉 2011年11月29日 AM5時49分

## 地獄の退院祝い

〈退院おめでとう、マミヤ曹長!〉

でっかい横断幕がマミヤの部屋に飾られてある。

キャロルとチハヤのお手製だ。

マミヤの住んでいるここは、

狛騎兵に用意された官舎である。

ワンルームマンション、ひろさは畳一二畳分ぐらいか？

けっこう広々として整理整頓のゆきとどいた部屋だった。

中央、ガラスのローテーブルに主賓のマミヤが座っている。

ひどい顔をしていた。

怪我は治っている、だから怪我のせいでは無い。

それはあたかも、

新郎のマミヤと新婦のエリカの結婚式場、

披露宴の真っ最中に招待客のひとり、

幼馴染みのナホが、

「その結婚に異議ありっ、っと、

まあそう唱えていきなり丸いテーブルから立ちあがり、

新郎と新婦の席めがけて猛烈ダッシュ、

ナホちゃんが？あたしと逃げてマミヤッ？」

キャロルがそういつて、

天井へと高々両腕を捧げ上げてくる。

チハヤは、キャロルの真ん前で、

やっぱり棒読み、

「ダメだ、許してくれー、ナホー、

ってゆーか、エリカとナホ、ふたりともおれのモノだー」

といって、

小芝居をしているふたりが一斉に笑い出した。

マミヤはますます脂汗を滲ませてくる。

「あんたら、そのふざけた小芝居止めてくれないかしら、コロしたくなるから」

エリカがいった。

極低温の深海の中、

宿敵のダイオウイカを食い殺そうとしているマッコウクジラさながらである。

相手のダイオウイカ、いやいや、

ナホはエリカを睨みつけながら、

「なんで？」

サバトの経営者の娘がどーして猟騎兵の退院パーティーにいるのかなっ？」

マッコウクジラはマミヤの左に、

ダイオウイカは右に座って、

互いに真正面から思いつきりガンを飛ばしあっている。

「なあみんな？　せっかくのケーキがあることだし、

冷めたら不味いし——」

マミヤが恐る恐るいうと、

ダイオウイカ、じゃなくってナホが、

「どこの世界に冷めたら不味いショートケーキがあんのよっ」

「そうよ、主賓はおとなしくケーキでも食べて黙ってなさいよっ」

エリカもマッコウクジラの下迫力で一步も引けをとらずにいる。

こんだけ主賓のないがしろにされるパーティーとゆうのも、

めずらしいものである。

「あっ、でもデリバリのーピッツァは冷めるとヤダからもらおうとっ」

キャロルがさっそく、

三〇センチ以上のLサイズ、チキンとバジルのピッツァからワンカットを手にとった。

チハヤも小芝居に飽きちゃったのか、

うれしそうにケーキに手を伸ばす。

「質問に答えてほしいんだけど、ってか、  
キャロルさんとチハヤさんだっけ？」

「マミヤいつの間にこんな女友達をつくっていたわけ？」

ナホの質問にキャロルが、

「はいっ、実は、このまえのG？であの世界の姫を倒したマミヤ  
くん、

ワタシ憧れちゃって、

親友のエリカちゃんに頼んで来させてもらいましたっ」

「そー、チハヤもね、なんだかそんな感じなのー」

ナホがキャロルとチハヤをうさんくさげに見回してから、  
マミヤにむかって、

「あっそ？ まあとにかく、

サバトの関係者とは縁を切ってよっ」

「ん？ んー、なんとゆうか、あのなナホ、

仕事上多少のつきあいというものがあるんだ、  
あくまで仕事上の――」

ローテールブルの下、

エリカがマッコウクジラ必殺アタックばりにキックをマミヤにお見  
舞いしてくる。

「……仕事上？ あらそう、

私たちそれだけのカンケーだったってことね」

「いや、ちがうんだ、エリカ……」

こんどはダイオウイカのがぶりより触手アタックっぽく、

ナホがキックをマミヤに放つ。

「ちよっと、どっちなのよ？ はっきりしなさいよ天下の猟騎兵っ」

「う、うん……すまん、ナホ」

ナホは例のあのEペーパーを、

？異性交遊申請書？をスクールバッグからとりだしてきた。

「もういいわ、この場でサインしてちょーだいっ」

といって、マミヤの鼻っ面に突きつけてくる。



「あら、ホントしつこいセンプイなこと、

未だその？私の肉体すべてを蹂躪してください、  
とあられも無く媚びへつらう申請書を？――」

「だからやめてよっ、そーゆういい方はーっ」

「私はマミヤと中学のおなじ一三年次生、

別にマミヤと親しくして何がおかしいのかしら？」

「いま、マミヤのこと呼び捨てにしたわね？

マミヤ先輩でしょっ、先輩っていいなさいよ」

「だってナホセンパイ？

私たち仕事上のつきあいもあるから、

ある意味対等のパートナー、ってところかしら」

そういつてエリカはマミヤに流し目を送ってくる。

「色気づきやがって一三のガキがっ」

「私まだ一二ですけど？」

「あっそう？

じゃあ小学校一二年次にもどればあっ？」

深海の化け者対決の長引く中で、

キャロルはピッツアを、チハヤはショートケーキに夢中になっている。

マミヤが、音を上げてしまった様子で、

「ちよっとトイレに……」

そういつて席を立つ。

逃げ込むようにトイレの個室に突入した。

エリカの吸いこまれそうなまでに黒い、小宇宙のような双眸が、  
きらり、超新星爆発のように煌めいた。

「いまよ、みんなっ」

エリカが立つ。

キャロル、チハヤも浮き浮きしながら、立ちあがる。

ナホが訳のわからない、

そんな顔になるのを無視して、

「キャロルはクローゼットを、

チハヤは小物入れっ、

私は大本命のベッド周りを見るわっ」

「ラジャーッ」

「らじゃーなのー」

三人の狩人たちは瞳を爛々と輝かせながら、

家捜しを始めだした。

そう、？アレ？を回収するためであつた。

「ねえエリカッ、

アレが原形とどめてないくらいの有様だったらどーすんの？」

キャロルが意地悪く笑顔をうかべてくる。

「聞きたくないっ、

聞きたくはなーいっ」

エリカは必死の形相でベッドのマットレスの下に両腕を突っこんでいる。

「ちよつと三人とも？

なにをしてんのよマミヤの部屋で失礼でしょっ？」

ナホも立ちあがった。

「キャロル、説明して差しあげなさいっ」

「はーい、あのねナホちゃん、

マミヤ曹長ったらこのまえ突然エリカのサバトにきたらしいの、

そんで？猟騎兵の捜査権を行使します？つってね、

エリカの部屋を家宅捜索したんだよ、

彼女が後で部屋調べたら、

いちばん高価なショーツが一枚だけ無くなってたんだってさー」

「そーそー、一万八千円のシルク製だよー」

「チハヤ？ 余計なことしないで手を動かしてっ」

「はーい」

チハヤはエリカにドヤされても、

なんだかのんびり、小物入れを引っかきまわしている。

「そんな、ふふっ、あの硬派なママヤが？  
するわけないじゃないの」

ナホが余裕の笑みをうかべ出す。

「……まったく、知らぬがブツダ、とはこのことよね」

「知らぬが仏つつーのよ、エリカ・ヴァンデル・メーアッ」

ナホがさらにまくし立てようとしたとき、

トイレから水の流れる音がしてきた。

エリカが、さっ、と右手を挙げて、

「退<sup>ひ</sup>けっ」

三人がすかさず？ガサ入れ？をやめてローテーブルの席に舞いもどった。

ぱんつはどこへ消えた？

マミヤは苦行僧そのものって表情をしながら  
トイレから重い足取りでやってきた。

「可哀想に、

マミヤったら誰のせいでこんなにやつれてしまって……」

ナホがピッツアを一切れ、

彼のために受け皿にとってやった。

「そうそう、それでね、

エリカがおかしなこというんだよ、マミヤが彼女の――」

ローテールブルの下、深海の底で、

マッコウクジラのローキックが、エリカの、ぷるんっ、とした太も  
もが躍り、

足先がナホの脇腹を直撃した。

ダイオウイカ、KOのピンチである。

ナホが両手をお腹にやって、苦痛と涙をうかべ、

エリカを見やる。彼女はしれっとした感じで、

「マミヤ、ケーキも食べてほしいの」

「……あ、ありがとう」

マミヤは、ナホのピッツア一切れと、

エリカのショートケーキピースとを小皿に盛られ、

やけくそ気味に口に運んだ。

「とっても、美味しいな……」

涙声であった。苦行僧というものは、

断食明けにはもっとお粥とか消化に良いものを食すのが普通である。

脂ごつてりの料理を早食いで平らげて、

マミヤのお腹が音を立てた。

トイレの排水管の流れるような、ろくでもない音であった。

彼がお腹をさすりだす。

「あらどうしたの？ マミヤ？ 調子悪いの？」

「うん、ちょっと、ね」

「キャロル、トイレへ連れて行って差しあげなさい」

エリカの一声に、はい、

と元気よくキャロルが答えてくる。

「いい、だいじょうぶ、ひとりで、

い、いけるから」

マミヤは、ふらりと立ちあがり、

再びトイレで苦行を積むための旅に出ていった。

女子たちは、

若き苦行僧の後ろ姿が個室に消えるのを見とけると、

「再開っ」

エリカの号令一下、直ちにガサ入れに復帰する。

ナホがお腹をさすりながら、

「あんたらどういうつもりよ？」

ふざけたことをいって下着出てこなかったらどうするつもりなのよ

っ？」

エリカは手を休めずに、

「どうもしないわ」

「なんですってえっ」

KO寸前だったナホは怒りのパワーで復活、

体をおこしてきた。

トイレの水の流れる音がしてきた。

「退けっ」

女子たちがふたたびローテーブルの席につく。

ガチャリ、と音がして、トイレのドアが開く。

マミヤが顔をのぞかせる。

少年苦行僧は、

断食のやりすぎで拒食症患者のような面構えになっている。

「誰か、胃薬とか、痛み止めとか

……もってないかな？」

ナホがバッグから、生理痛の薬をとりだす。

すぐにトイレのドアに駆けよって、彼に渡してやった。

「水無しで飲めるからね、口で溶かすタイプだから」

「ありがとう……」

トイレのドアがまた閉まる。

「再開っ」

エリカたちが作業に没頭し始める。

ナホは三人を見渡して、

「まったく、ひとの彼氏をなんだと思ってるのっ」

エリカがマットレスをひっくり返しながら、

「まだサイン済んでないからセンパイの彼氏では無いんじゃないかしら」

「言ってくれんじゃないのよっ」

キャロルがクローゼットをさんざん手荒くほじくり返して、  
とうとう音を上げだした。

「ねえエリカ、やっぱ無いよどこにも」

「そんなことは無いはずよ、

きつとどっかに隠し持って口では言えないイヤらしいことに」

チハヤが、ふうっ、と吐息をついて、

「マミヤ先輩がカワイソウ、実力をひた隠しにして、

独り一四連敗しながら

？魔導の姫？の暗殺計画を未然に阻止したヒーローなのになあー」

女子全員の瞳がチハヤにむいた。

キャロルが大げさな声で、

「あんた、たまにはまともなことも言えんのね、びっくりだわっ」

ナホが何度もうなずきながら、

「そうよ、彼は世界のヒーローっ、そしてあたしは彼のお嫁さんに  
ふさわしい世紀の……」

「世紀の？　なんなのかしらせんパイ？」

エリカがマットレスを元どおりにして聞いてくる。

「え？　ああ、なんでもないの、

どうでもいい話よ、べつにねえ」

ナホは含み笑いを漏らしながらも、  
勝ち誇ったように胸を反らしてくる。

彼女の可愛らしいふたつの胸が

——確実にエリカよりおっきいのだが——

Tシャツの上からくつきりと存在感を主張してくる。

途端、エリカは、自分のキャミソールの胸元に瞳を落として、

「なんだか無性に腹が立ってきたわ」

そこへ、チハヤがエリカのそばにやってきて、

「エリカー、気にすることないよ、

マミヤ先輩はエリカのこと、きっと大切に思っているよ」

エリカはそんなしおらしいことを言ってくる彼女をじっと見つめて、

「ありがと、チハヤ」

「マミヤ先輩も、毎晩幸せだと思っようよ？」

エリカのぱんつをくんかくんかしながら、

夜な夜な自分の

おちんち——」

跳びかかる、

三人一斉にチハヤに跳びかかる。

エリカが後ろ手に口元を塞ぎ、

キャロルが押し倒して、

ナホがトドメとばかりに、

チハヤのミニスカート越し、ちっちゃいおしりを思いつきりつねってやった。

「やっぱりこの子は抹殺すべきだったわ」

エリカが顔真っ赤にしながら、

チハヤの日焼けした頬にぐりぐり拳を押しつける。

「むぐーっ」

とまあ、チハヤが憐れな悲鳴を漏らしていると、いきなりトイレのドアが開いてきた。

エリカが咄嗟にチハヤを後ろから抱きしめる。

キャロルがチハヤのほっそりした腰に両手を回し、ナホはどうしたつもりなのか、

目のちっちゃいおしりに頬をすり寄せた。



## ナホ、人生大勝利の巻

マミヤはドアの陰から、抱き合う四人を眺めやった。

断食苦行の末、ようやく悟りを開いて山里に降り、飲食店に入ったら、そこは百合が売りのキャバクラだったとゆうオチというか……。

女子のいちやつく光景が自分のワンルームでくり広げられているのを見て、

マミヤは一言、

「みんな、ほんとうは仲がよかったんだね」

実にうれしげに、弱々しい声でいつてきた。

四人は気まずげに、互いの顔を見て、

それからチハヤに引きつった笑みを投げかけてから、

「も、もちろんそうよっ」

エリカが代表するかのようにつた。

ワンルームに、着信音が鳴り出した。

あれ、ワタシのかな？

とキャロルがいつて自分のリストタブレット端末、通称リストタブを見る。

エリカとチハヤが見て、

ナホが自分のリストタブをチェックした。

「あたしのだわ」

ナホがいつた。みんなから離れ、すぐにビデオ通話回線を開く。

『やあナホさん、夕食時に申し訳ありませんが、例の件で報告をと思ひまして』

リストタブのちいさな画面に映っているのは歳をとった白人男性だ

った。

上手な日本語だ。

エリカたちが後ろからのぞきこむ。

マミヤもトイレからよろよろと出てきた。

エリカは思わず声を上げそうになった。

よく知っている男だったからである。

？魔導の姫？たるエリカとスポンサー契約を結んでいた、

あのヘルマン&ハインeman社の顧問弁護士をしている人物だった。

彼女も契約のときなど何度も会って話したことがある。

老人の弁護士は、エリカがナホの肩越しで息を呑むのを、  
ちらり、見てから何事もなかったかのように話をつづけた。

『H&H社のシャハト氏の容疑はほぼまちがいの無いものとなって  
きました、

先ほどニッポンの警視庁から連絡がありまして、  
同氏が自供したそうです、

これで同社は？魔導の姫？との独占契約の権利を喪失しましたよ』

「良かった、先生、それで？

交渉はどうなったの？」

『はい、お喜びください、魔導の姫の独占スポンサーは、  
ナホさんの申し出通り貴女に最終決定いたしましたよ』

「きーっ、ありがとう先生っ、

お金積んだかいがあったわーっ」

老弁護士がまた、ちらり、エリカを見てから、

詳細な契約について、のちほどしなければならぬ手続きのことを  
ナホに話した。

ナホが通話を終える。

両手を腰に回し、

仁王立ちになって後ろのローテーブルをふりむいた。

みんな、自分の席に座りこんでいる。

「あれ、なあに？」

まるでお通夜みたいじゃないのよっ、どうしたの？」

そう、全員の目が、

あまりの超展開についていけなくなっているのである。

マミヤが周りの女子を見回してから、

「ナホ？ きみの家はたしか普通の中流家庭だったと思ったけど」

「うふふっ、ついこの前まではねっ」

ナホは有頂天になりながら、

スクールバッグの底を漁って、小物入れのポーチを出した。

中から紙幣サイズのEペーパーをとりだしてくる。

「さあ、見てもいいのよっ、さあっ」

四人の前にそれを突きつける。

それは紛れもなく魔導少女迎撃競技杯、しかもG？レースの結果

予想投票券であった。

《購入者の予想結果…山猫の捕獲 最終倍率…七五万一四四三倍》

そしてさらに、

《本券の払戻金は本人確認を経て支払い済みです 賭け金…一口  
一〇万円》

キャロルが目を見釘付けにしながら読んでいく。

「払戻金総額……一〇万円かける七五万一四四三倍で  
……七五一億四四三〇万円……」

「そうよっ、マミヤッ、

あんたとの結婚資金として何不自由がないのよっ、安心してねっ」

マミヤはナホを見て、すこしばかり微笑んだ。

それからエリカを見て、キャロルとチハヤを見る。

エリカは、というと——。

「美味しいわねー、このショートケーキ」

無表情にケーキを口に運んでいた。

ナホは完全勝利を確信した様子で、

「どう？ これでわかったでしょう？」

エリカ・ヴァンデル・メーアッ、どうやらアンタ、あたしのママヤに気があったみたいだけど、

これからあたしは魔導の姫のスポンサーッ、

彼女に稼がせながら悠々自適、

あたしの未来の夫は、姫に世界で唯一勝利した、

そう、ママヤ、そのひとつ、

なんだか世界を手に入れた気分だわあーっ、

あたしとママヤは世界を股にかけるカップルになっていくのよねっ」

「……ケーキ、美味しいわ」

エリカの現実逃避はとまらない。

「ふん、これでわかった？ 世界に躍り出るあたしと、

東京のしがないサバトの経営者の娘のアンタ、

どっちがママヤを幸せにできるのか？」

ナホはママヤの右側に座り、彼にしなだれかかった。

「ねえ？ ようやくあたしたち、幸せになれるのよね、

猟騎兵もね、いつだって退職してもいいんだからねっ」

「あー、その、なんとというか驚きだ、ナホ」

「いいのよ、いまは実感が湧かなくっても当然よねーっ」

ナホはるんるんしながら、

ママヤの右腕をつかんで離さない。

「……ええっと、た、食べよう、ピッツァ、みんなでさっ」

キャロルが場を取りなすように必死の笑顔をうかべてくる。

チハヤだけはどうでもいいといった感じで

——ある意味すごい子である——

ショートケーキをいくつもさらに取り分けて美味しそうに食べている。

「エリカー、美味しいねこのケーキ」

チハヤの無邪気な問いかけに、

エリカは、

「そうね、美味しいわね……」

機械的に口に運びつつけるばかりであった。

本日のパーティー、深海化け者対決、

ダイオウイカの逆転勝ちとなった様子である。

## 新たなる？魔女？

その日の深夜。

その三十代の軍政異端審問局、

普通科歩兵は夜の巡回を終えて守衛室にもどってきた。

ドアのまえでちよつとばかり顔をしかめる。

今夜の相棒は、弱冠一二歳の？兵長？サマである。

このガキにしろとにかく猟騎兵つてのはエリートだ、それは百も承知している。

しかし、しかしである。この男は思ってしまう。

三十過ぎてんのに、俺はまだ上等兵、

連中は一二歳で幼年士官学校卒業したら、

即最低でも兵長から出世競争のスタートときたもんだ、  
いったいどうなってんだこの世の中？

「やってらんねーよ」

上等兵の男は、だからつぶやいた。

ため息をついて、ドアを開ける。

八畳ぐらいの守衛室。

ドアの正面、来客と対面するための受付窓が設けられてある。

その窓の手前、守衛用のデスクが二台。

右のデスクに座っていた？兵長サマ？が直立してくる。

「お疲れ様でありますっ」

元気いっぱい、声変わりもしてない高音でそういうと、  
敬礼をしてくる。

「兵長殿、だから気を楽にしてくださいって、自分、上等兵ですから」

「いえ、長幼の序というものがありませんからっ」  
どう見たって——あたりまえだけれど

——小学校出たばかりとゆう風情の小柄な兵長は、

また右をむいてテレビに釘付けになってしまった。

長幼の序、かよ？　そうだよ俺は歳だけ無駄に喰っちまったよ、上等兵はそう思うと、簡素なキッチン冷蔵庫からビールをとりだした。

「兵長殿は？　ハッピーソーダが冷えてますぜ？」

「あのう……軍務時間中にアルコール類、多幸系飲料の服用は……」  
「堅いこといいっこ抜きつ、」

こんな夜ぐれえ呑んだっていいじゃないの、兵長サマ」

上等兵は勝手にビールの三五〇ミリ缶のプルタブを開けてしまった。

少年兵長は、まだ何かいたげだったけれど、  
空気を読んでまたテレビにむかった。

それは民放ではなくネットテレビにチャンネルが合わさっている。

《アイ&ユーくんの？小学生突撃？社会レポート！》

画面右下にそうテロップが表示されている。

可愛い少女のアイちゃんと相棒のユーくん、

小学生アイドルコンビが毎週色んな大人たちに仕事のインタビュー  
をして社会見学する、

そういう趣旨の番組だった。

？政府御用達？とはちがう独立系の日本自由放送の制作番組である。  
髪をツインテールにしたアイちゃんがマイクをもって中央に映っ  
ている。

左にユーくん。

右ににいるのが、壮年の学者っぽい男性だった。

柔和な顔立ちをしている。

場所は大学の研究室のような部屋だった。

アイちゃんが、

『では先生、自己紹介をお願いしますっ』

『はい、東京魔導工科大学准教授のホウセイと申します』  
なんだかすごそうだねアイちゃんっ、

とユークンがいうと、アイちゃんがうなずいて、

『魔導工学ってゆうのは、魔法を研究するんですよねっ？』

『ええ、そうですよ』

上等兵はビールをかたむけながら、

一心不乱に見ている兵長を横目でチラ見した。

安手の応接セット、そのソファに寝っ転がる。

「アレでしょ、兵長はガッコで魔導習ってきたから、

こんなもん見なくてもいいでしょ？」

内心、自分の賭けた魔導少女迎撃競技杯、  
インターセフション・カップ

通称？インター杯？のレースの速報を

スポーツチャンネルで知りたくってしよがなかったのである。

「ぼく……あつ、いえ、自分は士官学校の座学では魔導工学が赤点  
ぎりぎりでしたので、

魔導に関することはなんでもチェックしようかと思ひまして、

それに、この准教授はとっても有名な先生なんですよ」

「ああ、そうでらっしゃいますか、はいはい……」

こりゃ、俺の賭けたG？の予想結果、当分お預けだぜ、彼はそう  
思った。

テレビでは、アイちゃんが、

『ではホウセイ先生っ、魔法の種類を教えてください』

『そうですね、まずもつとも皆さん知りたがるのは？攻撃系呪法？  
ですね』

『カッコいい、攻撃の呪法っ』

ユークンが目を輝かせる。

ホウセイ先生がうなずいて、

『これは、攻撃する人がですね、どれだけ魔法を信じているか、  
これがね、重要なんです』

『魔法を信じていること？』



突撃コンビが互いの顔を見合う。

『四〇年前にあのグレコ・イグレスias先生が魔導工学を完成させるまで、

誰一人、魔法なんて信じてはいませんでした』

ふたりがうなずいた。

『でも今はちがうのです、魔法を使う人がどれだけ強い？カセクト対象？を保持しているかによって、

呪法の威力がちがってくるんですよ』

『カセクトタイショウ？』

アイちゃんが不思議そうになる。

ユークンが得意げに、

『はい、先生、？カセクト対象？ってのは、

魔法を使う人が信じてる宗教のことなんですよねっ？』

『よく知ってますねユークン、ですがね、宗教だけとは、限らないんですよ』

『ほかにも何かあるんですか？』

とアイちゃんが質問をしてくる。

『なんだっていいのです、宗教以外にもね、

自分の大好きな人、大嫌いな人、それが物でも、動物だって良いんです、

なんでもいいから、自分がいちばん、心を動かされる存在、

その存在にね、難しい言葉だけれど愛憎を振り向けつつけること、

これを精神分析の用語でカセクスと呼びます、

自分がカセクスをむけつつける存在、

これが？カセクト対象？なんです』

コンビがうなずく。

『カセクスをむけつつける強さ、

この単位がですね？魔導力場展開？というんですよ』

『僕知ってるっ、このまえ都心で、魔導の姫が第一級のアーデルハイド暴走を起こしたってネットで見ました』

ホウセイが何度もうなずいて、

『そうですね、カセクト対象への想いが暴走してしまうと、とっても怖い暴走事件になってしまいます、

ところでアイちゃん、眼をつぶってください』

はいっ、とアイちゃん。

眼をつぶった。

『アイちゃんに質問です、好きな人でも大嫌いな人でもどちらでも良いです、

真っ先にまぶたの裏に浮かぶ人は、誰かな？』

アイちゃんは、はいっ、と手を上げて、

『もちろん、ユーくんですっ』

左にいるユーくんの顔が赤くなってしまう。

『はい、アイちゃんがね、ユーくんを好きでいればいるほど、

その想いが強いほど、攻撃呪法のパワーは強まるんですよ、

防御する人は、ユーくんを知ろうが知るまいが、

関係は無いんです、攻撃呪法のダメージで傷ついちゃうんですね』

怖いねーっ、とアイちゃんがいった。

ユーくんも同意する。彼が、

『じゃあ先生、防御するにはどうすればいいんですか？』

『はい、身を守るのにはいくつか呪法の系統が別れます、

一般的なのは中和力場で身を守るんです、？中和系呪法？です』

『中和系のカセクトタイショウはどうなるんですか？』

アイちゃんが訊ねる。

『はい、中和系呪法を使う人自身のカセクト対象の強さ、これが重要です』

アイちゃんは、なんだかホッとした様子で、

『よかったー、アイは、ユーくん大好きだから中和系の魔法で防御

は完璧だね』

ホウセイは、ちよつとばかり真顔になって、

『ですがね、アイちゃん、それを他人に知られるのは、  
とっても危険なんですよ』

アイちゃんが驚きの表情になる。

『どうしてですか？』

『拘束系呪法という系統の魔導力があるんですよ、

これはね、いまいった攻撃、防御とちがって、

拘束したい相手のカセクト対象を念じないと発動しないんですね』

『ええーっ、じゃあ自分のたいせつなものを知られたらコーソクさ  
れてしまうんだっ』

ユークンが大げさな声を上げた。

『そうなんです、くれぐれも気をつけてくださいね』

はいっ、と元気よく突撃小学生コンビが返事をした。

上等兵は三本目のビール缶を開けていた。

「ばかばかしい、どうせ魔導なんざ、

猟騎兵と魔女しか使えねーってのに、

俺ら一般人にはカンケー無ーわな」

上等兵が愚痴ると、

兵長が、

「ですが、自分の？カセクト対象？を他人に知られてしまうのは、  
危険ですよね？

拘束呪法をかけてくださいとみだりに言いふらすようなもんですか  
ら」

「ま、まあ、そうかも知れないけどねえ……」

と、そこへ来訪者を告げるブザーが鳴った。

ふたりの会話がやむ。

こんな時刻に？

司法関係者だろうか？

建物の出入り口、自動ドアが開いた。

人影が夜間照明のほの暗い光の下、受付窓口に、ゆらり、とシルエットを浮かびあがらせる。

兵長がセキュリティ上の義務のため、魔導石の入ったピルケースを左手にもった。

一五ミリほどの蒼く輝くカプセルを一錠右手にとる。

いつでもかみ碎ける準備をする。

上等兵も慌てて自分のデスクへ、

若い猟騎兵の左に陣取る。

その来訪者は、少女か少年なのか、

判断がつかなかった。

歳は、兵長より二、三歳ほど上ぐらいだろうか？

酔いのまわった上等兵は、少女と勝手に決めつけた。

？少女？の茶色い瞳も、肩までの髪の毛も、光沢をまとったそれは見事な輝きを帯びている。

いつかは呑んでみたいと思っている最高級ブランデーの琥珀色の煌めきだって

？少女？にはかなわない、それぐらいの上玉だ、上等兵は思った。

あと何歳か年が経ったら極上のイイ女になる、こんな女から異性交遊申請されてえなあ、なんぞと呑気なことを考えた。

その？少女？は窓口の防弾仕様の硬化プラスチック越し、テレビ番組を見やり、

「拘束系ね……逮捕が目的の司法関係者なら必須の呪法だけれど、もったかんだんな方法があるのに」

兵長の少年がいぶかしみながら、

「あの、ご用件は？」

「かんだんな方法って何かわかる？」

君、猟騎兵さんでしょう？」

兵長が危険を察知したかのように、右手を動かす、カプセルを飲むようにする。

少女のほうが、速かった。

少女の両の瞳、魔導の蒼白の色を帯びる。

無造作に片手の拳で窓口を殴りつける。

防弾プラスチックが、卵の殻のように破れた。

そのまま両手が伸びてきて、左手が兵長の頸を握りしめる。

右手は上等兵の頸を握った。

——嫌な音が、鳴った。

守衛室に、少女のいる廊下に、鳴り響いた。

少女は、事切れてしまった兵長を、

飽きたおもちゃの人形のように後ろへ投げやった。

少年の亡骸が応接デスクのソファに放りこまれる。

上等兵は、頸を絞められて悲鳴も上げることができなかった。

血走った眼で——異性交遊申請なんぞ二度と欲しくないから——命だけは助けてっ、

としゃがれた、空気の漏れるような声でささやいた。

「ここが〈法務省証拠品安全管理庫〉……まちがいないよね？  
まちがいなければ舌を出して」

上等兵が口から泡をふきながら、舌を出してくる。

「魔導の姫の愛騎……アルバトロスM—VK三六モデル一〇、  
どこに保管してあるのか、案内してもらえる？」

上等兵はまた舌を出した。

少女が微笑んだ。

左手の蒼白の色がさらに光量を帯びる。

膨らみ巨大化し、窓の残骸を守衛室側に吹っ飛ばす。

受付窓の壁の穴から、男一人、廊下の自分側へ体を引きずり出し

てしまった。

上等兵は、背の低い少女と相対した。

のど頸を握りしめられ、少女と対等の目線の高さの姿勢にされる。  
少女は残酷なまでに、美しかった。

？魔女？は、美しかった。

「さあ、どこ？ 案内してちょうだい」

上等兵は舌を出して応じた。

ふたりは、夜間照明灯の緑の光の下、保管庫へと通じる長い廊下を歩きだした。

## ？魔導テロ？捜査会議

七月も下旬、マミヤの通う中学校は、

世情不安による臨時休校のまんま夏休みに入ってしまった。

だからマミヤ的には、思う存分睡眠をとるなり、

エリカのくれたプレゼントで夜の青春の嗜みを楽しむなり、

好き勝手にやっていたいい一五歳の夏であった。

そのはずだったけれど。

その夜、猟騎兵第一連隊、第一大隊に緊急動員令が発令された。

マミヤは眠気覚ましに、睡眠阻害覚醒薬の入ったブラックコーヒーを飲みながら、

深夜のタクシエアマシンで練馬警察署に駆けつける羽目になったのだった。

警察署の本会議室、

夏期軍装に身を包んだ二七名の少年たちが集結している。

第二大隊からも増援が到着し始めてきていた。

ソルベ中尉の所属する大隊である。

警視庁捜査一課と練馬の所轄署の刑事たちも会議場に着席している。

本会議室は二〇〇人近い人員を飲みこんでいた。

今回、審問局に動員令が下ったのである。

当然のことながら、

「ひさしぶりに魔導テロの案件だな？　なあマミヤ？」

となりに着席した同僚の少年猟騎兵が同意を求めてくる。

「うん、まちがいないな」

マミヤがうなずいたところで、捜査会議が始まった。

捜査員と相對して、首脳陣が正面に陣取っている。

警視庁捜査一課長、捜査一課管理官、練馬警察署長、軍政異端審問局審問官たちである。

エリート然とした管理官の仕切りで会議は進んだ。

初動捜査で真っ先に動いた練馬の機動捜査隊から報告が上がった。

「被害者、第一異端審問猟騎兵連隊所属、コンノ兵長、死因は扼殺

」

会議室後方からざわめきが起こる。

第二大隊の面々だ。

コンノ少年は第二大隊の所属だった。

仲間が殺害されたのだ、怒りは当然だった。

マミヤが後ろを見る。

ソルベだ、彼もいた。怒気を漲らせながら、

隣と同僚と早口でなにかをしゃべっている。

「静粛にっ」

管理官が怒鳴る。

ひとまず会議室には沈黙がおりた。

もうひとり、審問局の普通科歩兵の男性上等兵も頸部の圧迫、

扼殺された形で死体が見つかったのだった。

現場はあきらかに異常な腕力の発揮された痕跡が見ついている。

防弾仕様の受付窓が粉みじんにされていたのだ。

爆発物の反応も見つかってはいない。

魔導の力、それにまちがいない。

魔導テロだった。

不味いな、マミヤは思った。

会議で情報が発表されるにつれ、その確信が強まっていったのだ  
った。

事件当夜、練馬区にある〈法務省証拠品保全管理庫〉  
の守衛はふたりとも異端審問局の人員だった。

証拠品倉庫からは？魔導の姫？の愛騎、アルバトロスが紛失した。

会議場のあちらこちらから、

R大佐の仕業だ、ヤツの部下たちが動いてるんだ、  
そういったひそめいた声が上がってくる。



マミヤの隣の同僚も、

「こりゃまちがいない、Rのヤツにまだ忠誠誓ってる獵騎兵が、証拠品をツブしたんだよ、

まだ弱い新米兵長の当直情報をつかんで刺客を送り込んだんだぜっ」

同僚は、マミヤ、君ならどう見る？

そう訊ねてくる。

困ったことに、あの魔導の姫に圧勝して以来、

仲間から、周囲からの？見る目？が完全に変わってしまった。

誰もが自分に愛想を見せ、話しかけてくる。

困ったことがあれば相談してくれ、そういうかと思えば、

この同僚のようにマミヤの意見を逐一聞いては参考にしたがる人もいる。

いわば？マミヤ派？とでもゆうべき人脈が第一大隊二七名の中に確固としてできあがってしまったのである。

「でも、芝浦の一斉蜂起のとき獵騎兵たちはみんなR大佐から離反したはずだよ」

マミヤの冷静な意見に、

同僚は唸り声を上げた。

思案顔で沈黙してしまう。

会議は捜査官たちから活発な意見、

情報のやりとりが上がって終了時間にさしかかった。

ひとりの獵騎兵が——ソルベだった——彼が挙手して質問をぶつけてきた。

「このまま姫のアルバトロスが見つからなかった場合、

裁判においてR元大佐の処遇はどうなるのでしょうか？」

嫌な沈黙が巨大な会議室を覆った。

首脳陣たちが目配せをし合う。

ジョーカーを引かされたように、首脳陣のひとり、異端審問官が嫌な顔を見せる。

それからマイクに口を近づけた。

「証拠不十分により？ R氏？は釈放になる見通しだ」

警察側の捜査要員たちから失笑が起こり始めた。

また審問局の内紛だよ、バカバカしい、とかなんとか、そんな論調だ。

司会役の管理官も隣の審問官になにか、不快そうに耳打ちしている。

すっかり政治的に立場の弱くなっている審問局としては反論のしようが無かった。

マミヤは、このろくでもない空気から一刻も早く逃げだしたかった。

ユリスモールでエリカとふたり、唯、静かに話をしたかった。

そう、どんな話でもいいから、彼女と、のんびり、しゃべっていたい。

いつかの日のように、アイスティーでも飲みながら。

## 姫の体の？悪魔の紋章？

魔導の姫は、アイスティーに砂糖ならぬ多幸剤、  
？ハッピー・ピル？を三錠も放りこんだ。

なにげに錠剤の入った箱を見る。

あの、ヘルマン＆ハインマン社の製品である。

自分を暗殺しようとしたシャハトが重役としてでかい面をしていた企業だ。

姫は頭の中の爆燃機関の炎をさらに倍加させてしまう。

「ムカつくわっ」

そういうながらも、このH&H社は多幸剤で世界シェア九九%を誇っている。

特許を取得しており、なにせ値段が安価な上に、効く、のである。実に効いてくれる。

脳みそのなかで暴れまくる感情も、嫌な記憶も、

？とりあえず、まあ、いっかーっ？って気分になさせてくれるのだ。

箱の裏側には注意書きが書いてあって、

「……一五歳未満、一日六錠まで？ 上等じゃないのよっ」

姫はさらに三錠をアイスティーにぶち込んでやった。

ちなみにいま、姫は一糸まとわぬふるぬーど、

すっぽんぽんのぽーん、であった。

ユリスモール、サバトの地下施設、

自分専用階の広々としたシャワールーム。

完全滅菌後のシャワーを浴びて、

くつろぐにもくつろげる気分では無い。

これから新しいスポンサーとの面会が待っているからである。

冗談ではなかった。

事前に渡された名刺。

〈オフィス・ナホ〉とインストールされたEペーパーである。

「略したら？オナホ？じゃないのよっイヤらしいっ」

姫は六錠のハッピーピル入りアイスティーを飲みほして、全身大の姿見で己のヌードを見た。

じっと、その黒い瞳を、輝く双眸を見つめる。

濡れた長い黒髪、そして未だ幼いアンダーヘア

……瞳と髪以外、肌は雪の結晶のように白い。

それが湯上がりですこし火照って、

ほのかに練乳を垂らしたようにすこしばかり色づいている。

両手を腰にあてがい、チハヤに下貧乳といわれた、

可愛らしいふたつの胸のふくらみ、

くびれた腰とおへそ、

長い脚にしっかりと筋肉のついた、

肉感的な太もも

……体を順繰りに見つめていった。

そうして、ちょっと諦めたかのようにひとつため息をついた。

ついてから、座りこんで、愛する男の子の前ですら、

ちょっとためらっちゃうぐらい、恥ずかしい恰好をとった。

要するに、両の脚、

白い太ももを思いつきり開いたのである。

？それ？は愛する男の子にしか、決して見せはしない秘所のすぐ脇に、

ぽつん、とあった。

鮮やかに浮かんで見える。

痣。

通称？悪魔の紋章？

魔導少女の証。

魔導少女症候群、

正式には？グレコ・イグレスィア症候群？を発症してしまった少女の、

その確かな証。

ビキニのショーツを履いてしまえば、隠れてしまう、そんなちいさな痣。

魔導の姫。

戦績、七二勝一敗。

これだけの数、レースをこなしてきたにもかかわらず――。

「消えないわね……悪魔の紋章……」

姫はつぶやいた。

その黒い瞳は、紋章を見つめる瞳は、

どこまでも冷ややかで乾いていた。

シャワールームの隅、小物類をおいたテーブルの上から受信音が鳴った。

リストタブレット端末、通称リストタブのメール受信のお知らせだ。新しいスポンサー様が地下一階のレセプションルームにご到着、とのことであった。

「いくわよ、いきやあ良いんでしょ」

またため息ついて

――六錠飲んでもハッピーにはほど遠い気分で――更衣室へとむかった。

## ナホVS. 魔導の姫と女の舌戦

「遅いつ、もう、機長ハッピーソーダおかわりっ」

ナホが豪華なロココ調のソファに座ったまんま叫ぶ。

機長がタンブラーを受けとり、

「あいよっ社長」

口笛吹きながらレセプションルームのバーカウンターに足を運び、新しいソーダをつくってくる。

この機長、ちゃっかりオフィス・ナホの社員として、

社長であるナホ専属エアマシンプイロットとなっていたのである。

ちなみに錠剤の数をオーダーしないハッピーソーダは、

一錠入れてくれ、という意味合いである。

「姫ったらいつまでスポンサーを待たせるつもりなのっ、もう昼よ、昼っ」

苛立ちを隠さないナホに対して、

老弁護士がおだやかに両手を挙げて、

「社長、そうおっしゃらずとも

姫はいま更衣室を出たそうですので、もうすぐくるでしょうな」

そういつて手元のロングテーブルの上の何枚もの書類、

Eペーパーの山の確認作業を再開する。

この老人はきのうの地獄の退院パーティーのとき、

ナホに連絡をしてきたあの白人弁護士だ。

ナホが機長からタンブラーをもらい、

マドラーで手荒く引っかきまわしている。

赤い錠剤が一錠、きれいに発砲しながらソーダに溶けてゆく。

老人が書類の整理を終わらせて、

公認会計士とノートブック型端末でビデオ通話を始めた。

ナホたちが入ってきたドアとは正反対の出入り口、

両開きの重厚なドアが開けられた。

魔導の姫が現れた。

ドア口、両手をほっそりした腰に当てふんぞり返っている。

ナホは愕然としていた。

相手の態度に対してではない。

姫は全身にローズレッドのマギアパンツァーをぴたりと着用して

——これだけならまだしも——

なんとその貌を隠すかのようにフルフェイスヘルメットをすっぱり、被っていたのだった。

『待たせたわね、新しいスポンサーさん？』

姫がデジタル変声した声でそういつて、

ロングテーブルでナホの正面に位置する席に座りこむ。

ドアを背にして姫、

真正面にはナホ、

右側に弁護士の人。

機長は左に並ぶバーの高級酒に見惚れていたけれど、

興味を姫の顔に移した様子でしげしげと見つめてきた。

ナホは、じつ、

と姫を睨みつけてから、

「機長っ、姫にハッピーソーダをお出ししてっ」

「あいよ社長っ」

『けっこうよ、要らないわ』

「あら、あたしのおごりでソーダは飲めないってゆうの？」

『契約書をよく読んでいただきたいのだけれど、

あなた方に素顔を見せるつもりは無いのよ、

だからこのヘルメットは脱げないし、

この場で何も飲んだり食べたりはできないってわけ』

姫はそういつて優雅に足を組んだ。

ナホが老弁護士を見る。

「ええ、姫のおっしゃるとおりですな、

彼女はついこの前命の危険にさらされたばかりです、同様の被害を防ぐためにその正体を知る人物は極めて限定されています」

「スポンサーのこの私ですらっ？」

「はい、ナホ社長、残念ながら」

「っ……しょうがないわねっ、先生、ほかには？」

何かまだ知っておかなくやいけないことあるの？」

老人がしゃべろうとするのを、

姫が手で制した。

『ボディガード条項はご存じかしら？』

「なによそれ？」

『嫌だわ、スポンサーのくせになんにもご存じないのね』

姫がロココ調の猫足のソファの上、

退屈そうに両手を挙げて伸びをする。

ナホがまた姫をひと睨みしてから、

弁護士を見た。

「は、えええとですな、

姫の専属ボディガードとして、

マミヤ曹長を可能な限り姫の周囲半径三メートル以内において待機

状態とすること、

以上、東京地方裁判所の保護観察決定事項です」

「はあああああーっっっ」

ナホが老弁護士に食ってかかる。

高級ローテーブルの上に膝乗りになっちゃって、

「どーゆーこと先生？」

なんでっ、

どーしてここでマミヤの名前が出てくんのっ？」

『教えてあげるわスポンサーさん、



私が先日第一級アーデルハイド暴走を起こした件、  
ご存じよね』

「ええっ、ひどい目に遭ったわっ戦争でも起こったのかと思って、  
永田町の銀行でぶるぶる震えてたんだからっ、  
ねっ、機長っ」

「そっすね、

社長、ありゃ参ったわマジでねえ」

『あのとき、私の暴走をとめることができたのは、  
あのひとの、  
マミヤ曹長との……』

思いつきり間をおいてから、

『……彼との、キス、だったのよ』

——がっしゃーんっ、

とガラスの割れる音がした。

ナホが自分の手元のタンブラーを床の絨毯に叩きつけて割ったの  
だった。

毛足の異様に長い高級絨毯ですら衝撃を吸収できないぐらい、  
そんぐらいの勢いで投げ落としたのだった。

ナホがついに立ちあがって、

「アンタ、ま、まさかあたしのマミヤにふしだらな、  
かつ、感情をっ?——」

『ええ、私、彼を愛しているの』

## ナホVS. 魔導の姫く女の舌戦く後編

ナホはパニックに陥った様子だった。

きのうの暴力パーティーで、

マッコウクジラ（メス・一二歳）に勝利して意気揚々と乗りこんできたってゆうのに、

この展開はなんなのかしら？

って感じで、ふわんっ、とポニーテールを揺らしながら、

椅子の上で、ずるずる、体をくずおれさせてしまった。

老弁護士が書類に目を落とす。

機長があごを引っ掻きながら、

「社長、あのー

……見えてますってばっ」

「……え？」

彼女がテーブルの下に目をやった。

ワンピースがめくれ上がり、

フリルのついた縞々ショーツがモロ見えであった。

急いで裾の乱れを直して、

「わっ、わけわかんないっ、

だからってどーしてマミヤが護衛になんのよっ？」

老弁護士が咳払いをして、

「それは姫の？カセクト対象？がマミヤ曹長だからです、

姫の第一級暴走がいかに脅威かは誰もが認めるところですな、

よって姫が万が一暴走したときにも早急に食いとめられるよう、

言葉を換えれば、すぐさまキスのできる位置にマミヤ曹長を配置すること、

これは、姫が矯正収容所に送致されないために決定された絶対条項です」

「とにかくっ、気に入らないわねっ、

そもそもこのサバトにアンタが、

魔導の姫がいたって時点から気に食わなかったのよねーっ」

『このサバトに何か問題でも？』

「ええ、大ありだわっ、

ここんちの娘、

エリカ・ヴァンデル・メーアってんだけどあの小生意気な一三年生もあたしのマミヤに気のある態度見せてんのよっ」

そういつて、きれいにセツトしてきた髪の毛を引っ掻きむしる。

「どーゆーこと？ このサバトがらみでいつつも、

いーつもっ、ろくでもない目に遭ってゐるわっ、

マジ信じらんないっ」

『貴女、男運が無いのね、

それこそ絶対的に皆無なんじゃないかしら？』

「……」

『あら、どうしたの？』

「なんっか、アンタ見てっとな誰かを思い出すのよ、

誰かとケンカしてる気分になってくんのよねー……」

『スポンサーさんお疲れじゃなくって？』

それ、既視感<sup>デジャヴ</sup>ってゆうのよ』

「……………んぐっ」

わなないているナホに、

老弁護士が助け船を出すかのように、

「状況を整理いたしましょう、

まず、魔導の姫はあくまで魔導少女です、

世界的に高名で富にも囲まれておりますが、

しかし、猟騎兵であるマミヤ曹長との異性交遊許可証が

政府から降りることはございません」

姫がヘルメットごと、ぷいっ、と横をむいてしまう。

ナホが両手にVサインをつくってきて、

「そうよっ、そうだったわーっさすが弁護士さんっ」

『あのひとが猟騎兵を退職すればそれですむ話よ?』

「ああ~~~~らっ、

魔導の姫に、世界を支配した魔導の姫に圧勝したあの、  
あたしのママヤをつ、

人類世界最強の猟騎兵を

この国の軍政府が手放すわけ無いじゃない?」

そういつて、声高らかに勝利の雄叫びを上げた。

こんどは姫のほうだんまりになってしまふ番となる。

「さて、つぎに初年度の必要経費をですな、

概算で算出しておりますので公認会計士のほうから説明が  
ございます」

老弁護士が中型のノートブック型端末をナホのほうにむけた。

画面に中年の会計士が映っている。

『社長、これはあくまで概算なのですが』

「はいはいおいくら?」

「一〇億? 二〇億?」

『初年度、概算で六百七十億円です、

次年度からは姫の戦績次第では……最悪赤字転落です』

機長が仰天した様子で端末をふりむく。

ナホが笑いをやめ、体を震わせながら、

「あのー、桁が

……ちがうんじゃないかなーっ?」

『いえ、ちがいません、

初年度の特別損失として姫のアルバトロスの新車購入費用、

こちらが一五億円、

ほかに整備チームの人件費、整備費用、G?インター杯の広告宣伝  
費、

日本国軍政府に対する首都再建のための賠償費用、  
こちらはアーデルハイド暴走時の危機損失賠償保険でかなりカバー  
できますがしかし、

ほかにもまだまだいくらでもありますがつづけますか？……』

「つづけなくってもいいです」

すっかり意気消沈してしまった新米女社長サマであった。

姫はそれを眺めながら、

『機長さん？ 私たち、芝浦につづいて会うのはこれで二回目だけ  
れど、

これからは一蓮托生、呉越同舟よ？

私が勝ちつづけてお金を稼がない限り、

オフィス・ナホとゆう名の泥舟はソッコーで沈没ってわけ、

これからは皆さん仲よくやっていきましょ？』

機長は、どっちかつーと女の子の醜い色恋沙汰の嫉妬の争いに  
巻きこまれたくは無い、

そんな中立の態度がありあった。

けれどひとつ咳払いをして、

「ま、まあ、仲よくやっていきましょーや社長もっ、

姫とっ、仲よくっ」

ふたりは長いテーブルを挟んで睨みあった。

『機長さんはそういうけど、こんな長いテーブル越しじゃ、  
握手も届かないわ』

「ってゆーか、部屋でヘルメットも脱がない非常識な女と  
握手する気はないけどねーっ」

ふたりは思いつきりいがみ合うと、

同時にそっぽをむいてしまった。

機長は困り顔でふたりを見ていた。

老弁護士はつぎの契約の話のためにEペーパーをとりだしている。

とうとう機長は音を上げて、

「なあ弁護士先生や、ハッピーソーダ呑むかい？」

老弁護士は機長をちらりと見上げ、

「昼から気は進まないのですが、呑みたい気分ですな、私は二錠で」

「了解、俺は一〇錠ぶち込むわ」

「あたしもおかわりっ四錠でっ」

「社長は一日の限度超えて呑んでっからもうダメだってばっ」

「も~~~~~~~~うっ」

ナホが両の太ももを、ぷるんぷるん、

震わせながら駄々をこねる。

姫は足を組んだまんま貧乏揺すりをしていた。

本日、覆面マッコウクジラVS・ダイオウイカ、

深海化け者対決は両者痛み分けの引き分けとなったようである。

## マミヤ、ソルベ、スズキ、奇妙な顔ぶれの客人たち

マミヤがそのろくでもない酔っぱらいどもを引き連れて、ホテル・ユリスモールにやってきたのは夕刻ごろ、六時近くになってからだった。

民間のエアマシンタクシーでホテルの屋上エアポートに着陸、階段兼用ハッチを下ろす。

三人の若き猟騎兵たちが疲れきった足取りで降りたった。

ホテルは正方形の中心をくりぬいて中庭をつくった構造になっている。

エアポートもそのまま、

上空から見ると？回？の字の姿をしていた。

広々とした屋上には屋上階と兼用の管制塔が一棟によきつ、と突き出ている。

ほかに数機のエアマシンが駐機していた。

スズキ大尉が、ひろい建物と眼下にひろがる緑豊かなブルーヘヴンの木立とを見た。

一部の林の幹が倒れているのを見て、

手すりに寄りかかりながら、

「あれか、チハヤという魔導少女のやらかした第三級の？痕？ってのは……」

「はい」

マミヤがうなずいた。

もともと肌の白い少年だけれど、

ハッピーソーダを呑んでも顔には出ない質らしい、しらふのようにすっきりしている。

スズキと遅れて出てきたソルベ中尉はソーダにこれでもかとH＆H社の多幸剤をぶち込んで呑んでしまっていた。

ふたりとも完全にできあがっている様子だった。

マミヤが後部ハッチから荷物を取りだした。

黒い金属製、長くほそいケースである。

「しかしなあ、マミヤが、

魔導の姫の暮らすサバトの家宅捜査をおこなった経験があったとは、まったくの奇遇としか言いようがないな」

スズキが、酔った者特有の慎重な足取りで屋上階の出入り口へと歩いていく。

「はい、チハヤという少女とは縁があるようで、

二度も彼女の暴走現場に立ち会いました」

ソルベがマミヤに、

「あのチハヤっていう子、

二度目の暴走のとき容態はだいじょうぶだったのか？」

「線のほそい子に見えて、あれでけっこう芯が強いよ、

俺の現着時、すでに収容されていて容態は直接たしかめられなかったけどな」

「うん、そっか」

ソルベはそういうと、ソーダのビンをラッパ飲みした。

「そのぐらいにしておいたほうがいいんじゃないか」

「君の指図は受けないぞ、僕はっ」

そういつてまた呑んだ。

三人が屋上階に近づいたとき、

建屋のドアが開いた。

ナホである。

彼女が飛び出してきた。

「マミヤーッ、もうーっ遅いんだからっ、ちよっとどいてよふたりともっ」

そういつてスズキとソルベを押しわけ、

マミヤの腕に絡みつく。

スズキがほがらかな笑顔をうかべて、

「おお、ネットの自由放送で君の顔は見たぞ、



うら若き億万長者の美少女じゃないか」

「あゝらやだ、？美？少女だなんてっ、

あたしは単なる猟騎兵の嫁に過ぎませんからっ、ただし……」

マミヤをうつとり、

見つめながら、

「あたしのダンナ様は世界最強の猟騎兵様ってゆうところが、ちよっとばかりフツーじゃないかも？

うふふっ」

マミヤは赤面して、

「お願いだ、カンベンしてくれないか」

ナホはクスクス、

笑いころげながらマミヤを引き連れ階下に降り始めた。

ソルベとスズキは顔を見合わせて、

呆れかえった笑顔をこぼした。

「ありゃあ、尻に敷かれるなマミヤ曹長は」

「ですね、あの勢いで押し切ってくれば、

僕がエリカにアタックする隙も生まれるな……」

「ああ、このサバトの管理人の娘だとかいったな？」

「ええそうです、最高の美人ですよ」

スズキも十代後半の少年らしくうれしそうに破顔した。

「それはお顔を拝見したいものだな」

全員が屋上階から螺旋階段で下に降りていった。

ナホが螺旋階段を先にいきながら、

「残念ですけど、エリカ・ヴァンデル・メーア嬢サマは自室にこもっちゃって出てきませーんっ」

ソルベがソーダビンを取り落としそうになりながら、

「そ、それはいったいまたどうしてなんだいっナホ？」

「だあーてっ、忘れたのソルベ？」

あの一三年のガキ、あたしとの賭けにボロ負けして泣きじゃくっ

てるんだってさーっ、

面目丸潰れっ、

うふっ、愉快だわーっ」

とまあ、はしゃぎまくるナホに抱きつかれているマミヤのほうは、なにを考えているのやら、

神妙な表情で天井の古風なシェードランプを見上げている。

「……困った」

実に、困った……と、

ほんのかすかな声で、そうつぶやくのだった。

そうしてなんとゆうか、

ホテルの支配人といったオーラすら漂わせているナホに導かれ、野郎どもは一階の食堂に通された。

そこはイタリア風のトラットリアのような

——気取りのない大衆食堂——然とした清潔な広間だった。

ナホがマミヤの腕を握ったまんま、

「さあ、メイドたちよっ、マミヤ様ご一行のお着きよーっ」

鶴の一声で、

ふあ~~~~い、となんとも間の抜けた声がしてきた。

厨房からスイングドアを開いて最初に出てきたのはチハヤである。完璧に黒いシックなメイド服にメイドカチューシャをつけている。両の太ももをくるみ込むのは、純白のニーソックス。

その上に太もも上部がはっきりと露わになってしまいうぐらいのミニスカート。

うちっ側にはパニエ、と呼ばれるフリルのついた衣装を着用している。

スカートをふんわりひろげてみせる衣装である。

「マミヤ先輩っ、ようこそ、チハヤの元へーっ」

そういつて、マミヤの右腕につかまってくる。

……左腕のほう、真横でナホが青筋を立ててるんだが、この子は一切眼中にない様子である。

ほんとうに、凄まじい子である。

マミヤは冷や汗を垂らし始めた。

「あら、もうバトル勃発っ？」

そういつて、実に一四年次にしては美乳とゆうか、

純白のメイドエプロンの胸元麗しいキャロルが現れた。

ソルベとスズキはこの可愛い少女ふたりの出現だけで、顔をゆるみっぱなしにしている。

「さあ、ではここで？魔導の姫？のご登場よっ」

ナホがマミヤにしなだれかかったまんま、手を一回叩いた。

厨房から、がさごそ、と音がする。

『……………に、にゃっ』

猫？ 猫の鳴き声が聞こえてたような？

野郎どもが不思議そうにしていると、

その少女は飛びだしてきた。

そのうつくしいプロポーションをメイド服で包み込み、

二本の、ぷるん、とした太もとふくらはぎとを、真っ白なニーソで、

ぎゅっ、と抑えこんだ美脚。

頭には黒いネコミミカチューシャ。

その貌には、ハロウィンなどで使われる仔猫のお面を被っている。ド貧乳とゆうか、微妙な感じの胸のかわいいふくらみはともかく、それはともかく――。

「さあ、お鳴きなさいっ、このドロボウ猫めがっ」

ナホが勝ち誇った様子で命じてくる。

『……………にゃっ』

「なーに？ 聞ーこーえーなーいーつ、ご挨拶はーっ？」

『にゃっ、い、いらっしやいだ……にゃんっ』

マミヤが恐怖に引きつるなか、

ソルベとスズキは、姫の愛くるしさにノックアウトを喰らっていた。貌すらまだ拝んではないとゆうのに、である。

そのお面内臓の変声機で変声されたロリっぽい声音のせいもけっこうあったかもしれないが。

スズキが興奮してナホにむかって、

「彼女が、魔導の姫、さま、か？」

「そうよっ、マミヤの同僚さんっ」

さらにナホはえぐいマネに出た。

「さあ、ドロボウ猫？ 両手がおろそかよっ、

猫ポーズをなさいっ」

ぷるぷるぷるぷる

……震えている、

あの？魔導の姫？が、震えているのだった。

マミヤも恐怖に震えだしていた。

姫は、なんとか左手を挙げ、右手を下にして、ニャンコの例のあのポーズをとった。

「さあっ、？いらっしやいませ御主人様？とお鳴きっ」

ナホが瞳を爛々と輝かせて、いつてくる。

ソルベとスズキは、姫の全身をじっとり、見入ってしまったている。

キャロルとチハヤは爆笑を懸命にこらえている様子だ。

マミヤはひとり、幽体離脱しかかった栄養失調患者のようであった。

『い、いらっしゃい……せ……ゴジュ、ゴ、ジュジンザマ……』

ナホはママの耳元で、

「ごめんなさいねママ、ダメなクツソ、

ダメな、ドロボウ猫で躰がなくなっていなくなっつ」

「いや、そ、その……ナホ？」

「東京地裁の決定、聞いた？」

ナホが真顔になる。ママはなんとかうなずいた。

「あたしのダンナさまが、

よりにもよってこんな薄汚いドロボウ猫の半径三メートル以内で警護しないといけないんですってっ、それも昼夜問わずによーっ、その罰としてこの恰好をさせてやったってワケよーっ」

もう、ナホは泣いてんだか笑ってんだか、

怒ってんのかもわからない顔になっている。

「そうだ、だから、

捜査から外されてここへ来るよう命令が下ったんだが」

「うん、それは聞いたけど、

まあ、それにしても……」

と、ちよっと戸惑った風にナホがスズキ大尉を見ってくる。

なんとか感情を整理したらしく、

「スズキ大尉さん、ってたしか――」

スズキがためらいがちに、

「ナホさんの疑問ももっともだな、

俺はソルベといっしょにあの？ロングランス？で裏切りを働いた微妙な立場だ」

ナホがうなずいて、

「で、ですよ、ねー……？」

スズキとソルベが目を交わし合う。

最後にママを見ってくる。

マミヤはしっかりと、両名にうなずき返した。

スズキは、伏し目がちになってから、

「訳あってマミヤ曹長と行動を共にすることになった、しばらくの間だが」

よろしく頼みます、とスズキは静かに頭を下げた。

ソルベもどこことなく、ぎくしゃくした風情で笑顔をつくった。

「……はい……ま、まあいいわっ、お食事にしましようっ、

オラ、メイドども働けーっ」

ナホの一声で、怒りの爆燃機関と化している魔導の姫が厨房へと逃げ込む。

キャロルが、ぶふっ、

とあいかわらず笑いを噴きこぼしながら、あとへとつづいた。

チハヤが、

「マミヤ先輩、そのお荷物、お部屋に運びましょうかー？」

そのマミヤの右手の黒く長いケースを持つとうとする。

「いや俺が持っていくから」

マミヤの声は、なぜか堅苦しかった。

チハヤが、きょとん、としている。

「あの、チハヤ、お気に障ること、しましたかー？」

ナホとチハヤは野郎どもの視線を浴びているのに気づいたのか、三人を見た。

ソルベ中尉とスズキ大尉がチハヤのことを見ていた。

無表情に。

真顔で。

「ああ、えっと、大切な荷物なのね？」

ナホが場を取りなすようにいった。

「ええそうです」

スズキ大尉が

——この場の最高位の士官として——三人を代表するかのようにな

えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037y/>

---

駆けろ、姫に賭けろ！

2011年12月7日00時49分発行